

平成 30 年度

# FD 推進助成（甲・乙）事業 成果報告書

國學院大学 教育開発推進機構  
教育開発センター

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學



## 平成30年度「FD推進助成（甲・乙）事業」成果報告書刊行にあたって

國學院大学 教育開発推進機構

教育開発センター長

野呂 健

ここに『平成30年度「FD推進助成（甲・乙）事業」成果報告書』をお届けいたします。

本学では、平成28年度まで、各学部におけるFD活動への予算的支援を行う「学部FD推進事業」を実施しておりましたが、29年度に、学部学科を超えた有志教員によるFDの取組みに支援対象を拡大し、「(甲)学部FD推進事業」と、「(乙)グループによるFD推進事業」の二つの柱から成る「FD推進助成（甲・乙）事業」をスタートいたしました。また、平成28年度より新たに事業成果の学内共有の場として、年度末に「成果報告会」の開催に踏み切りましたが、29年度末には部会形式で、甲・乙両方の事業について成果報告を実施することができました。

今回、本報告書に取りまとめましたのは、上記の経緯に引き続いて、平成30年度に実施いたしました甲・乙両事業の事業概要、および平成31年2月27日に開催された「成果報告会」における報告資料です。成果報告会では、「学部FD推進事業」が5件、「グループによるFD推進事業」が1件、合計6件の報告がなされました。

無論、課題も多いことは言うまでもありません。特に、参加者数については、残念ながら3回目の開催を迎えた今回においてもなお、決して盛会と言える状況ではなく、参加者の間からも学部・学科の教員により多くの参加を呼びかけるべきであるとの声が寄せられています。

しかし、各報告後の質疑応答や、最後の総合意見交換の際には、報告者とフロアの参加者の間で活発な意見交換がなされたことは印象的でした。このような取り組みを、少しずつではあっても広げて行くことを通して、本学の教育力向上を着実に推し進めて行けることを予感させる内容であったと思います。

本機構としては、今後とも全学および学部・学科レベルでの教育改善・教育力向上の取り組みを一層支援して行くと共に、その成果の共有を後押しすることで、本学の教職員間にFDの文化を醸成して行きたいと考えています。本学教職員の皆様には今後ともご理解・ご協力を賜れば幸いです。

令和元（2019）年7月31日



## 目 次

平成 30 年度「FD 推進助成（甲・乙）事業」成果報告書の刊行にあたって.....	1
はじめに.....	5
平成 30 年度「FD 推進助成（甲・乙）事業」実施までの経過.....	7
学部 FD 推進事業の改定から現在までの審議経過.....	9
平成 30 年度「FD 推進助成（甲・乙）事業」採択一覧.....	11
平成 30 年度「FD 推進助成（甲・乙）事業」申請書一覧.....	15
（甲）文学部.....	17
（甲）法学部.....	18
（甲）経済学部.....	19
（甲）神道文化学部.....	21
（甲）人間開発学部.....	23
（乙）グループ.....	24
平成 30 年度「FD 推進助成（甲・乙）事業」中間報告書一覧.....	27
（甲）文学部.....	29
（甲）法学部.....	31
（甲）経済学部.....	32
（甲）神道文化学部.....	34
（甲）人間開発学部.....	36
（乙）グループ.....	37
平成 30 年度「FD 推進助成（甲・乙）事業」報告書及び成果報告会資料一覧.....	39
（甲）文学部.....	41
（甲）法学部.....	51
（甲）経済学部.....	63
（甲）神道文化学部.....	87
（甲）人間開発学部.....	163
（乙）グループ.....	179
参考資料.....	195



## はじめに

本報告書は、主として平成31年2月27日に開催された「平成30年度「FD推進助成事業（甲・乙）」成果報告会」におけるその開催記録である。

平成28年度に第1回を開催した「学部FD推進事業成果報告会」は、翌29年度に「FD推進助成（甲・乙）事業成果報告会」へと拡大して第2回を開催した。これは、平成14年度来継続的に実施してきた”教育に係る研究開発”を支援する「特色ある教育研究」を、教育開発センターに移管したことに伴い、(甲)学部におけるFDの取り組みを支援する「学部FD推進事業」と、(乙)学部学科等にとらわれない教員有志によるFDの取り組みを支援する「グループによるFD推進事業」を2つの柱としてリニューアルしたことを承けてのことである（これらの制度改変およびその過程における議論の経過等については、前年度・前々年度に発行された「成果報告書」に参考資料と併せて詳述されている）。

平成30年度「FD推進助成（甲・乙）事業」については、まず、平成29年12月に事業募集の告知を配信し、これを受けて提出された諸申請を集約した上で、翌30年2月の教育開発センター委員会において審査を行った。その結果、甲事業については最終的に5学部からの申請を全て採択し、乙事業として応募のあった1件を採択、4月から事業をスタートするに至った。同年9月の教育開発センター委員会では各事業の中間報告および減額補正の有無について説明とそれに対する質疑応答がなされ、特に希望があった事業1件については委員会の審査を経て予算の修正を認めている。各事業はその後も年内計画に則って事業を執行し、平成31年2月21日を以て、開催された第3回「FD推進助成（甲・乙）事業」での成果報告を無事完了した。以上の事業経緯は、28年度・29年度に引き続き、「各学部・グループからの事業申請と審査→中間報告と軌道修正およびそれに伴う予算の補正→事業成果の報告と学内外への共有」というサイクルに則って粛々と実行がなされており、「成果報告会」の実施についても、着実に学内において制度的な定着が図られつつあるということができよう。

その一方で、無論、課題も見受けられる。様々なFD事業の成果を学内で共有し、異なる学部・学科の教員同士が様々な情報交換・意見交換を行うことによって学部学科レベルでの教育改善の取り組みに対する意欲の向上を図るとともに、教員個人レベルでもそれぞれの教育活動に適用可能な新たな着想を得られるような場を提供したいという企図に照らせば、本「成果報告会」には、言うまでもなく、大学・学部・学科の執行部のみならず、広く学内教職員の数多い参加が望まれよう。しかし、28年度から3回にわたる開催を経て、学内に繰り返し周知を行ってはいるものの、学務や会議との兼ね合いもあってか、参加者数が依然伸び悩んでいることは否めない事実である。

当日の発表者とフロアとの意見交換・質疑応答自体は大変活発であり、かつ、報告会終了後に実施したアンケートによせられた記述では、事業および報告会の意義を極めてポジティブに評価する声がほとんどであっただけに、より一層の教職員の参加と活発な意見交換を呼びかけて行きたいところである。本センターが担う重要な課題として、今後もさらなる検討を進めたい。

令和元（2019）年7月31日  
教育開発推進機構 教育開発センター



## 「FD 推進助成（甲・乙）事業」実施までの経過

- ・「学部 FD 推進事業」の改定から「FD 推進助成（甲・乙）事業」実施までの審議経過
- ・平成 30 年度「FD 推進助成（甲・乙）事業」採択一覧



「学部 FD 推進事業」の改定から「FD 推進助成（甲・乙）事業」実施までの審議経過

年	月日	検討事項
平成 27 年	7 月 22 日	第 4 回教育開発センター委員会 <ul style="list-style-type: none"> <li>審議事項「平成 28 年度学部 FD 推進事業に関する件」を審議。</li> </ul>
	9 月 30 日	第 5 回教育開発センター委員会 <ul style="list-style-type: none"> <li>審議事項「次年度以降の学部 FD 推進事業に関する件」を審議。各学部からは事業の実施・継続を求めるとの意見が寄せられ、学部における FD 助成の継続が承認。</li> </ul>
	10 月 28 日	第 6 回教育開発センター委員会 <ul style="list-style-type: none"> <li>審議事項「次年度以降の学部 FD 推進事業に関する件」を審議。前回承認事項（学部における FD 助成の継続）の確認が行われた。また実施方針については、PDCA サイクルによる学部 FD を促進するため、改定案を教育開発推進機構内で作成した上で、次回センター委員会に諮ることです承を得た。</li> </ul>
	11 月 18 日	第 7 回教育開発センター委員会 <ul style="list-style-type: none"> <li>審議事項「次年度以降の学部 FD 推進事業に関する件」を審議。資料「平成 28 年度「学部 FD 推進事業」について（案）」により、これまでの検討課題を踏まえ、①申請書の形式の改定、②成果の共有・検証と学外への情報発信を追加した改善案が提示され、審議の結果、承認。それを受けて「平成 28 年度以降の「学部 FD 推進事業」のモデル」を考慮して同事業を実施することも承認。</li> <li>平成 28 年度学部 FD 推進事業の予算執行方式及び申請書式改訂版が提示され、適宜修正を加えた上で、それに従い実施することが承認。</li> </ul>
	12 月 4 日	平成 28 年度「学部 FD 推進事業」の募集を開始（締切平成 28 年 1 月 29 日）
平成 28 年	2 月 10 日	第 8 回教育開発センター委員会 <ul style="list-style-type: none"> <li>審議事項「平成 28 年度学部 FD 推進事業の審査に関する件」を各学部から提出された申請書にしたがって審議。審議の結果、申請内容・申請金額等の修正を行い、申請書を再提出することで事業実施を承認。</li> </ul>
	4 月	平成 28 年度「学部 FD 推進事業」の開始
	9 月 28 日	第 5 回教育開発センター委員会 <ul style="list-style-type: none"> <li>報告事項「平成 28 年度学部 FD 推進事業中間報告について」を報告。</li> </ul>

		各学部から提出された中間報告にもとづいて報告され意見交換が行われた。
	10月26日	第6回教育開発センター委員会 <ul style="list-style-type: none"> <li>審議事項「「特色ある教育研究」FDプログラムに関する件」を審議。本学のFD推進事業である「学部FD推進事業」と「特色ある教育研究」の今後の在り方を検討。「國學院大學FD推進事業」として、「学部FD推進事業」と「特色ある教育研究」を機能的に統合した「國學院大學FD推進事業の助成に関する規程（案）」を提示し、審議。審議の結果、次回センター委員会で修正を加えた規程案を提示することで了承。</li> </ul>
	10月27日	平成29年度「学部FD推進事業」の募集を開始（締切平成29年1月31日）
	11月24日	平成29年度「グループによるFD推進事業」の募集を開始（締切平成29年1月31日）
平成29年	2月8日	第7回教育開発センター委員会 <ul style="list-style-type: none"> <li>審議事項「平成29年度「学部FD推進事業」の審査に関する件」を審議。審議の結果、申請内容・申請金額等の修正を行い、申請書を再提出することで事業実施を承認。</li> <li>審議事項「平成29年度「グループによるFD推進事業」の審査に関する件」を審議（本事業は従来の「特色ある教育研究」を発展的に改定したもの）。それと合わせて、前回センター委員会での議論を踏まえて修正した「國學院大學FD推進事業の助成に関する規程」を再提示し、承認。</li> <li>報告事項「平成28年度学部FD推進事業について」を報告。同事業の報告書締切を平成29年3月3日（金）までとし、成果報告会を平成29年3月10日（金）に実施することが決定</li> </ul>
	3月10日	平成28年度「学部FD推進事業」成果報告会を開催
	4月	「國學院大學FD推進事業の助成に関する規程」に基づき、 <u>平成29年度「FD推進助成（甲・乙）事業」の開始</u> （甲：学部FD推進事業・乙：グループによるFD推進事業）

平成29年度4月以降「FD推進助成（甲・乙）事業」を推進中

## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲・乙）事業」採択一覧

（平成 30 年 2 月 9 日開催の平成 29 年度第 7 回教育開発センター委員会にて審査・承認）

※職名は申請当時のもの

※申請額については、甲・乙ともに、中間報告段階で減額補正等により変更が生ずる場合あり

### （甲）学部 FD 推進事業 採択一覧

項 目	詳 細
申請学部	文学部
事業名称	カリキュラムおよび授業改善の基本方針検討
申請者	石川 則夫 学部長
実務担当者	牧野 格子 准教授
申請額	600,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部新カリキュラムの実効性の検証
申請者	門広 乃里子 学部長
実務担当者	小原 薫 准教授
申請額	800,000 円
申請学部	経済学部
事業名称	基礎演習 A・B におけるルーブリックの作成・授業導入、および実践のためのコーチングスキル研修
申請者	橋元 秀一 学部長
実務担当者	星野 広和 教授
申請額	999,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	学生に対する効率的なアンケート・学力調査に基づく授業運営・学部カリキュラム改善への検討
申請者	武田 秀章 学部長
実務担当者	菅 浩二 准教授
申請額	739,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	充実した『理論と実践の往還』による教育インターンシップに向けた学部の関わり方
申請者	田沼 茂紀 学部長
実務担当者	山田 佳弘 教授
申請額	288,400 円

\* 申請総額 3,426,400 円

(乙) グループによるFD推進事業 採択一覧

項目	詳細
研究代表者	成田信子 人間開発学部初等教育学科教授
事業名称	ルーブリックを活用した日本語関連科目の学修支援
実施形態	学部・学科横断型
共同研究者	高橋 大助 (文学部 教育学 (教職課程) 教授) 吉田 永弘 (文学部 日本文学科 教授) 渡邊 雅俊 (人間開発学部初等教育学科教授) 坂本 正徳 (人間開発学部初等教育学科教授) 鈴木 道代 (教育開発推進機構特別専任助教) 大津 直子 (教育開発推進機構特別専任助教)
申請額	2,413,240 円

\* 申請総額 2,413,240 円

## 収録資料について（注記）

本報告書に収録した資料は、以下の通りである。これらの資料は、原則として、学部・グループより提出された様式書のデータ版をPDF化したものである。また、①担当者の個人情報等に係る箇所、②学部・グループ等の要望により学外非公開としたい箇所については、収録にあたり一部削除・編集を施している。

### 1) 学部FD推進事業・グループによるFD推進事業 事業申請書

- ・事業概要・予算計画に関する諸様式と添付資料のうち、事業概要部分を収録。

### 2) 学部FD推進事業・グループによるFD推進事業 中間報告書（中間報告部分）

- ・中間報告・減額補正申請に関する諸様式と添付資料のうち、中間報告部分を収録。

### 3) 学部FD推進事業・グループによるFD推進事業 事業報告書

「FD推進助成（甲・乙）事業 成果報告会」報告資料、および学部からの提出資料

- ・学部・グループから提出された「事業報告書」について、原則としてその全体を表示。

ただし、学部・グループからの要望により、概要部分のみの掲載、もしくは一部の実務上の記述について除外した箇所がある。

- ・「成果報告会」での配付資料と、報告会後に学部・グループより寄せられた報告資料のうち、学部・グループの担当者から許諾を得た資料について、「事業報告書」と併せて収録した。

以上



## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲・乙）事業」申請書（事業概要）一覧

### 【(甲) 学部 FD 推進事業】

文学部

法学部

経済学部

神道文化学部

人間開発学部

### 【(乙) 学部 FD 推進事業】

成田 信子 人間開発学部 教授

#### 【備考】

- 1) 審査を経て、申請内容に修正等を施して再提出がなされた事業については、最新版を掲載している。
- 2) 実務担当者については、申請時の担当者名をそのままに掲載しているが、年度内に変更された学部もある。
- 3) 担当者等の個人情報に係る箇所は削除し、また学部・グループの意向により一部に編集を加えている。



平成30年度 「学部FD推進事業」 申請書

平成30年2月26日提出

申請者氏名 (学部長申請)	文学部長 石川 則夫 (印)
課題名	カリキュラムおよび授業改善の基本方針検討

事業の概要(計画期間全体)(各400字程度)

〇目的:現状認識を踏まえた事業の目的

文学部独自の授業評価アンケートを継続的に実施し、カリキュラムおよび授業の改善の指針を検討するための材料とする。過去3年間のアンケート実施の結果、アンケートをどのような方法(質問項目、回収方法等)で実施するのが望ましいかが大体定まってきた。来年度は従来の経験に鑑み、以下の二つの点に留意して事業を進めたい。一つは満足度の低い授業とは具体的にはどのような授業なのかということである。もう一つは学科ごとの課題とは具体的には何かということである。従来文学部アンケートは特定の学年に偏る傾向にあり、この点を是正しながら、学年ごとの推移も検証できればと庶幾する。その結果を学年調査結果を学部内で共有し、カリキュラムおよび授業改善の具体的な検討作業を行いたい。

〇内容:目的を達成するために、どのような事業を実施するのか。

- ①文学部独自のアンケート(「FDアンケート」)の実施 ②研修会の実施

〇計画:どのような計画で、当該事業を実施するのか。

①アンケート:これまでの経験に鑑み、5-6月にはアンケート項目や実施方法を文学部教務委員会で確定し(基本的にはデータの継続性のために平成29年度の質問項目を引き継ぐが、平成29年度の回答結果をみて変更の可能性もあろう。)後期開始しばらくしてからアンケートを実施したい。その後、業者にデータの分析を行ってもらおう。  
②研修会:データにもとづいて平成30年内に研修会を実施する。また、アンケート調査によって浮かび上がった本学独自の状況を、現状に照らし合わせて考察する。特に、人文系の学士課程教育にどのような教育が求められているのか、掘り下げて考察したい。なお、平成29年度は予算内で想定されたアンケート回答数は1148件であった(配布は1500件)。この数を平成30年度も維持するため、アンケートの委託費として600千円を申請する(業者によるデータ分析結果報告・研修会の費用も含む)。

〇点検・評価:本事業の実施状況並びに成果をどのように点検・評価するのか。

本事業の成果は、研修会を通じた調査結果の学部内共有によって実際にどれくらいカリキュラムや授業が改善されたかによって点検・評価される。カリキュラムや授業の改善の程度は、過去に実施されたアンケートのデータに基づいて学生のカリキュラム満足度等の経年比較を行うことによって測定される。とりわけ過去のアンケートを通じてわかってきたことは、たとえば文学部の学生は「授業のテーマに興味を持てること」で満足度を感じる場合が多く、逆にいえばそうではない授業は評価が低いこと、卒論の有無が満足度と関連していること、特に3年生を中心として就職活動との両立が難しくなっていることなどが明らかになった。これらの点を踏まえて、改善策を検討し、成果を現実化・具体化することに努めていきたい。

〇改善・期待される効果:今後の当該学部の教授法や授業改善にどのように役立つことが想定されるか。具体的に記述してください。

①FDアンケート:各教員が実感として持っているカリキュラムや授業の質(長所と問題点)を、授業を受ける側の学生の視点および数値的データと比較できる。この作業により、授業を行う側には気づかれにくい問題点を明らかにするきっかけができる。また、これまでのデータの蓄積に加えることによって、一貫して見られる傾向が判明すると同時に、学生の側の変化しつつある要望なども浮かび上がる可能性がある。  
②研修会:授業改善のための具体的な課題を学部内で広く共有する。また、日本の大学(特に人文科学系の私立大学)の学士課程教育が直面している課題に照らし合わせて、本学の抱える問題が明らかにされることで、カリキュラムおよび授業改善のための検討課題がより明確かつ具体的になる。

〇汎用性(波及効果):成果を全学で共有することで、当該学部学科を超えて、本学学士課程教育全体または本学教員の職能改善にどのような効果をもたらすことが想定されるか。

アンケートの質問項目は学部固有の内容を含んだものが多い。しかし、カリキュラムや授業の改善のための材料を、アンケートを通じて獲得するという本事業の形態や成果は、全学で共有できるものがあると考えている。とくに学生の意見を踏まえながら授業改善等を行っていくこと、あるいは学部のポリシーを教員と学生との間で共有することなどの点は、全学的に共有性が高い事柄であると思われる。

〇経費の妥当性・必要性:教育研究費支出、人件費支出、設備関係支出のそれぞれについて、申請する事業計画と関連して妥当性と必要性を記述してください。

本事業の支出は、アンケートの委託費からなる教育研究費支出のみである。アンケート用紙も実務担当者がコピーしており、経費の節減に努めている。アンケート結果の精度を高めるためにデータ数を一定に保つ必要があるため、平成30年度はアンケート回答数1000件程度(配布1500件)を想定している。平成30年度は600千円程度の支出が見込まれる。

事業の実務担当者 (教員)	吉岡孝(文学部史学科/職位教授)
------------------	------------------

## 平成30年度「FD推進助成（甲）学部FD推進事業」申請書

平成30年1月30日提出

申請者氏名 (学部長申請)	法学部長 門広 乃里子	⑨
課題名	法学部新カリキュラムの実効性の検証	

事業の概要（計画期間全体）（各400字程度）	
<p>○目的：現状認識を踏まえた事業の目的</p> <p>法学部は、平成30年度から新カリキュラムを開始することとした。その手始めとして、公法・刑事法・民法の各分野で入門科目（公法入門・刑事法入門・民法入門）を開講する。これらの入門科目は、アクティブ・ラーニングの手法により、受講生に学修の動機付けと基礎的な知識・学習方法を修得させ、その後の履修カテゴリー選択を促すことを目的としているが、かかる目標が実現されているかどうか；また、法学部の他の専門科目についても、授業及び教育方法が実効性をあげているか検証する。</p>	
<p>○内容：目的を達成するために、どのような事業を実施するのか。</p> <p>（1）入門科目の受講生にアンケートを実施し、その結果に基づき、入門科目の目標達成度を検証する。</p> <p>（2）法学部の提供している授業および教育施策についてアンケートを実施し、アクティブ・ラーニングを実施している授業および教育方法の改善を検討する。</p>	
<p>○計画：どのような計画で、当該事業を実施するのか。</p> <p>（1）入門科目アンケートの実施と分析 入門科目受講生に独自アンケートを実施する。アンケートについては専門業者にその集計を委嘱し、その集計結果に基づき、全体会合および各部会において、目標の達成状況について分析・検討を行う。部会の開催頻度は月に1回程度（休暇期間を除く）とする。必要に応じて、次年度以後の改善策を検討し、シラバス・テキスト内容等の調整を行う。</p> <p>（2）アクティブ・ラーニングに関する学生アンケートの実施 昨年度に引き続き、授業および教育方法の実効性を総合的に検証するために、学生アンケートを実施する。</p> <p>（3）基礎資料の収集 必要に応じて、初年次教育やアクティブ・ラーニングの参考となる入門書・教育手法に関する専門書等を入手し、検討の基礎資料とする。</p>	
<p>○点検・評価：本事業の実施状況並びに成果をどのように点検・評価するのか。</p> <p>（1）入門科目アンケートについては、入門科目授業終了時に受講生の感想や評価を収集し、成果を測定・分析し、入門科目FD会合を通じて、その情報を研究会等を通じて全教員で共有するとともに、教員相互で点検・評価が可能となるようにする。</p> <p>（2）アクティブラーニングの導入については、既に導入が為されている講義等の受講生にアンケート調査を実施し、他の通常型の授業と比べてどれだけ学習成果や満足度が上がっているかを確認する。</p>	
<p>○改善・期待される効果：今後の当該学部の教授法や授業改善にどのように役立つことが想定されるか。具体的に記述してください。</p> <p>アクティブラーニングの手法を開発することにより、法学教育の特性に合わせた双方向教育を教員がより効果的に実施することが可能となり、引いては、受講生の理解度や応用力が高まることが期待される。入門科目の検証については、初学者にとって難解と感じられる法学教育につき、教員が初学者にとってもより理解可能な形で教授できるようになり、引いては、受講生が法学に積極的に興味を持ち、より自主的・能動的に学修できるようになることが期待される。</p>	
<p>○汎用性（波及効果）：成果を全学で共有することで、当該学部学科を超えて、本学学士課程教育全体または本学教員の職能改善にどのような効果をもたらすことが想定されるか。</p> <p>アクティブラーニングの手法開発は、経済や文学、教育学に関する教育にも応用できると考えられる。また、入門科目に関して得た成果は、専門知識に必ずしも慣れていない初学者にどのような順序で教育をしていくべきなのか、という点に関する貴重な示唆を与えられよう。</p>	
<p>○経費の妥当性・必要性：教育研究費支出、人件費支出、設備関係支出のそれぞれについて、申請する事業計画と関連して妥当性と必要性を記述してください。</p> <p>用品費：入門教材の作成に際しては、プリンターやパソコンによりスライド教材やレジュメを作成する必要がある。また、アクティブ・ラーニングを効果的なものとするために必要な用品の購入を依頼したい。</p> <p>図書購入費：アクティブラーニングや入門科目の実施に必要な基礎知識を提供する文献の購入を依頼したい。これらは従来の教育手法に新しいアイデアをもたらしてくれると考える。</p> <p>業務委託費：入門科目アンケートの分析を専門業者に、質問作成および分析・測定の基礎資料の作成を委託したい。</p> <p>人件費支出：アクティブ・ラーニング・アンケート集計に関する単純作業を依頼するほか、アンケートの結果を分析することを依頼したい。</p>	
事業の実務担当者 (教員)	小原 薫（法学部法律学科／職位：准教授）

## 平成30年度「FD推進助成（甲）学部FD推進事業」申請書

平成30年 1 月 31 日提出

申請者氏名 (学部長申請)	経済学部長 橋元 秀一	㊟
課題名	基礎演習A・Bにおけるルーブリックの作成・授業導入、および実践のためのコーチングスキル研修	

**事業の概要（計画期間全体）（各400字程度）**

**○目的：現状認識を踏まえた事業の目的**  
 経済学部では平成27年度から1年前期必修科目「基礎演習A」ならびに1年後期義務履修科目「基礎演習B」において、アクティブラーニング形式（グループワーク形式）の授業トライアルを導入し、平成28年度から全23クラスへ展開している。この授業では、FA（学生ファシリテーター&アドバイザー）を各クラス1名ずつ配置し、統一内容で授業を行っているものの、導入して間もないこと、基礎演習担当教員のスキルのバラつきや毎年度の入れ替わりもあり、受講生が授業を通じて涵養すべき能力や知識について、教員の間で、必ずしもゴール像や獲得ステップが明確になっていない状況が発生している。そこで、本事業では、基礎演習A・Bにおいて、教員間で、受講生が獲得すべき能力やスキルの共通化を図るべく、学部統一の評価基準となるルーブリック（学習到達度）を作成し、ルーブリックの授業導入（授業展開・ツールの活用）サポートを行う。ルーブリックの作成・導入により、学部共通の到達目標・評価基準や学習環境を整え、教員個人および学部組織としてのアセスメント（振り返りと改善）を円滑に進める状態を目指す。

**○内容：目的を達成するために、どのような事業を実施するのか。**  
 本学部においても、平成29年度に経営学特論（ビジネスデザイン/リーダーシップ）の授業にて、ルーブリックの作成や教員研修を担当したand seeds 社に以下の業務内容を委託し、教員を巻き込みながらルーブリックを作成するとともに、その導入と実行支援を行う。  
 ①ルーブリックの作成支援⇒教員の教育観の共有と受講生が授業を通じて獲得すべきスキルの明確化  
 ②ルーブリックの授業導入の支援⇒ルーブリックを活用する上でのルール作りと具体的な測定方法のトレーニング  
 ③アクティブラーニング型授業の学習法の改善・発展支援⇒ルーブリックの到達度合いを高めるられるように教員に対して教授法を指導

**○計画：どのような計画で、当該事業を実施するのか。**  
 ①授業期間中、委託事業者は教員を巻き込みながら、各教員が持つ教育観を共有するミーティングを開催し、授業の趣旨から考えて必要なスキルや知識を織り込んだルーブリックを作成する。  
 ②ルーブリックの導入をスムーズに行う上での勉強会を開催する。  
 ③前期・後期において1回ずつ、教員向けにアクティブラーニング型の教授法のスキルアップに繋がる研修会を実施する。  
 ④学期末に実施する基礎演習担当者会議（教員に加えてand seeds社も参加）において、授業改善提案、教育ノウハウについて議論するとともに、各クラスの授業運営の相対化を図る。  
 ⑤学期末に総括レポートを提出してもらい、それをもとに後期ないし次年度以降の改善案に反映する。

**○点検・評価：本事業の実施状況並びに成果をどのように点検・評価するのか。**  
 本事業の実施状況・把握方法として、以下のプロセスをもとに点検・評価を行う。  
 ①and seeds社と教員とのミーティングの成果は、基礎演習A・Bのルーブリックを作成するとともに、その導入を通じて、授業内容が改善されることで、点検・評価する。  
 ②ルーブリックの作成・導入後は、毎月1回程度開催される基礎演習担当教員会議において、ルーブリックの運用状況と授業改善案について、各担当教員から報告・議論されることで実施成果を点検する。  
 ③①および②の成果について、(イ) 学期末および学年末の学生アンケートの結果、and seeds社による(ロ) ルーブリックの授業導入の状況に関するレポート、および(ハ) 教員の教授法に関するレポートを経済学部教務委員会が点検を行うことによって、ルーブリックの導入状況だけでなく授業改善の最終成果である学生の満足度および学習態度の向上をチェックする。

**○改善・期待される効果：今後の当該学部の教授法や授業改善にどのように役立つことが想定されるか。具体的に記述してください。**  
 平成27年度よりアクティブラーニング形式で基礎演習を実施してきたものの、導入・展開間もないことかつ教員も毎年度入れ替わることもあり、教員（およびFA）による授業を通じた教育成果の到達イメージについてバラつきが顕在化している。また、授業評価のサイクルもこれまでは半期もしくは通年単位だったため、授業評価・改善のサイクルが長期化していた。そこで本事業の実施によって、以下の効果が期待される。  
 ①授業評価の見える化・短期化及び教員の教育スキル向上  
 ②初年次教育としての基礎演習科目の授業改善および標準化・均質化  
 ③アクティブラーニング形式授業（経営学特論（リーダーシップ）など）への授業運営・改善ノウハウの展開  
 ④専門科目・演習へのアクティブラーニング形式の導入・展開および授業運営・改善ノウハウの展開

**○汎用性（波及効果）：成果を全学で共有することで、当該学部学科を超えて、本学学士課程教育全体または本学教員の職能改善にどのような効果をもたらすことが想定されるか。**  
 現在、「アクティブラーニング」が教育界で注目されている。國學院大學経済学部の「基礎演習A・B」の取り組みは、新入生全員に対する初年次教育であると同時に必修科目との性格を有しているが、そうした科目に対して、「アクティブラーニング」を取り入れている先進的な取り組みであるといえる。しかしながら、この形式での授業により進んでいる大学も多々存在している。外部事業者から助言を受け、経済学部が自己改善を加えていくことで、國學院大學全体における初年次教育や「アクティブラーニング」についてのノウハウを蓄積し、全学的に波及させることが可能であろう。また、教員間での評価基準の適正化が図られることで、より授業目標に適した授業運営が可能になるとともに、授業評価の有効性の向上が成果として上がれば、それを全学的に共有することも容易である。

○経費の妥当性・必要性：教育研究費支出、人件費支出、設備関係支出のそれぞれについて、申請する事業計画と関連して妥当性と必要性を記述してください。

本事業で申請する経費は労務委託費のみである。競合他社がほとんど存在せず、平成29年度に同様の支援を依頼した事業者（and seeds）と年間の事業内容について、事前に見積もり（見積書を添付）を提出してもらった金額が申請金額である。

事業の実務担当者  
（ 教 員 ）

星野 広和（経済学部／教授）

## 平成30年度「FD推進助成（甲）学部FD推進事業」申請書

平成30年 1月 30日提出

申請者氏名 (学部長申請)	神道文化学部長 武田 秀章	㊟
課題名	学生に対する効率的なアンケート・学力調査に基づく授業運営・学部カリキュラム改善への検討	

**事業の概要（計画期間全体）（各400字程度）**

**○目的：現状認識を踏まえた事業の目的**  
 神道文化学部は、学生の4年間の学修をよりよいものにするには、授業運営の指針として、学生の学修と奉職・就職の指向性の十分な把握が必要であると考えている。この目的に即し、(1)1年次における基礎学力の充実、(2)学生の奉職・就職の指向性とカリキュラムや授業内容のマッチング、(3)卒業延期率の継続的な改善、休退学者数の減少、(4)よりよい奉職・就職や進学などの実現、のために、アンケートや学力調査を実施してデータを把握する。  
 本学部では、過年度の学部FD推進事業においても同様の調査事業を遂行し、授業改善や学部諸行事の企画、卒業延期率や修学状況の改善に向けた即応的対処法を検討する上で参照してきた。今後は、このデータおよびその分析結果に基づき、より長期的な視座に立った対応として、学部教育の質保証を目指した、授業内容およびカリキュラムのあり方の検討をも進めたい。

**○内容：目的を達成するために、どのような事業を実施するのか。**  
 下記①②のアンケート・調査を実施する。また③④の検討を進める。  
 ①学生アンケートの実施と、平成30年3月卒業生アンケートの集計・分析  
 アンケートの実施と集計・分析により、大学生生活や奉職・就職に関する学生の将来的な希望や指向性と、学生が経験に即し大学生生活をふりかえった上での評価の、二種類について把握を目指す。  
 ②神道に関する基礎学力診断（試験）  
 新入生の神道に関する基礎学力診断と、一年後の到達度調査を、それぞれ試験形態で行い、1年次の、複数科目による基本知識向上度を計測し分析する。  
 ③他大学と共同での専門教育（含：専門に関わる共通教育科目・導入教育科目）の内容検討  
 本学部と同じく神道学・宗教学に関わる専門教育課程を有し、本学との間に教育・学術研究交流に関する協定（平成18年4月締結）を有する皇學館大学と共同で、教育内容検討を実施する。  
 ④大学教育の質保証に関する検討  
 「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 哲学分野」（平成28年3月23日）（日本学術会議哲学委員会 哲学分野の参照基準検討分科会作成）の内容について、教務委員会を中心に学部内で理解をすすめて、将来的な授業改善の準備とする。

**○計画：どのような計画で、当該事業を実施するのか。**  
 上欄①②については、下記のようなアンケート・調査を当該時期に実施する。  
 ①学生アンケートの実施  
 ・平成29年3月卒業生アンケートの集計・分析  
 ・新入生意識調査（入学時）  
 ・オリエンテーション・アンケート（オリエンテーション終了後）  
 ・初年次教育に関するアンケート（1年次後期開始前）  
 ・2年次の進路希望調査（後期「神道文化演習」における奉職・就職ガイダンス時）  
 ・3年次の学生生活に関するアンケート（修学状況・進路希望など）  
 ・院友神職会からの教育補助費で実施している課外講座でのアンケート（適宜）  
 ・卒業生アンケート（卒業時）  
 ②神道に関する基礎学力診断（試験）…新入生（編入生・社会人等含む）の神道に関する基礎学力診断と、一年後の到達度（入試形態別による分析等）調査。  
 上欄③④については、継続的に検討を行う。特に③については、皇學館大学と協議の上、時期を定め、3名程度の本学部教員が同大学を訪問し、文学部神道学科の授業見学と、教員との意見交換の機会を持つ。

**○点検・評価：本事業の実施状況並びに成果をどのように点検・評価するのか。**  
 このFD推進事業については、神道文化学部教務委員会が主体となって実施する。実施状況については、定期的にかかれる教務委員会においてその進行状況を報告し点検するとともに、学部教授会でも実施状況の報告を行い、学部の教員からの意見を聴取することで、十分な点検を果たしたい。また、成果については、適宜報告書の形にまとめて教務委員会・学部教授会で中間報告を行うとともに、特に教務委員会では授業設計や授業運営に関する基礎資料として、具体的な内容を検討する。

**○改善・期待される効果：今後の当該学部の教授法や授業改善にどのように役立つことが想定されるか。具体的に記述してください。**  
 新入生の意識調査については、大学入学時の指向性を把握することによって、そのデータを参考とした授業の設計・運営の改善が可能になる。オリエンテーションならびに課外活動については、円滑な学生生活のためには友人関係が重要だという位置づけから実施しているアイスブレイクをはじめ、学部が用意した諸企画が学生にどのように受けとめられているか、学生のさらなるニーズはどこにあるのかを把握することで、その後の企画立案の基礎とすることができる。基礎学力診断については、具体的な学修項目に即した成績を調査することで、1年次の基礎的な科目の授業設計・運営について、具体的に検討・改善が可能になる。  
 以上の調査とその結果分析に加え、皇學館大学と共同の専門教育内容検討、および質保証に関する検討を行うことにより、より長期的な視座での授業・教育改善の流れを見据えた認識を培い、将来における具体化につなげることが期待される。

○汎用性（波及効果）：成果を全学で共有することで、当該学部学科を超えて、本学学士課程教育全体または本学教員の職能改善にどのような効果をもたらすことが想定されるか。

神道文化学部は、1年次学生の習熟度を測る基準として、神道関係の基礎知識を用いることが可能であるが、他学部が同じ指標を用いることはできない。ただ、初年次学修の習熟度を測る指標なり試験なりを用意することで、ある程度の客観的なデータが把握できるという手法は、全学で共有可能である。

神道文化学部が採用している集計手法は、通常の業者委託アンケートと比較して、対費用効果はかなり高いと考えられる。全く同じ方法を採用する必要はないが、学生のアンケート・調査を年に複数回実施することで把握されるデータもある。費用を低く抑えつつ実施回数を確認するという手法は、全学でも参考になるのではないかと考える。

また本学部の専門教育課程が有する高い固有性を保持しつつ、授業方法のより一般的な改善を目指して、長期的な視野を培うことで、本学の建学の精神に関わる共通教育等にも波及効果をもたらすことが期待される。

○経費の妥当性・必要性：教育研究費支出、人件費支出、設備関係支出のそれぞれについて、申請する事業計画と関連して妥当性と必要性を記述してください。

学生のこれからの大学生活や将来設計についての指向性や学生生活・学部の諸企画に対する評価を知るもの、および学生に対する複数回の学力調査を行って習熟度を知るものなど、複数回のアンケートや調査が必要である。調査対象となる学生の数が1学年全体となることも多く、教員自身が集計作業を行うことは困難なので、アンケート・調査に関する業者委託は妥当だと考える。業者委託も、教員のできる部分は負担し、通常の業者アンケートとは異なる低費用での実施が可能になる手法を想定している。アンケートの実施に伴う準備・整理作業、業者から出てきたアンケート結果を学部教員の必要な形に整える作業、教員の分析を補助する作業は必要であり、作業協力者の人件費としてこれを計上している。

このほかに皇學館大学を訪問する上での旅費支出を計上する。質保証に関する検討については、当年度は予算を計上しないが、今後、外部から教示を受けることなども想定している。

事業の実務担当者  
(教員)

菅 浩二 (神道文化学部神道文化学科/職位 准教授)

## 平成30年度「FD推進助成（甲）学部FD推進事業」申請書

平成30年 1月 30日提出

申請者氏名 (学部長申請)	人間開発学部長 田沼 茂紀	㊞
課題名	充実した『理論と実践の往還』による教育インターンシップに向けた学部の関わり方	

事業の概要（計画期間全体）（各400字程度）	
<p>○目的：現状認識を踏まえた事業の目的</p> <p>中央教育審議会の答申（2015年12月21日）に、これからの学校教育を担う教員の資質能力向上にむけて教員養成段階における学校インターンシップ（学校体験活動）の重要性が示されて、一律に義務化するのではないものの導入が促されている。本学ではこれに先駆けて2009年の学部開設時よりカリキュラムに学校インターンシップ科目を開設してきている。学校インターンシップは多くの大学において様々な形態で開設運用されているが、教育実習につなげる指導体制が不明瞭なまま継続されているケースもあり、学校インターンシップの在り方が問われている。そのため、人間開発学部では2017年度学部FD推進事業として、本学部の学校インターンシップの現状と課題の把握について他大学での取り組みも含めて検討を進めてきた。その中で「理論と実践の往還」が進められるインターンシップ体験がその後の教育実習に繋がるものとの共通認識に至った。そこで、本事業では学生がインターンシップで抱えた疑問・課題を大学に戻り、理論的な裏付けの下で「協議・解決・共有」し、学生が再び実習に従事できるような「理論と実践の往還」が可能な学部による支援体制の構築を目的とする。</p>	
<p>○内容：目的を達成するために、どのような事業を実施するのか。</p> <p>インターンシップ実習中に学生たちが実習校においてどのような課題に直面し対処しているのか。その情報を下記の方法によって収集・整理し、学生ならびに学部教員が情報を共有する。学内においてはこの情報を基に学生教員間でディスカッションできるようにする。</p> <p>①実習記録カードから関連記述内容を抽出。 ②中間・事後報告会時における実習中の疑問・課題についての対処についてアンケート調査を実施。 ③教育インターンシップ体験事例集の作成、ならびに事例集の配布。 ④学部FD協議会を開催し、受講学生の実習現場での課題に対する検討・対応事例を報告し、教育インターンシップでの学生が直面する課題と対応状況について意見交換も踏まえて共有する。</p>	
<p>○計画：どのような計画で、当該事業を実施するのか。</p> <p>事業①：実習記録カードからの関連記述の抽出作業（アルバイト委託） 事業②：中間・事後報告会時にアンケートを実施し集計（アルバイト委託）し、分析を行う。 事業③：実習記録カード抽出内容、ならびにアンケート集計内容を受理してインターンシップ体験事例集を製作する。事例集は実習校にも配布し、学生の実習実態の理解に役立てていただく。 事業④：学部FD協議会を1回開催し、調査データから教育インターンシップで学生がどのような課題に直面して対処に苦慮しているのかを報告する。 教職科目担当以外の教員の関わり方についても協議して、学生に課題解決の支援方法を探る。</p>	
<p>○点検・評価：本事業の実施状況並びに成果をどのように点検・評価するのか。</p> <p>本事業の実施状況は、学部FD協議会の開催により調査結果報告と協議を実施することで点検評価を行う。また本事業の成果は学部FD協議会内容も含めてインターンシップ体験事例集を作成して点検評価する。</p>	
<p>○改善・期待される効果：今後の当該学部の教授法や授業改善にどのように役立つことが想定されるか。具体的に記述してください。</p> <p>教育インターンシップ実習中に学生が抱える疑問や課題の解消過程に「学生・実習校・学部教員」が連携して関わることは「理論と実践の往還」の実践となり、学生にとっては子ども理解や学校業務理解を深く進めることができるようになると考えられる。さらに学生が次に控える教育実習においても各自がテーマをもって積極的に参加する心構えも育つと考えられる。</p>	
<p>○汎用性（波及効果）：成果を全学で共有することで、当該学部学科を超えて、本学学士課程教育全体または本学教員の職能改善にどのような効果をもたらすことが想定されるか。</p> <p>本学部のFD推進事業の成果により、次のような効果が想定される。 1. 渋谷キャンパス開講の中・高教職課程における学校インターンシップの運営ならびに指導体制構築の検討材料となる。</p>	
<p>○経費の妥当性・必要性：教育研究費支出、人件費支出、設備関係支出のそれぞれについて、申請する事業計画と関連して妥当性と必要性を記述してください。</p> <p>1. 印刷製本費は、インターンシップ受講学生より収集したデータを事例集として冊子を製本するために計上する。 2. 人件費は、実習記録カードや中間・事後報告会時のアンケート集計作業の費用として計上する。</p>	

事業の実務担当者 (教員)	山田佳弘（人間開発学部健康体育学科／教授）
------------------	-----------------------

## 平成30年度「FD推進助成（乙）グループによるFD推進事業」申請書

申請者氏名 (所属／職名)	成田 信子 (人間開発学部初等教育学科／教授)	印
事業名	ループリックを活用した日本語関連科目の学修支援	
実施形態	学部・学科横断型	
共同研究者氏名 (所属／職名)	高橋 大助 (文学部 教育学 (教職課程)／教授) 吉田永弘 (文学部 日本文学科／教授) 渡邊雅俊 (人間開発学部初等教育学科／教授) 坂本正徳 (人間開発学部初等教育学科／教授) 鈴木道代 (教育開発推進機構／助教 (特別専任)) 大津直子 (教育開発推進機構／助教 (特別専任))	
事業の概要 (計画期間全体) (各400字程度)		
<p>○目的：事業の目的</p> <p>大学生の学修に言語能力の占める割合はかなり大きい。各講義の内容を聞き取り、的確にノートをとる力、各領域・分野の入門書・専門書を読解する力、レポートを作成する力、演習でのディスカッションで自分の考えを述べる力等が求められ、初年次から言語能力が学修成績を左右する場合も多い。言語能力の伸長にはメタ認知能力の関与が大きく、自分の言語理解や言語使用に関する状況をつかみ自ら伸ばそうとする意欲や態度が結果を左右する。本事業の目的は、学生の言語に関するメタ認知能力を伸ばし、学生が自ら自覚的に言語能力を伸ばしていこうとする学修態度の育成をめざることである。</p> <p>本学では共通教育の中に1・2年対象の選択科目「基礎日本語」を位置づけている。29年度の履修者数は前期473名後期455名で、選択科目ではあるが1年生の入学定員2180名に対してかなりの割合が受講しているといえる。「基礎日本語」では大学の学修に必要な基礎的な言語能力を身に付けることをねらっている。29年度からカリキュラムの改善に取り組み、30年度は新たに「問いをもって思考し、文章を記述する力」を育成しようとしている。本事業ではメタ認知能力を伸ばすための試行として「構成、記述、推敲」の各段階でループリックを使用し、学生の自覚的な言語使用また言語能力を伸ばそうとする意欲を喚起し、その効果を検証する。</p>		
<p>○内容：目的を達成するために、どのような事業を実施するのか。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 高等教育におけるループリック使用の実態調査 <ul style="list-style-type: none"> <li>・言語関連科目におけるループリック使用の調査</li> </ul> </li> <li>2 「基礎日本語」のシラバス実施の振り返りと検証 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ループリックを使った自己学習能力の開発と教授方法</li> </ul> </li> <li>3 自己学習の方法としての文章診断ソフトの使用と教員による添削の効果的な連動 <ul style="list-style-type: none"> <li>・教員による添削の重点化</li> <li>・文章診断ソフトSAIでの記述面の自己診断</li> </ul> </li> </ol>		
<p>○計画：どのような計画で、当該事業を実施するのか。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 日本語関連科目でのループリック使用先進校事例収集及び調査</li> <li>2 日本語関連科目のカリキュラム運用・教授方法について講話を聴き、本学のカリキュラム、教授方法改善に生かす。</li> <li>3 主に「基礎日本語」での3種類の文章記述に合わせたループリックと教授方法の開発 <ul style="list-style-type: none"> <li>・開発したループリック使用による学生のメタ認知等の自己学習能力伸長の調査</li> </ul> </li> <li>4 文章診断ソフトによる文章記述面の自己診断の効果検証</li> <li>5 教員の添削を文章の構成、論理展開に重点化し、添削による学生の記述力の伸長を検証する。</li> <li>6 4と5の連動による添削の効率化を図る。</li> </ol>		

○役割分担：申請者と共同研究者の役割をそれぞれ明確に示してください。

成田信子：全体統括（1から6）  
 高橋大助：日本語関連科目における教授方法の開発・検証（主に計画2及び3）  
 吉田永弘：日本語関連科目におけるルーブリックの開発・検証、文章診断ソフトの記述面診断の妥当性の検討（主に計画2、3及び4）  
 渡邊雅俊：ルーブリック使用・文章診断ソフト使用による学生のメタ認知等の自己学習能力伸長の調査（主に計画3及び4）  
 坂本正徳：文章診断ソフトSAIの評価（主に計画4及び6）  
 鈴木道代：日本語関連科目のルーブリック使用先進事例調査と本学への適用、文章診断ソフトによる文章記述面の自己診断の効果検証（主に計画1、2、3及び4）  
 大津直子：3種類の文章記述に合わせたルーブリックと教授方法の開発、添削の重点化検証（主に計画2、3、5、6）  
 研究協力者：必要に応じて高等教育関連の教員、「基礎日本語」担当の兼任講師を含む。

○点検・評価：本事業の実施状況並びに成果をどのように点検・評価するのか。

- 1 主に内容1から3について、グループFD研究会（隔月または月に1回程度開催）による共有と発表討議及びまとめ
- 2 ルーブリックの開発と検証については、小グループでの「基礎日本語」授業での効果の報告と精査を経て、より精度の高いルーブリックを目指す。
- 3 文章診断ソフトの評価は事例研究と学生へのアンケート調査を行い、ソフト開発への提言とし、本学での学生の自己学習能力伸長への効果を探る。
- 4 教員の添削と文章診断ソフトとのかかわりについては、学会発表で公にし、他からの評価を受ける。

○改善：今後の本学学士課程教育の教育改善にどのように役立つことが想定されますか。

日本語関連科目におけるメタ認知等自己学習能力の開発は、専門課程における各科目の学修を支えるものになると考えられる。「基礎日本語」の学修内容と他の科目での学修内容を比較し、それぞれの科目で内容の重点化を図り、カリキュラムマップの精緻化につなげることができる。

○経費の妥当性・必要性

- ・FD研究会に際し、「基礎日本語」で専用のプロジェクターが必要なことから、用品費に申請している。（29年度は渋谷での研究会に際し、機構の機器を借用したが、型番が古く、文章診断ソフトを投影するのに不都合であった。）
- ・教員の文章内容添削と文章診断ソフトの記述表現面の添削を比較、連動して、学生の自己学習能力を高めるため、図書資料費に現在の文章診断ソフトで最も能力が高いと思われるSAIを申請している。29年度から開発側に学生の試験的使用での不都合（接続詞の使用、名刺率・用言率の適正さ、引用の扱い等）を報告し、國學院大學での使用に適合するよう改善を図ってもらっている。30年度もソフト面での要望を反映できるよう交渉する。
- ・図書資料費に日本語関連科目の教科書ならびに日本語学基礎資料購入費用を申請した。
- ・ルーブリック使用の先進事例を持つ大学の教員、日本語関連科目カリキュラム開発の知見を持つ教員にFD研究会で講話をしてもらえるよう謝金を手数料（報酬）を申請している。
- ・「基礎日本語」におけるルーブリックの効果を生徒のアンケート記述から分析するため、学生アルバイトに整理作業を人件費に計上した。
- ・アンケートの集計・データ化を労務委託費（電算）に計上した。

本申請書の作成担当者	成田 信子（人間開発学部 初等教育学科／教授）
------------	-------------------------



## 平成30年度「FD推進助成（甲・乙）事業」中間報告書 一覧

### 【(甲) 学部FD推進事業】

文学部

法学部

経済学部

神道文化学部

人間開発学部

### 【(乙) 学部FD推進事業】

成田 信子 人間開発学部 教授

#### 【備考】

- 1) 担当事務課に提出された「中間報告書」に基づき、予算執行・修正・補正等に係る実務的な内容を除き、事業の中間報告、および修正に係る記述部分を収録した。また、担当者等の個人情報に係る箇所は除外した。



## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲）学部 FD 推進事業」中間報告書

平成 30 年 9 月 18 日提出

事業申請者 (学部長申請)	文学部長 石川則夫	㊟
課題名	カリキュラムおよび授業改善の基本方針検討	

## ■事業の進展状況

平成 30 年 4 月から現在（9 月末）までにおける当該申請事業の進展状況について、申請書に記載した「目的」「内容」「計画」「役割分担」を考慮しつつ、いつ、どこで、だれが、何を実施したかを考慮して、その概要を簡潔に説明してください（枠内書式自由）。

◎ なお、学部教員全員を対象として検討会等を実施した場合には、その参加人数を明記してください。

平成 30 年 4 月より本年度の FD 推進事業の準備作業を行っている。

この事業は、文学部独自の授業評価アンケートを継続的に実施し、カリキュラムおよび授業改善の指針を検討するための材料とすることを目的としている。なお、過去 4 年間のデータを総括すべしとの意見も出たが、前年度予算申請の都合上、今年度は見送ることにした。

内容は、①文学部独自のアンケート実施、②研修会の実施である。

計画は、①5-6 月のアンケート項目や実施方法を文学部教務委員会で確定し、後期開始後アンケートを行う。

②アンケート結果を踏まえて、平成 30 年度以内に文学部教務委員会内で研修会を行う、というものである。現在の所、アンケート用紙のたたき台を作成し、9 月 19 日の文学部教務委員会で審議をした後、印刷に回す予定である。さらに後期開始後 10 月後半から 11 月にかけて、アンケートを学生に配布し、回答を得る予定である。

アンケート内容については別紙、業者による調査票（予定）を参照されたい。

役割分担については、文学部教務委員会内の担当である牧野が、教育開発推進機構と業者との連携を進めている。

予算に関しては、アンケート内容の分割によって、増額が見込まれたが、業者との交渉で、予算内に収まった。

**■事業に関する変更点**

現在までの進展状況から、申請書に記した「計画」「役割分担」「点検・評価」「改善（期待される効果）」に変更が生じる見込みであれば、その理由とどのような変更を見込まれるかについて簡潔に記述してください（枠内書式自由）。

アンケート用紙を3種類に分けた。主に、1, 2年生、3, 4年生によって、各学科のカリキュラムの内容が違っていることを考慮したものである。①新たな教養教育制度実施のため、外部業者による英語の授業が1, 2年生の学生に如何に影響を与えているか、②卒業論文必修制、選択制を敷いている学科によって、アンケート内容を分けた。以上の観点から、学生たちのカリキュラム理解、新教育制度の長所欠点、卒業論文選択までの履修行動を明らかにする。

**■経費の執行状況** ※いずれかに○を付けて「その理由」を記述してください

当初計画通りの見込み

減額補正を申請する見込み

**\* その理由（減額補正を申請する場合、必ず記入してください）**

アンケート内容の変更があり、むしろ増額が必要であったが、業者との交渉の結果、当初の600千円に収まったため。

事業実務担当者名(教員)

牧野 格子 (文学部文学科/職位 准教授)

## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲）学部 FD 推進事業」中間報告書

平成 30 年 9 月 3 日提出

事業申請者 (学部長申請)	法学部長 門広 乃里子	⑨
課題名	法学部新カリキュラムの実効性の検証	

## ■事業の進展状況

平成 30 年 4 月から現在 (9 月末) までにおける当該申請事業の進展状況について、申請書に記載した「目的」「内容」「計画」「役割分担」を考慮しつつ、いつ、どこで、だれが、何を実施したかを考慮して、その概要を簡潔に説明してください (枠内書式自由)。

◎ なお、学部教員全員を対象として検討会等を実施した場合には、その参加人数を明記してください。

本年度より、公法・刑事法・民事法の各分野で入門科目 (公法入門・刑事法入門・民事法入門) を開講し、新カリキュラムが開始された。これらの入門科目は、アクティヴ・ラーニングの手法により、受講生に学習の動機づけと基礎的な知識・学習方法を習得させ、その後の履修カテゴリ選択を促すことを目的としている。かかる目標が実現されているかどうかを検証するために、法学部 FD 委員会では入門科目受講生に対しアンケートを実施した。アンケートの実施にあたっては、公法・刑事法・民事法担当者にアンケート項目の作成を依頼し、法学部 FD 委員会で、最終的な項目の調整を行った。その上で、専門業者にアンケートの集計・分析を委嘱した。アンケートは、入門科目授業終了時に、公法入門・刑事法入門・民事法入門の受講生に対して実施され、現在、委嘱した専門業者による集計・分析を待っているところである。

## ■事業に関する変更点

現在までの進展状況から、申請書に記した「計画」「役割分担」「点検・評価」「改善 (期待される効果)」に変更が生じる見込みであれば、その理由とどのような変更を見込まれるかについて簡潔に記述してください (枠内書式自由)。

変更の予定なし。

## ■経費の執行状況 ※いずれかに○を付けて「その理由」を記述してください

当初計画通りの見込み

減額補正を申請する見込み

\* その理由 (減額補正を申請する場合、必ず記入してください)

事業実務担当者名 (教員)	小原 薫 (法学部法律学科/職位: 准教授)
---------------	------------------------

## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲）学部 FD 推進事業」中間報告書

平成 30 年 9 月 10 日提出

事業申請者 (学部長申請)	経済学部長 橋元 秀一	㊟
課題名	基礎演習 A・B におけるルーブリックの作成・授業導入、および実践のためのコーチングスキル研修	

## ■事業の進展状況

平成 30 年 4 月から現在（9 月末）までにおける当該申請事業の進展状況について、申請書に記載した「目的」「内容」「計画」「役割分担」を考慮しつつ、いつ、どこで、だれが、何を実施したかを考慮して、その概要を簡潔に説明してください（枠内書式自由）。

◎ なお、学部教員全員を対象として検討会等を実施した場合には、その参加人数を明記してください。

平成 30 年度前期（4 月～9 月末）の学部 FD 推進事業として、事業計画書「内容」にあるように、①「ルーブリックの作成支援：教員の教育観の共有と受講生が授業を通じて獲得すべきスキルの明確化」については、委託事業者である and seeds 社小畑氏のサポートを得ながら、基礎演習 A・B の担当教員全体を対象として、各教員が持つ教育観を共有するワークショップを開催し、授業の趣旨から考えて必要なスキルや知識を棚卸した。

具体的には、基礎演習 A・B の担当教員全体を対象にしたワークショップを、(1) 6 月 13 日[10 名参加]と (2) 7 月 25 日[9 名参加]の 2 回開催し、基礎演習 A・B を通じて、育成したい学生像や身に付けて欲しいスキルや知識について、広く意見を収集した。また、(1) では、アクティブ・ラーニング型の教授法のスキルアップ研修として、ルーブリックを活用することの目的とその効果について、and seeds 社小畑氏からレクチャーを受けた。

(1)、(2) のミーティングを踏まえ、広く出た意見を取りまとめるため、担当教員の中から、ルーブリックの文言を選定する 5 名の教員からなるサポートチームを有志で結成し、and seeds 社小畑氏のサポートを得ながら、6 月 27 日、9 月 5 日に、ミーティングを開催し、ルーブリックの文言化作業を進めた。ルーブリックについては、9 月 20 日に予定されている基礎演習 A・B 担当教員ワークショップまでに完成させる予定である。

事業計画書「内容」にある②「ルーブリックの授業導入の支援：ルーブリックを活用する上でのルール作りと具体的な測定方法のトレーニング」と③「アクティブ・ラーニング型授業の学習法の改善・発展支援：ルーブリックの到達度合いを高められるように教員に対して教授法を指導」については、9 月 20 日の基礎演習 A・B 担当教員ミーティングを始めとして、後期に開催予定である。

## ■事業に関する変更点

現在までの進展状況から、申請書に記した「計画」「役割分担」「点検・評価」「改善（期待される効果）」に変更が生じる見込みであれば、その理由とどのような変更を見込まれるかについて簡潔に記述してください（枠内書式自由）。

本事業は申請書に記した計画に沿って、予定を上回るペースでワークショップを実施しており、進捗状況としても良好である。特に、and seeds 社の支援を受けながら、基礎演習担当兼 FA 担当教員でもある齊藤助教を始めとする 5 名の教員からなるサポートチームが、ルーブリックの文言化を進めており、本事業の現時点での「計画」「点検・評価」「改善・期待される効果」において変更はない。

■経費の執行状況 ※いずれかに○を付けて「その理由」を記述してください

当初計画通りの見込み

減額補正を申請する見込み

\* その理由 (減額補正を申請する場合、必ず記入してください)

事業実務担当者名(教員)	星野 広和 (経済学部/教授)
--------------	-----------------

## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲）学部 FD 推進事業」中間報告書

平成 30 年 9 月 10 日提出

事業申請者 (学部長申請)	神道文化学部長 武田 秀章	⑨
課題名	学生に対する効率的なアンケート・学力調査に基づく授業運営・学部カリキュラム改善への検討	

## ■事業の進展状況

平成 30 年 4 月から現在（9 月末）までにおける当該申請事業の進展状況について、申請書に記載した「目的」「内容」「計画」「役割分担」を考慮しつつ、いつ、どこで、だれが、何を実施したかを考慮して、その概要を簡潔に説明してください（枠内書式自由）。

◎ なお、学部教員全員を対象として検討会等を実施した場合には、その参加人数を明記してください。

当事業申請書に記載した計画に従い、平成 30 年 4 月から現在までに以下の事業を実施している。

## ○学生アンケートの実施・集計

- ・新入生意識調査：（平成 30 年 4 月 3 日 神道文化学部ガイダンス時 実施）185 名
- ・オリエンテーション・アンケート（平成 30 年 4 月 15 日 明治神宮オリエンテーション時 実施）177 名

## ○神道に関する基礎学力診断試験・新入生（編入生・社会人等含む）の神道に関する基礎学力診断

- ・「神社検定」3 級問題を使用（平成 30 年 4 月 12 日 「神道概論」第 1 回目講義時 実施）  
昼（3 限）143 名 夜（6 限）89 名受験

※以上の意識調査・学力診断については、株式会社情報基盤開発に集計を委託し、納品を受けた。

## ○学生アンケート分析

- ・平成 29 年度卒業生アンケート（平成 30 年 3 月 25 日卒業式実施、学部生 146 名 専攻科 38 名 別科 8 名）  
集計結果、および昨年度一年間のアンケート集計結果について、過年度データによる経年変化も含め、作  
従事者 1 名を雇用し分析を進めている。  
分析結果は、冊子『FD 推進事業報告書』とし、7 月 11 日の本年度第 4 回学部教授会にて教員に配布した。  
今後も学部執行部、教務委員会を中心に検討材料とする。

## ■事業に関する変更点

現在までの進展状況から、申請書に記した「計画」「役割分担」「点検・評価」「改善（期待される効果）」に変更が生じる見込みであれば、その理由とどのような変更を見込まれるかについて簡潔に記述してください（枠内書式自由）。

当事業は現在まで、申請書に記した計画等の通りに進捗しており、評価や効果等についても特に変更の生じる見込みはない。計画に従い、今後 2 年次の進路希望調査（後期「神道文化演習」における奉職・就職ガイダンス時、11 月を予定）、学期末の基礎学力診断（1 月）、卒業生アンケート（卒業時）を実施、集計の上分析するほか、他の調査についても適宜実施の予定である。

このほか後期実施予定として予算申請している、「他大学と共同での専門教育の内容検討」についても、3 名の本学部教員が皇學館大学を訪問し、文学部神道学科の授業見学と、教員との意見交換の機会を持つ計画で、同大学教務担当教員と連絡・協議を進めている。

■経費の執行状況 ※いずれかに○を付けて「その理由」を記述してください

当初計画通りの見込み

減額補正を申請する見込み

\* その理由 (減額補正を申請する場合、必ず記入してください)

当事業は上記の通り、本年度後期も申請書に記した計画に沿って進む見込みである。「他大学と共同での専門教育の内容検討」については、先方の事情等を考慮しつつ実施の必要があるが、この件を含めて現時点では、特に経費の執行について変更・補正等の必要を認めない。

事業実務担当者名(教員)	菅 浩二 (神道文化学部/教授)
--------------	------------------

## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲）学部 FD 推進事業」中間報告書

平成 30 年 9 月 10 日提出

事業申請者 (学部長申請)	人間開発学部長 田沼茂紀	㊟
課題名	充実した『理論と実践の往還』による教育インターンシップに向けた学部の関わり方	

## ■事業の進展状況

平成 30 年 4 月から現在（9 月末）までにおける当該申請事業の進展状況について、申請書に記載した「目的」「内容」「計画」「役割分担」を考慮しつつ、いつ、どこで、だれが、何を実施したかを考慮して、その概要を簡潔に説明してください（枠内書式自由）。

◎ なお、学部教員全員を対象として検討会等を実施した場合には、その参加人数を明記してください。

2017 年度の人間開発学部の FD 推進事業において、本学部の学校インターンシップの現状と課題の把握について他大学での取り組みも含めて検討を行った。そして、「理論と実践の往還」が進められるインターンシップ体験がその後の教育実習に繋がるものとの共通認識に至った。そして、この「理論と実践の往還」を可能にするには、学校インターンシップにおいて学生がどのような課題を持つのかを明らかにし、その課題を教員間で共有し、さらに授業に反映することが必要である。そこで、今年度はインターンシップ実習中に学生たちが実習校においてどのような課題に直面し対処しているのかについて情報を収集し、教員間で共有することを目的としている。

これまで、3 回 FD 推進委員会を開催した。そして、昨年度の実習記録カードから学生の課題等を抽出することが確認された。また、抽出の項目や具体的なアルバイトの運用方法について話し合いが行われた。

## ■事業に関する変更点

現在までの進展状況から、申請書に記した「計画」「役割分担」「点検・評価」「改善（期待される効果）」に変更が生じる見込みであれば、その理由とどのような変更を見込まれるかについて簡潔に記述してください（枠内書式自由）。

最終的な成果物として、「インターンシップ体験事例集」という形で冊子にする予定であるが、申請当初と変更無く実施する予定である。

## ■経費の執行状況 ※いずれかに○を付けて「その理由」を記述してください

当初計画通りの見込み

減額補正を申請する見込み

\* その理由（減額補正を申請する場合、必ず記入してください）

事業実務担当者名(教員)	神事 努（人間開発学部健康体育学科/准教授）
--------------	------------------------

## 平成 30 年度「FD 推進助成（乙）グループによる FD 推進事業」中間報告書

平成 30 年 9 月 13 日提出

事業申請者 (研究代表者)	(氏 名) 成田 信子 (所属・職名) 人間開発学部・教授	⑧
課題名	ルーブリックを活用した日本語関連科目の学修支援	

## ■事業の進展状況

## [目的]

本事業の目的は、学生の言語に関するメタ認知能力を伸ばし、学生が自ら自覚的に言語能力を伸ばしていこうとする学修態度の育成をめざすことである。

## [内容]

目的に照らして下記のような事業内容を実施した。

1. 共通教育「基礎日本語」の前期の授業において、本年度よりシラバスを改訂して行った「読解型レポート」と「調査型レポート」において、ルーブリックを使用して自己評価・相互評価・教師による評価を行い、その効果と課題について研究会で共有し、出された意見をもとに後期は改善を図る見通しである。
  2. 「基礎日本語」の前期3クラスにおいて、自己学習の方法として文章診断ソフト SAI の使用と教員による添削の効果的な連動を図った。主に文章表現面で自己学修に有効であることが実証され、教員による添削の重点化を図れることが示唆された。
  3. 高等教育における言語関連科目についてルーブリック使用の文献調査に着手し、ルーブリック作成の手順、改訂の手続きについて本学でも参考にし、ルーブリックの改善を行う見通しを得た。
- 1、2、3の内容については、FD 研究会ならびに科目担当者の研修会を次のように開催して、提案・討議・検証を行っている。

## [FD 研究会ならびに科目担当者研究会]

4月18日 第1回グループFD研究会 「年間計画」出席者/グループFD研究分担者6名 研究協力者1名

5月17日 科目担当者研修会「シラバス詳細」出席者/科目担当者11名（うち3名はグループFDメンバー）

7月4日 第2回グループFD研究会「書くに値することを見つけるー主体的・協同的・深い学びとして書くことー」話題提供 高橋大助（文学部教授）出席者/グループFD研究分担者6名 研究協力者2名

7月26日 科目担当者研修会 「前期総括」ルーブリック使用について意見交換 出席者/科目担当者11名（うち3名はグループFDメンバー）

8月3日 第3回グループFD研究会 「ルーブリックについて」話題提供 成田信子（人間開発学部教授）出席者/グループFD研究分担者5名 研究協力者1名 科目担当者1名

9月20日（予定）第4回グループFD研究会・科目担当者研修会（合同）「前期成績評価について」話題提供 笹川勲（「基礎日本語」兼任講師）

### ■事業に関する変更点

「計画」「役割分担」「点検・評価」「改善（期待される効果）」のうち、「計画」で記した文章診断ソフトの導入による効果検証については、「基礎日本語」の時間割等の関係で可能なクラスで行うものとする。またルーブリックに関する先行事例の講話講師招聘については、学年歴等との関係から3名から2名とする。当初の「点検・評価」に記した成果の学会発表については、前後期の実践と考察を経て、次年度に行うものとする。

### ■経費の執行状況

当初計画通りの見込み

減額補正を申請する見込み

#### \* その理由

事業に関する変更点に記した点を踏まえて、下記のように減額補正を申請する。）

- 1 文章診断ソフト前期3クラス展開に加えて、改善修正申し入れを行い、カスタマイズを行い、これを検証するため後期は9クラス展開を行う。通年で16クラス予定のところ12クラスの展開に変更し、成果の検証、ソフト改善に重点を置くこととする。  
16クラスから12クラスに変更した分（4クラス分 392000円）を減額する。
- 2 成果の学会発表を次年度に送り、一般旅費（初年次教育学会北海道2名分 100000円）を減額する。
- 3 講師招聘のための手数料（報酬1名分 50000円）を減額する。

平成 30 年度「FD 推進助成（甲・乙）事業」事業報告書・成果報告会資料 一覧

【(甲) 学部 FD 推進事業】

文学部

法学部

経済学部

神道文化学部

人間開発学部

【(乙) 学部 FD 推進事業】

成田 信子 人間開発学部 教授

【備考】

- 1) 平成 30 年度「FD 推進助成（甲・乙）事業」の「事業報告書」と、同事業成果報告会の配付資料、及び学部から提出された参考資料を収録している。
- 2) 「事業報告書」の公開範囲については、学部・グループの意向により、適宜編集を行っている。その他の資料についてもこれに準ずる。



## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲）学部 FD 推進事業」報告書

標記のことに関し、以下のとおり報告いたします。

学 部 名	文学部
事 業 名	カリキュラムおよび授業改善の基本方針検討
平成 30 年度実務担当者名	牧野格子
事 業 の 概 要	
<p>以下、<u>本年度実施した推進事業の概要</u>について、年初「学部 FD 推進事業」申請書の「目的」「内容」「計画」を参照しつつ、具体的に記入してください。</p> <p>○目的:現状認識を踏まえた事業の目的</p> <p>文学部独自の授業評価アンケートを継続的に実施し、カリキュラムおよび授業の改善の指針を検討するための材料とする。過去 3 年間のアンケート実施の結果、アンケートをどのような方法（質問項目、回収方法等）で実施するのが望ましいかが大体定まってきた。来年度は従来の経験に鑑み、以下の二つの点に留意して事業を進めたい。一つは満足度の低い授業とは具体的にはどのような授業なのかということである。もう一つは学科ごとの課題とは具体的には何かということである。従来文学部アンケートは特定の学年に偏る傾向にあり、この点を是正しながら、学年ごとの推移を見出す。ここまでが昨年度提出した申請書における目的であるが、実際今年度は各学科から特に尋ねたい項目を聞き取り、(1)英語科目(2)卒業論文の 2 点の項目を設定し、アンケート質問項目を変えた。(1)の英語科目に関しては、1, 2 年生と 3, 4 年生に分け、実施体制の違いで学生の満足度に違いが出るかどうかを探る。(2)の卒業論文については、必修(史学、哲学)と選択(日文、外文、中文)を実施している学科に分け、履修・非履修の理由と履修した際の満足度を聞いた。</p> <p>○内容: 目的を達成するために、どのような事業を実施するのか。</p> <p>文学部独自のアンケート（「FD アンケート」）の実施</p> <p>○計画: どのような計画で、当該事業を実施するのか。</p> <p>アンケート: 今年度 6 月の文学部教務委員会で、上記の(1)(2)項目を加えてアンケート項目を変更し、11 月 12 日～24 日にアンケートを実施した。業者（(株)理経）にデータの分析を委託し、2 月 13 日 13 時半より開催の教務委員会（文学部教務部委員 1 人、文学部教務委員 9 人、教務課員 2 人、計 12 人出席）で分析結果の報告を行ってもらった。</p> <p>今回はアンケート分析委託料として 600 千円申請したが、項目変更がありながらも、この予算内で実施できた。今年度の成果を含めて来年度は前期に過去 5 年間の総括を行い、後期は結果からの問題点を踏まえて講習会 2 回行う予定である。</p>	



---

# 國學院大學

## 文学部FDアンケート

### 【2018年度サマリー】

2019年 2月13日

## 調査概要

### 【目的】

國學院大学文学部の在校生を対象としたアンケートを実施し、学科毎のカリキュラム満足度や、理想とする授業・満足度の低い授業の傾向等を明らかにする。そして、その結果を今後の学習環境整備の為の検討材料とする。

### 【対象者】

2018年度國學院大學文学部の学生（1年～4年）

### 【調査期間】

2018年11月12日（月）～11月24日（土）

### 【調査方法】

調査票(紙) 配布・回収

### 【調査ボリューム】

A4 1ページ(裏表)

### 【回収数】

945枚

### 【報告書作成】

株式会社理経

# 基本情報

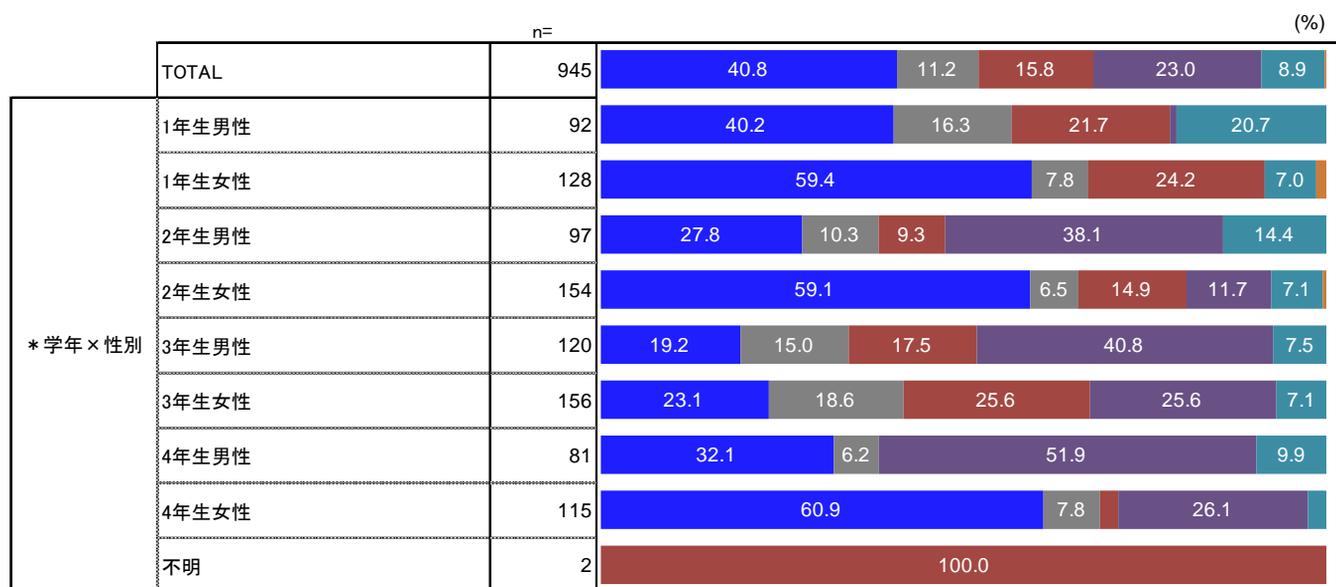
## 【回収数／実施率】

	学部合計	日本文学	中国文学	外国語	史学	哲学	不明
学生数	3,300	1,220	256	577	941	306	
回収数	945	386	106	149	217	84	3
実施率	29%	32%	41%	26%	23%	27%	
誤差	±3%	±4%	±7%	±7%	±6%	±9%	

※誤差は、信頼区間95%で算出

## 【学科×学年×性別】

■ 日本文学科    ■ 中国文学科    ■ 外国語文化学科    ■ 史学科    ■ 哲学科    ■ 不明

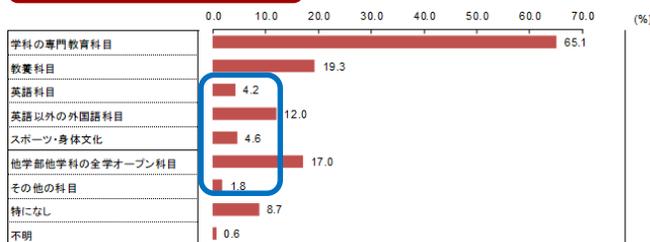


代表性を担保することを考慮すると、学科別では、中国文学科、外国語文化学科、哲学科の実施率をもう少し上げるべきである。学年、性別では、日本文学科の女性は、3年生以外で他学科と比べ割合が大きい。史学科の1年生は、非常に少ない。

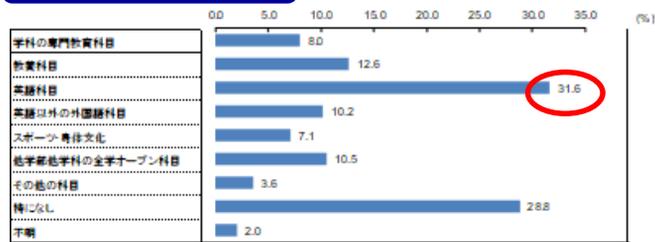
【本学の授業の中で、満足度の高いもの・低いものはどれですか。(複数回答可)】

全体

満足度高い



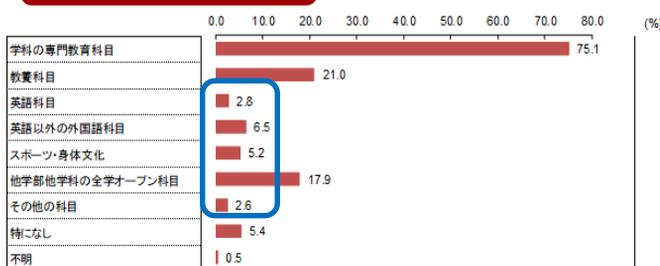
満足度低い



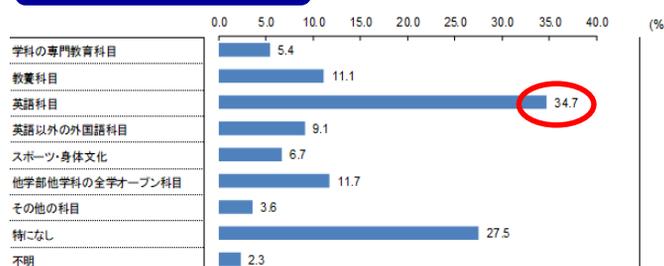
英語科目、英語以外の外国語科目、スポーツ・身体文化、その他の科目が満足度が低い。これらの科目は、満足度が低い質問の方は、強くなる傾向があるはずであるが、英語科目だけが突出して、特に英語科目に満足していない学生が多いことが分かる。

日本文学科

満足度高い



満足度低い



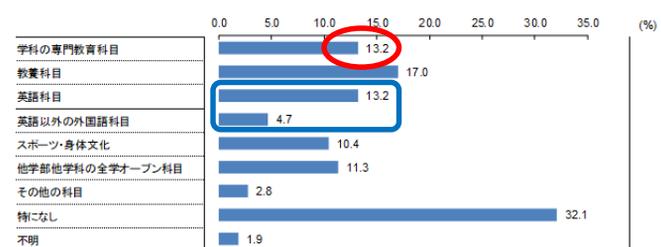
英語科目、英語以外の外国語科目、スポーツ・身体文化、その他の科目が満足度が低い。満足度が低い方の傾向は、英語科目に満足していない学生が多い。サンプルサイズが一番大きいので、全体的な傾向に近い。

中国文学科

満足度高い



満足度低い



英語科目、英語以外の外国語科目、スポーツ・身体文化、その他の科目が満足度が低い。特に英語科目の満足度が他学科に比べ低い。満足度が低い方の傾向は、学科の専門教育科目に満足していない学生が他学科よりも多く、英語科目、英語以外の外国語科目に満足していない学生は他の学科よりも少ない。

高い傾向

低い傾向

【本学の授業の中で、満足度の高いもの・低いものはどれですか。(複数回答可)】

### 外国語文化学科

満足度高い



満足度低い



学科の専門教育科目、教養科目の満足度が他学科よりも低い。英語科目、英語以外の外国語科目は他学科よりも満足度が高い。満足度が低い方の傾向は、学科の専門教育科目が、他学科よりも満足度が低い学生が多く、スポーツ・身体文化が他学科よりも満足度が低い学生が少なく、英語科目は、他学科に比べると満足度は高いが、決して大きい値ではない。一方で、英語科目は、他学科よりも満足度低い傾向であるが、決して少なくはない割合である。

### 史学科

満足度高い



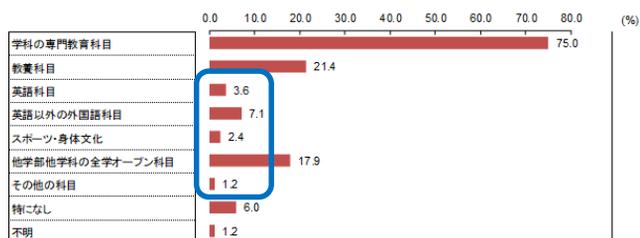
満足度低い



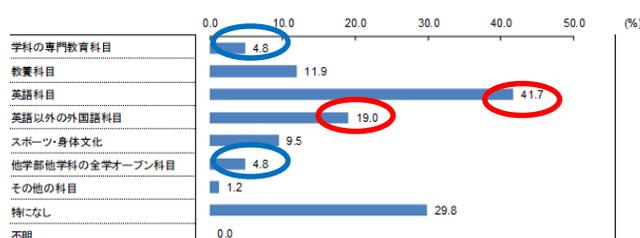
英語科目、英語以外の外国語科目、スポーツ・身体文化、その他の科目の満足度が低い。満足度が低い方の傾向は、学科の専門科目が他学科よりも満足度が低い学生が少ないが、全体的な傾向とほぼ同じである。

### 哲学科

満足度高い



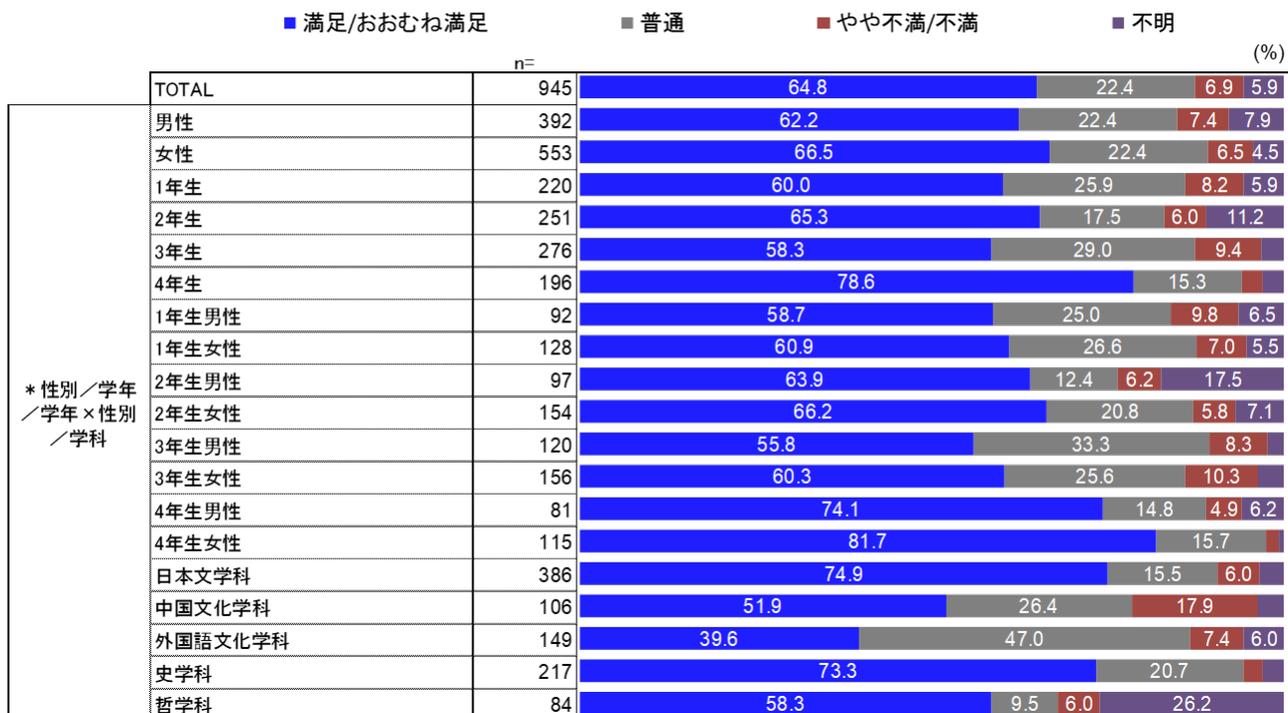
満足度低い



英語科目、英語以外の外国語科目、スポーツ・身体文化、その他の科目の満足度が低い。特にスポーツ・身体文化の満足度が他学科よりも低い。満足度が低い方の傾向は、学科の専門科目、全学オープン科目が他学科よりも満足度の低い学生が少ない。英語科目、英語以外の外国語科目については、他学科よりも満足度が低い学生が多い。

【学科の専門教育科目について】

全般的に学科の専門教育科目の満足度は高かった。学科専門科目だけに絞り込んだ質問の回答が下記のグラフです。この中で、満足度が一番高かった日本文学科と低かった外国語文化学科を比較するため、満足/おおむね満足と回答した代表的な意見を下記にあげます。



【ポジティブ】

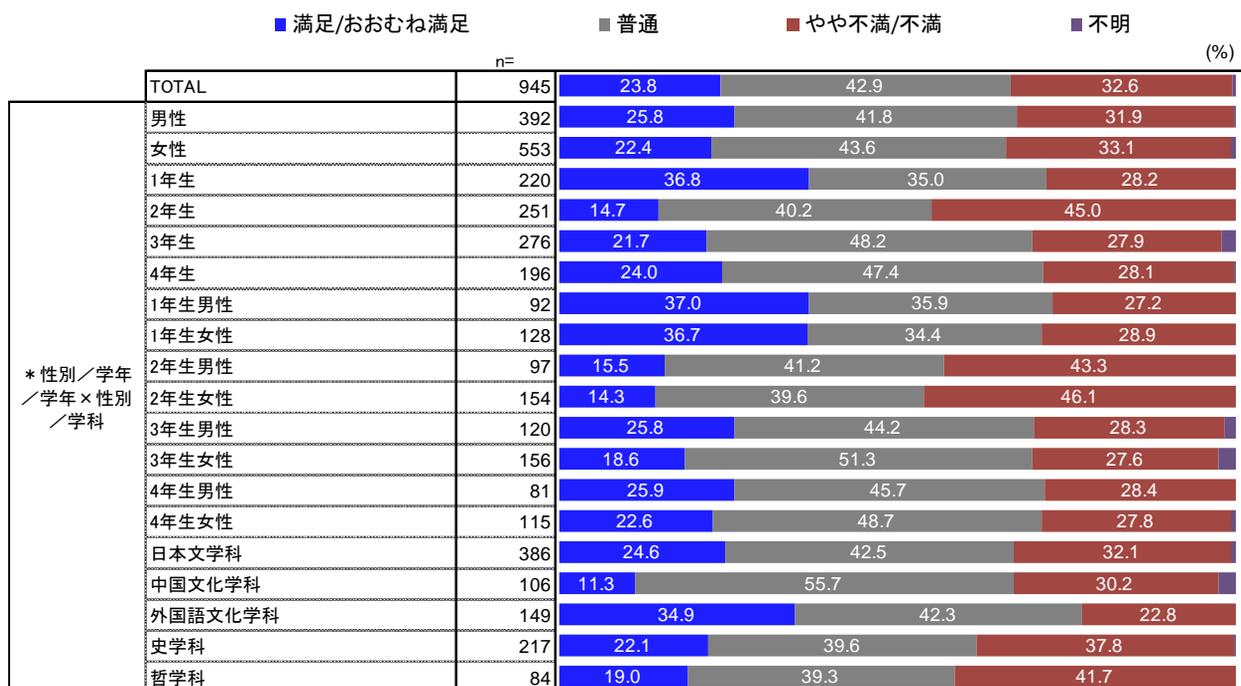
今まで <b>知らなかったことを知れ</b> 、入学前から学びたかった授業がうけられているので楽しい	日本文学科
自分の興味が広がるのが楽しい。他学科の授業は先生の雰囲気もちがうので <b>新鮮な感じ</b> がして面白い。	日本文学科
高校までとは違った視点から学問を見ることで <b>新たな発見</b> を得ることができたから。	日本文学科
更に踏み込んだ学習内容に <b>非常に強い興味</b> を持っているから。	日本文学科
抽選なのがづらい。内容は充実していると思う。	日本文学科
先生方の知識の一部を受け取れる瞬間瞬間に <b>価値</b> がある。	日本文学科
外国文化について興味をもち、詳しく理解できる内容になっているから。	外国語文化学科
<b>新しい発見や驚き</b> がある。	外国語文化学科
先生方が皆わかりやすく丁寧に教えてくださるから。	外国語文化学科
自分の勉強したいものをしっかりできる時間であり、教員のレベルも非常に高いと感じたから。	外国語文化学科

【ネガティブ】

課外学習が少なく、 <b>休憩も多い</b> ので、本当にこのままでいいのかと時々心配になる。	日本文学科
この授業を受けたい！と思って進んだ語学専攻なのに、興味のない事をさせられる。親に申し訳ない。(学費)	日本文学科
希望した科目を <b>抽選で落とされて</b> 受けたくもない授業を受けさせられることに納得がいかない	日本文学科
興味のある科目が少ない、開講時間が遅かったり必修とかぶったりして <b>履修できない</b> 。	日本文学科
文学と日本語学の演習科目数に差がありすぎる。日本語学も充実させてほしい。	日本文学科
あまり外国語文化に関わる授業内容ではない。	外国語文化学科
もう少し文化を詳しくやりたい。あと、ゼミとかあったら良かったな…と。	外国語文化学科
専門的な知識の習得が難しく、教養的な内容であるため。	外国語文化学科
コミュニケーションに関しては、とれる授業が少ない。	外国語文化学科

【英語科目について】

全般的に英語科目の満足度が低かった。英語科目だけに絞り込んだ質問の回答が下記のグラフです。他の科目を含めた質問と比べると、満足度は高くなっています。不満が高いのは、学科別では史学科、哲学科。学年では、2年生の男女。やや不満/不満と回答した史学科、哲学科で代表的な意見を下記にあげます。

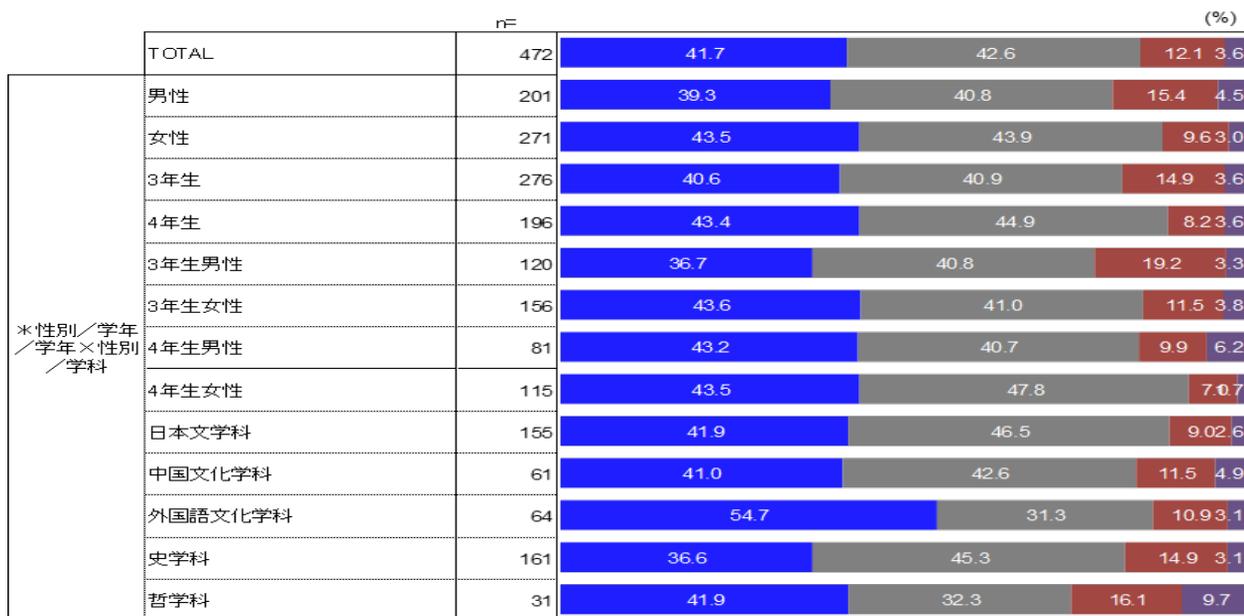


教科書の難易度が高く学生のレベルに合っていない。同じカリキュラムでも教員によって難易度が全然違う。	史学科
中学の英語の授業のようだった。もう少しレベルを上げて良いのではないか。	史学科
高校英語より低いレベルの授業であったから	史学科
教員によって授業のレベルに差がありすぎる	史学科
講師によるレベルのばらつきがひどく、不平等感を与える結果となっている。	史学科
シラバスと実際の授業内容にギャップがあった。	史学科
土曜日1限を必修という事以外は特に不満はありません	史学科
簡単すぎる、または英語力（読む力、話す力）がついているように思えない。	哲学科
担当教員によって内容とレベルがバラバラで不平等だから。	哲学科
2年次の抽選結果が遅い。そもそも英語より学部の専門の授業をとりたかった。時間のムダと思った。	哲学科
担当教員によって内容とレベルがバラバラで不平等だから。	哲学科

【英語以外の外国語科目について】

全般的に英語以外の外国語科目の満足度が低かった。英語科以外の外国語科目だけに絞込んだ質問の回答が下記のグラフです。他の科目を含めた質問と比べると、満足度は高くなっています。満足度が高かったのが外国語文化学科。満足/おおむね満足と回答した外国語文化学科の代表的な意見が下記になります。

■ 満足/おおむね満足    ■ 普通    ■ やや不満/不満    ■ 不明



- 楽しかったことに加え、とても分かりやすかったから。
- 大学生のレベルに合っており、やりがいがある
- 先生方がわかりやすく丁寧に教えてくださるから。
- 教授によって授業形態は様々だが面白い。
- 言語に限らず、文化・背景も学べる授業が多いから。
- 難易度は高いが、学ぶことが多く、先生方がやさしく教えてくださるから。

平成 31 年 2 月 21 日  
教育開発推進機構長殿

学部長 門広 乃里子 印

## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲）学部 FD 推進事業」報告書

標記のことに関し、以下のとおり報告いたします。

学 部 名	法学部
事 業 名	法学部新カリキュラムの実効性の検証
平成 30 年度実務担当者名	小原 薫
<b>事 業 の 概 要</b>	
<p>以下、<u>本年度実施した推進事業の概要</u>について、年初「学部 FD 推進事業」申請書の「目的」「内容」「計画」を参照しつつ、具体的に記入してください。</p> <p>法学部は、平成 30 年度より新カリキュラムを開始することとした。その手始めとして、公法・刑事法・民事法の各分野で入門科目（公法入門・刑事法入門・民事法入門）を開講した。これらの入門科目は、アクティブ・ラーニングの手法により、受講生に学習の動機付けと基礎的な知識・学習方法を習得させ、その後の履修カテゴリー選択を促すことを目的としている。かかる目標が実現されているかどうか、また、法学部の他の専門科目についても、授業及び教育方法が実効性を上げているかを検証した。</p> <p>具体的な内容としては、（１）入門科目の受講生にアンケートを実施し、その結果に基づき、入門科目の目標達成度を検証した。（２）法学部の提供している授業及び教育施策についてアンケートを実施し、アクティブ・ラーニングを実施している授業及び教育方法の改善を検討した。</p> <p>計画としては</p> <p>（１）入門科目アンケートの実施と分析 入門科目受講生に独自アンケートを実施した。アンケートについては専門業者にその集計を委嘱し、その集計結果に基づき、全体会合及び各部会において、目標の達成状況について分析・検討を行った。また、必要に応じて、次年度以降の改善策を検討し、シラバス・テキスト内容等の調整を行った。</p> <p>（２）アクティブ・ラーニングに関する学生アンケートの実施 前年度に引き続き、授業及び教育方法の実効性を総合的に検証するために、学生アンケートを実施した。</p> <p>（３）基礎資料の収集 必要に応じて、初年次教育やアクティブ・ラーニングの参考となる入門書・教育手法に関する専門書等を入手し、検討の基礎資料とした。</p>	

## 事業の結果

【目的】年初計画で設定した目的は達成できましたか？（または「今後達成できるか？」）（いずれかにチェック）

十分達成できた（できる） 若干の計画修正の上達成可 大幅な修正の上達成可 達成できない

【内容】年初計画で設定した事業内容は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【点検・評価・共有】点検・評価を行い、その結果を学部教員全員で十分に共有・検討しましたか？

十分な点検・評価・共有ができた 一定の点検・評価・共有ができた

点検・評価・共有のどれかが不十分であった 点検・評価・共有のほとんどが不十分であった

以下、**本年度実施した推進事業の結果**について、年初「学部 FD 推進事業」申請書の「目的」「内容」「計画」「点検・評価」及び上記の自己評価（チェック項目。特に【点検・評価・共有】については必ず言及）に照らして記入してください。

本年度の事業の中心は初年度に実施される入門科目の実効性の検証であったので、以下ではこれを中心に報告する。アクティブ・ラーニングを取り入れた公法入門・刑事法入門・民法入門の実効性を検証するという目的のために、本事業の内容としてはアンケートの実施という手法が採用された。単位修得の結果は教務課からデータを提供してもらうことが可能であるのに対し、学生側の取り組みや理解度、感想などを知るにはアンケートという手法が適切と考えられたからである（なお、大学共通の授業評価アンケートの場合にはアンケートに応じない学生もいることがあるため、入門科目のための特別なアンケートの実施が必要と考えられた）。具体的な計画としては、アンケートの内容策定・実施・結果の検証が行われることになった。

アンケートの内容については、まず5月3日に開催された学部 FD 委員会にてその基本的な方向性が定められた。そして、それを踏まえて各分野の担当者にそれに沿ったアンケート項目の策定を依頼し、各科目担当者による検討会が開催された。そのうえで、6月15日に全体会議が開催され、アンケート内容を確定した。その内容は主に①学生の希望進路、②法律科目を学ぶことに対する不安、③学生の授業への取り組み、④学生の理解度（自己判定）、⑤学生の満足度、⑥授業方法についての意見ないし感想（自由記述を含む）に分けることができる。この点に関して、会議では、公法入門と刑事法入門ではほぼ同内容のアンケートを実施することになるのに対し、民法入門では、初学者にとって理解が難しい内容を1年次から教授しなければならないという科目の特性のため、各回の内容に関する項目を入れる必要があることが確認された。

アンケートは、7月の最終講義の際に実施され、終了後専門業者に集計と分析を依頼した。その実施率をみると、刑事法入門が94.7パーセント、公法入門が90.7パーセント、民法入門が72.9パーセントとなっている。これによれば、民法入門については実施方法に問題がなかったかを検証する必要があるが、その他についてはおおむね問題はなかったといえよう。

12月19日の会議では、まず各入門科目の単位修得率が95パーセントを超えたことが報告された。そのうえで、アンケートの集計結果の検証では、刑事法入門、公法入門については今年度の授業に内容にほぼ問題がなく、来年度も基本的には同じ内容とすること、他方、民法入門については、単位修得率の点では成功といえるものの、学生の満足度の観点からは取り上げる内容及びアクティブ・ラーニングの在り方（学生間の議論の機会を増やすなど）についてなお検討の余地があり、引き続き検討することが確認された。

以上のアンケートの集計結果は学部教員全員に配布され、担当者のみならず学部教員全体で共有された。

## 今後の展望

【改善・期待される効果】本事業で得た知見は、今後の当該学部の教授法や授業改善に効果的であるか？

とても効果的である  効果的である  あまり効果的でない  効果的でない（いずれかにチェック）

効果的である（ない）と判断した理由を、平成 30 年度以降の当該学部の教授法や授業改善との関連から、具体的に述べてください。

（改善・期待される効果）本事業の実施により得られた知見として、学生が法学を学ぶことに対してかなり不安を感じていることが分かったという点があげられる。このことは、教員が授業を行うに際して留意すべき点であろう。また、学生間による議論の機会を設けることやグループワークの導入が学生の満足度に寄与するという点もあげられるだろう。このことは、例えば民事法入門担当者に対して大きな示唆となり、次年度の授業の改善に向けた取り組みがなされようとしているところである。より具体的に言えば、配布資料の改善、取り扱う項目の厳選、議論にとって適切なテーマの検討に役立つと考えられている。

【汎用性・波及効果】本事業で得た知見は、学部学科を超えた本学学士課程教育全体または教員の職能改善に効果的であるか？

とても効果的である  効果的である  あまり効果的でない  効果的でない（いずれかにチェック）

効果的である（ない）と判断した理由を、平成 30 年度以降の当該学部の教授法や授業改善との関連から、具体的に述べてください。

新カリキュラムの実施にあたって、受講生に対するアンケートを行うことによって、学習者の視点からその意義、運用を分析、検討することが可能となり、学部 FD 活動に有益であることが分かった。その点で、本事業は汎用性があると思われる。

また、入門科目に関して得た成果は、専門知識に必ずしも慣れていない初学者にどのような順序で教育をしていくべきなのか、という点に関する貴重な示唆を与えられられる。

すでに、法学部では、入門科目以外でも、アクティブ・ラーニングを利用した授業を展開しており、従来、一方向的な教授が主流であった法学教育の改善に非常に効果的と考える。加えて、これら入門科目で得られたアクティブ・ラーニングの成果は検討会を通じて、法学部教員に共有されつつある。さらに、検討会を通じて、これらアクティブ・ラーニングの手法開発は、入門科目にとどまらず、他の専門科目の学習においても効果的であることが検証され、法学部の科目以外においても効果的と考えられる。

【経費の執行】経費の執行は、執行計画表に基き執行時期・費目別執行率とも適切でしたか？

消耗品費：プリンタ用カートリッジ・SDカード等、椅子2脚

予算額：50,000円、執行額：31,945円、執行率：63.89%

図書資料費：図書の購入

予算額：50,000円 執行額：46,118円、執行率：92.2%

労務委託費：入門科目受講者アンケートの作成・入力・分析

追加依頼 クロス分析と報告書原稿

予算額：665,440円 執行額：568,998円（アンケート484,758円、追加依頼84,240円）

執行率：85.5%

人件費支出：アルバイト 34時間（アンケートの作成・入力・分析補助）

予算額：34,560円 執行予定額：33,660円、執行率：97.4%

予算額：80万円 執行額：680,721円 執行率 85.1%

2018年度 7月実施

## 法学部 入門科目アンケート結果

1

## アンケート実施の背景

### ◆ 新カリキュラム導入



### ◆ 入門科目を履修することで、 法律を学ぶ基礎を築くことができたか？

2

## アンケート設問の選定

### ◆ 科目ごとに設問を選定

【刑事法入門】17項目(選択式・記述式)、自由記述

【公法入門】17項目(選択式)、自由記述

【民法法入門】39項目(選択式)

### ◆ 学生の傾向を調査

希望進路／興味関心／不安度／予習時間／理解できないときの対処／  
難易度／理解度 など

3

## 実施概要①

### ◆ 入門科目3科目でアンケートを実施

【実施期間】2018年7月23日～7月27日

【実施科目】刑事法入門／公法入門／民法法入門

【実施方法】マークシート方式

4

## 実施概要②

### ◆アンケート実施状況

科目	履修者数	回答者数	回答率
刑事法入門	187名	177名	94.7%
公法入門	226名	205名	90.7%
民法法入門	450名	328名	72.9%

5

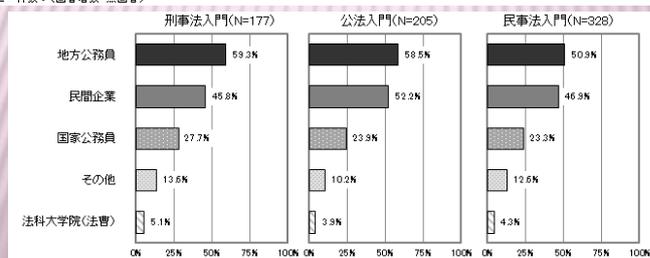
## 結果① 希望進路

(1) あなたが現時点で希望する将来の進路はなんですか？(複数回答可)

	刑事法入門	公法入門	民法法入門
回答者数	177	205	328
回答数	268	305	452

順	選択肢	件数	率	件数	率	件数	率
1	地方公務員	105	59.3%	120	58.5%	166	50.9%
2	民間企業	81	45.8%	107	52.2%	153	46.9%
3	国家公務員	49	27.7%	49	23.9%	76	23.3%
4	その他	24	13.6%	21	10.2%	41	12.6%
5	法科大学院(法曹)	9	5.1%	8	3.9%	14	4.3%
	無回答	0		0		2	

※回答率=件数÷(回答者数-無回答)



6

## 結果② 興味関心

(17) 扱ったテーマのうち、特に興味関心を抱いたものを選んでください。(最大3つ)

※民事法入門では、2-Q13：授業で取り上げられた以下の項目について、あなたは興味関心を持ちましたか。

### 【刑事法入門】

※興味関心が高いテーマ(3種合計の回答数順)

	ALL
1 法的意見表明	58
2 授業全体(受講方法・課題・議論・発表)	40
3 法的三段論法	36
4 事情聴取・取調・調書	26
5 法的解釈	16
6 4つの解釈(拡大・縮小・文理・類從解釈)	14
7 刑事訴訟法	12
8 刑法	11
9 傷害罪と暴行罪の解釈	10
10 丸刈り事件	10
11 その他(10件以下)	92
合計	325

### 【公法入門】

※興味関心が高いテーマ(回答数順)

	ALL
1 夫婦別姓と平等	57
2 平和主義と自衛隊・徴兵制	49
3 保育園と児童福祉法	46
4 猫カフェと動物愛護法	43
5 学校教育と生徒の自由	42
6 外国人の人権と入管法	37
7 TV放送と報道の自由	34
8 憲法改正と国民投票	33
9 家族の助け合いと生活保護法	33
10 ごみの不法投棄と廃棄物処理法	32
11 都市行政と都市計画法	23
12 リサイクルショップと古物営業法	21
13 市民会館と集会の自由	14
無効・無回答	13
合計	477

### 【民事法入門】

※興味関心が高いテーマ

下記5点法で平均点を算出  
「かみゆそう思う」:5点、「そう思う」:4点、「どちらでもない」:3点  
「あまりそう思わない」:2点、「そう思わない」:1点

	平均点
1 意思能力、行為能力	3.514
2 所有権とは	3.506
2 契約	3.506
4 契約の履行をめぐるトラブル	3.457
5 契約内容をめぐるトラブル	3.430
6 契約締結過程におけるトラブル	3.424
7 不法行為に基づく損害賠償と保険	3.367
8 民法(財産法)上の権利	3.355
9 相続法	3.339
10 民事法とは	3.325
11 三段論法	3.260
12 自然人、法人と会社	3.213
13 民法の条文の配置	3.065

7

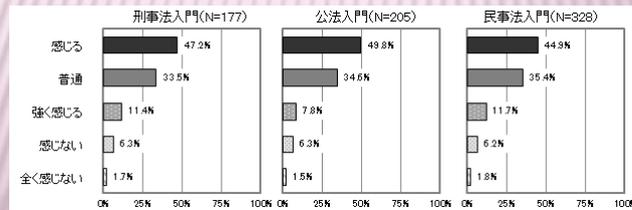
## 結果③ 不安度

(3) あなたは、法学部で専門科目を学ぶことに不安を感じていますか？

※民事法入門では、1-(2)

回答数	刑事法入門		公法入門		民事法入門		
	177		205		328		
順	選択肢	件数	率	件数	率	件数	率
1	感じる	83	47.2%	102	49.8%	146	44.9%
2	普通	59	33.5%	71	34.6%	115	35.4%
3	強く感じる	20	11.4%	16	7.8%	38	11.7%
4	感じない	11	6.3%	13	6.3%	20	6.2%
5	全く感じない	3	1.7%	3	1.5%	6	1.8%
	無効・無回答	1		0		3	

※回答率 = 件数 ÷ (回答数 - 無効・無回答)



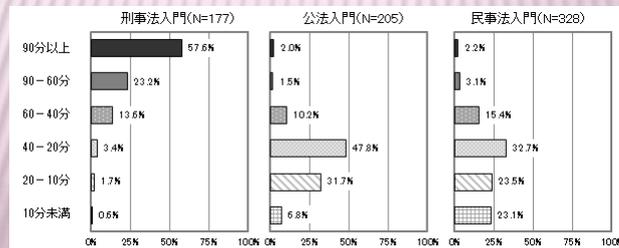
8

## 結果④ 予習時間

(5) あなたは、1回の授業につき予習をどのくらい行いましたか？  
※民法入門では、1-（4）

	刑事法入門		公法入門		民法入門		
回答数	177		205		328		
順	選択肢	件数	率	件数	率	件数	率
1	90分以上	102	57.6%	4	2.0%	7	2.2%
2	90-60分	41	23.2%	3	1.5%	10	3.1%
3	60-40分	24	13.6%	21	10.2%	50	15.4%
4	40-20分	6	3.4%	98	47.8%	106	32.7%
5	20-10分	3	1.7%	65	31.7%	76	23.5%
6	10分未満	1	0.6%	14	6.8%	75	23.1%
	無効・無回答	0		0		4	

※回答率 = 件数 ÷ (回答数 - 無効 - 無回答)



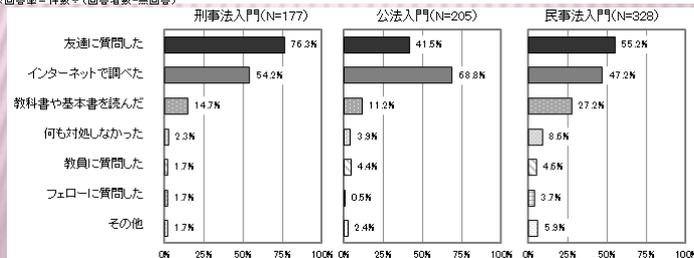
9

## 結果⑤ 理解できなかったときの対処

(7) あなたは、授業で理解できなかった部分がでたとき、どのように対処しましたか？  
(複数回答可) ※民法入門では、1-（6）

	刑事法入門		公法入門		民法入門		
回答者数	177		205		328		
回答数	270		272		498		
順	選択肢	件数	率	件数	率	件数	率
1	友達に質問した	135	76.3%	85	41.5%	179	55.2%
2	インターネットで調べた	96	54.2%	141	68.8%	153	47.2%
3	教科書や基本書を読んだ	26	14.7%	23	11.2%	88	27.2%
4	何も対処しなかった	4	2.3%	8	3.9%	28	8.6%
5	教員に質問した	3	1.7%	9	4.4%	15	4.6%
6	フェローに質問した	3	1.7%	1	0.5%	12	3.7%
7	その他	3	1.7%	5	2.4%	19	5.9%
	無回答	0		0		4	

※回答率 = 件数 ÷ (回答者数 - 無回答)



10

## 結果⑥ 難易度

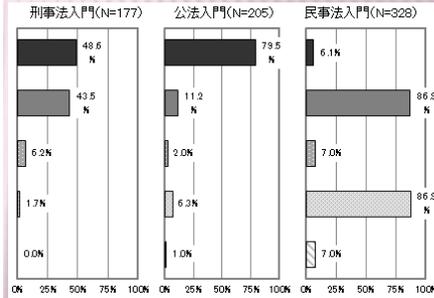
(10) この授業の難易度は、あなたにとって適切でしたか？

※民事法入門では、2-Q2

	刑事法入門	公法入門	民事法入門				
回答数	177	205	328				
順	選択肢	件数	率	件数	率	件数	率
1	適切であった かなりと思う	86	48.6%	163	79.5%	19	6.1%
2	難しかった そう思う。どちらともいえない。 あまりそう思わない	77	43.5%	23	11.2%	272	86.9%
3	とても難しかった そう思わない	11	6.2%	4	2.0%	22	7.0%
4	簡単であった そう思う。どちらともいえない。 あまりそう思わない	3	1.7%	13	6.3%	272	86.9%
5	とても簡単であった そう思わない	0	0.0%	2	1.0%	22	7.0%
	無効・無回答	0		0		15	

※回答率 = 件数 ÷ (回答数 - 無効 - 無回答)

※民事法入門は、他2科目との比較のため、意味合いが近い選択肢をグループ化して回答率を算出



11

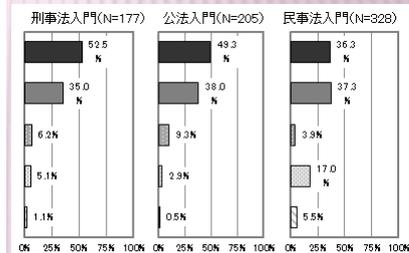
## 結果⑦ 理解度

(11) あなたは、この授業で扱われたテーマについてどの程度理解できましたか？

※民事法入門では、2-Q11：あなたは、この授業の内容を理解できましたか。

	刑事法入門	公法入門	民事法入門				
回答数	177	205	328				
順	選択肢	件数	率	件数	率	件数	率
1	90-70% そう思う	93	52.5%	101	49.3%	113	36.3%
2	70-50% どちらともいえない	62	35.0%	78	38.0%	116	37.3%
3	100-90% かなりと思う	11	6.2%	19	9.3%	12	3.9%
4	50-30% あまりそう思わない	9	5.1%	6	2.9%	53	17.0%
5	30%未満 そう思わない	2	1.1%	1	0.5%	17	5.5%
	無効・無回答	0		0		17	

※回答率 = 件数 ÷ (回答数 - 無効)



12

## 分析① 理解度と成績の分布

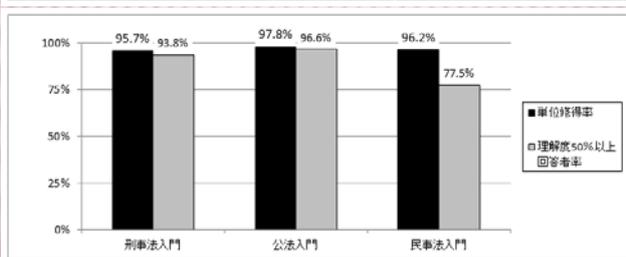
### <成績>

科目名	成績						単位修得者数	単位修得率	履修者	未登録者	在籍数(1年)
	S	A	B	C	D	R					
刑事法入門	76.5%	9.1%	8.6%	1.6%	0.0%	4.3%	179	95.7%	187	263	450
公法入門	76.5%	17.7%	3.1%	0.4%	1.3%	0.9%	221	97.8%	226	224	450
民法入門	71.6%	17.3%	4.7%	2.7%	0.4%	3.3%	433	96.2%	450	0	450

※Dグレード以上で単位修得

### <理解度>

科目名	理解度設問 選択肢					理解度50%以上回答者数	理解度60%以上回答者数	有効回答数	無効・無回答数	回答数
	100-90% かなり思う	90-70% 思う	70-50% やや思う	50-30% あまり思わない	30%未満 ほとんど思わない					
刑事法入門	6.3%	53.1%	35.4%	5.1%	1.1%	166	93.8%	177	0	177
公法入門	9.3%	49.5%	38.2%	2.9%	0.5%	198	96.6%	205	0	205
民法入門	3.9%	36.3%	37.3%	17.0%	5.5%	241	77.5%	311	17	328



13

## 分析② 自由記述の傾向

- ◆ 全設問のあとに自由記述枠を設置 ※民法入門は当該設問なし

### 【刑事法入門】

#### アクティブラーニングへの肯定意見

例) アクティブラーニングは初めてでとても新鮮でよかったです。

従来の形式よりもはるかにわかりやすいし、自分から学ぶようになったと思います。

#### 学習成果への肯定意見

例) 基礎的なところから授業してくださり分かりやすかった。

#### 課題への否定意見

例) 課題がとても多く、難しく、1週間で1番勉強していた科目です。

### 【公法入門】

#### グループワークへの肯定意見

例) グループで意見を交流するのは、頭にも残って良かった。

#### 内容理解・充実への肯定意見

例) 具体的な事例を取り上げて説明されていたので分かりやすかった。

14

## 最後に

---

- ◆ **成果**

履修者の95%以上が単位を修得

- ◆ **課題**

不安度が高く、理解に自信がもてない学生が一定数いた

- ◆ **歯止め**

アンケート結果を冊子にまとめ、学部教員間で共有

## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲）学部 FD 推進事業」報告書

標記のことに関し、以下のとおり報告いたします。

学 部 名	経済学部
事 業 名	基礎演習 A・B におけるルーブリックの作成・授業導入、および実践のためのコーチングスキル研修
平成 30 年度実務担当者名	星野 広和
<b>事 業 の 概 要</b>	
<p>以下、<u>本年度実施した推進事業の概要</u>について、年初「学部 FD 推進事業」申請書の「目的」「内容」「計画」を参照しつつ、具体的に記入してください。</p> <p><b>【目的】</b>          経済学部の初年次教育である基礎演習 A・B において、教員間で受講生が獲得すべき能力やスキルの共通化を図るべく、学部統一の評価基準となるルーブリック（学習到達度）を作成し、ルーブリックの授業導入(授業展開・ツールの活用)サポートを行う。また、ルーブリックの作成・導入により、学部共通の到達目標・評価基準や学習環境を整え、教員個人および学部組織としてのアセスメント(振返りと改善)を円滑に進める状態を目指す。</p> <p><b>【内容】</b>          平成 29 年度に経営学特論(ビジネスデザイン/ リーダーシップ)の授業において、ルーブリックの作成や教員研修を担当した <b>and seeds</b> 社に以下の業務内容を委託し、教員を巻き込みながらルーブリックを作成するとともに、その導入と実行支援を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① ルーブリックの作成支援</li> <li>② ルーブリックの授業導入の支援</li> <li>③ アクティブラーニング型授業の学習法の改善・発展支援</li> </ol> <p><b>【計画】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 授業期間中、委託事業者は教員を巻き込みながら、各教員が持つ教育観を共有するミーティングを開催し、授業の趣旨から考えて必要なスキルや知識を織り込んだルーブリックを作成する。</li> <li>② ルーブリックの導入をスムーズに行う上での勉強会を開催する。</li> <li>③ 前期・後期において 1 回ずつ、教員向けにアクティブラーニング型授業の教授法のスキルアップに繋がる研修会を実施する。</li> <li>④ 学期末に実施する基礎演習担当者会議（教員に加えて <b>and seeds</b> 社も参加）において、授業改善提案、教育ノウハウについて議論するとともに、各クラスの授業運営の相対化を図る。</li> <li>⑤ 学期末に総括レポートを提出してもらい、それをもとに後期ないし次年度以降の改善案に反映する。</li> </ol>	

## 事業の結果

【目的】年初計画で設定した目的は達成できましたか？（または「今後達成できるか？」）（いずれかにチェック）

■十分達成できた（できる）  若干の計画修正の上達成可  大幅な修正の上達成可  達成できない

【内容】年初計画で設定した事業内容は適切でしたか？（いずれかにチェック）

■適切であった  概ね適切であった  あまり適切でなかった  適切でなかった

【点検・評価・共有】点検・評価を行い、その結果を学部教員全員で十分に共有・検討しましたか？

十分な点検・評価・共有ができた  一定の点検・評価・共有ができた

点検・評価・共有のどれかが不十分であった  点検・評価・共有のほとんどが不十分であった

以下、**本年度実施した推進事業の結果**について、年初「学部 FD 推進事業」申請書の「目的」「内容」「計画」「点検・評価」及び上記の自己評価（チェック項目。特に【点検・評価・共有】については必ず言及）に照らして記入してください。

### 【目的・内容】

平成 30 年度の学部 FD 推進事業として、①ルーブリック作成のための全体研修 2 回（6/13, 7/25）および作成ワークショップ 2 回（6/27, 9/5）、②授業導入サポートのための全体研修 2 回（9/20, 2/20）、③実践のためのコーチングスキル研修 2 回（7/25, 2/20）を実施した。①および②については、and seeds 社の小畑怜美氏および基礎演習担当教員である斉藤光弘特任助教を中心として経済学部教員が参加しながら実施し、学部統一の評価基準となるルーブリック案を作成し、授業導入のサポートを行った。

具体的には、①では、個人・組織の教育観を明らかにし学部の核（共通価値や教育方針）を描き、教員の知識や経験を彫り起こした。また、育みたい学生像に向けての課題の明確化と、課題が求める具体的なスキルや知識を設定した。②では、ルーブリックを活用する際の目的、基準などルールを設け、授業のスクライビング研修を行った。また、授業場面におけるルーブリックの活用を振り返った。③では、前期にパターンランゲージを用いた授業プロセス可視化の研修を行い、後期にはフィードバックの効果的な観点を踏まえたコーチングスキル研修を行った。

### 【点検・評価・共有】

本事業の実施状況・把握方法として、以下のプロセスをもとに点検・評価・共有を行った。

- ① and seeds 社と教員とのミーティングの成果は、基礎演習 A・B のルーブリックを作成するとともに、その導入を通じて授業内容が改善されることで点検・評価・共有を行った。
- ② ルーブリックの作成・導入後は、研修の最終回に同時開催された基礎演習担当教員会議において、ルーブリックの運用状況と授業改善案について、各担当教員から報告・議論されることで実施成果を点検・評価・共有した。
- ③ ①および②の成果について、(i) 学期末および学年末の学生アンケートの結果、and seeds 社による (ii) ルーブリックの授業導入の状況に関するレポート、を経済学部教務委員会が点検する。なお、報告書から本事業の成果と課題として指摘された点を挙げると、以下のとおりである。

#### [成果]

- 学習目標の可視化と共有（対学生）
- 授業内容と身につける力の関連づけ（対学生）
- 目標を捉えた振り返りの実施（授業内容やプロジェクトといった学習活動への自己内省）（対学生）
- 学習目標、評価観点の可視化と共有（対教員）

#### [課題]

- ルーブリックの学習／成績評価への活用
- 通常授業への活用
- ルーブリック単体、内容の見直し
- ルーブリック作成・導入の主体者

## 今後の展望

【改善・期待される効果】本事業で得た知見は、今後の当該学部の教授法や授業改善に効果的であるか？

とても効果的である  効果的である  あまり効果的でない  効果的でない (いずれかにチェック)

効果的である(ない)と判断した理由を、平成30年度以降の当該学部の教授法や授業改善との関連から、具体的に述べてください。

経済学部では平成27年度よりアクティブラーニング形式で基礎演習を実施してきたものの、導入・展開間もないことかつ教員も毎年度入れ替わることもあり、教員(およびFA)による授業を通じた教育成果の到達イメージについてバラつきが顕在化している。また、授業評価のサイクルもこれまでは半期もしくは通年単位だったため、授業評価・改善のサイクルが長期化していた。

それゆえ、本事業の実施によって、以下の改善効果が期待される。

- ① 基礎演習における授業評価の見える化・短期化及び教員の教育スキル向上
- ② 初年次教育としての基礎演習科目の授業改善および標準化・均質化
- ③ アクティブラーニング形式授業への授業運営・改善ノウハウの展開
- ④ 専門科目・演習へのアクティブラーニング形式の導入・展開および授業運営・改善ノウハウの展開

①と②については、基礎演習に対する、教員の認識や目指す成果を合わせて一枚岩として進むことが今後期待できる。③と④については、2020年度に予定されている学部学科改組とカリキュラム改定において整備される授業運営に反映されることが期待できる。

【汎用性・波及効果】本事業で得た知見は、学部学科を超えた本学学士課程教育全体または教員の職能改善に効果的であるか？

とても効果的である  効果的である  あまり効果的でない  効果的でない (いずれかにチェック)

効果的である(ない)と判断した理由を、平成30年度以降の当該学部の教授法や授業改善との関連から、具体的に述べてください。

現在、「アクティブラーニング」が教育界で注目されている。國學院大學経済学部の「基礎演習A・B」の取り組みは、新入生全員に対する初年次教育であると同時に必修科目との性格を有しているが、そうした科目に対して、「アクティブラーニング」を取り入れている先進的な取り組みであるといえる。しかしながら、この形式での授業により進んでいる大学も多々存在している。外部事業者から助言を受け、経済学部が自己改善を加えていくことで、國學院大學全体における初年次教育や「アクティブラーニング」についてのノウハウを蓄積し、全学的に波及させることが可能であろう。また、教員間での評価基準の適正化が図られることで、より授業目標に適した授業運営が可能になるとともに、授業評価の有効性の向上が成果として上がれば、それを全学的に共有することも容易である。

もちろん、授業(クラス)の規模や形式、例えば大教室における一方通行的な授業、によっては困難である可能性もある。しかしながら、授業の規模や形式を問うというよりはむしろ「教員の授業に取り組む姿勢・態度・自覚」を改善するものであり、この点の改善が最大の課題といえよう。

**【経費の執行】経費の執行は、執行計画表に基き執行時期・費目別執行率とも適切でしたか？**

本年度の経費の執行状況について、執行計画表に基づき、中間報告の前後に分けて記入してください。

委託費として年間 100 万円の予算を認めていただき、前期分として 33.3 万円，後期分として 66.6 万円を and seeds 社に委託費として支払った。特段問題はなく適切であったと考えている。

**【成果報告会】成果報告会の内容（説明事項、共有事項、問題提起等）について現時点での概要をお書きください。**

1. はじめに
2. 平成 30 年度事業の概要
3. ルーブリック作成・導入プロセス
4. 研修内容
5. おわりに

平成30年度学部FD推進事業成果報告会

# 基礎演習A・Bにおける ルーブリックの作成・授業導入, および実践のための コーチングスキル研修

星野 広和  
(経済学部)



## 報告内容

- 1.はじめに
- 2.平成30年度事業の概要
- 3.ルーブリック作成・導入プロセス
- 4.研修内容
- 5.おわりに

## 1. はじめに

### 1) 基礎演習A・B（学部初年次教育）の現状

- ・ 平成27年度から「**アクティブラーニング形式**（以下AL形式）」の授業トライアルを導入  
→平成28年度から**全23クラス**へ展開
- ・ **FA**（学生ファシリテーター&アドバイザー）を各クラス1名配置

### 2) 基礎演習A・Bの課題

- ① 基礎演習担当教員およびFAのスキルのバラつき
- ② 教育ノウハウ（ex.ファシリテーションスキル）の蓄積が不十分
- ③ 各クラスの運営にバラつき
- ④ 教員間でのゴール像や獲得ステップが不明確（共有されず）

## 報告内容

1.はじめに

2.平成30年度事業の概要

3.ループリック作成・導入プロセス

4.研修内容

5.おわりに

## 2. 平成30年度事業の概要

### 1) 目的：

「H29に経営学特論においてルーブリックの作成や教員研修を担当したand seeds社に業務活動を委託し、教員を巻き込みながらルーブリックを作成するとともに、その導入と実行支援を行う。」

### 2) 内容：

- ① ルーブリック（学習到達度）の作成支援  
→教員の教育観の共有と受講生が授業を通じて獲得すべきスキルの明確化
- ② ルーブリックの授業導入支援  
→ルーブリックを活用するうえでのルール作りと具体的な測定方法のトレーニング
- ③ AL型授業の学習法の改善・発展支援  
→ルーブリックの到達度合いを高められるように教員に対して教授法を指導

学部共通の到達目標・評価基準の整備, アセスメントの構築

## 報告内容

- 1.はじめに
- 2.平成30年度事業の概要
- 3.ルーブリック作成・導入プロセス
- 4.研修内容
- 5.おわりに

### 3. ルーブリック作成・導入プロセス

ルーブリック (rubric) とは？

1. 権威ある規則
2. 文中の曖昧な単語の説明もしくは定義
3. 赤色もしくは特別な字体で印字された表題 (ワードネット,1997)

- ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具
- 課題をいくつかの構成要素に分け、要素ごとに評価基準を満たすレベルを詳細に説明したもの →評価に使われる

### ルーブリック作成を通して目指すもの

→育てたい学生像や、そのために身につける力(提供する知識や技術)の基準/状態を明確にする。

その先に、

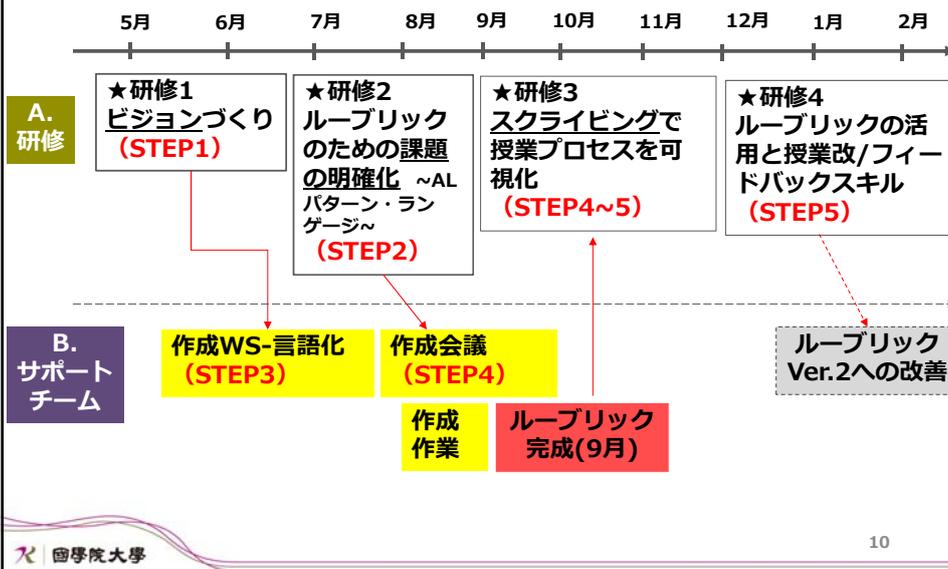
- ① 各自が重要だと思う状態目標を捉えて、**学生の状況を把握**することができる
  - ② 各自が重要だと思う状態目標を捉えて、**自分の授業プロセスや内容を振り返る**ことができる (授業と学生の身につける力を紐付ける)
  - ③ 自分の授業で発展させたい力を考え、**授業デザイン**をすることができる
  - ④ 共通認識を持ち、**教員同士で (組織の中で) 議論**できるようになる
- ⇒ **基礎演習に対する、教員の認識、目指す成果を合わせて一枚岩として進む**

## 作成・導入STEP

ルーブリックは、学部のカリキュラムに従い、**学部が目指す教育方針・目指す学生像の状態に合うものを、**教員および学生の指標として作成する。

	STEP	内容
作成	1.ビジョン・メイキング	個人・組織の教育観を明らかにし学部の核(共通価値や教育方針)を描く
	2.課題の明確化	教員の知識や経験を彫り起こし、育みたい学生像に向けての課題の明確化と、課題が求める具体的なスキルや知識を設定する
	3.評価尺度・観点の設定	ルーブリックに用いる項目(状態目標)を具体化する。規制のルーブリックとの比較などから、学部オリジナルの方針を強化
授業導入	4.活用にあたってのルール	ルーブリックを活用する際の目的、成功/失敗基準などルールを設ける
	5.ルーブリックと授業改善	授業場面におけるルーブリックの活用を振り返る。学生の学習成果を測定し、教員自らの授業を評価・改善する

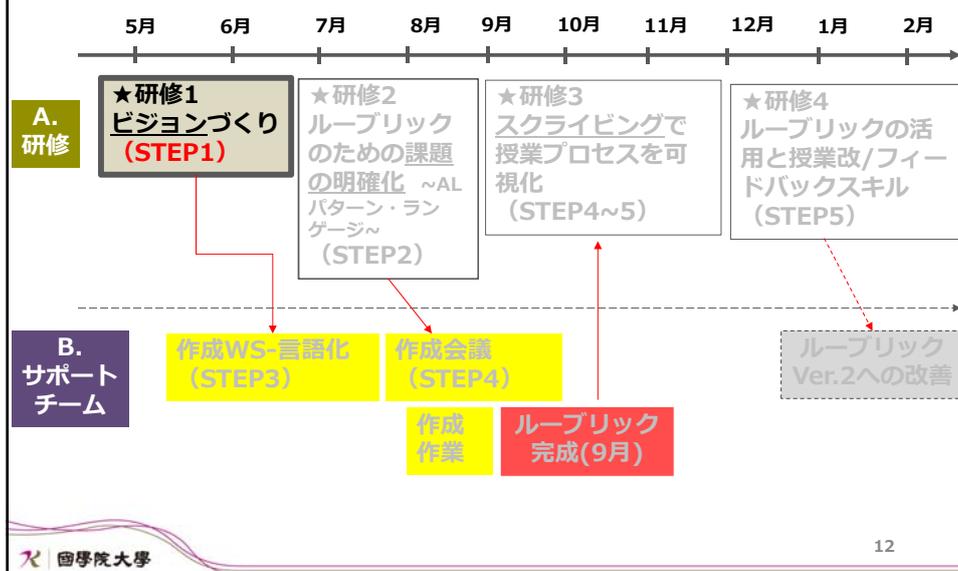
## 作成・導入スケジュール



## 報告内容

- 1.はじめに
- 2.平成30年度事業の概要
- 3.ループリック作成・導入プロセス
- 4.研修内容**
- 5.おわりに

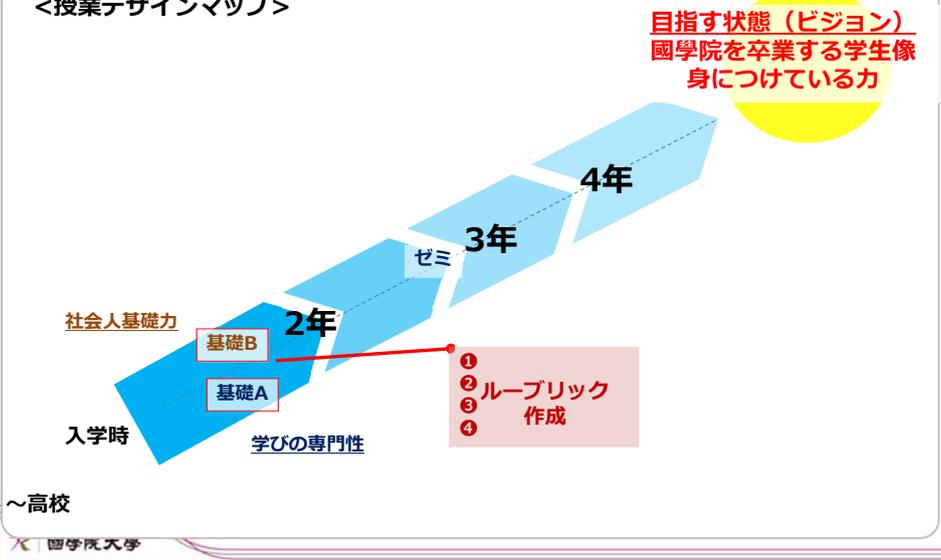
## 作成・導入スケジュール



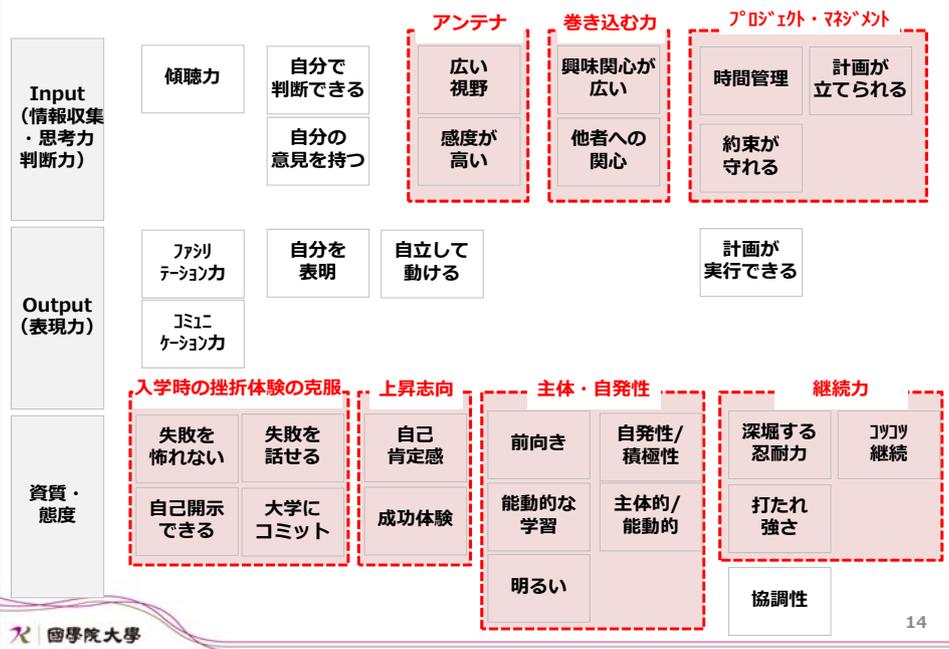
## 4. 研修内容：

### 【研修①】 個人および組織のビジョンづくり

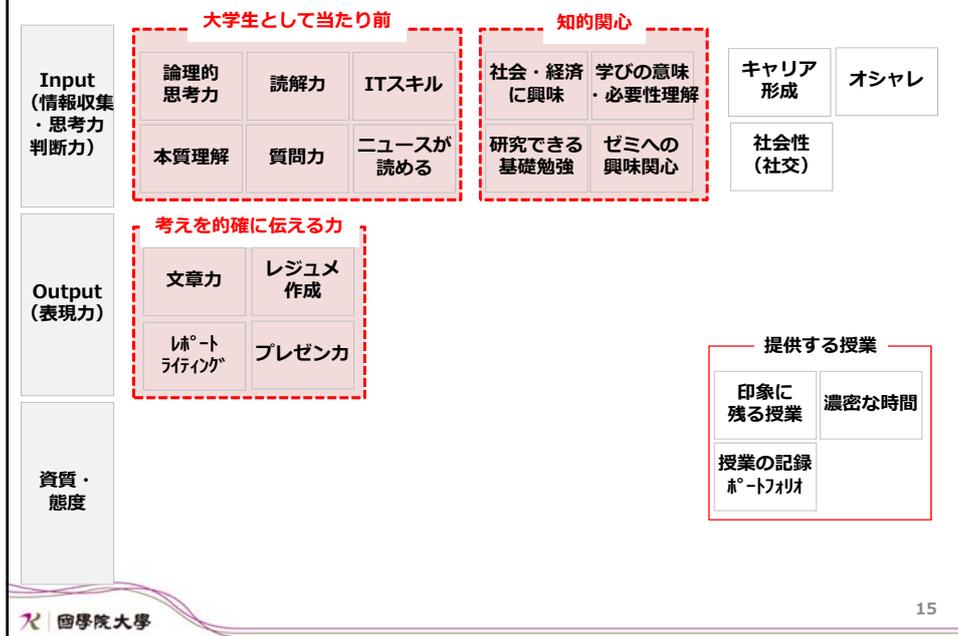
<授業デザインマップ>



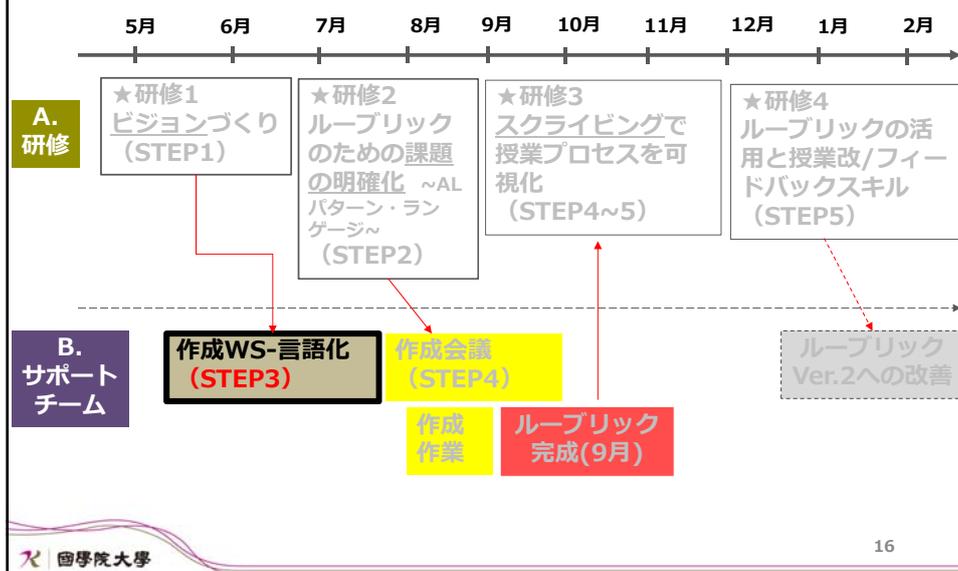
### 【研修①】 身に付けて欲しいGenericスキル・態度



## 【研修①】身に付けて欲しいAcademicスキル・態度



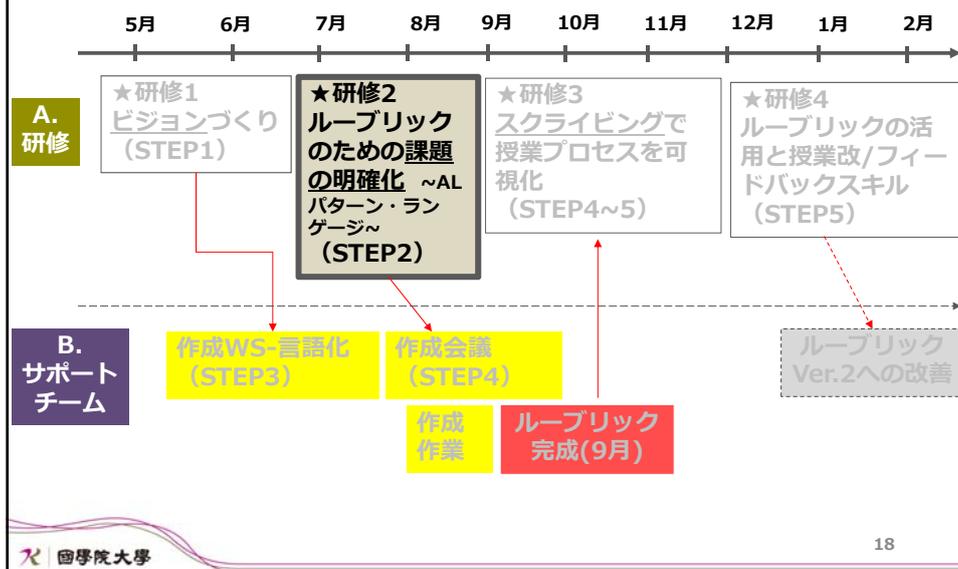
## 作成・導入スケジュール



## 【研修①後】6/27作成サポートチームによる情報整理

- ・ **自主性・主体性を育てたい**
  - ⇒学生にどのレベルまで求めるか
  - ⇒普通が良い・目立ちたくない学生が一步前に出るためには？ 保身が強い
  - ⇒課題に向き合い、主体性を発揮してもらうにはどうすればよいか？
- ・ **自信・自己肯定感を上げたい**
- ・ **作法（方）等、最低限動き始められるインプットをしたい**
- ・ **基礎演習とゼミで身に付ける力は同じか、別か？**
  - ⇒関連し・重なりあう。ゼミは、扱う課題がより専門的。
  - ⇒基礎演習では、勉強のサイクルを回す。ほめる→定着。
  - ⇒ゼミに参加する最低限のスキルを基礎演習で身に付ける。
- ・ **学習習慣を身に付けて欲しい**
- ・ **どこまで専門性を求めるかは教員同士で意見が分かれる部分**
- ・ **社会に出た時に幸せに生きる力 = Generic**  
最低限の力 = Academic

## 作成・導入スケジュール



## 【研修②】課題の明確化・言語化

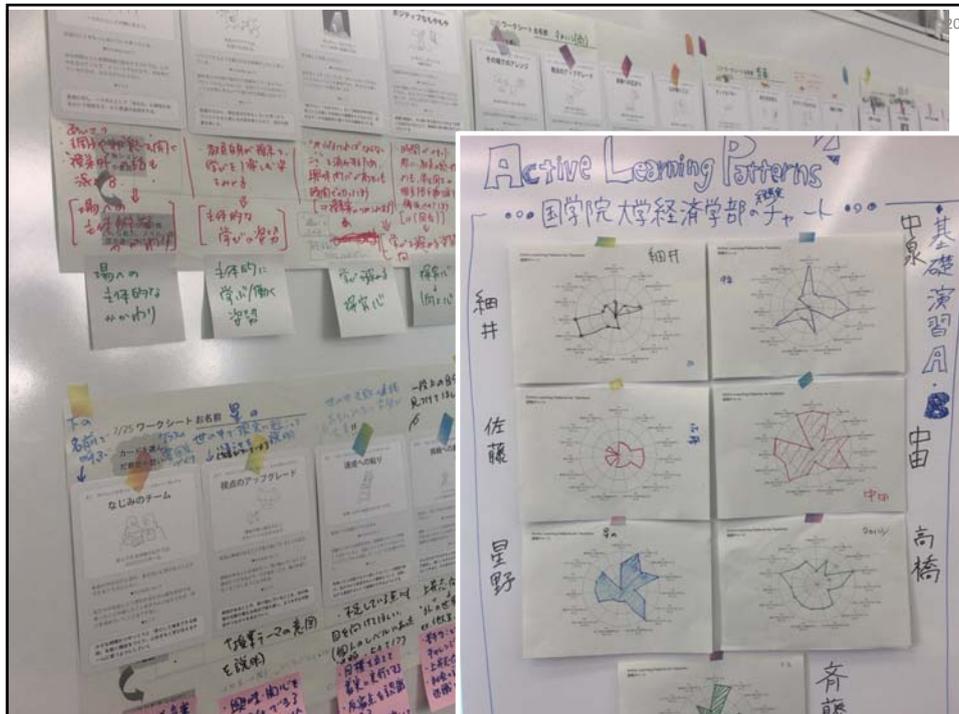
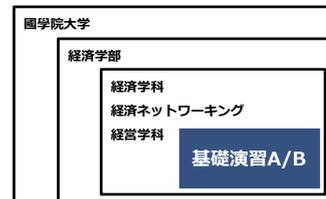
アクティブラーニング・パターン《教師編》を用いて

### ①基礎演習A/Bのルーブリックのコンピテンシー

(理想とされる学生の状態)を言語化する

→**教員の知識や経験を棚卸し**から育てたい学生像に向けての  
課題の明確化と、課題が求めるスキル/知識を言語化する

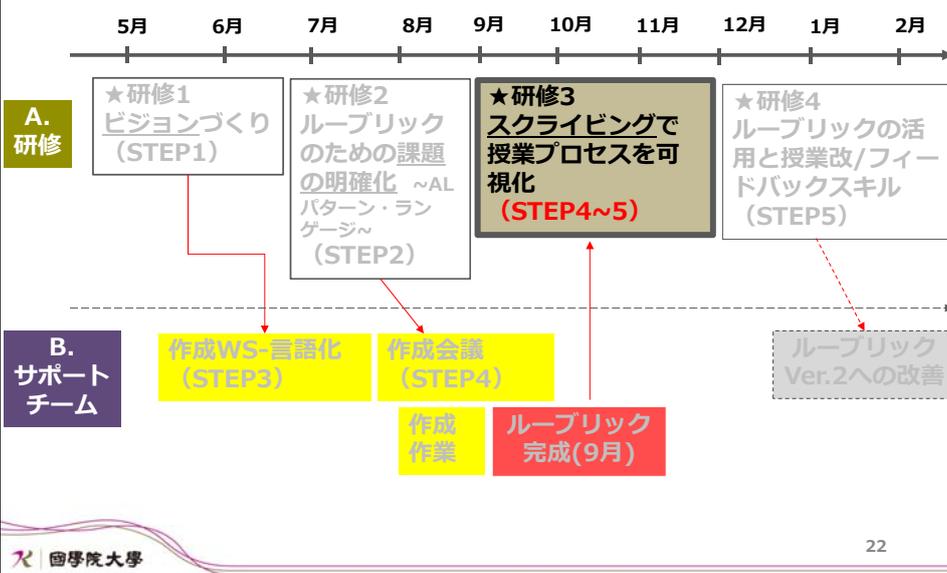
### ② ご自身の授業（行動や思考）を俯瞰する



## 基礎演習A・Bルーブリック 第1版の完成！



## 作成・導入スケジュール



## 【研修③】スクライビングで授業プロセスを可視化

### スクライビングとは？：授業プロセスの可視化

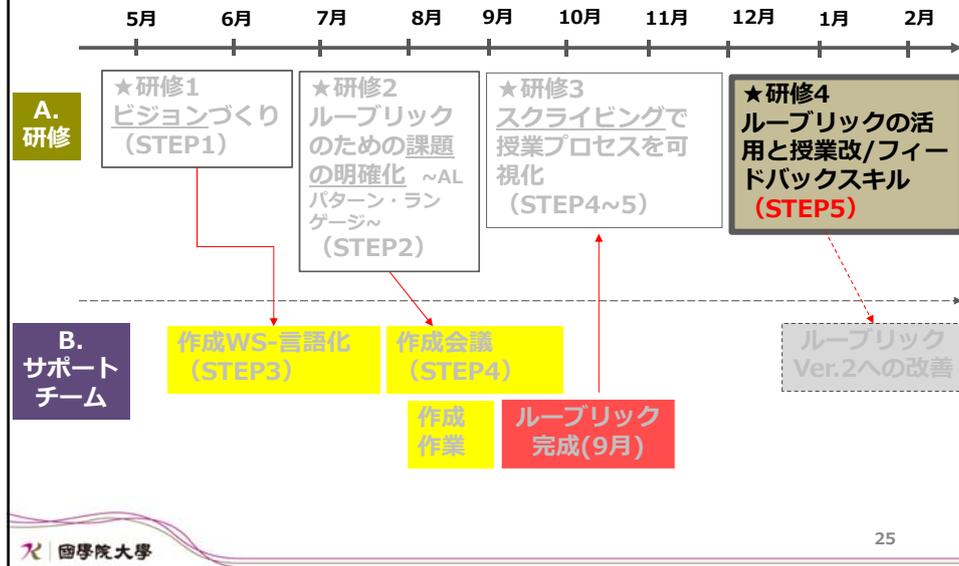
- ① 発表者が授業概要を発表し、  
別の人が発表を聞きながら授業プロセスを整理、板書する
- ② **実際の授業内容・プロセスと育つ力を紐づける（ループリックより）**
- ③ 当授業でさらに育てたい力を考え、新たな可能性を探ったり  
今後の授業のアプローチを考え、授業をデザインしたりする



## 基礎演習A・Bループリック 第1版の実施へ！



## 作成・導入スケジュール



## 【研修④】活動報告とルーブリック活用のリフレクション

今期のルーブリック作成と導入に関する振り返りを通して  
ルーブリックの価値や教育活動を俯瞰する

<進め方>

シートを作成し、ルーブリックの実践及び基礎演習Bの教育活動を振り返る。

- ・振り返りテーマ（縦軸）：基礎演習Bに関わる教育活動の4項目
- ・振り返り観点（横軸）：3項目

\*後ほど、みなさんと共有するので「太いペン」で、きれいに、お書きください

教育活動	①工夫・努力	②成果・やってみたいあった	③課題・改善案
A 内容/ 教授法			
B FAとの 連携			
C 受講生/学生 との関わり			
D ルーブリック の活用			

## ルーブリック実践の振り返り(研修④当日の意見・抜粋)

27

### 成果

- ・ 教員間で教育目標、教育方針が明確化(可視化)でき、共有された
- ・ 評価視点の明確化により、
  - ✓ 学生にとって評価指標がクリアになり、学生に学習意図やゴールを意識させることで学びを促せるようになった。モチベーションが上がった学生もいた
  - ✓ 教員も成績がつけやすい学習の促しになった
- ・ 学生への問題意識の醸成ができた
- ・ 振り返りが苦手な学生が、振り返りをしている様子が見えた

## ルーブリック実践の振り返り(研修④当日の意見・抜粋)

28

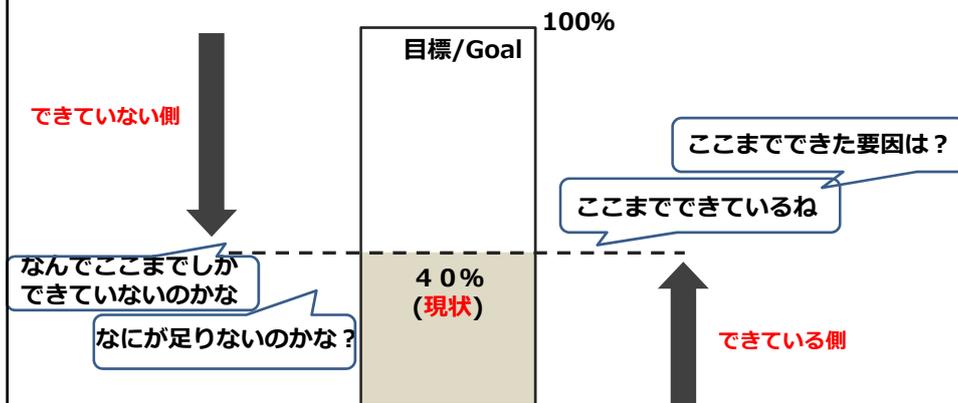
### 課題/ 改善点

- ・ 通常授業時の活用方法が難しかった
  - 各回の授業案と、ルーブリックの関連付けがうまくできなかった
- ・ 成績評価が難しかった(教員が学生を評価する)
- ・ グループワークが多くなる後半は、個人の評価をするのが難しかった(個人の成績への対応が難しいと感じた)
- ・ FAとのルーブリックの共有が薄かった
- ・ アピールする学生はわかるが、そうでない学生を見切れない
- ・ 評価尺度(基準)における区別が曖昧になり評価に使いきれなかった
- ・ 度合いを示す言葉は、もっと具体的な言葉に落ちていると使いやすい

## 物事を前進させるフィードバック

- (1) ソリューション志向
- (2) スケーリング

### ● 事象(あるいは相手の話)の内容の「どこ」を見ているか？

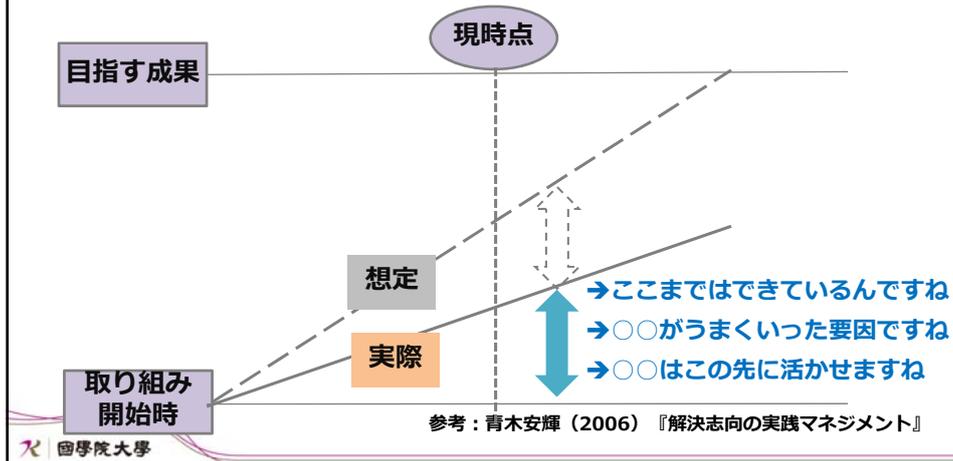


参考：青木安輝（2006）『解決志向の実践マネジメント』

## (1) ソリューション志向

31

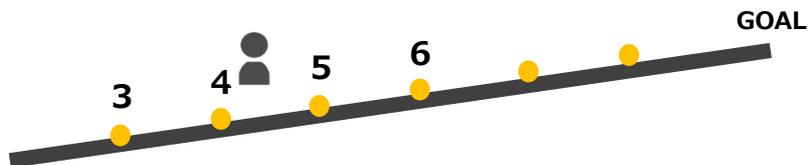
- これまでの取り組みの内、“**できている部分**”に着目し  
その要因を探る
- ここから何ができる可能性があるかと本人が思っているか、  
目指す成果を見て思考をめぐらす



## (2) スケーリング

32

現状を測る“ものさし”をつくります。



- 理想/到達点を100%だとすると、いまは何%(何合目)までできているか
- 開始時点をもととして解決を10としたら、いくつまで来た感じがあるか
- うまくいっているところを見つけ、それを増やす思考へ移る
  - どのような時、どのような条件下で、問題は起こっていないか？
  - 可能性/他の選択肢、事象のまわりにある複雑性を大きく捉える
- 行き先を意識する = ソリューションに向けてのベクトルを動かす！

## 報告内容

- 1.はじめに
- 2.平成30年度事業の概要
- 3.ループリック作成・導入プロセス
- 4.研修内容
- 5.おわりに

## 5. おわりに

- ・ 今期の授業案では「期初」と「期末」の2回、ループリックを活用

期初

ループリックを用いて、該当項目に○を付け、  
自分の現在の状態を棚卸

期末

振り返りシートの内容に、ループリックを  
反映させ、授業内での経験と紐づけながら、  
各項目の到達状況について内省を促した

⇒ 今期は、主に学生自身のリフレクション  
(振り返り) に活用するに留まる

## 実践から見えた良かった点と改善点

### メリット

- 教員・FA・受講生間で受講生に身に付けて欲しい能力やその到達度について、期初の段階で具体的に共有することができた。  
→基礎演習B初回
- 期末の振り返りで、期初と比較した自分の成長度について内省を促すことができた（对学生）。  
→研修④
- 期中の具体的なアクションと評価を紐づけることで、具体的なエピソードを伴いながら、到達度について考えさせることができた（対教員）。  
→研修③

## 実践から見えた良かった点と改善点

### 課題

- ルーブリックの活用が受講生の内省促進に留まり、教員による第三者評価としての成績評価には直接的に組み込みきれなかった。  
(一部、内省の言語化度合いを評価に組み込んだが)
- 期末は、振り返りシートに組み込んだので、期初との変化を定量的に比較しにくかった。

グローバルリック項目(案)

※基礎演習Aは、大学での学びを深める上でどのような姿勢や態度、心構え、スキルが必要になるのかを知り、特に、一人や1対1の関係性の観点から、それらの発揮の仕方を学びます。  
 ※基礎演習Bは、基礎演習Aで学んだ、姿勢や態度、心構え、スキルについて、PBLを通じてグループワークの中で応用的に実践しながら学びを深めていきます。

No	評価観点	評価尺度		ウエイト	評価尺度		ウエイト
		要再学習	良(ベース)		要再学習	良(ベース)	
1	基礎的学習スキル	25%	25%	15%	15%	基礎演習B	15%
2	コミュニケーション力	20%	20%	15%	15%	基礎演習B	15%
3	思考力・判断力・表現力	20%	20%	20%	20%	基礎演習B	20%
4	課題発見、解決力	15%	15%	20%	20%	基礎演習B	20%
5	関心・問題意識の醸成	10%	10%	20%	20%	基礎演習B	20%
6	目標設定の相座	10%	10%	10%	10%	基礎演習B	10%



## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲）学部 FD 推進事業」報告書

標記のことに、以下のとおり報告いたします。

学 部 名	神道文化学部
事 業 名	学生に対する効率的なアンケート・学力調査に基づく授業運営・学部カリキュラム改善への検討
平成 30 年度実務担当者名	菅 浩二
<b>事 業 の 概 要</b>	
<p>本事業では、(1) 1 年次における基礎学力の充実、(2) 学生の奉職・就職の指向性とカリキュラムや授業内容のマッチング、(3) 卒業延期率の継続的な改善、休退学者数の減少、(4) よりよい奉職・就職や進学などの実現、学部の授業運営の指針として学生の学修と奉職・就職の指向性把握、のために、アンケートや学力調査を実施してデータを把握する。</p> <p>内容としては、下記①②のアンケート・調査を実施し、③④の検討を進める。</p> <p>①学生アンケートの実施と、平成 30 年 3 月卒業生アンケートの集計・分析</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 30 年 3 月(29 年度)卒業生アンケートの集計・分析</li> <li>・新入生意識調査（入学時）</li> <li>・オリエンテーション・アンケート（オリエンテーション終了後）</li> <li>・初年次教育に関する調査（1 年次後期開始前）</li> <li>・2 年次の進路希望調査（後期「神道文化演習」における奉職・就職ガイダンス時）</li> <li>・院友神職会からの教育補助費で実施している課外講座でのアンケート（適宜）</li> <li>・卒業生アンケート（卒業時）</li> </ul> <p>②神道に関する基礎学力診断（試験）</p> <p>新入生の神道に関する基礎学力診断と、一年後の到達度調査を、それぞれ試験形態で行い、1 年次の、複数科目による基本知識向上度を計測し分析する。</p> <p>③専門教育（含：専門に関わる共通教育科目・導入教育科目）の内容についての他大学との共同検討</p> <p>本学部と同じく神道学・宗教学に関わる専門教育課程を有し、本学との間に教育・学術研究交流に関する協定（平成 18 年 4 月締結）を有する皇學館大学と共同で、教育内容検討を実施する。</p> <p>④大学教育の質保証に関する検討</p> <p>「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 哲学分野」（平成 28 年 3 月 23 日）（日本学術会議哲学委員会 哲学分野の参照基準検討分科会作成）の内容について、教務委員会を中心に学部内で理解をすすめる、将来的な授業改善の準備とする。</p>	

## 事業の結果

【目的】年初計画で設定した目的は達成できましたか？（または「今後達成できるか？」）（いずれかにチェック）

十分達成できた（できる） 若干の計画修正の上達成可 大幅な修正の上達成可 達成できない

【内容】年初計画で設定した事業内容は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【点検・評価・共有】点検・評価を行い、その結果を学部教員全員で十分に共有・検討しましたか？

十分な点検・評価・共有ができた 一定の点検・評価・共有ができた

点検・評価・共有のどれかが不十分であった 点検・評価・共有のほとんどが不十分であった

① 学生アンケートについては、次のように実施し、集計・分析を進めた。

前年度の平成30年3月18日卒業証書授与式において実施した卒業生アンケートの集計・分析は、本年度事業として行われた。新入生意識調査（入学時）については、平成30年4月の学部学科ガイダンスの際に新入学生を対象に実施し、183名（フレックスA 60名、フレックスB 123名）の回答を得た。オリエンテーション・アンケート（オリエンテーション終了後）については、第2回アイスブレイク（4月15日 於明治神宮）終了時に参加者を対象に実施し、166名（フレックスA 55名、フレックスB 111名）の回答を得た。2年次の進路希望調査については、後期「神道文化演習」における奉職・就職ガイダンス時（11月）にアンケート用紙を配布し、出席者である161名からの回答を得た。これらのアンケート結果については、業者による集計作業を経た上で、データの整理・分析を学部で行い、各アンケート結果がまとまるごとに学部教務委員会で概略を紹介した。その上で、前期終了後に経過報告としての暫定版「報告書」を作成、7月教授会で配布し、各教員に指導上参考とするよう促した。また年度末には、最終的な「平成30年度神道文化学部 FD 推進事業報告書」を作成し、学部教授会で配布するとともに、引き続き次年度も学部教務委員会で内容の検討を行い、複数開講科目の担当者打ち合わせ等で参照する予定である。

② 神道に関する基礎学力診断（試験）について、新入生（編入生・社会人等含む）の神道に関する基礎学力診断と1年後の到達度（入試形態別による分析等）調査を行った。具体的には1年次開講の「神道概論Ⅰ」の初期（4月12日3限目・6限目 計232名受験）および「神道概論Ⅱ」の終期（平成31年1月24日3限目・6限目 計163名受験）において、それぞれ基礎学力をはかる同一の試験を実施し、昼と夜の比較や、成績比較による学習成果測定など多角的な分析を進めた。

上記①②いずれの成果も、教務部委員が中心となって分析結果をまとめ、神道文化学部教務委員会で内容の分析・共有を行った。（添付の冊子『平成30年度 國學院大學神道文化学部 FD 推進事業報告書 平成31年2月27日版』（以下『報告書』）参照）。

③ 専門教育の内容についての他大学との共同検討

本学部と同じく神道学・宗教学に関わる専門教育課程を有し、本学との間に教育・学術研究交流に関する協定（平成18年4月締結）を有する皇學館大学と共同で、教育内容検討を実施するため、平成30年12月14日・15日に、学部教員三名が、皇學館大学を訪問し授業見学及び教員との意見交換を行った。見学する授業については、皇學館大学教務担当との協議により、事前に許可を受けた（添付の別紙報告「皇學館大学と共同での専門教育の内容検討」参照）。

④ 大学教育の質保証に関する検討

「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 哲学分野」（平成28年3月23日）について、学部教務委員会において把握と理解の必要性を確認し共有した。但し、本年度中に具体的な内容検討の機会を設けるには至らなかった。なお、④のこの点に鑑み、上記「目的」欄を「若

干の計画修正の上達成可」とした。

## 今後の展望

【改善・期待される効果】本事業で得た知見は、今後の当該学部の教授法や授業改善に効果的であるか？

とても効果的である 効果的である あまり効果的でない 効果的でない（いずれかにチェック）

本学部ではこれまで複数年度にわたり、ほぼ同じ質問紙によるアンケート等調査を1・2年生、4年卒業時対象に行っており、今後は入学時から卒業時までの動向も継続的に追える様になっている。単年度の調査結果に留まらず、こうした複数年度の結果蓄積に基づく、本学部学生の基本的特性と経年変化についての分析が、今後の教授法や授業改善、ひいてはカリキュラム改定に向け非常に重要である。本年度現段階ではこの分析を大きく進めることはできていないが、今後進めるべき分析の方向性等が検討されている。この様な分析は、皇學館大学と共に両大学の事例を参照しつつ、今後進められる専門教育の共同検討においても、本学部生の特性を考慮に入れる上で重要と考えられる。

単年度の調査結果の活用について述べる。現在本学部カリキュラムでは1～4年次の演習体系に軸の一つが置かれており、1年前期「神道文化基礎演習」及び2年後期「神道文化演習」では、開始前に打ち合わせ、終了後に報告書提出を伴う反省会の形で、担当者FD会議が開催されている。両科目を含む演習が在学中の学修のどの側面に役に立ったか、等に関する卒業時の回答（『報告書』8～11頁ほか）は、これら担当者会議で資料として活用され、各教員による教授法の工夫に反映されている。

別の視角として、学部独自の神道に関する基礎知識試験・習熟度調査（『報告書』67・68頁）と新入生アンケート（『報告書』34～46頁）は、全学実施の入学時学力診断結果と共に分析され、初年次教育検討改善の基礎資料として活用されている。また特に本年度は、平成29年度末に本学部の卒業率が低下したことを深刻に受け止め、教務委員会において当該学年の（特に卒業延期者の）入学時学力診断結果・再履修科目の実情と共に、本年度事業である卒業時調査と、入学以来の過年度本調査結果を参照し、学生の動向を分析し考察結果を得た。今後もこのような分析を続け、卒業率改善向上を目指すうえで、本事業の結果は有用であろう。

【汎用性・波及効果】本事業で得た知見は、学部学科を超えた本学学士課程教育全体または教員の職能改善に効果的であるか？

とても効果的である 効果的である あまり効果的でない 効果的でない（いずれかにチェック）

継続的なアンケートと基礎学力調査の実施は、もちろん本学部の授業改善に資することを第一義とするものであるが、学生の全数調査を各学年に実施し、同じ学生集団の経年的な性質の把握を可能としていること、特に卒業時に在学経験の振り返りを集計していること、費用対効果の面で比較的効率的な調査・集計の手法を採っていると思われること、などは、他学部において同様の調査を行う場合、先行する一例となり得るであろう。

本学部が責を負う共通教育科目たる「神道と文化」の内容は、本学部の初年次科目「神道文化基礎演習」「神道概論Ⅰ・Ⅱ」等の内容の根幹部分に相当している。本学部生と他学部生では志向性に大きな隔たりがあることは勿論であるが、本事業に基づく、本学部初年次教育改善の取り組みを、学内兼任や兼任など学部専任外の「神道と文化」担当教員にも、打ち合わせ会・反省会などを通じて波及させることを、今後も進めていきたい。

本学部では、2年次後半の学生の奉職・就職意識を継続的に把握している。就職活動一般とは時期や方法が異質である神社奉職活動を含む本学部の事例は特異ではあるが、この調査をもとに、本学部では学部正課教育の改善、および奉職・就職のための課外での諸施策（セミナーの実施、情報提供等）を実施している。本学部のこの取り組みは、学内で有機的に連関するべきキャリア支援事業諸々の一要素たる認識で実行されており、他の部局との協力・情報交換により、相互に効果を増すことが期待される。

**【経費の執行】経費の執行は、執行計画表に基き執行時期・費目別執行率とも適切でしたか？**

本年度の経費の執行状況について、執行計画表に基づき、中間報告の前後に分けて記入してください。

〈中間報告前〉

- ・4月：新入生意識調査（入学時）に係る諸経費
- ・4月：オリエンテーション・アンケート（オリエンテーション終了後）に係る諸経費
- ・4月：神道に関する基礎学力診断（試験）〈第1回〉に係る諸経費
- ・4月：前年度末の卒業証書授与式アンケートの集計に係る諸経費
- ・調査結果の整理のための臨時雇員の費用

〈中間報告後〉

- ・11月：2年次の進路希望調査（後期「神道文化演習」における奉職・就職ガイダンス時）
- ・12月：皇學館大学と共同での専門教育の内容検討に係る出張経費
- ・1月：神道に関する基礎学力診断（試験）〈第2回〉に係る諸経費
- ・調査結果の整理のための臨時雇員の費用

以上のように、アンケート調査、学力診断（試験）、皇學館大学訪問による共同検討、については、実施時期はいずれも予定通りである。また業者による集計作業も、計画通りに依頼・納品されているため、執行は計画通りであり、適切であったと考える。

**【成果報告会】成果報告会の内容（説明事項、共有事項、問題提起等）について現時点での概要をお書きください。**

1.実施内容

2.実施方法の実際

3.内容分析

・アンケート調査概況:

- 1)卒業時アンケート結果の授業への反映・カリキュラム検討への活用模索
- 2)新入生アンケート、神道に関する基礎学力診断（試験）・到達度調査の活用
- 3)平成26年度入学者の動向に関する考察への活用

4. 展望

詳細は、当日報告の通りである（配布資料も参照のこと）。

平成 30 年度 神道文化学部 FD 推進事業  
「学生に対する効率的なアンケート・学力調査に基づく  
授業運営・学部カリキュラム改善への検討」報告

平成 31(2019) 年 2 月 27 日 学部 FD 推進事業報告会  
菅 浩二 (神道文化学部)

## 1. 実施内容

### アンケート

・平成 29 年度卒業生アンケート (データ整理・分析のみ) : 卒業証書授与時 平成 30 年 3 月 18 日実施

回答数 学部 146 名 専攻科 38 名 別科 8 名

・平成 30 年度新入生アンケート: ガイダンス時 平成 30 年 4 月 1 日実施

回答数 183 名 (フレックス A 60 名、フレックス B 123 名)

・平成 30 年度オリエンテーションアンケート: 第 2 回アイスブレイク時 平成 30 年 4 月 15 日実施

回答数 166 名 (フレックス A 55 名、フレックス B 111 名)

・平成 30 年度 2 年生就職奉職意識アンケート: 「神道文化演習」時 平成 30 年 11 月実施

回答数 161 名

### 学力調査

・神道に関する基礎学力診断 (試験) : 1 年次「神道概論 I」「神道概論 II」にて実施

- 入学時診断 平成 30 年 4 月 12 日 3 限目・6 限目 計 232 名受験

- 到達度確認 平成 31 年 1 月 24 日 3 限目・6 限目 計 163 名受験

### 専門教育の内容についての他大学との共同検討

・神道学・宗教学の専門教育課程を持ち、本学との教育・学術研究交流に関する協定 (平成 18 年締結) を有する皇學館大学と共同で、教育内容検討を実施するため、学部教員三名が、皇學館大学を訪問し、授業見学及び教員との意見交換を行った。

出張期間 : 平成 30 年 12 月 14 日 (金)・15 日 (土)

## 2. 実施方法 (アンケート・学力診断について)

- ・学部が Word 作成、業者へ入稿
- ・業者が質問紙 (pdf) に加工
- ・学部で質問紙をプリントアウト、実施、回収
- ・業者に郵送

- ・業者が集計、データを学部へ送付、質問紙を返却
- ・学部でアルバイトの補助を得て集計結果を加工、最終結果へ。

### 3. 内容分析について

- ・アンケート調査概況（冊子『報告書』参照）：

#### 1) 卒業時アンケート結果の授業への反映・カリキュラム検討への活用模索

本学部カリキュラムは4年間の演習体系に軸の一つがある。1年前期「神道文化基礎演習」及び2年後期「神道文化演習」では、開始前・終了後に担当者FD会議が開催されている。両科目を含め、演習が在学中の学修のどの面で役立ったか、に関する卒業時の回答(8～11頁)は、これら会議の資料として、各教員による教授法の工夫に反映されている(これまでも検討の結果、全「基礎演習」にグループワークを採用するなど、全体としても応用中である)。

#### 2) 新入生アンケート、神道に関する基礎学力診断(試験)・到達度調査の活用

神道に関する基礎学力診断では、例年、おおよそ入学時が平均50点台、1年次終了時が平均75点前後、との結果である(本年度結果については66～69頁)。毎年、ほぼ同程度の教育成果を維持している訳だが、これに満足せず、全学実施の入学時学力診断結果と共に分析し、より効果的な初年次専門教育に向けた検討が重要であろう。

#### 3) 平成26年度入学者の動向に関する考察への活用

平成29年度末に本学部生の卒業率が低下したことを深刻に受け止め、教務委員会において特に卒業延期者の入学時学力診断結果、再履修科目の実情を分析、加えて本年度事業である卒業時調査を含め、平成26年度入学者の過去の調査結果等を参照し学生の動向を考察、卒業率低下の要因を探った(その結果、本学部の特有性を軸としつつ、より汎用的な学び、得意分野の拡大、幅広いキャリア、が可能であることを、学生に認知させる必要がある、との考察が示された)。

今後もこのような分析を続け卒業率改善向上を目指すうえで、本事業の結果は有用であろう。

### 4. 展望

本学部ではこれまでもアンケート等調査を1・2年生、4年卒業時対象に実施しており、今後は入学時から卒業時までの動向を継続的に追うことが可能である(添付表「実施状況」参照)。こうした複数年度の結果蓄積に基づく、本学部学生の基本的特性と経年変化についての分析についても、方向性等が検討されている。

また皇學館大学と共に、両大学の事例を参照しつつ、今後進められる専門教育の共同検討においても、本学部生の特性を考慮に入れる上で、こうした分析が重要だと考えられる。

平成 30 年度 國學院大學神道文化学部

# FD 推進事業報告書

—各アンケート結果についての整理・分析結果—

令和元年 5 月 22 日版



## 【目次】

### 卒業生アンケートについての整理・分析

#### 平成 29 年度 卒業生アンケート

○神道文化学部 .....	3
○神道文化学部・専攻科 .....	19
○神道文化学部・別科 .....	26

### 神道文化学部 各アンケート結果の整理・分析

#### 平成 30 年度 新入生アンケート

○フレックスA .....	33
○フレックスB .....	39

#### 平成 30 年度 オリエンテーションアンケート

○フレックスA .....	44
○フレックスB .....	48

#### 平成 30 年度 2 年生 就職奉職意識アンケート

○全体 .....	52
○男子 .....	57
○女子 .....	60

### 神社に関する基礎知識試験についての整理・分析

平成 30 年度 実施概要と分析 .....	63
------------------------	----

---

平成 29 年度

卒業生アンケートについての整理・分析結果

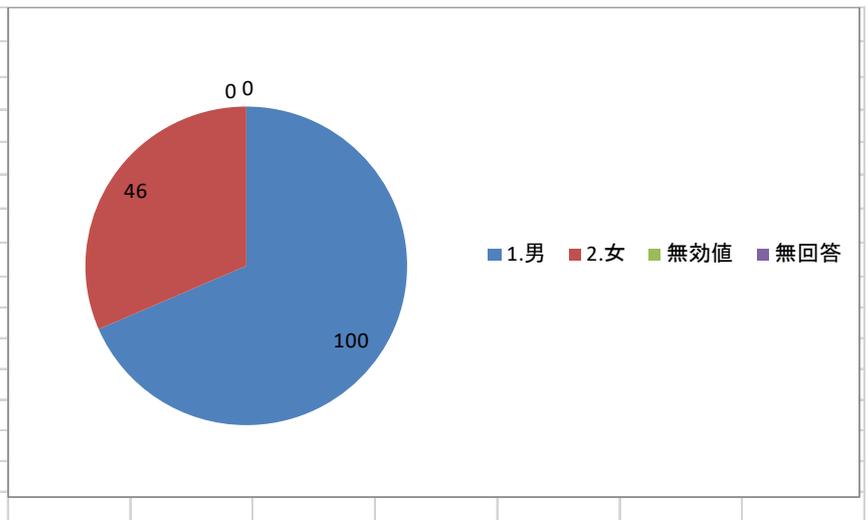
---

# 【平成29年度 卒業生アンケート・神道文化学部生】

## 1 性別

選択肢	回答数	
1.男	100	68.49%
2.女	46	31.51%
無効値	0	0.00%
無回答	0	0.00%
合計	146	100.00%

### 単一回答

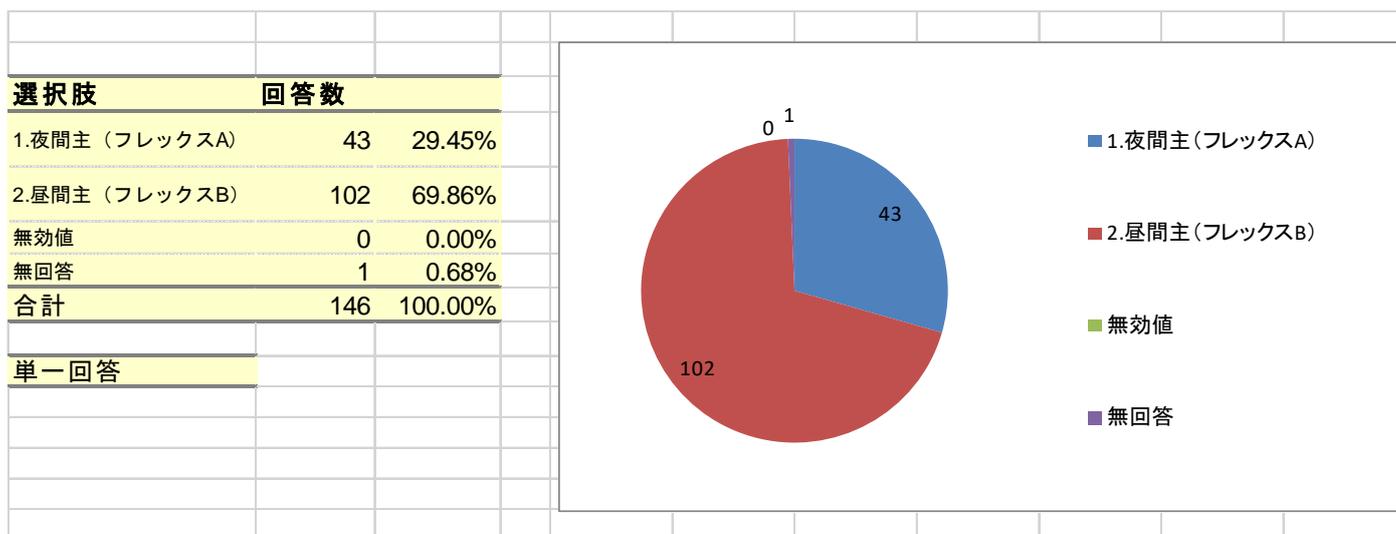
## 4 入学方式

選択肢	回答数	
1.一般入試(A方式)	25	17.12%
2.一般入試(B方式)	10	6.85%
3.一般入試(C方式)	10	6.85%
4.一般入試(センター試験)	8	5.48%
5.公募制自己推薦(AO)	14	9.59%
6.神道宗教特別選考(神道)	27	18.49%
7.神道宗教特別選考(宗教)	0	0.00%
8.神職養成機関普通課程推薦	1	0.68%
9.院友子弟等特別選考	7	4.79%
10.系列三高校推薦	2	1.37%
11.スポーツ推薦	8	5.48%
12.社会人特別選考	5	3.42%
13.学士入学	7	4.79%
14.一般編入	2	1.37%
15.系列編入学	6	4.11%
16.再入学	0	0.00%
17.その他	3	2.05%
無効値	0	0.00%
無回答	11	7.53%
合計	146	100.00%

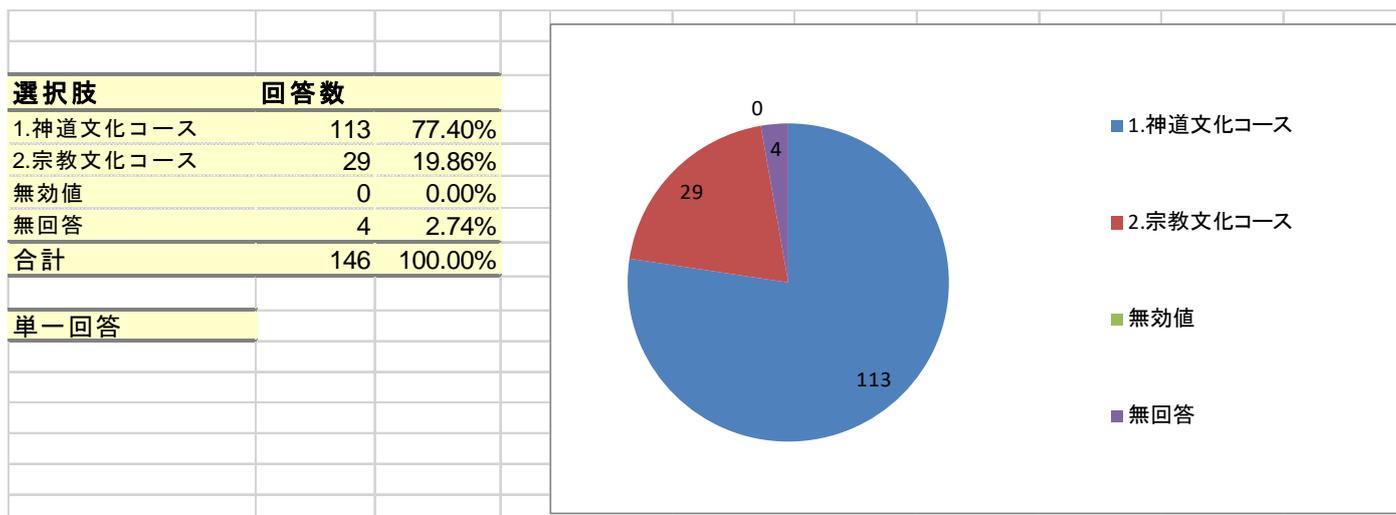
### 単一回答



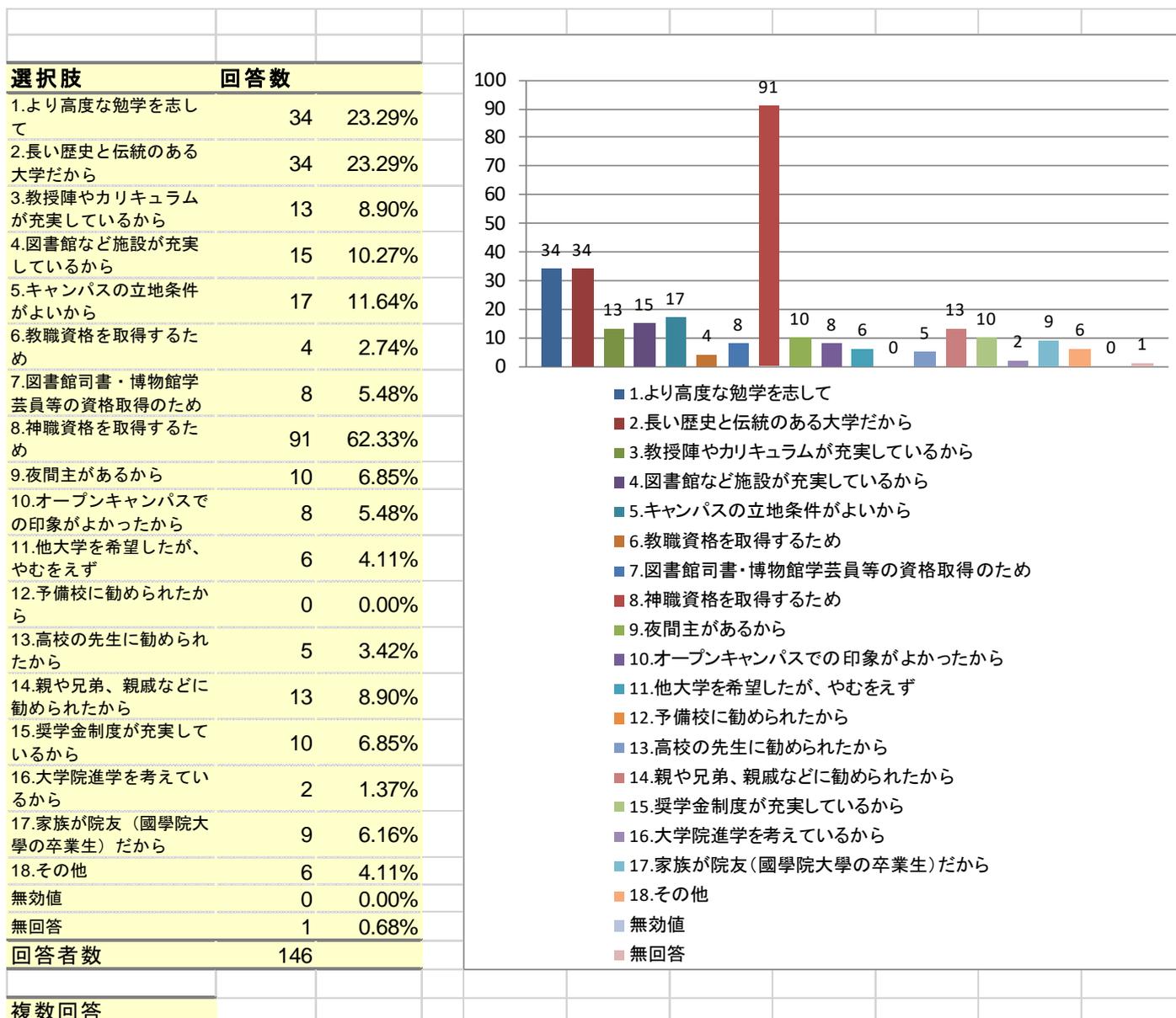

## 5 昼夜開講制



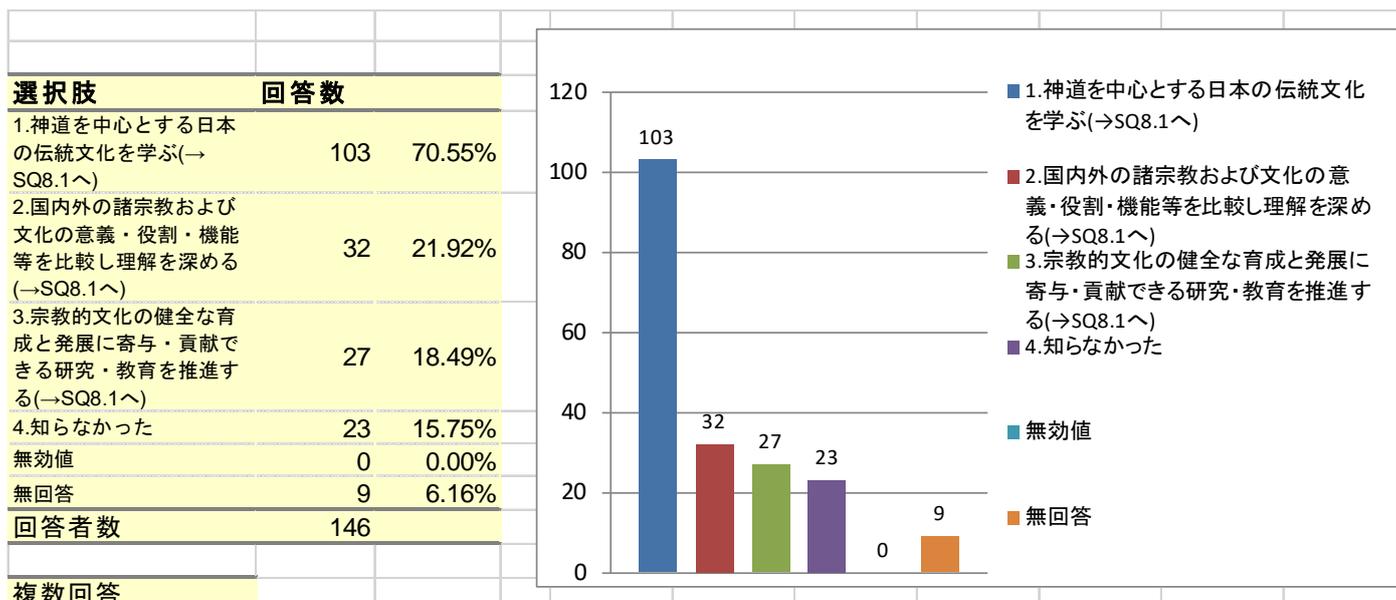
## 6 学科内コース



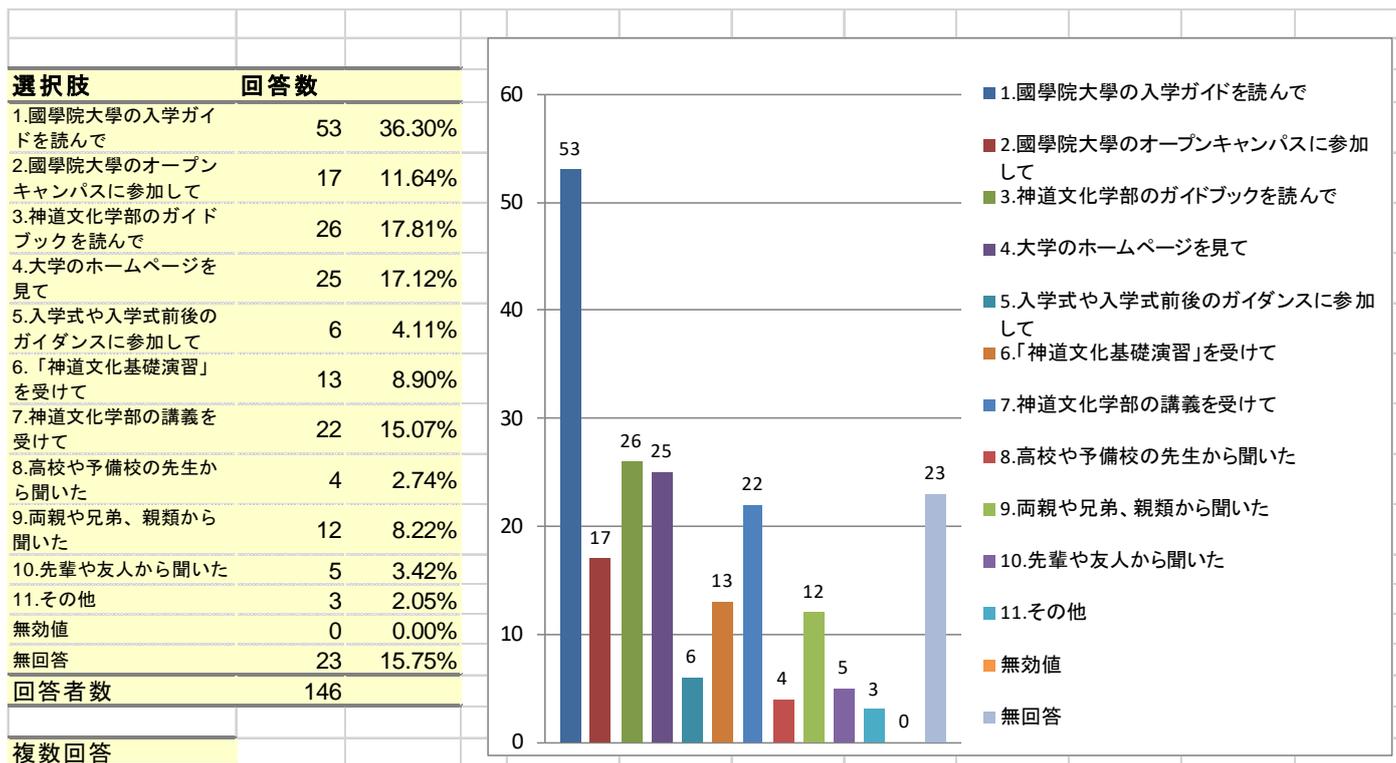
7 あなたの入学動機についてうかがいます。あてはまるものを選んでください（いくつでも可）。



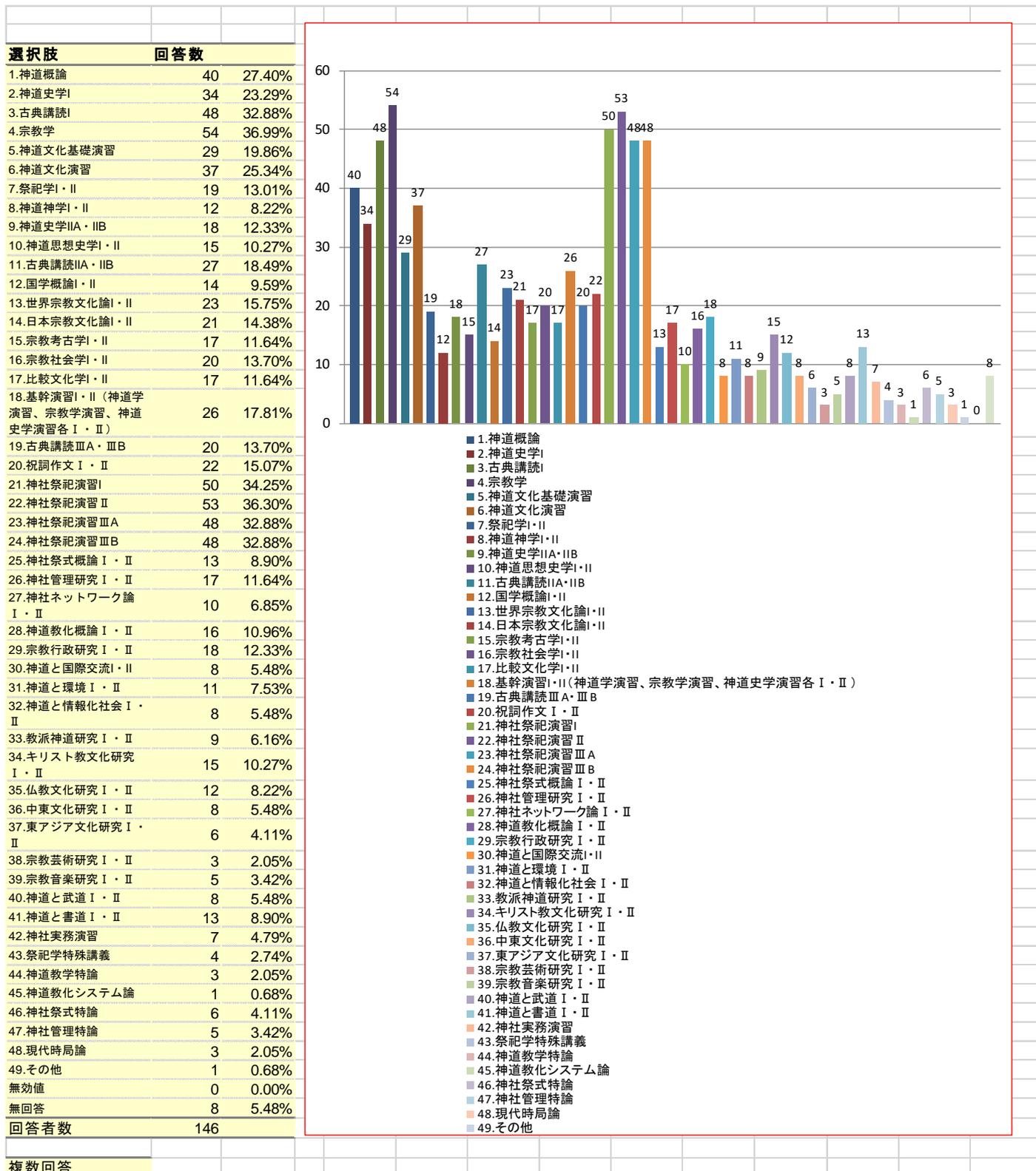
8 あなたは神道文化学部がめざしている教育（講義・演習）の特徴（理念）を知っていましたか。該当するものいくつかでも○をつけてください。



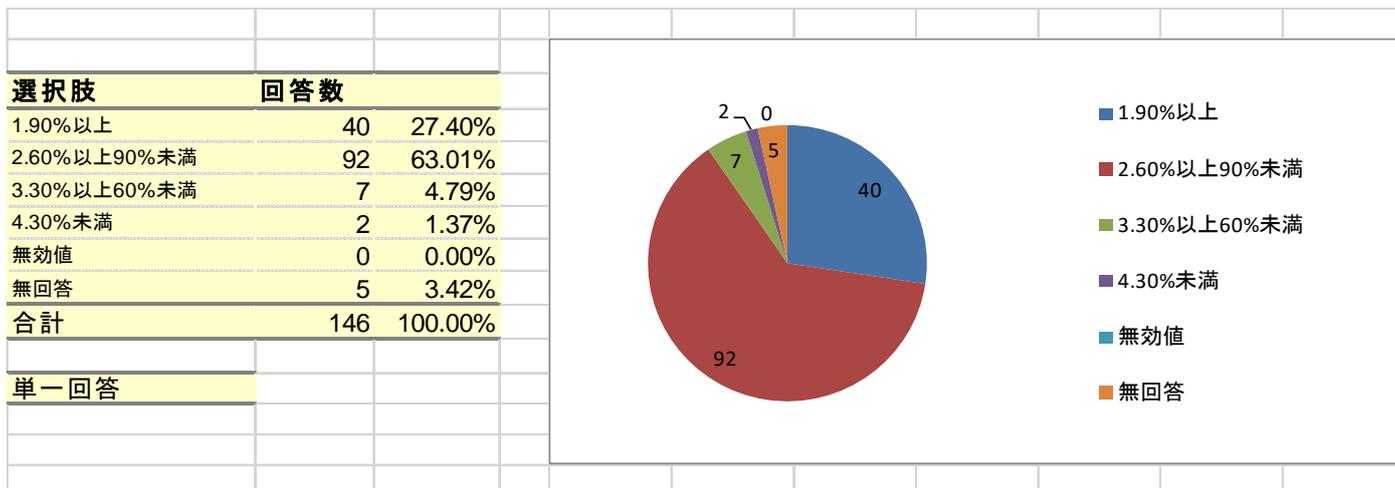
▷SQ8.1 それを何で知りましたか。あてはまるものに○をつけてください（いくつかでも可）。



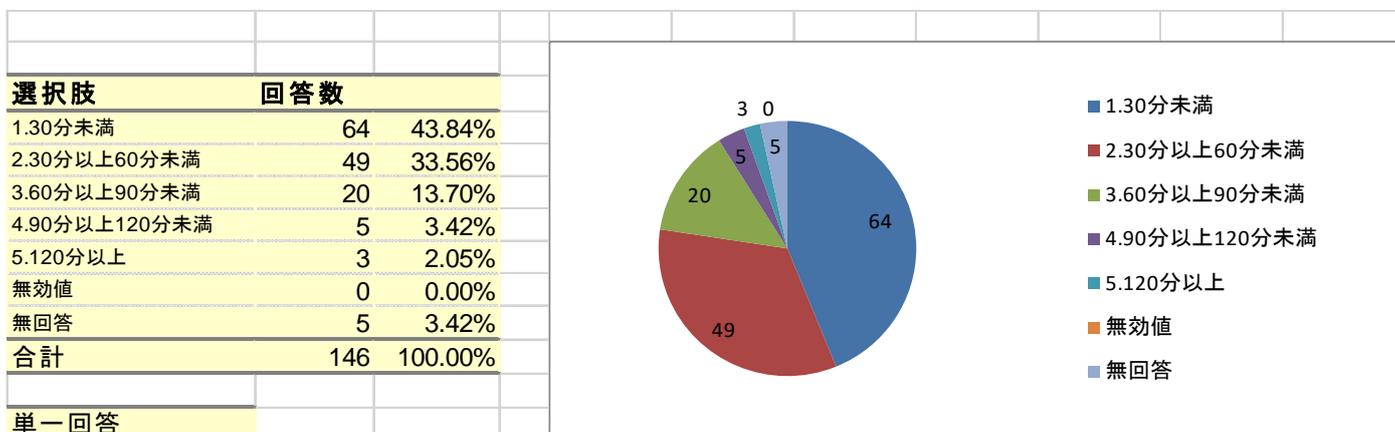
9 専門教育科目のなかで、自己の力を伸ばすことができた授業科目はありますか。あてはまるものに○をつけてください (いくつでも可)。



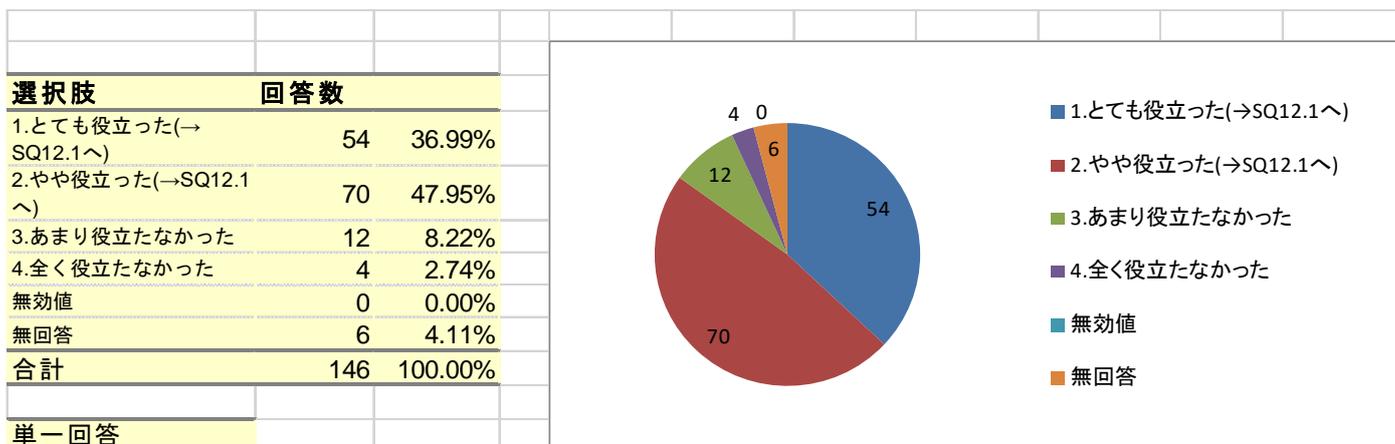
10 授業には平均してどれくらい出席しましたか。



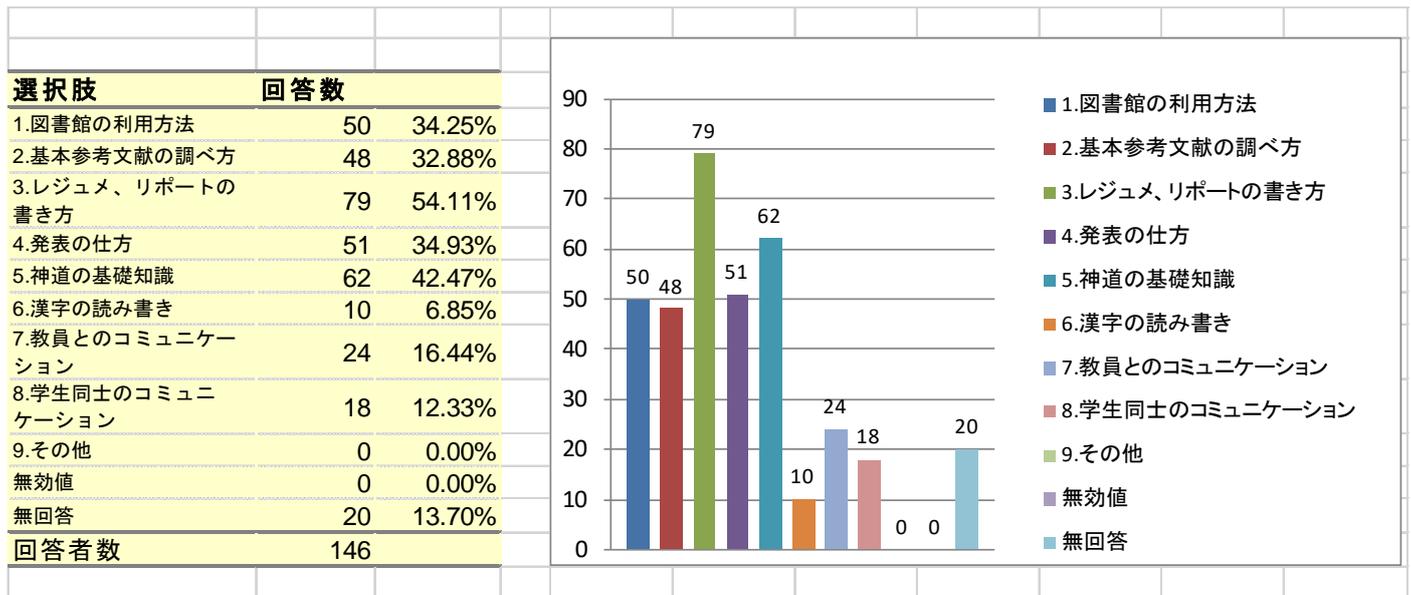
11 学習時間についておたずねします。1日に平均何時間学習しましたか。



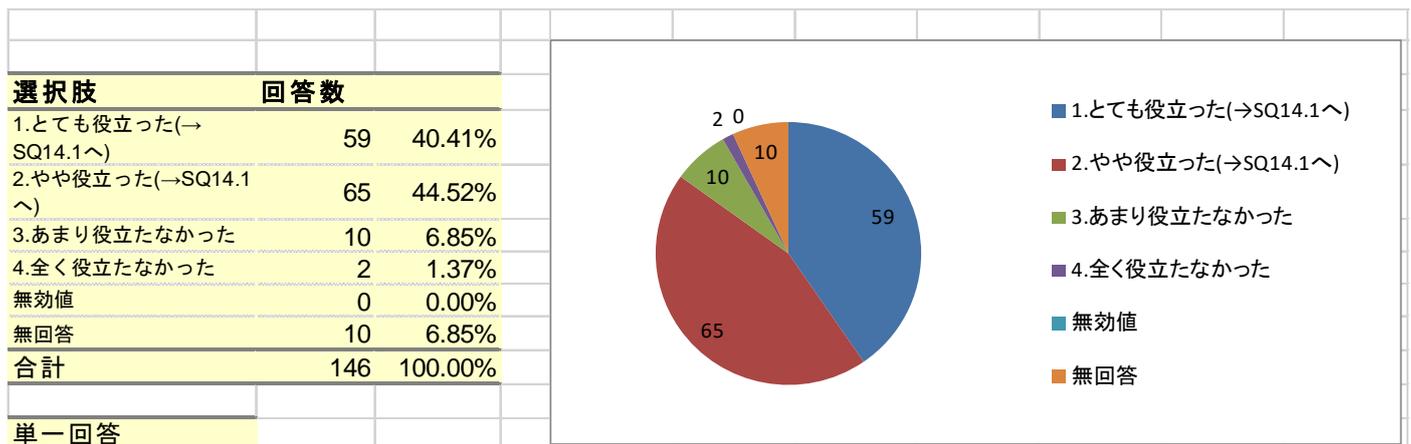
12 必修科目「神道文化基礎演習」は4年間の学習・研究生活に役立ちましたか。



▷SQ12.1 「1.とても役立った」「2.やや役立った」と回答した方に尋ねます。どのような内容が4年間の学習・研究に役立ちましたか。あてはまるものに○をつけてください（いくつでも可）。

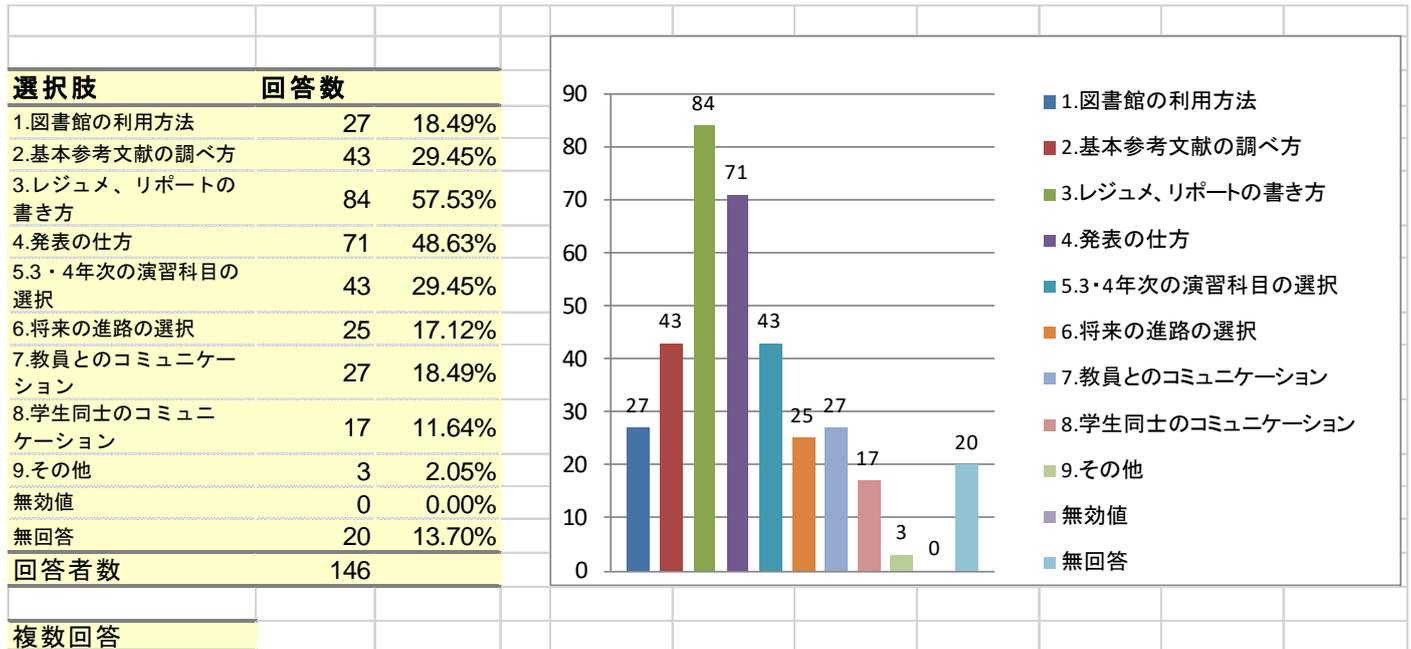


14 必修科目「神道文化演習」は2～4年次の学習・研究生活に役立ちましたか。

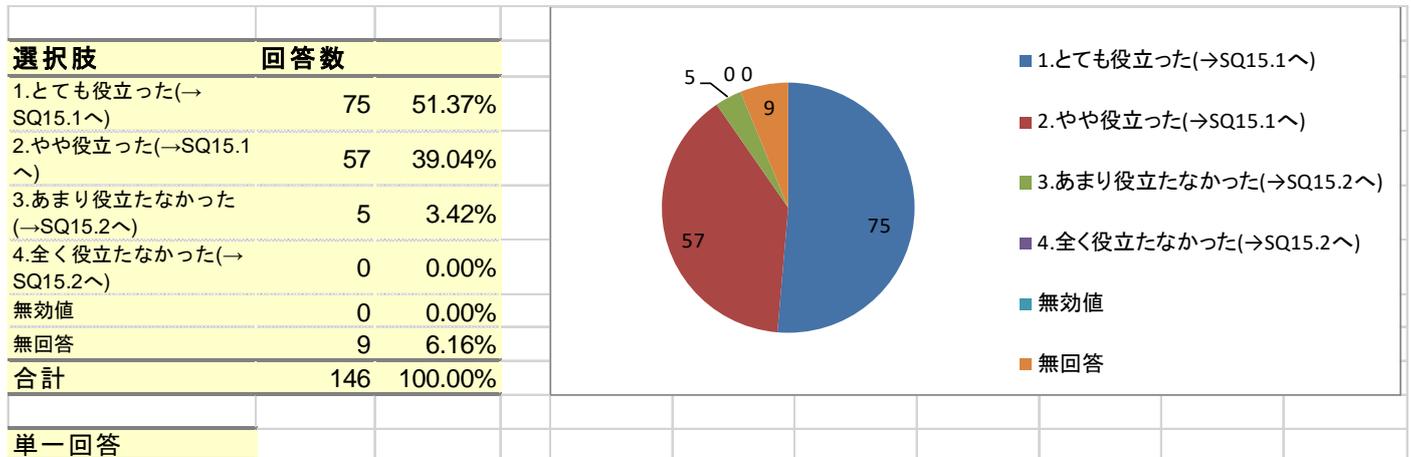


単一回答

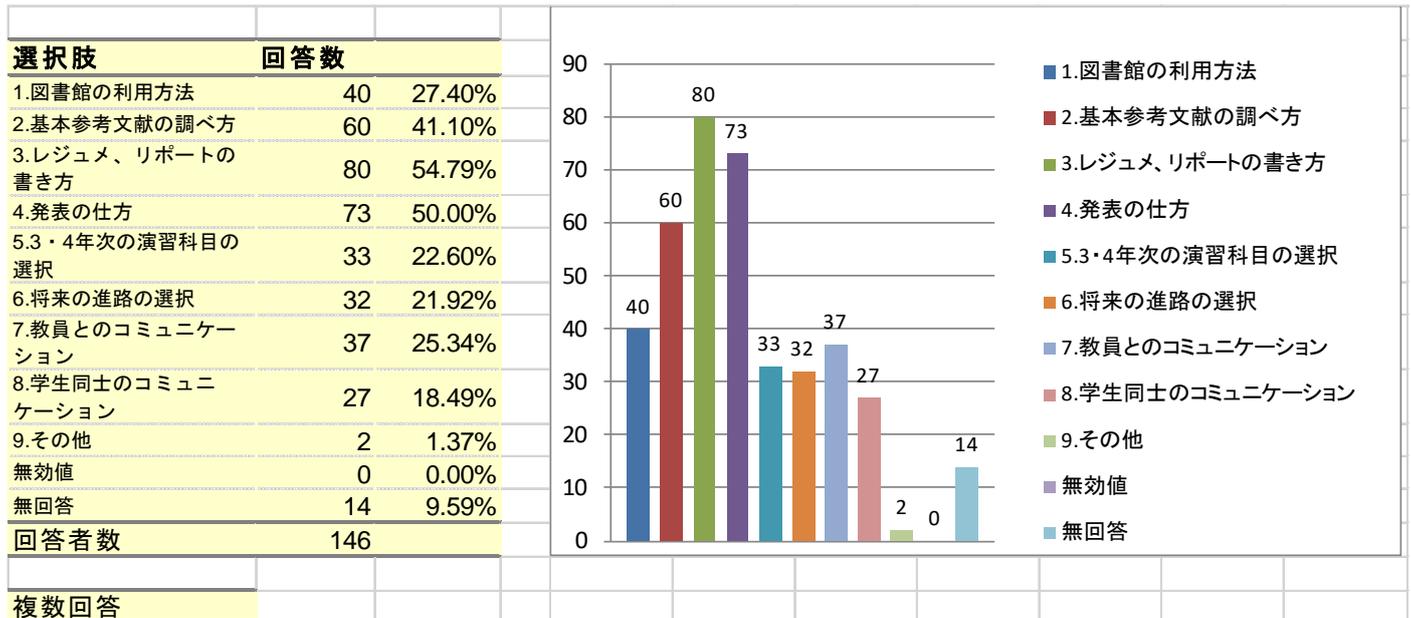
▷SQ14.1「1.とても役立った」「2.やや役立った」と回答した方に尋ねます。どのような内容が2～4年次の学習・研究に役立ちましたか。あてはまるものに○をつけてください(いくつでも可)。



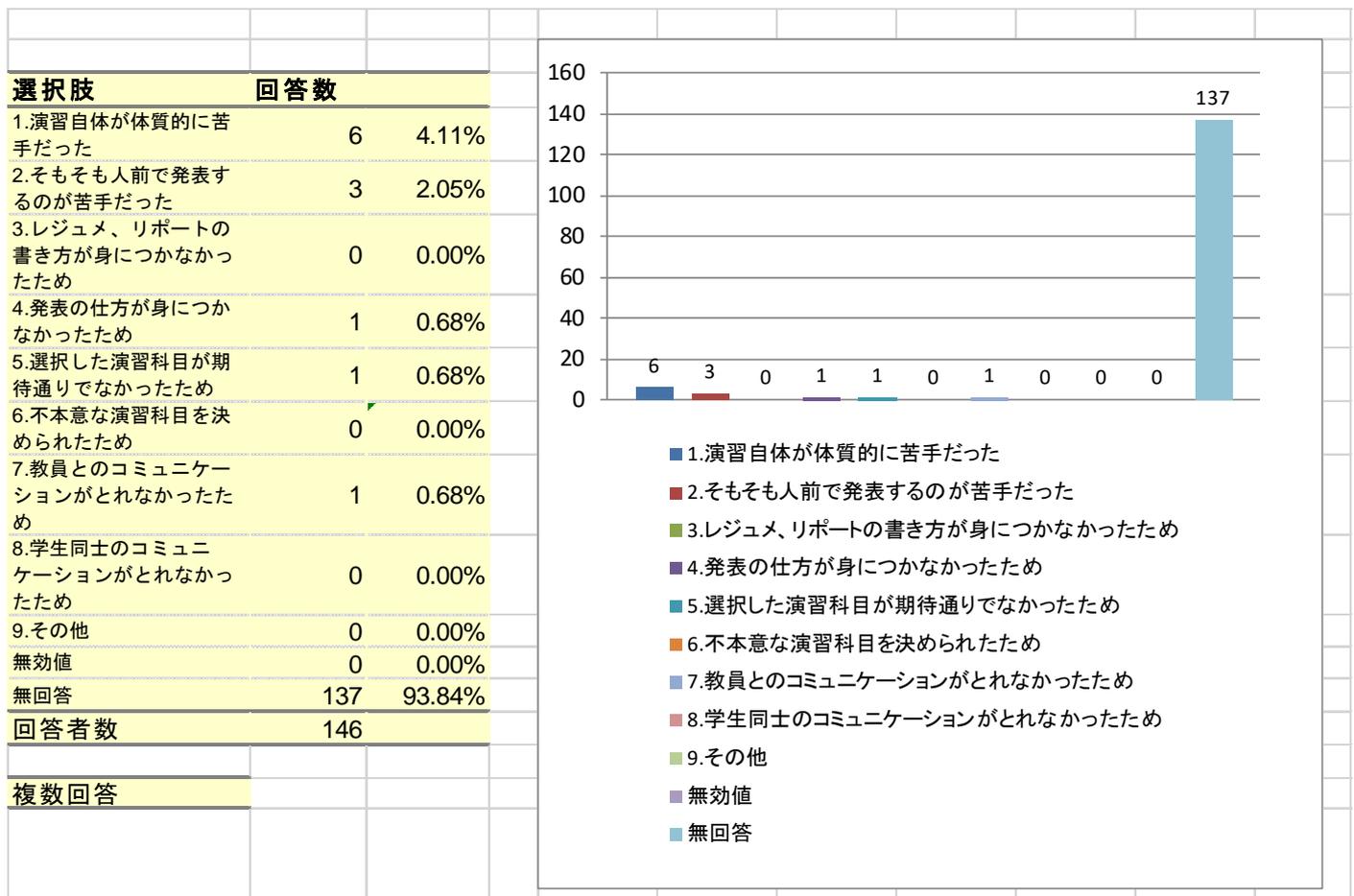
15 必修科目「基幹演習」(神道学演習ⅠⅡ・宗教学演習ⅠⅡ・神道史学演習ⅠⅡ)は3～4年次の学習・研究生活に役立ちましたか。



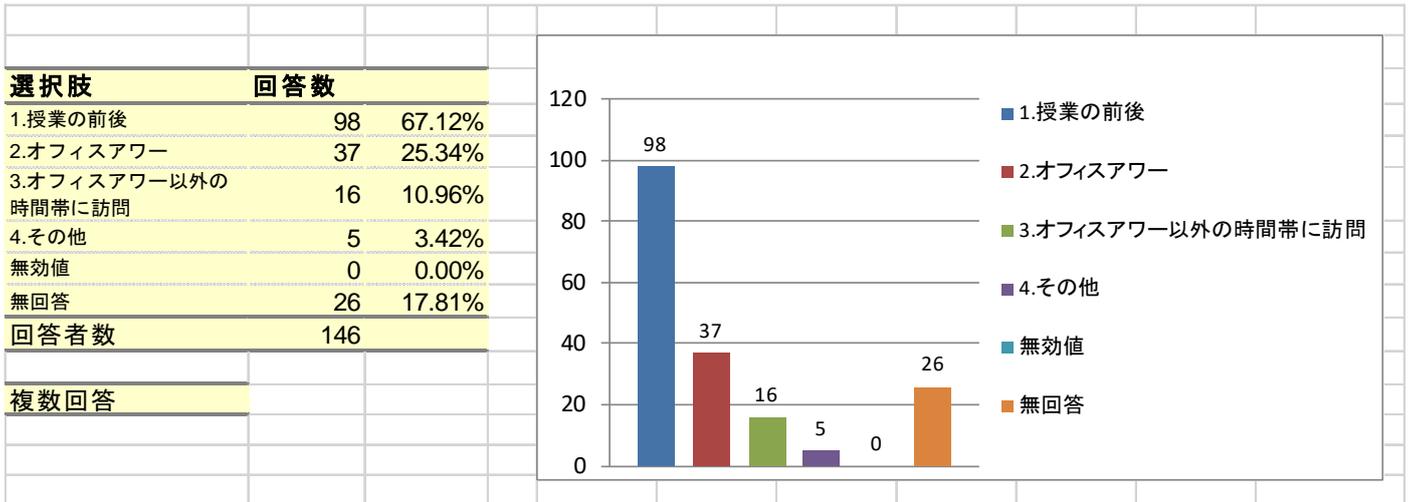
▷SQ15.1 「1.とても役立った」「2.やや役立った」と回答した方に尋ねます。どのような内容が3～4年次の学習・研究に役立ちましたか。あてはまるものに○をつけてください（いくつでも可）。



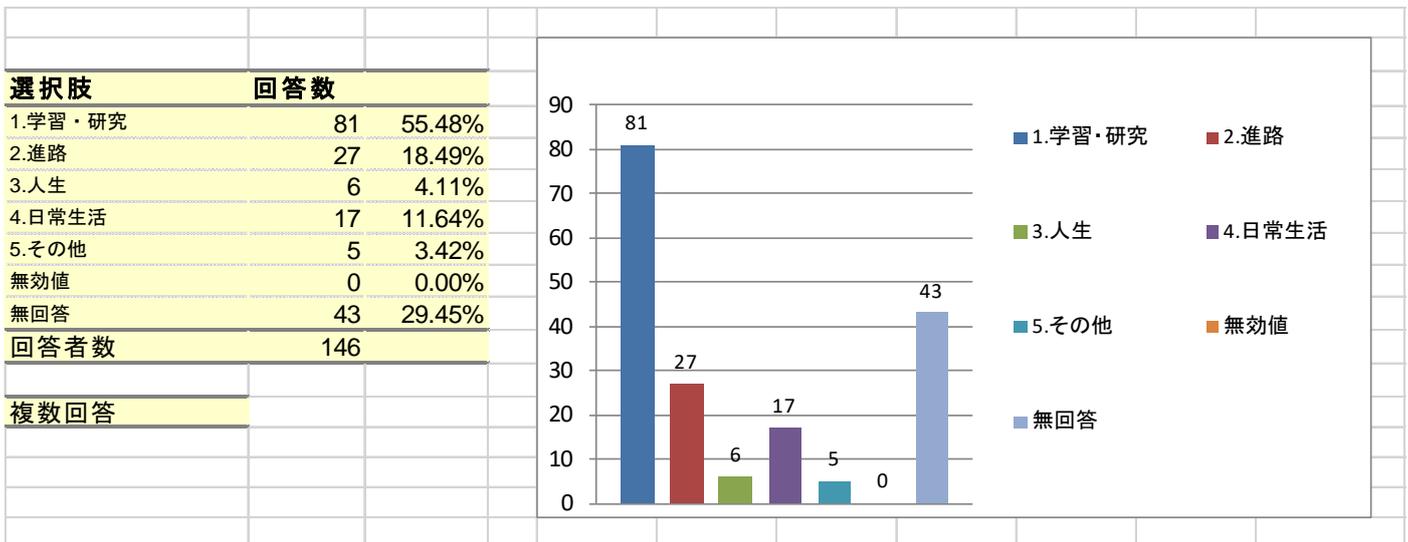
▷SQ15.2 「3.あまり役立たなかった」「4.全く役立たなかった」と回答した方にその理由をお尋ねします。あてはまるものに○をつけてください（いくつでも可）。ほかに理由があれば「9.その他」に記述して下さい。



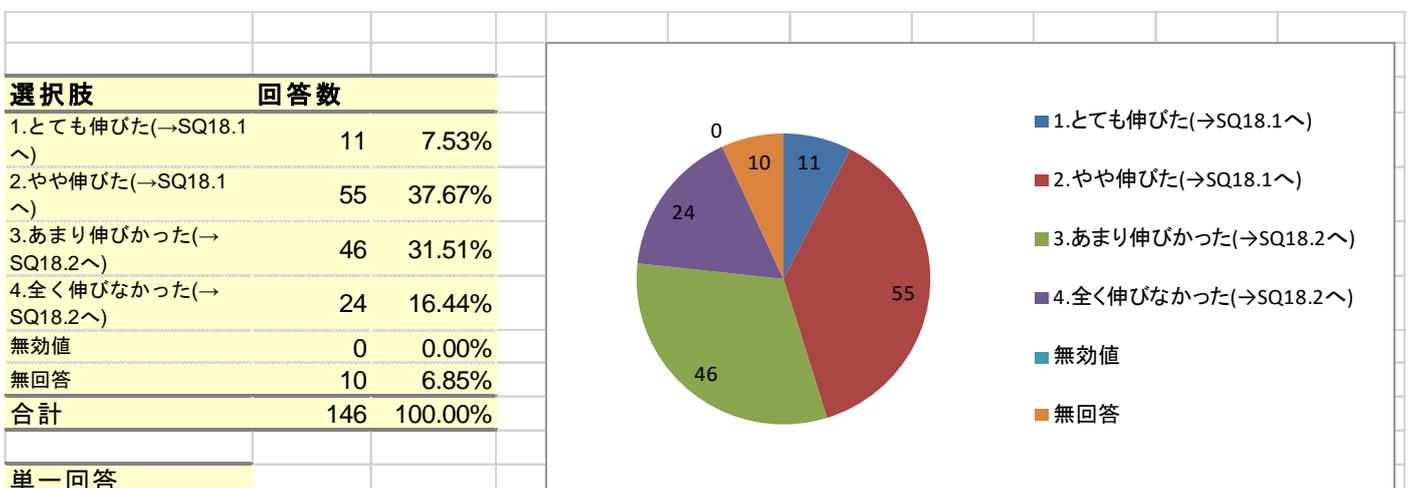
16 学部専任教員とのコミュニケーションについて尋ねます。授業以外でどのような機会にコミュニケーションをとりましたか。あてはまるものに○をつけてください (いくつでも可)。



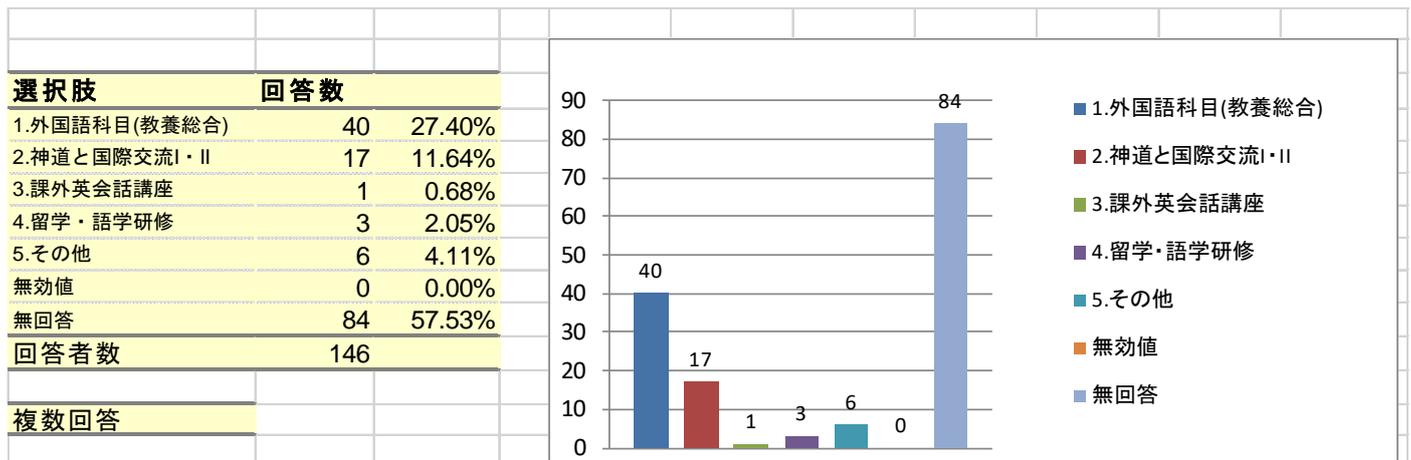
17 学部専任教員にどのような相談をしたことがありますか。あてはまるものに○をつけてください (いくつでも可)。



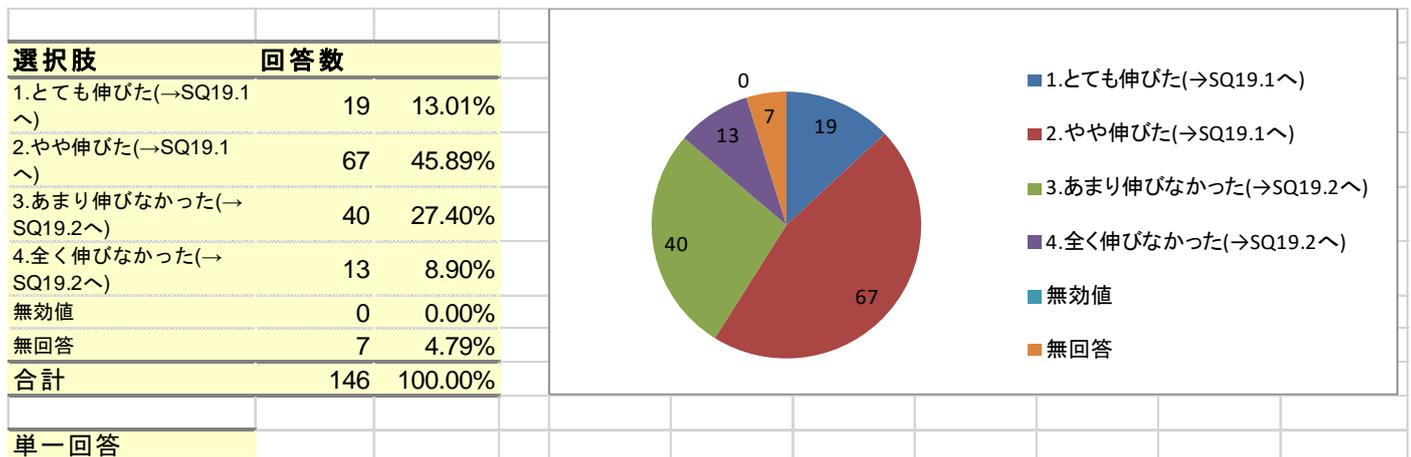
18 在学中に、語学力が伸びましたか。



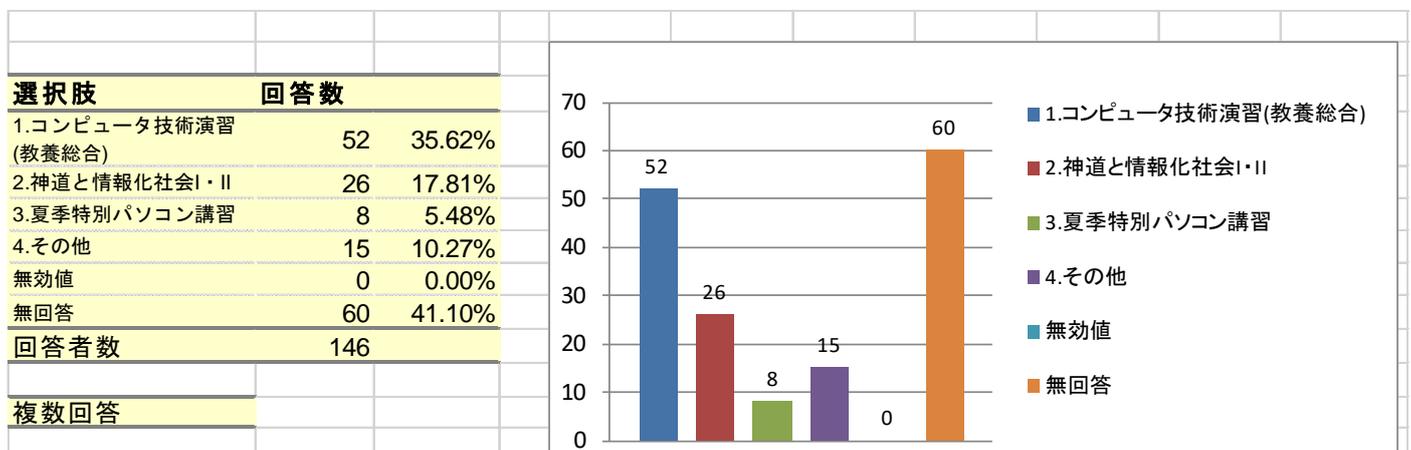
▷SQ18.1 「1.とても伸びた」「2.やや伸びた」と回答した方に尋ねます。語学力を伸ばすのに、どのような機会が役立ちましたか。該当するものいくつかでも○をつけてください。



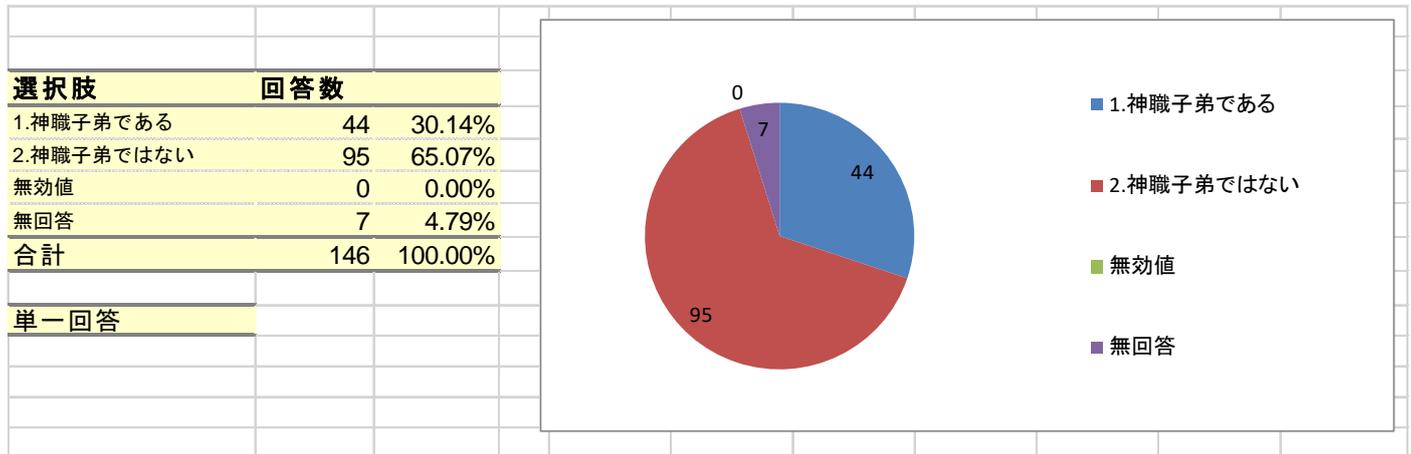
19 在学中に、コンピュータを使う能力が伸びましたか。



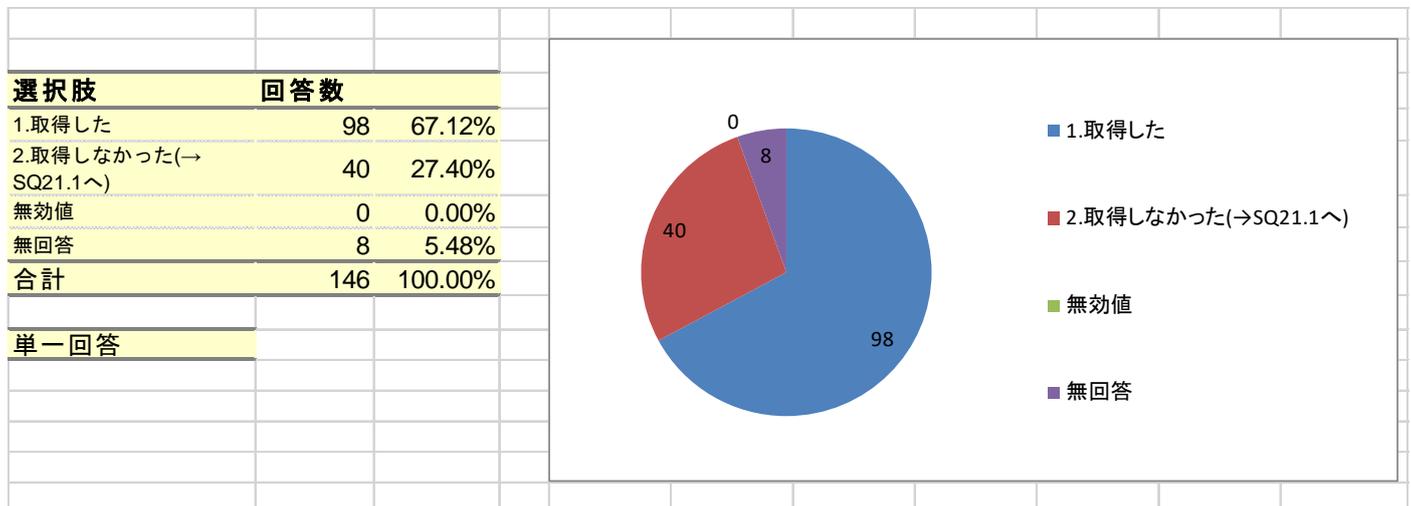
▷SQ19.1 「1.とても伸びた」「2.やや伸びた」と回答した方に尋ねます。コンピュータを使いこなす能力を伸ばすのに、どのような機会が役立ちましたか。該当するものいくつかでも○をつけてください。



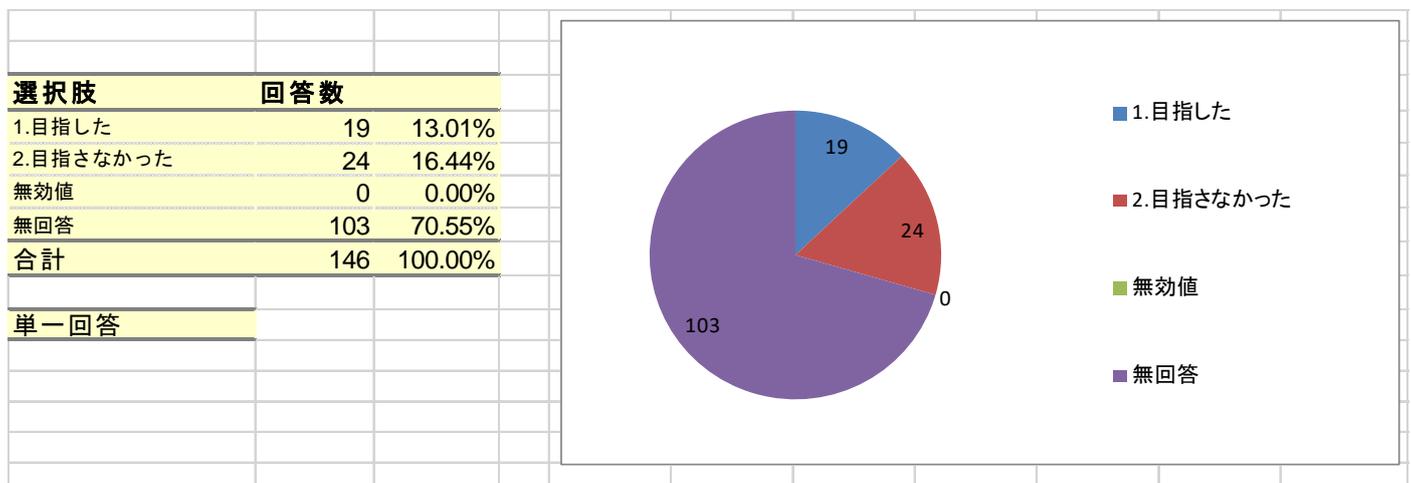
20 神職子弟ですか。



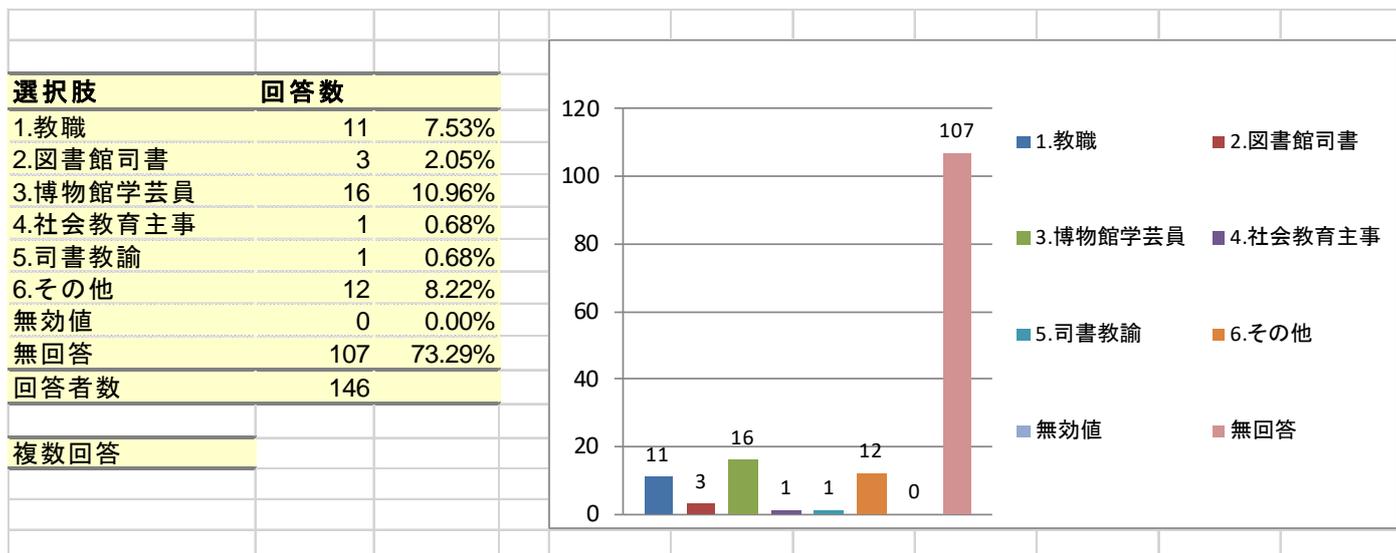
21 在学中に神職資格を取得しましたか。



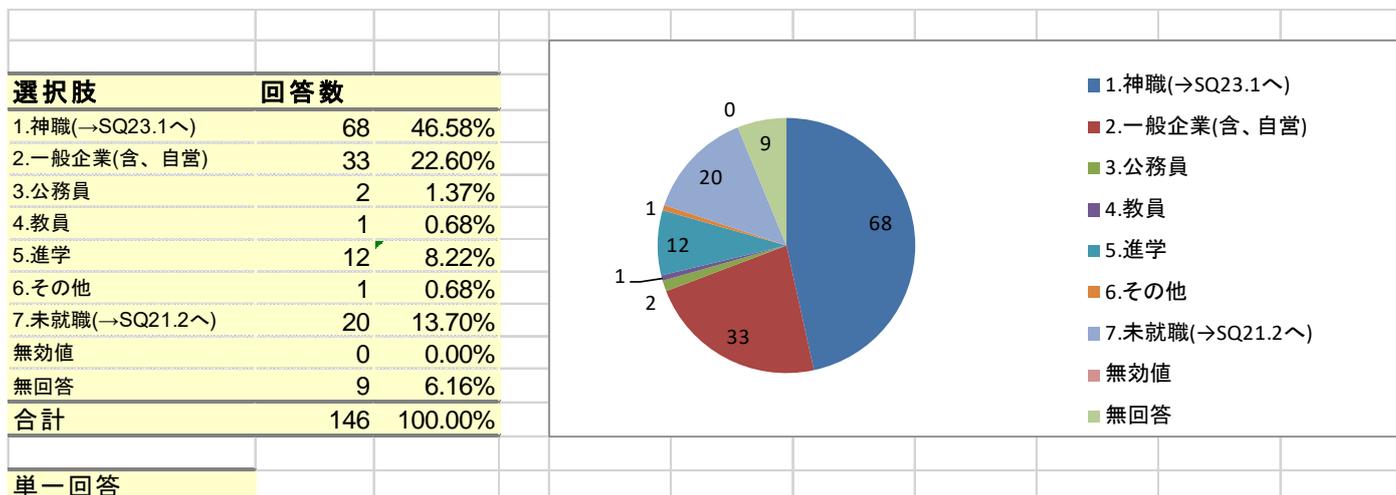
▷SQ21.1 「2.取得しなかった」と回答した方におたずねします。在学中に神職資格の取得を目指しましたか。



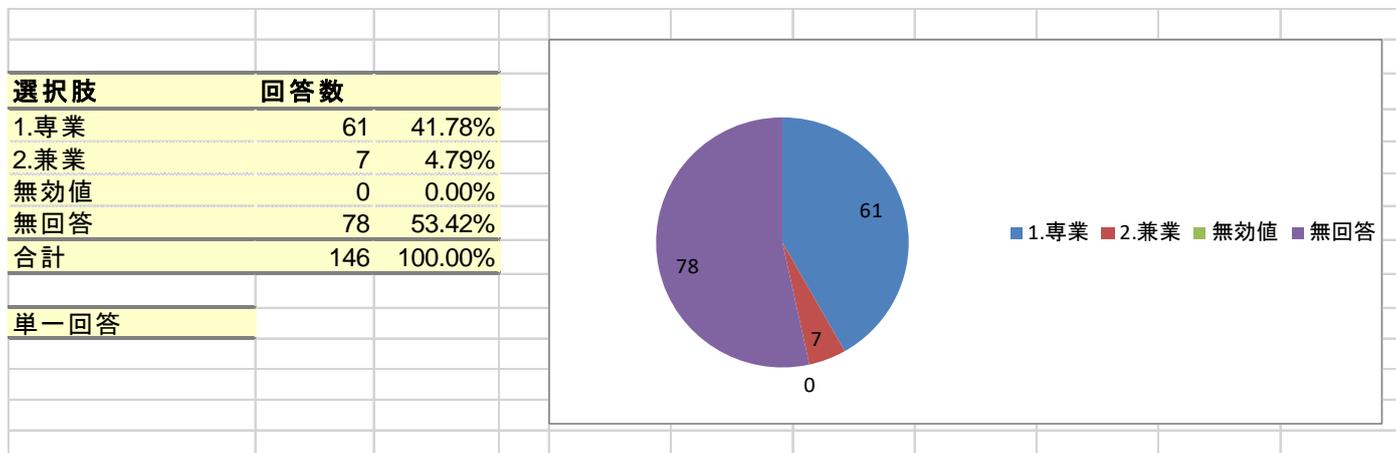
22 在学中に、他にどのような資格を修得しましたか。



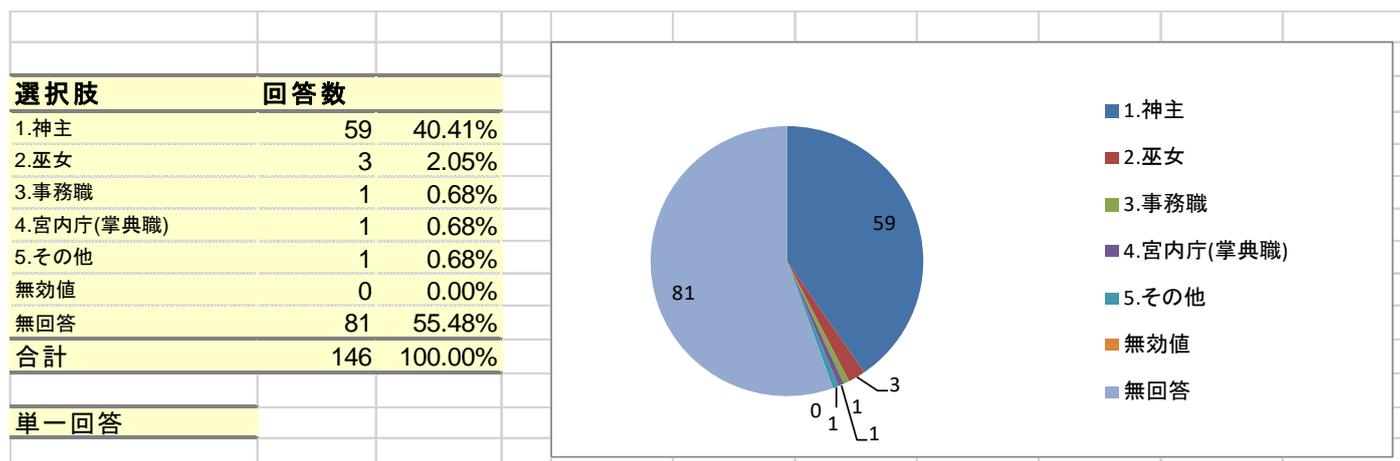
23 卒業後の進路についておたずねします。あてはまるもの1つに○をつけてください。(→1・7以外はSQ23.3へ)



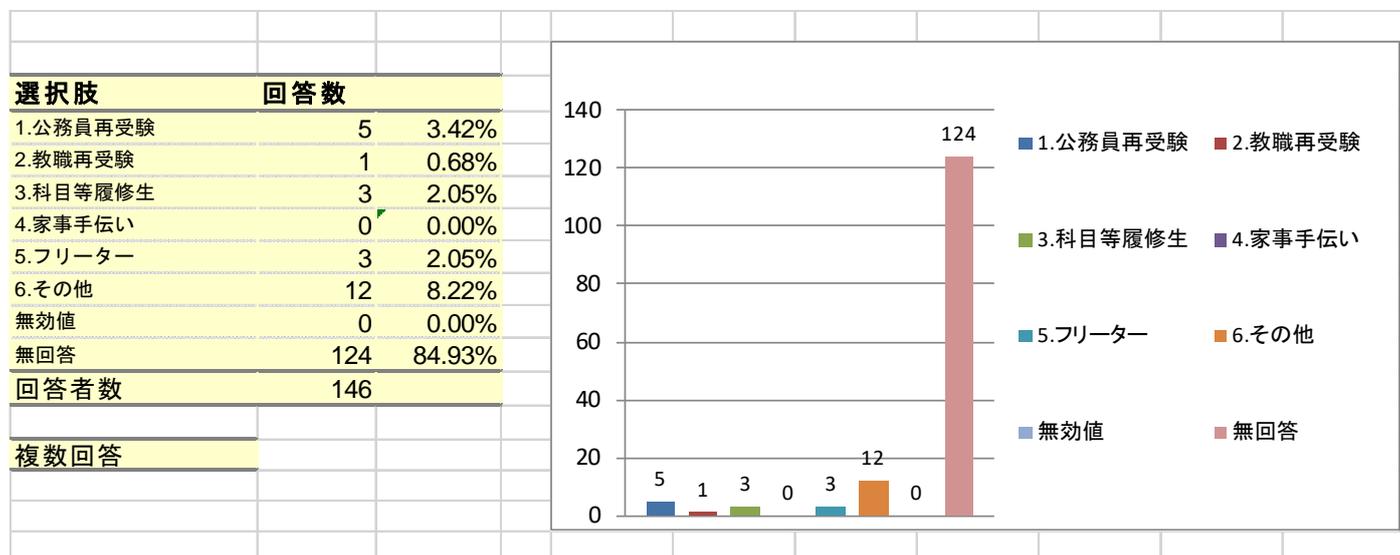
▷SQ23.1「1.神職」と回答した方におたずねします。次のうち、あてはまるもの1つずつ○をつけてください(回答後、→SQ23.3へ) /業態



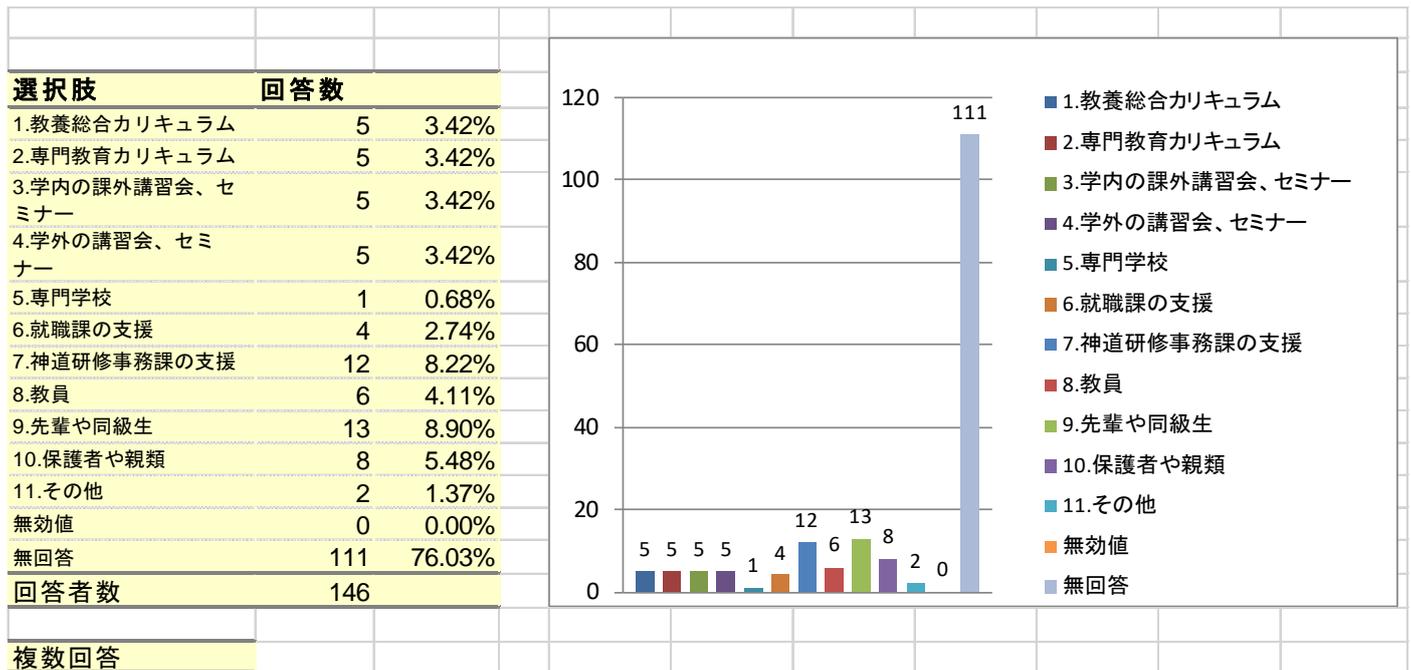
▷SQ23.1「1.神職」と回答した方におたずねします。次のうち、あてはまるもの1つずつ○をつけてください（回答後、→SQ23.3へ）/採用区分



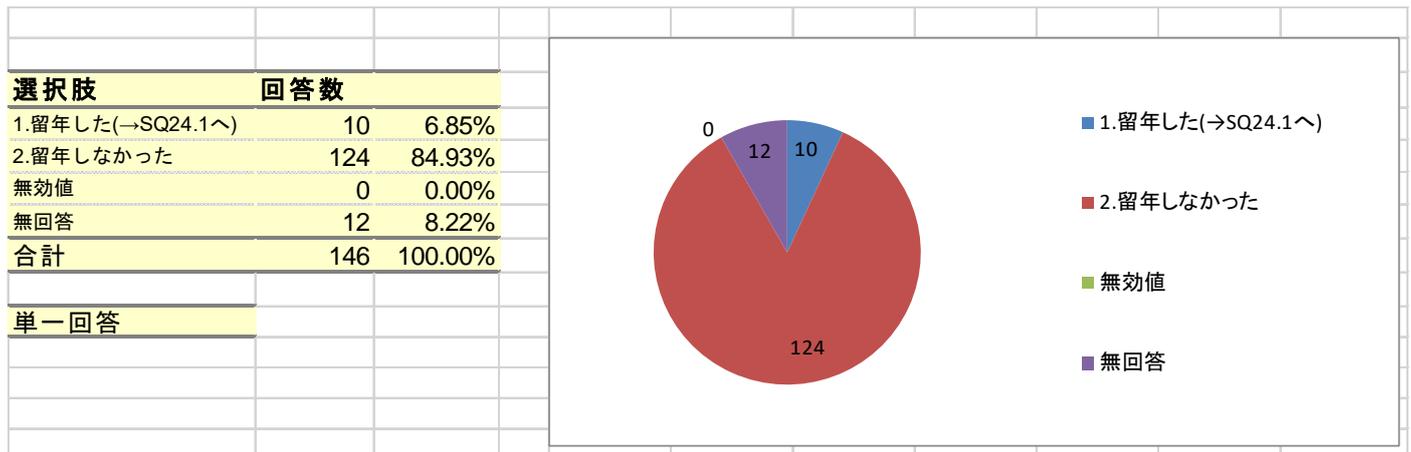
▷SQ23.2「7.未就職」と回答した方に尋ねます。理由としてあてはまるものに○をつけてください（いくつでも）。



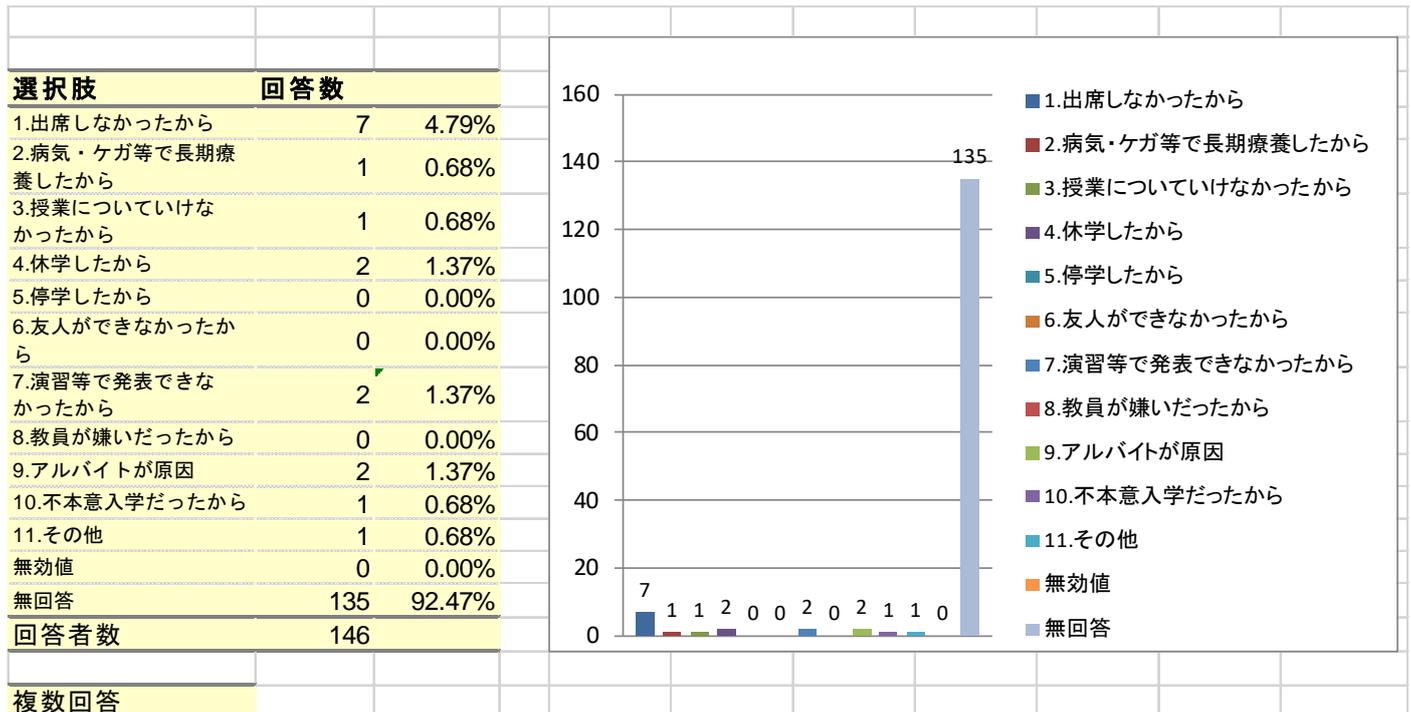
▷SQ23.3 「7.未就職」以外に回答した方におたずねします。進路決定に役立ったものがあれば、いくつでも○をつけてください。



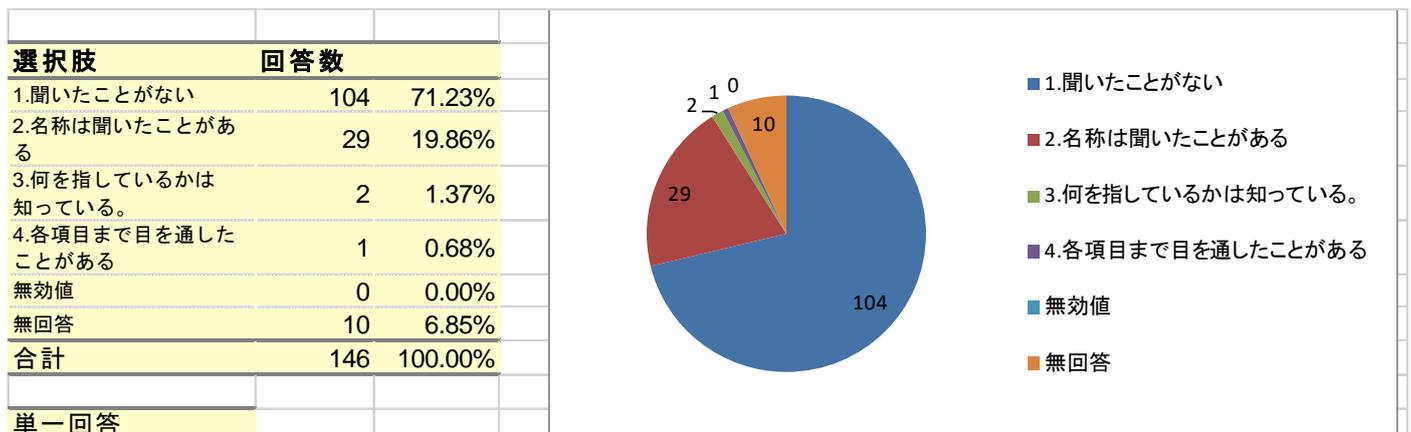
24 あなたは在学中、留年しましたか。1つだけ○をつけてください。



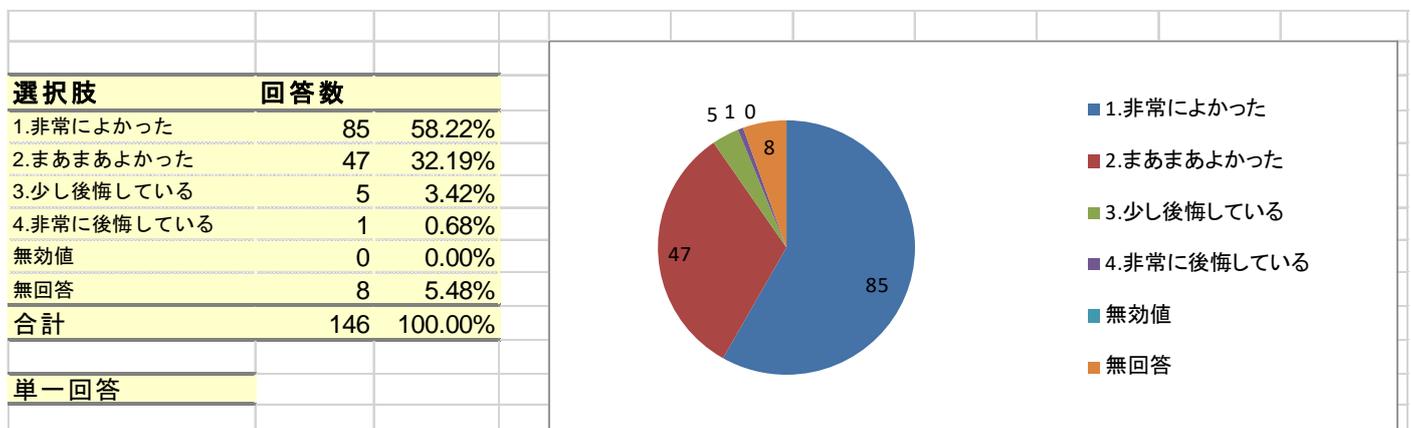
▷SQ24.1 「1.留年した」に回答した方におたずねします。理由としてあてはまるものに○をつけてください（いくつでも可）。



25 あなたはディプロマ・ポリシーについて知っていますか。あてはまるもの1つに○をつけてください。

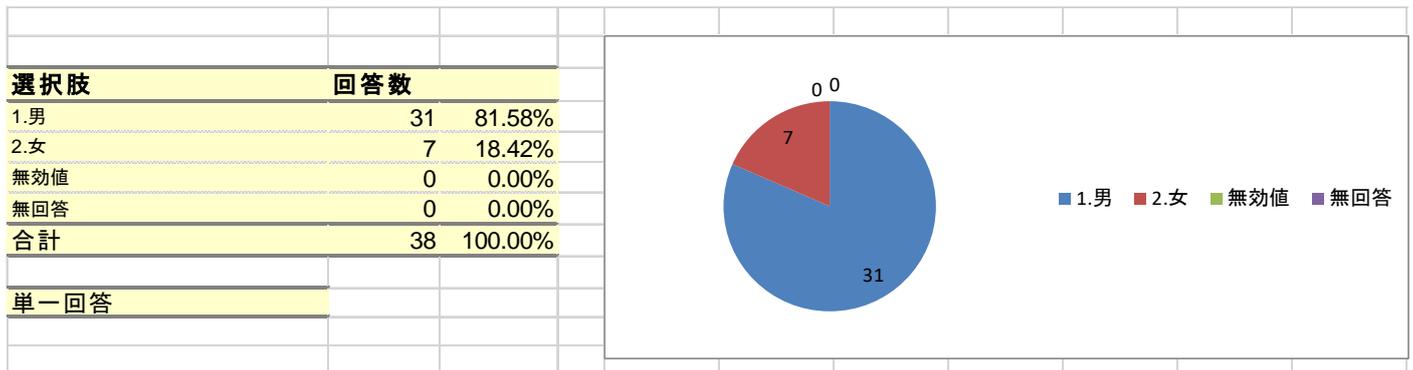


26 あなたは今、國學院大學に在学したことをどのように考えていますか。1つだけ○をつけてください。

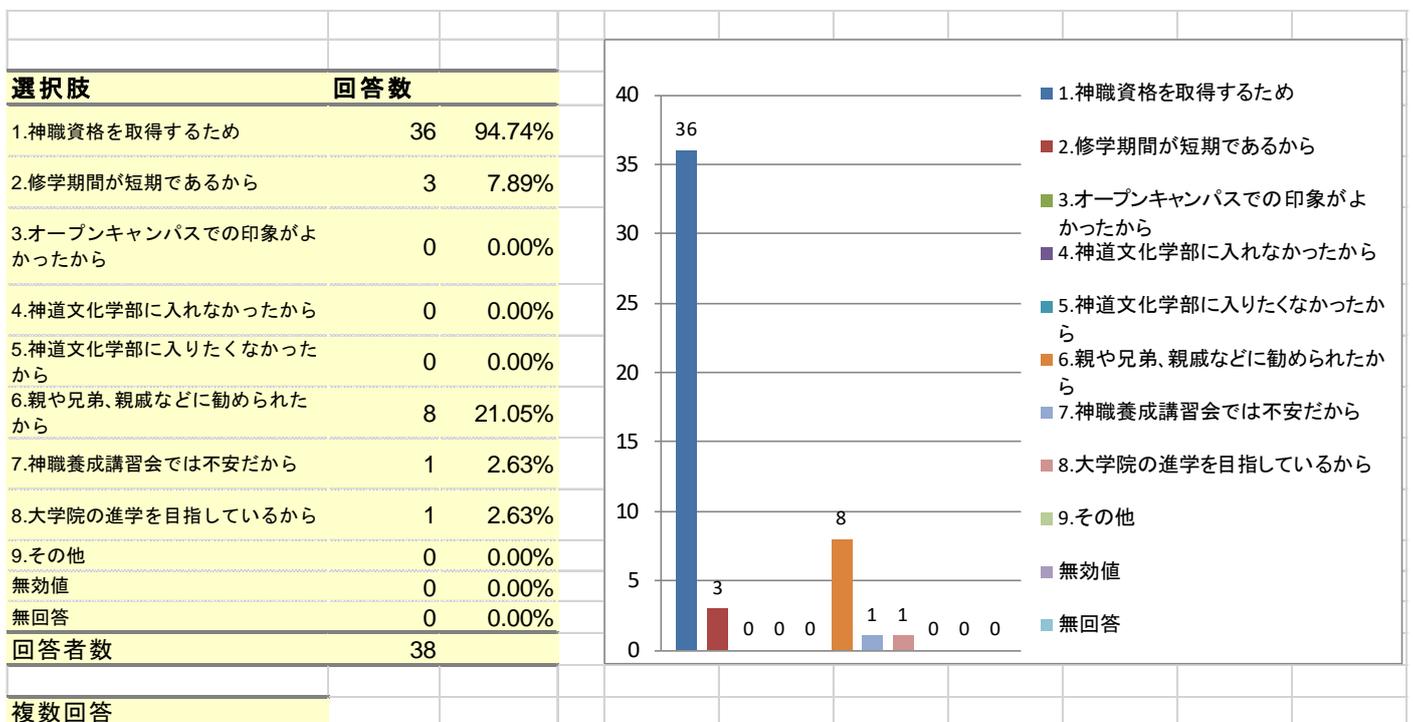


## 【平成29年度 卒業生アンケート・専攻科生】

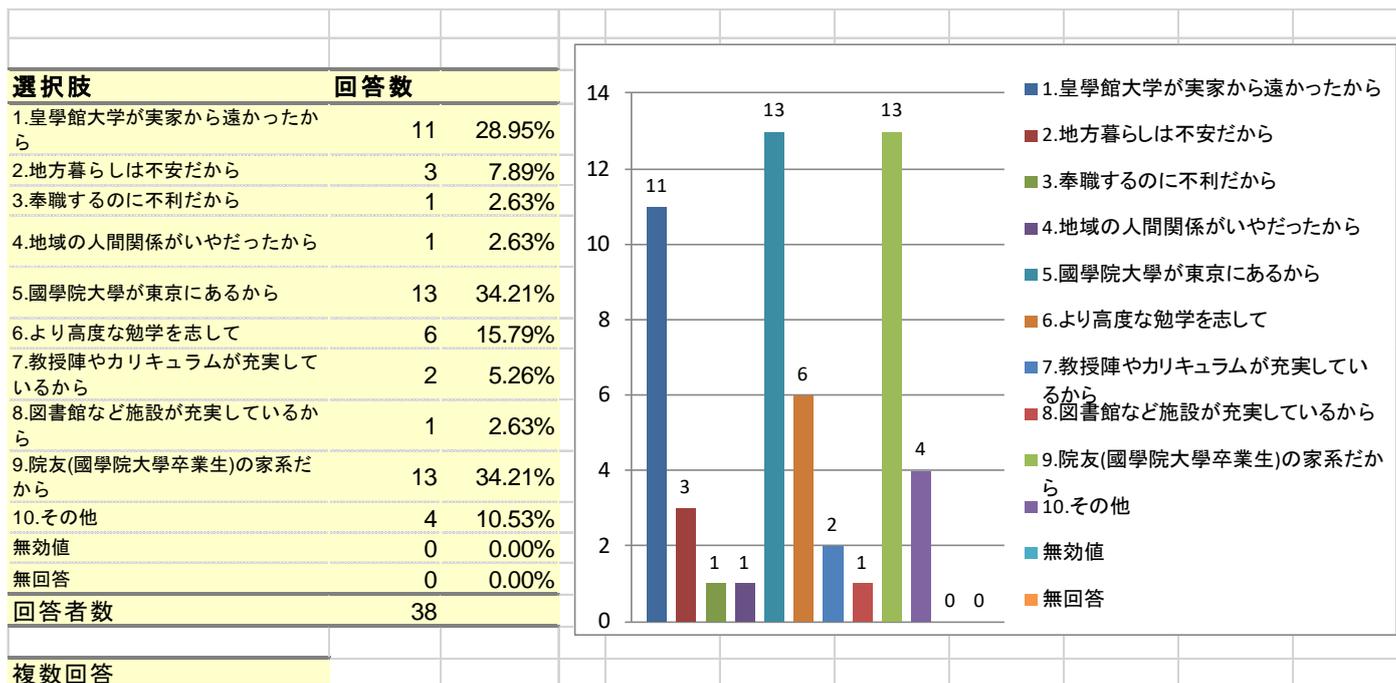
### 1 性別



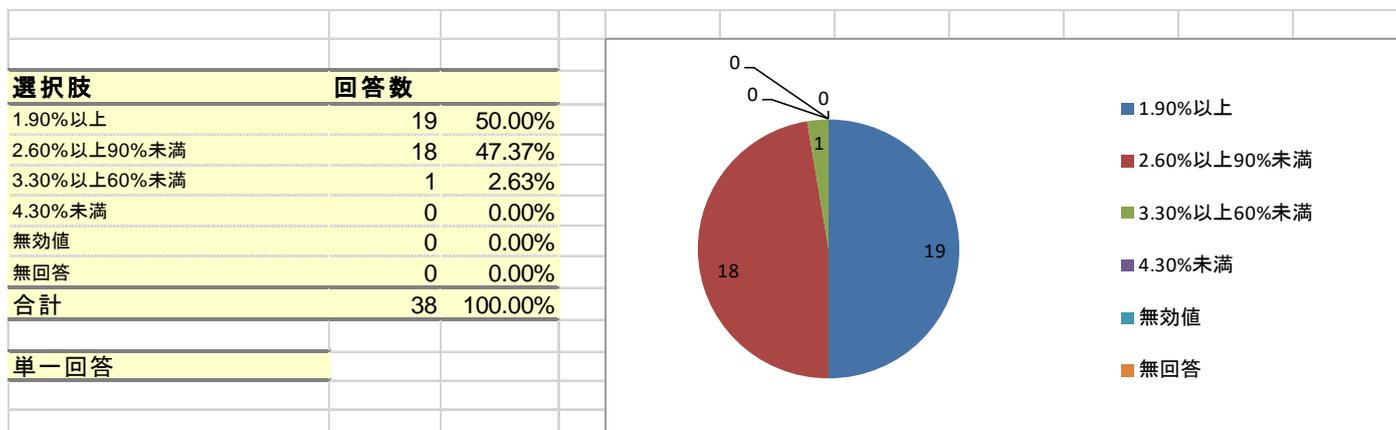
4 あなたの入学動機についておうかがいします。下記のうちあてはまるものに○をつけてください(いくつでも可)。その他の理由があれば記述してください。



5 なぜ皇學館大学での修学を選択しなかったのですか。あてはまるものに○をつけてください(いくつでも可)。その他の理由があれば記述してください。

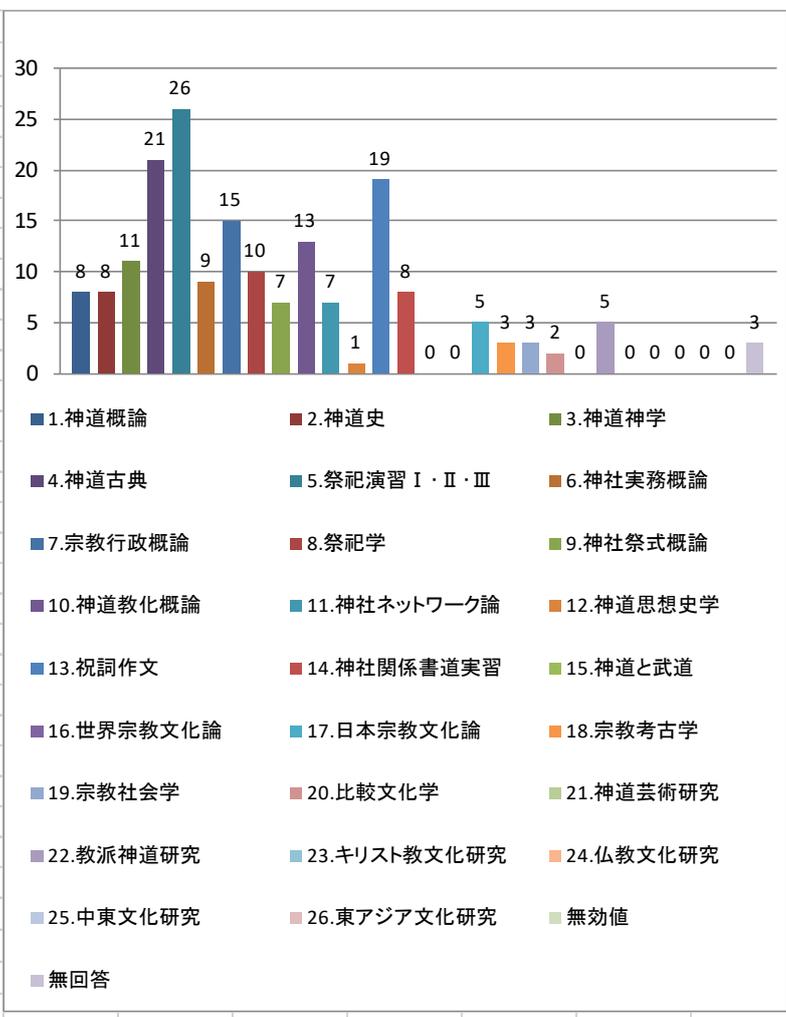


6 授業には平均してどれくらい出席しましたか。



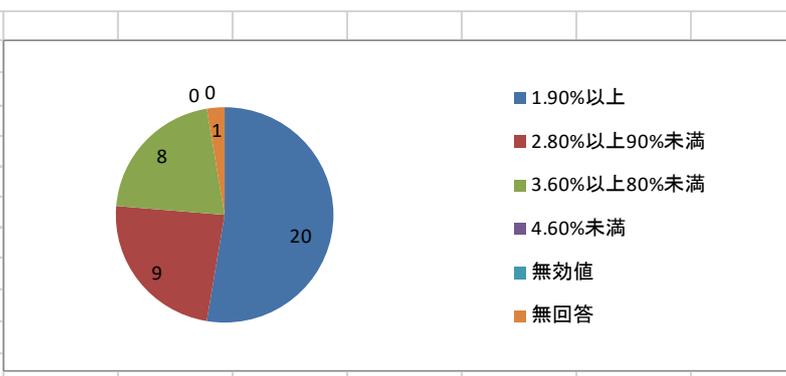
7 専門教育科目のなかで、自己の力を伸ばすことができた授業科目はありますか。あてはまるものに○をつけてください(いくつでも可)。

選択肢	回答数	
1.神道概論	8	21.05%
2.神道史	8	21.05%
3.神道神学	11	28.95%
4.神道古典	21	55.26%
5.祭祀演習 I・II・III	26	68.42%
6.神社実務概論	9	23.68%
7.宗教行政概論	15	39.47%
8.祭祀学	10	26.32%
9.神社祭式概論	7	18.42%
10.神道教化概論	13	34.21%
11.神社ネットワーク論	7	18.42%
12.神道思想史学	1	2.63%
13.祝詞作文	19	50.00%
14.神社関係書道実習	8	21.05%
15.神道と武道	0	0.00%
16.世界宗教文化論	0	0.00%
17.日本宗教文化論	5	13.16%
18.宗教考古学	3	7.89%
19.宗教社会学	3	7.89%
20.比較文化学	2	5.26%
21.神道芸術研究	0	0.00%
22.教派神道研究	5	13.16%
23.キリスト教文化研究	0	0.00%
24.仏教文化研究	0	0.00%
25.中東文化研究	0	0.00%
26.東アジア文化研究	0	0.00%
無効値	0	0.00%
無回答	3	7.89%
回答者数	38	
複数回答		

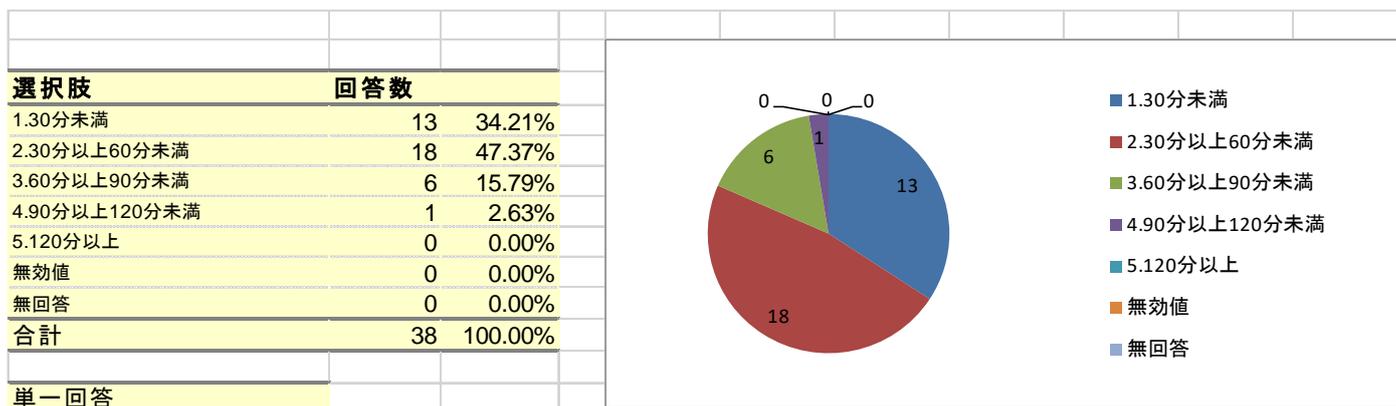


8 授業には平均してどれくらい出席しましたか。

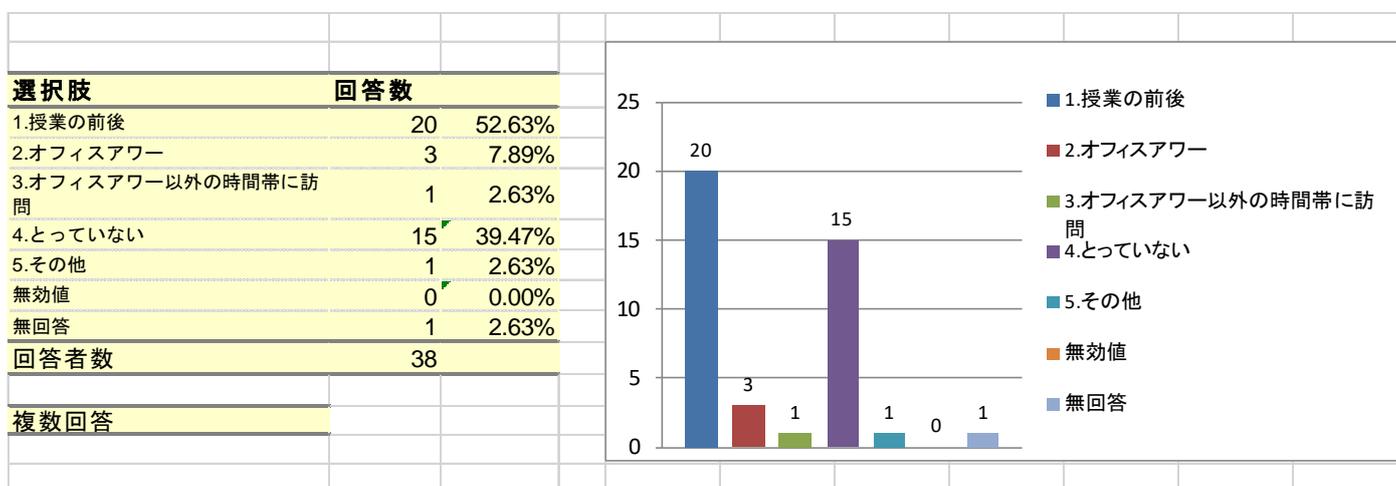
選択肢	回答数	
1.90%以上	20	52.63%
2.80%以上90%未満	9	23.68%
3.60%以上80%未満	8	21.05%
4.60%未満	0	0.00%
無効値	0	0.00%
無回答	1	2.63%
合計	38	100.00%
単一回答		



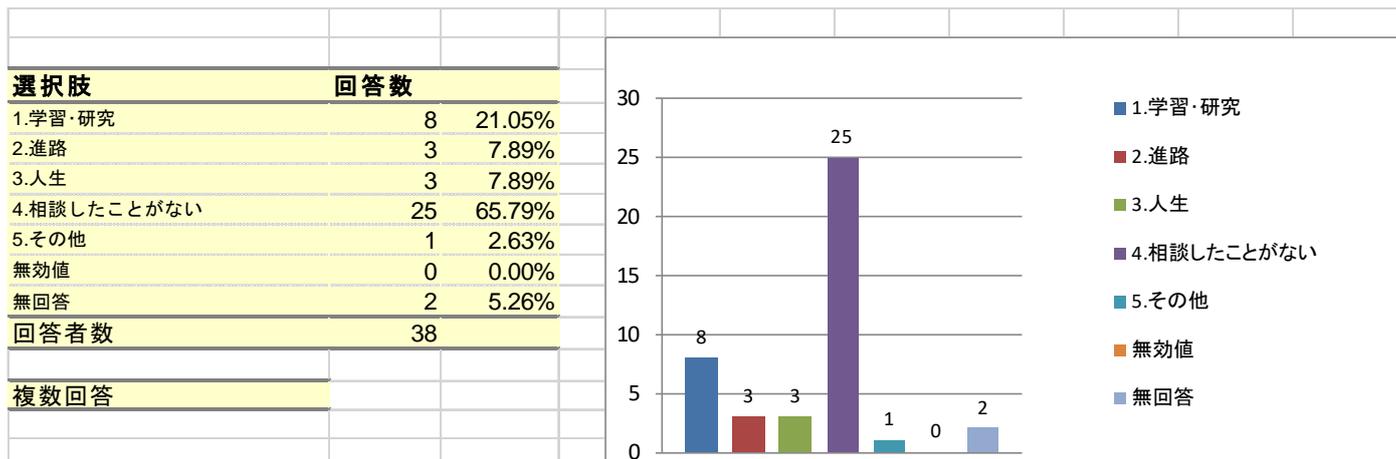
9 1日平均何時間学習しましたか。



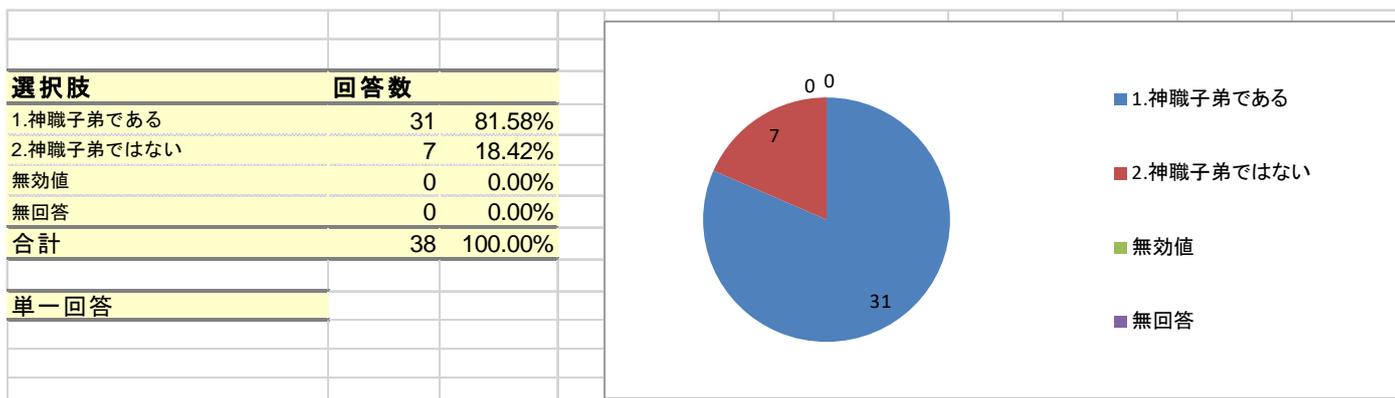
10 学部専任教員とのコミュニケーションについて尋ねます。授業以外でどのような機会にコミュニケーションをとりましたか。あてはまるものに○をつけてください(いくつでも可)。



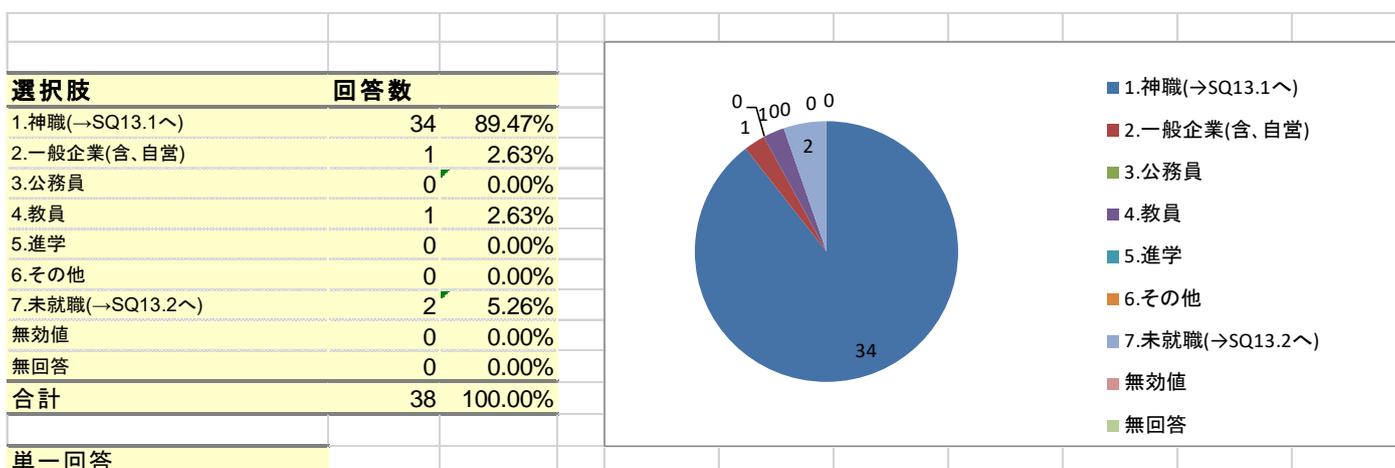
11 学部専任教員にどのような相談をしたことがありますか。該当するものいくつでも○をつけてください。



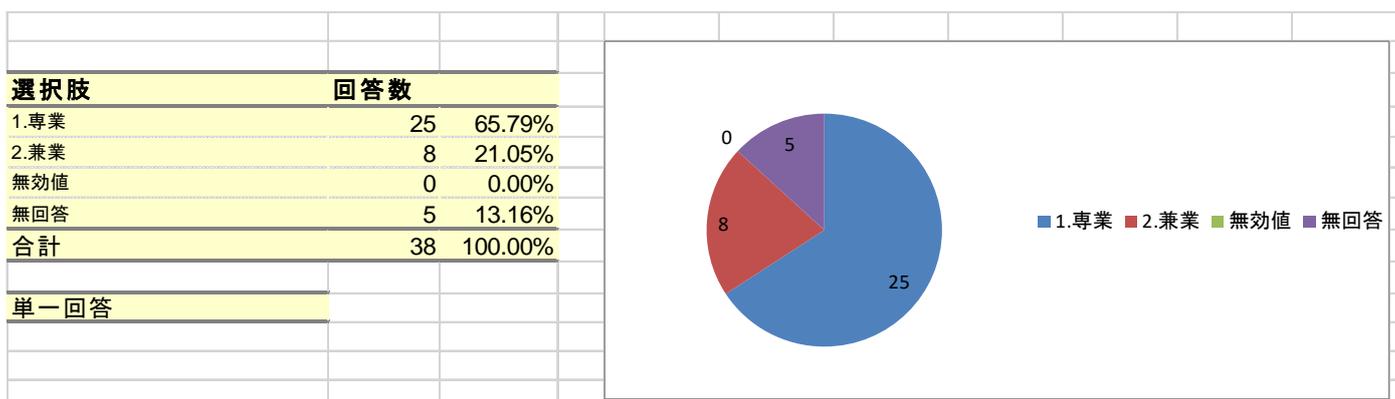
12 神職子弟ですか。



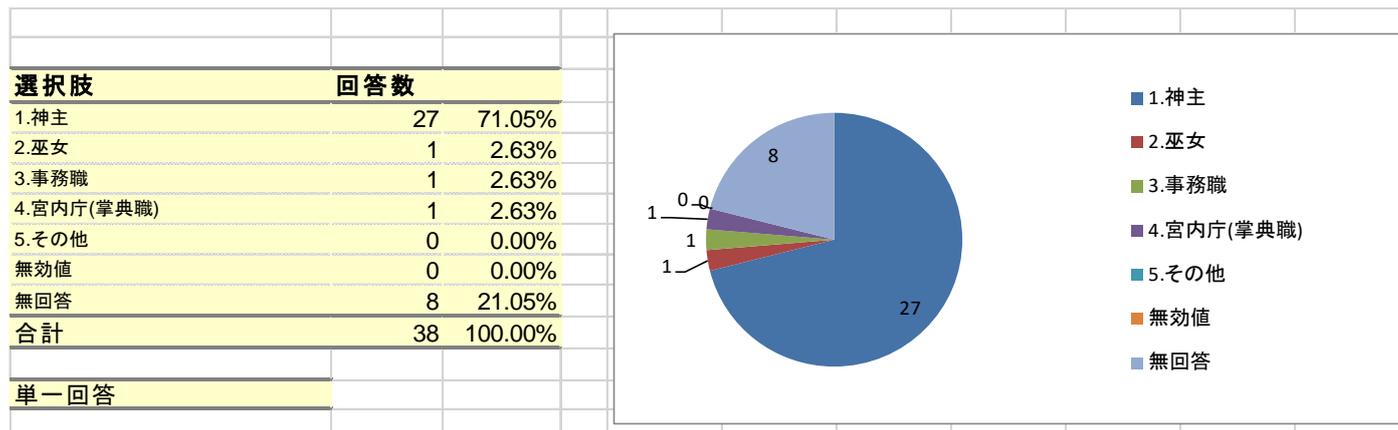
13 卒業後の進路についてお尋ねします。該当するもの1つに○をつけてください。(→1・7以外はSQ13.3へ)



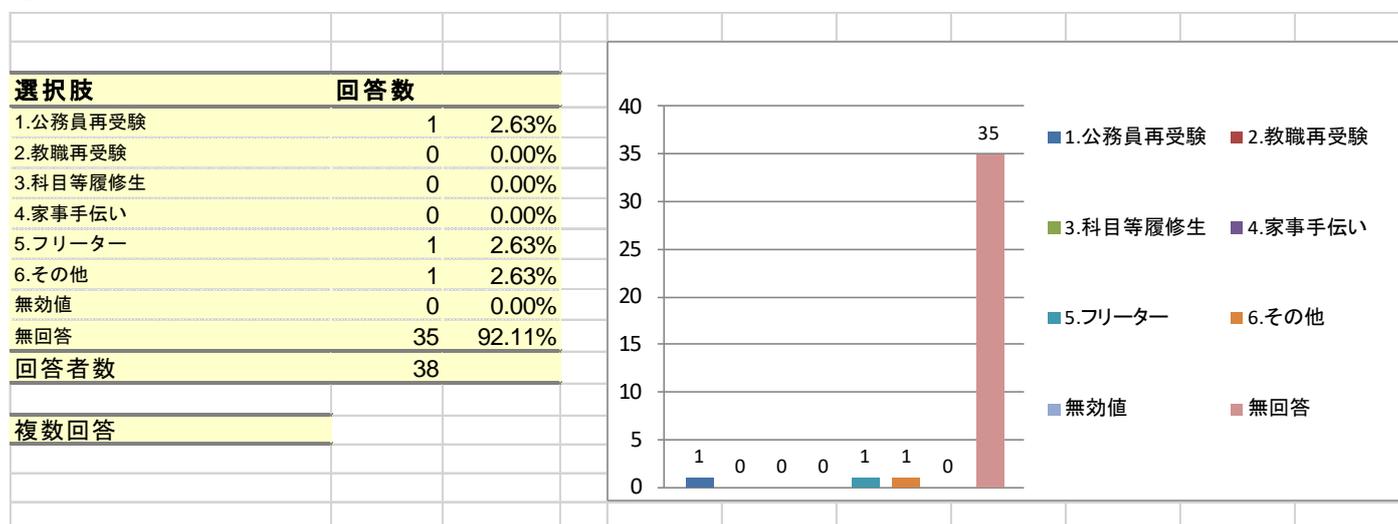
Q13.1「1.神職」と回答した方におたずねします。次のうち該当するもの1つずつ○をつけてください(回答後、→SQ13.3へ)/業態は



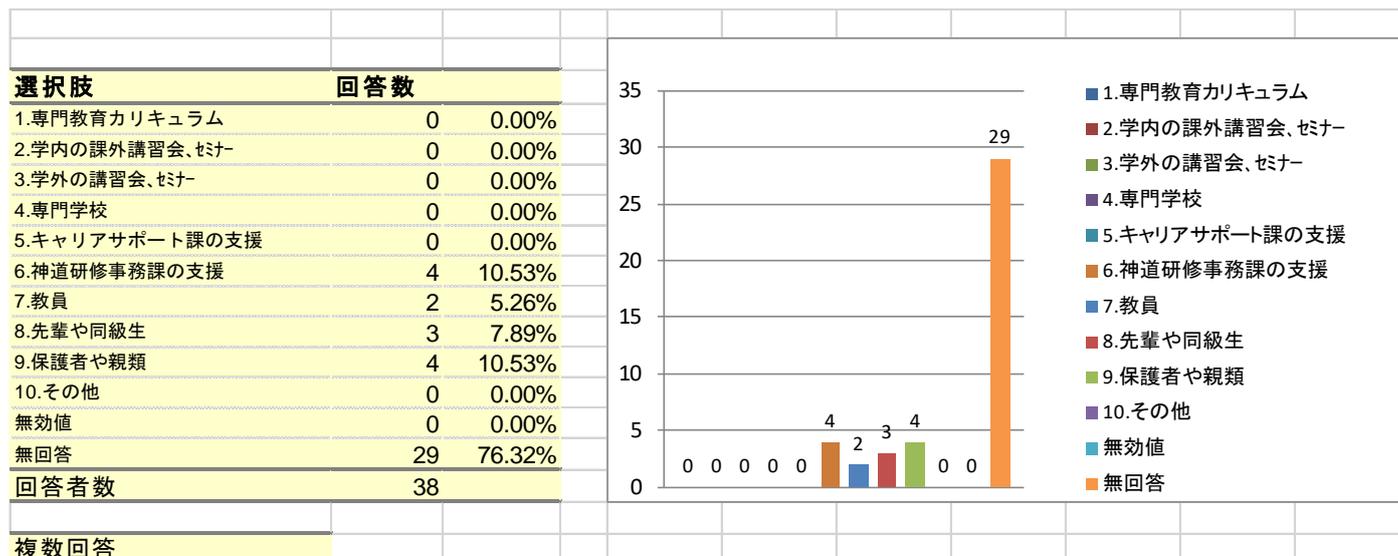
▷SQ13.1「1.神職」と回答した方におたずねします。次のうち該当するもの 1 つずつ○をつけてください(回答後、→SQ13.3へ)/採用区分は



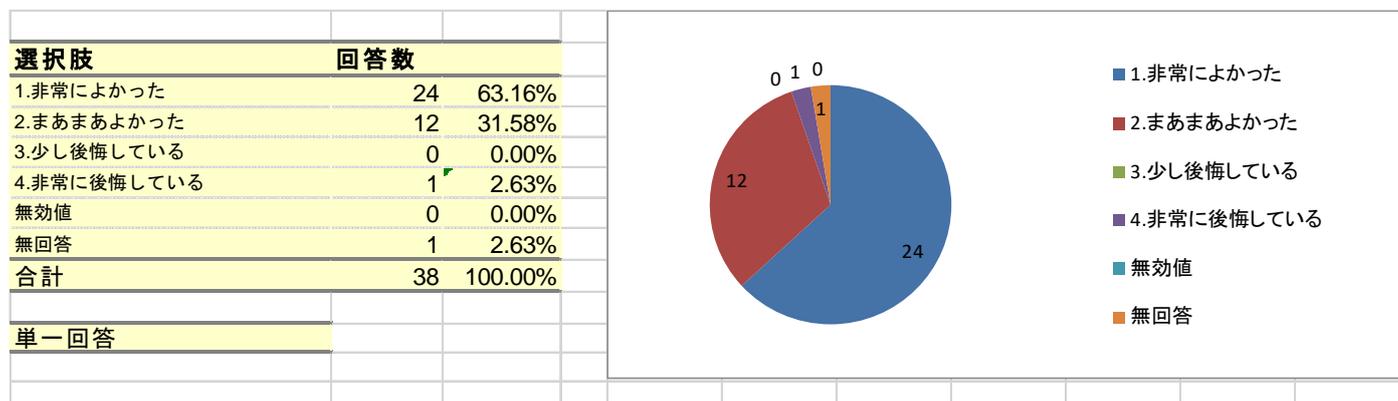
▷SQ13.2「7.未就職」と回答した方におたずねします。理由としてあてはまるものに○をつけてください(いくつでも可)。



▷SQ13.3「7.未就職」以外に回答した方におたずねします。進路決定に役立ったものがあれば○をつけてください(いくつでも可)。

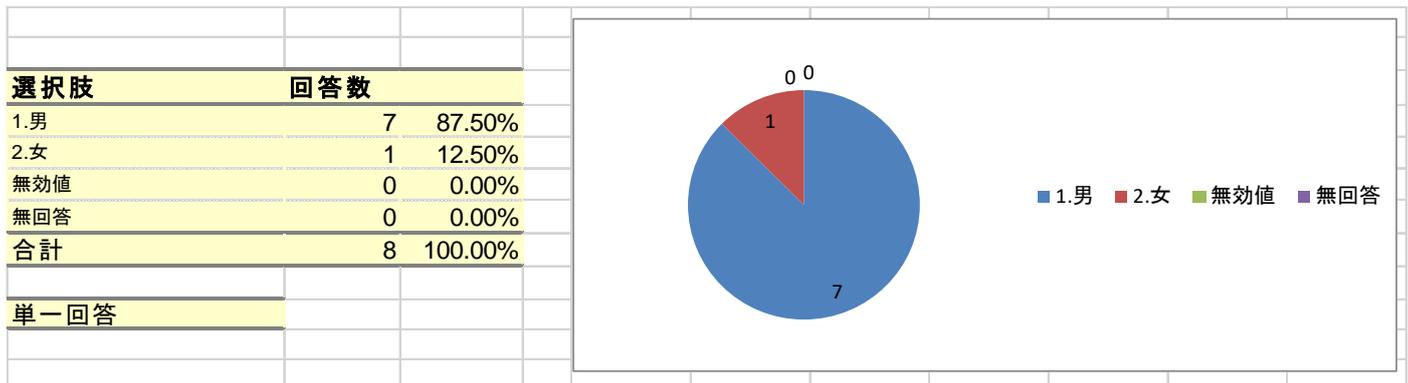


15 あなたは今、國學院大學に在学したことをどのように考えていますか。1つだけ○をつけてください。

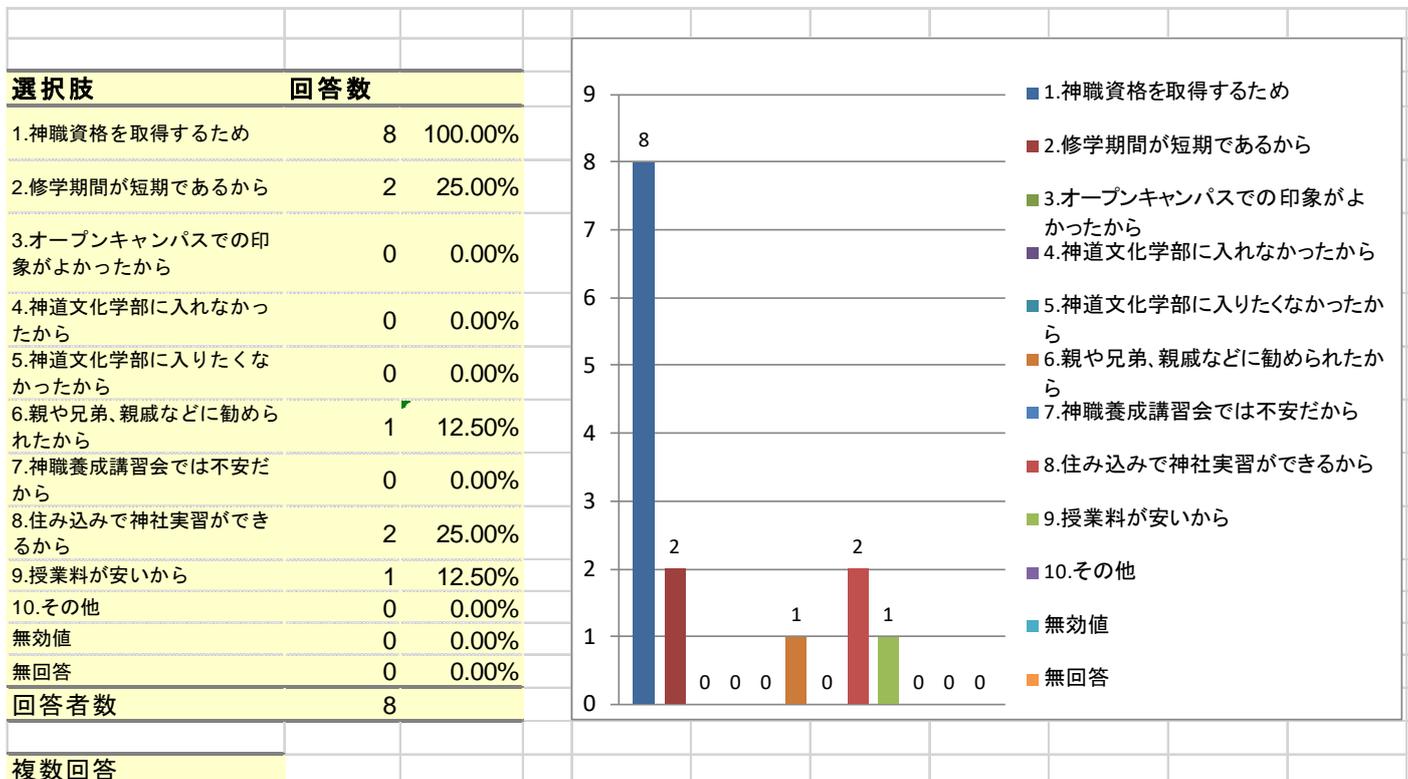


## 【平成29年度 卒業生アンケート・別科】

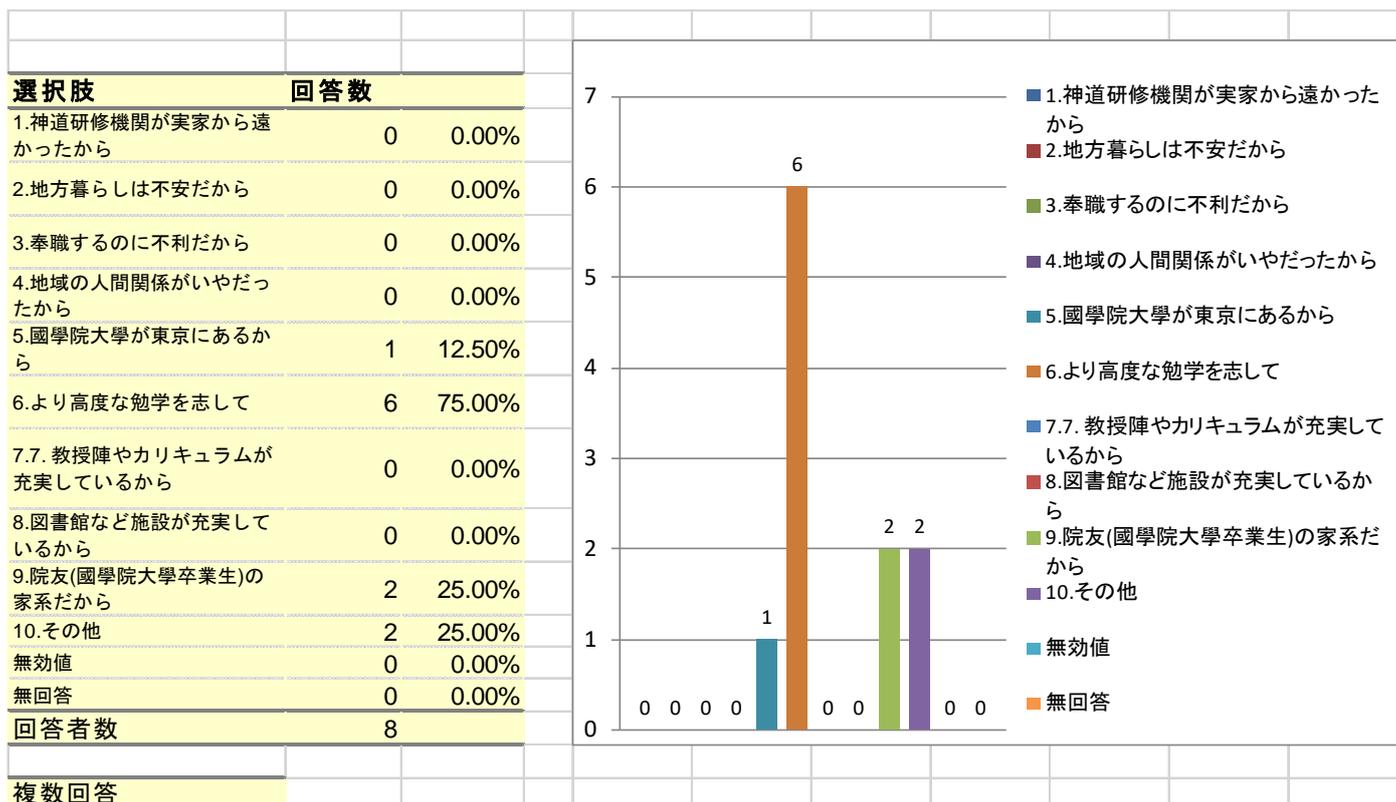
### 1 性別



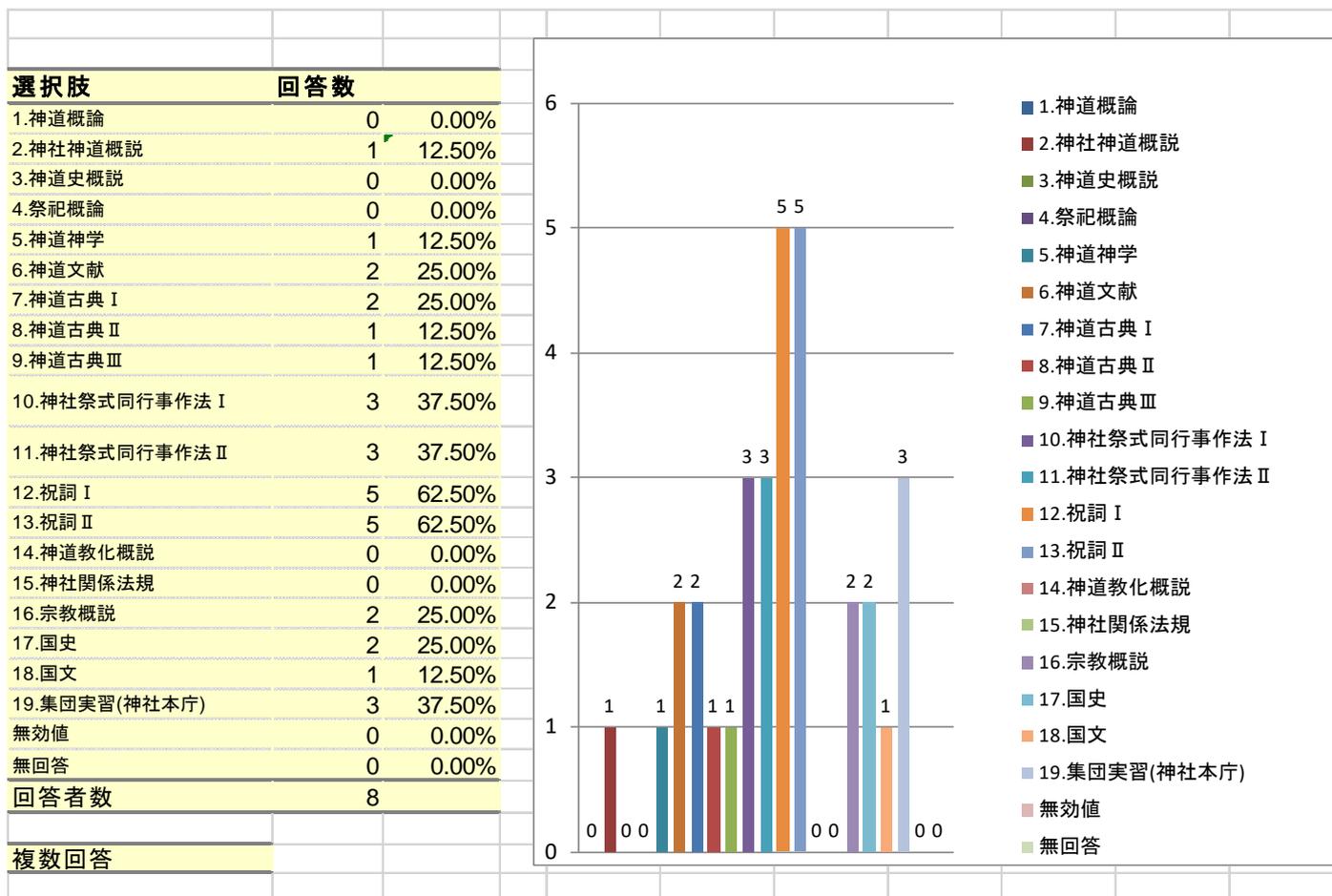
4 あなたの入学動機についてうかがいます。あてはまるものに○をつけてください(いくつでも可)。その他の理由があれば記述してください。



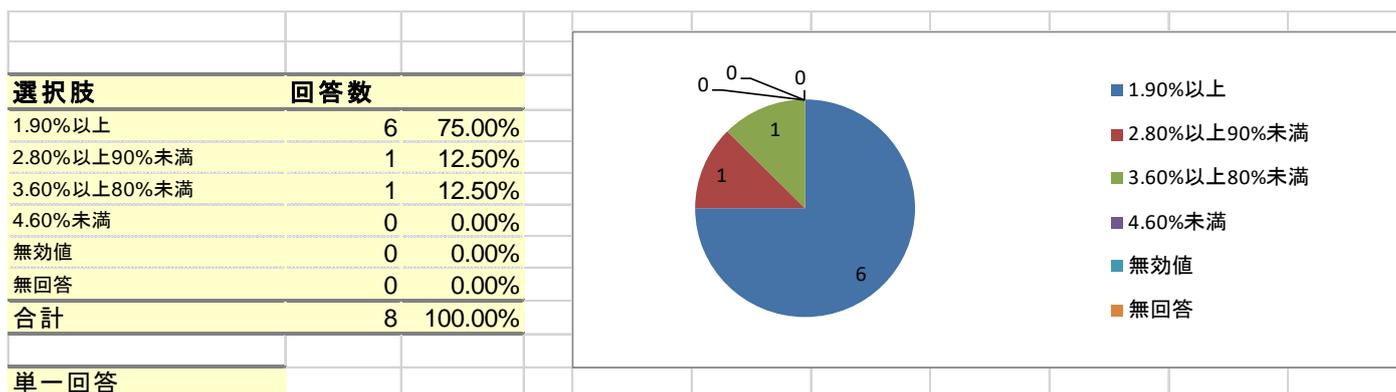
5 なぜ他の神道研修機関(出羽三山・塩竈・熱田・神宮・京都・大阪・大社)での修学を選択しなかったのですか。あてはまるものに○をつけてください(いくつでも可)。その他の理由があれば記述してください。



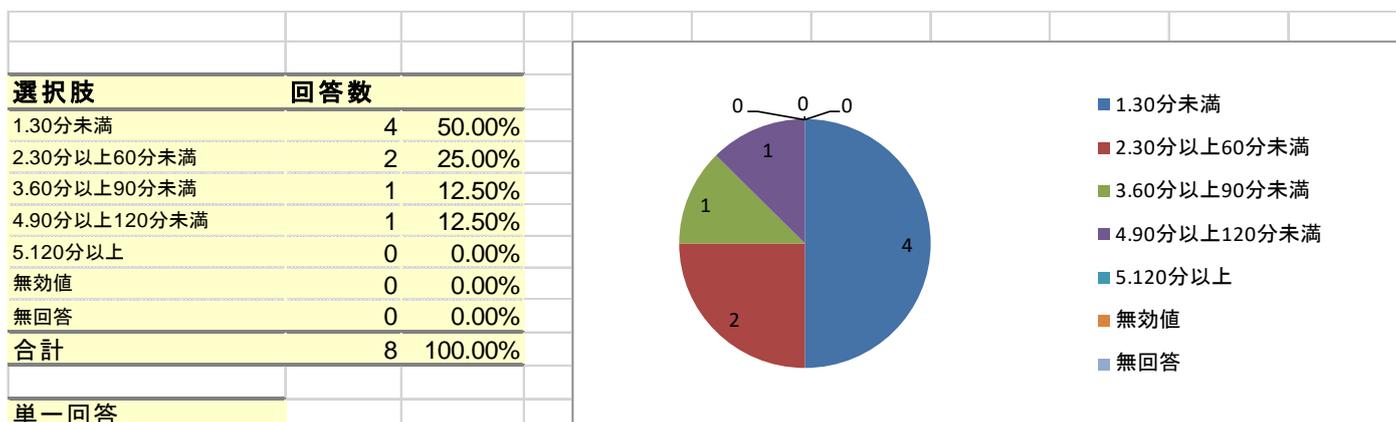
6 専門教育科目のなかで、自己の力を伸ばすことができた授業科目はありますか。あてはまるものに○をつけてください(いくつでも可)。



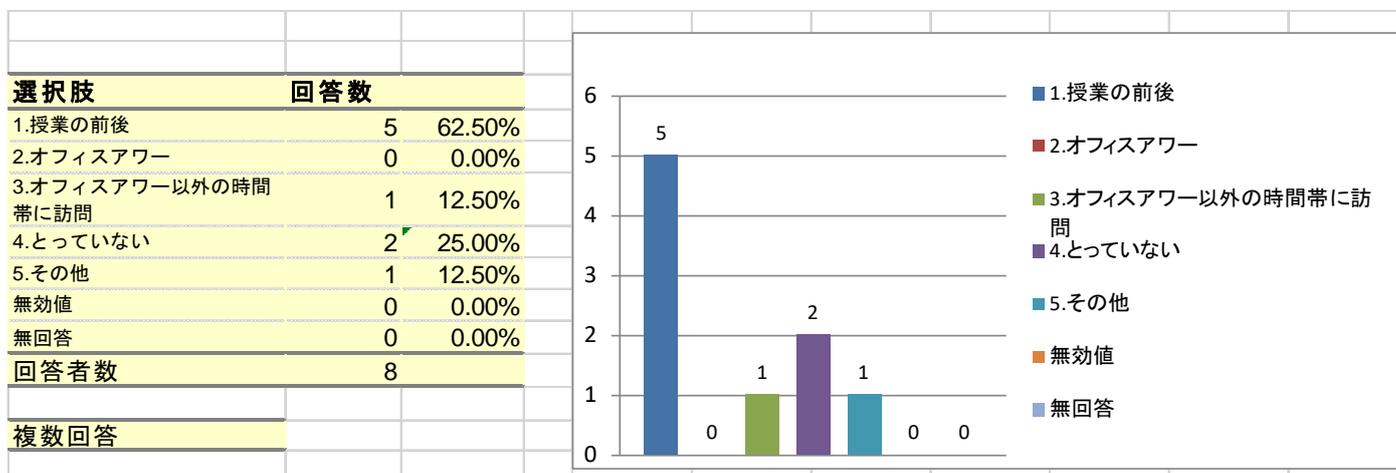
7 授業には平均してどれくらい出席しましたか。



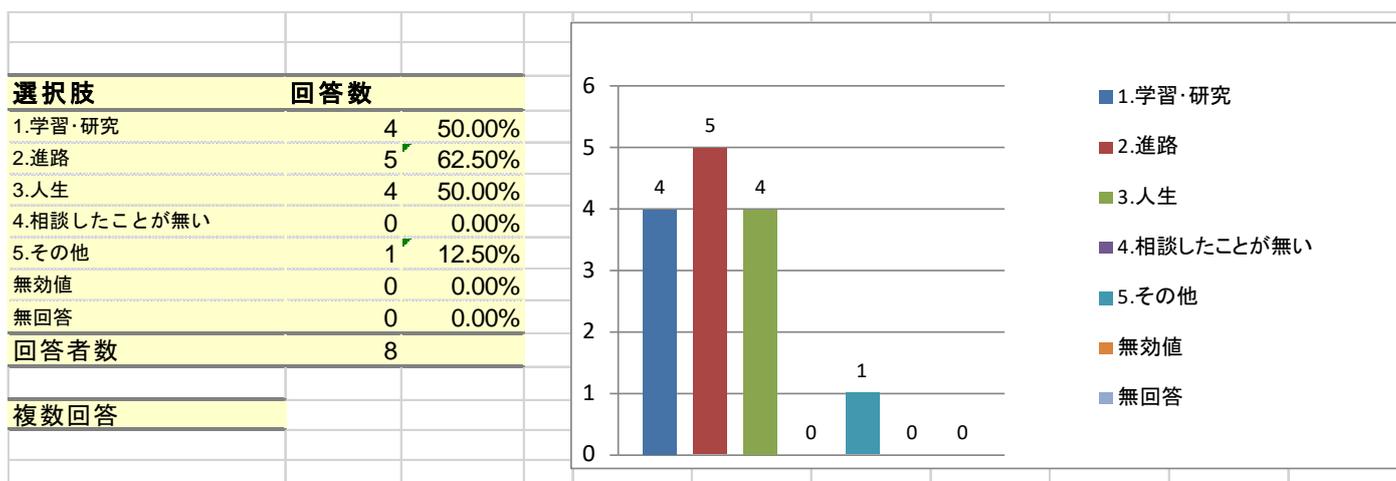
8 1日平均何時間勉強しましたか。



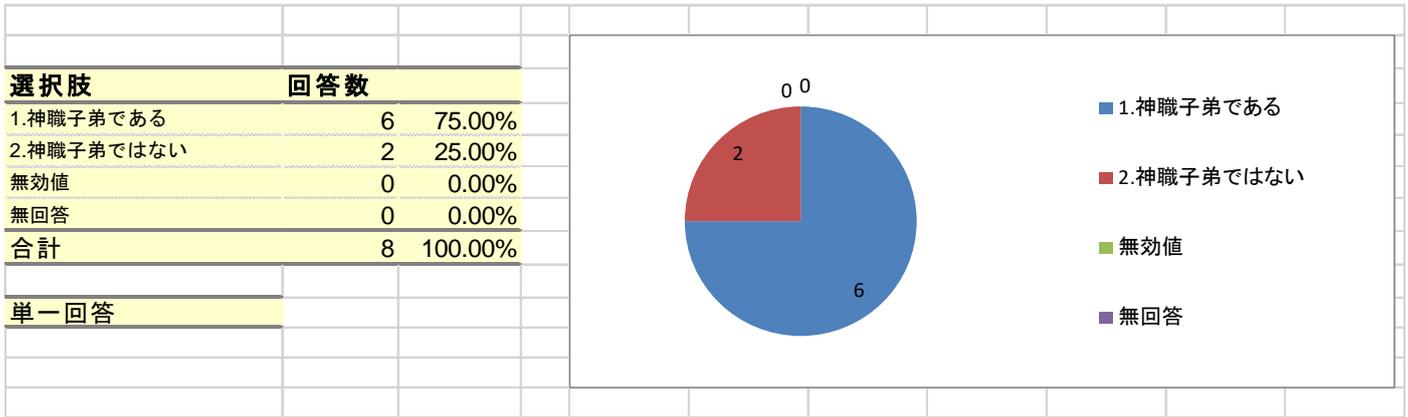
9 教員とのコミュニケーションについて尋ねます。授業以外でどのような機会にコミュニケーションをとりましたか。該当するものいくつかでも○をつけてください。



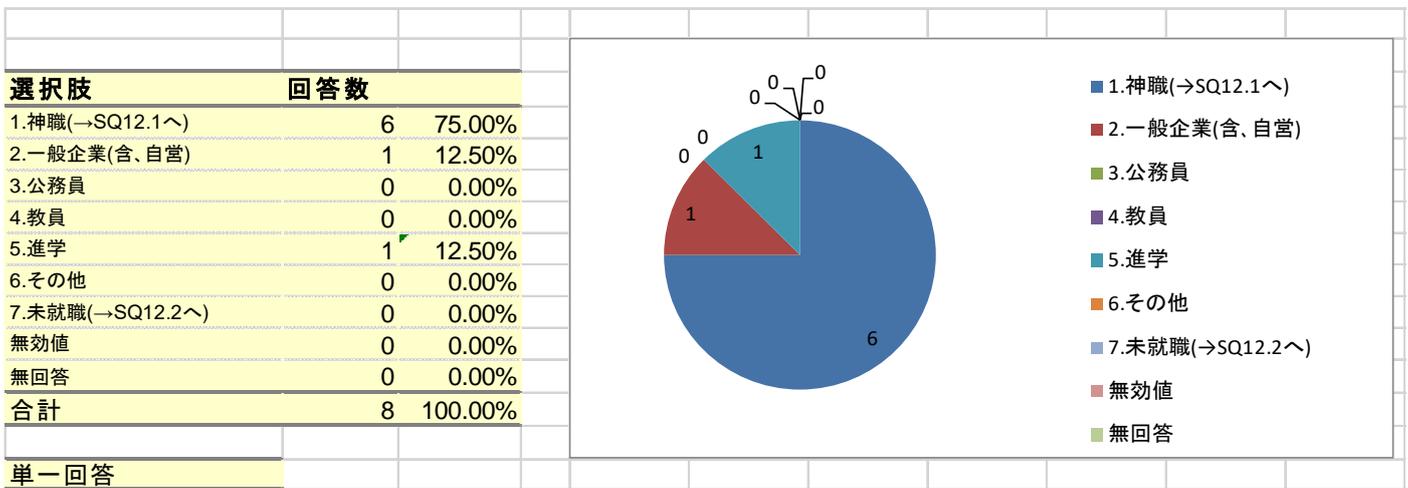
10 教員にどのような相談をしたことがありますか。該当するものいくつかでも○をつけてください。



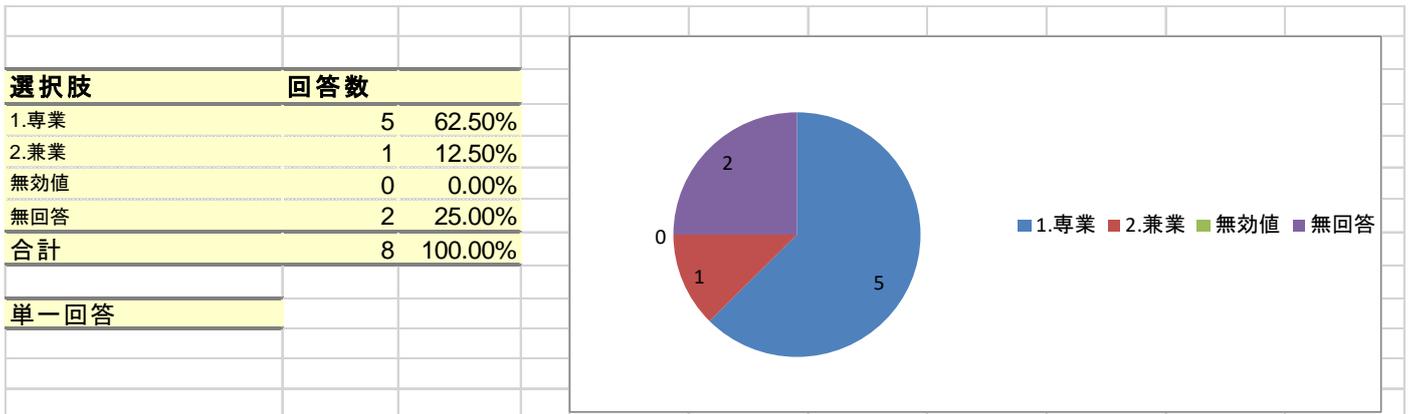
11 神職子弟ですか。



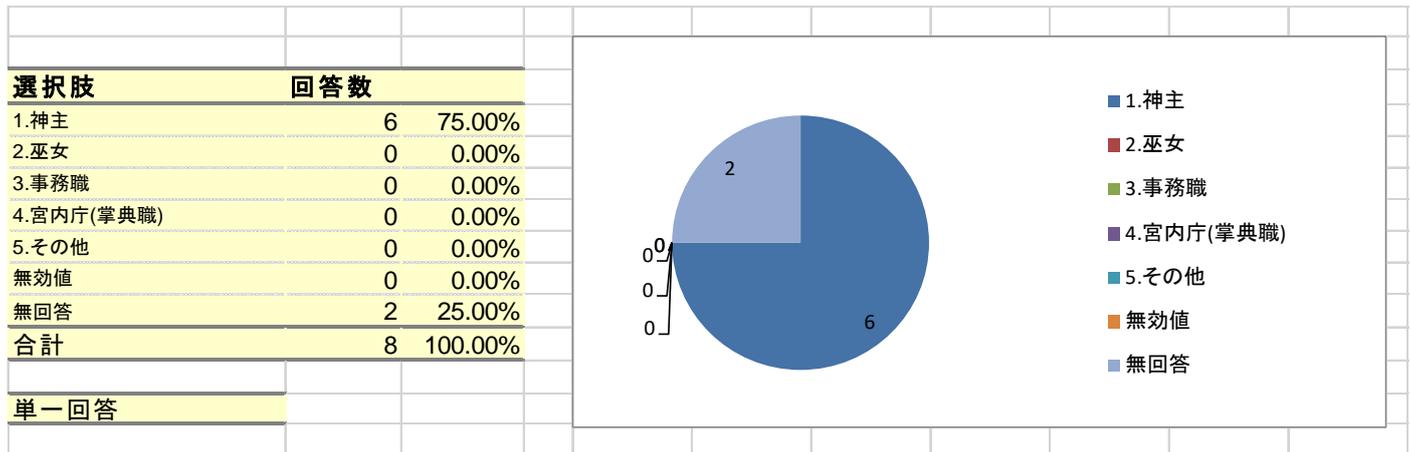
12 卒業後の進路についてお尋ねします。該当するもの1つに○をつけてください。(→7以外はSQ12.3へ)



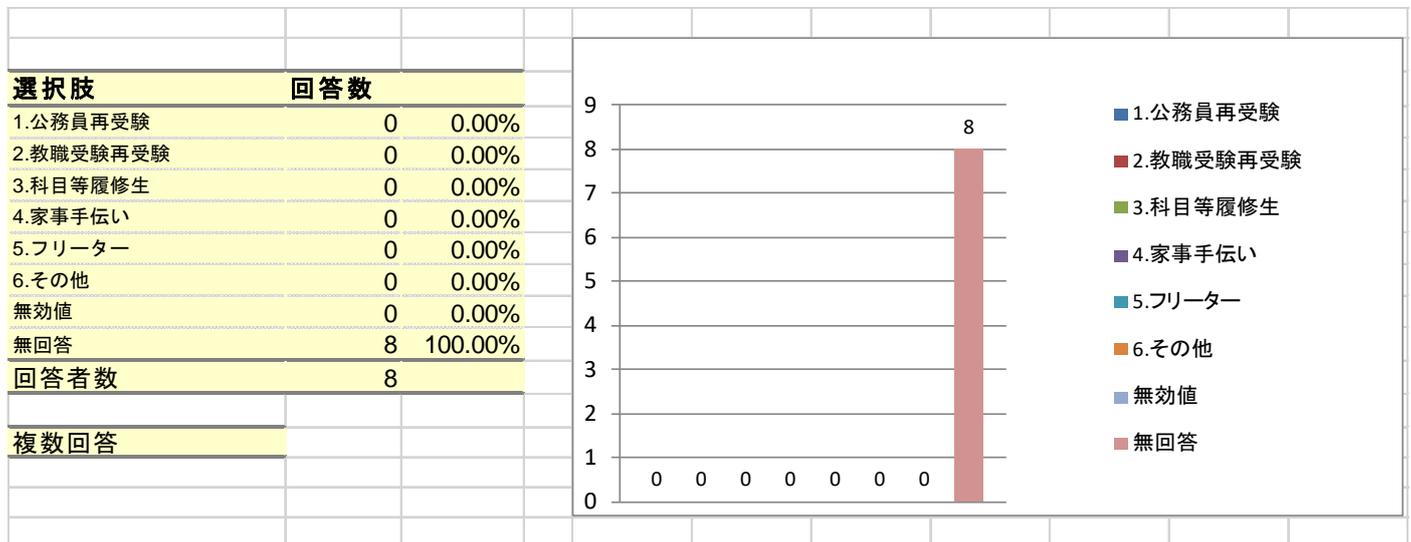
▷SQ12.1「1.神職」と回答した方に尋ねます。次のうち該当するもの1つずつ○をつけてください業態



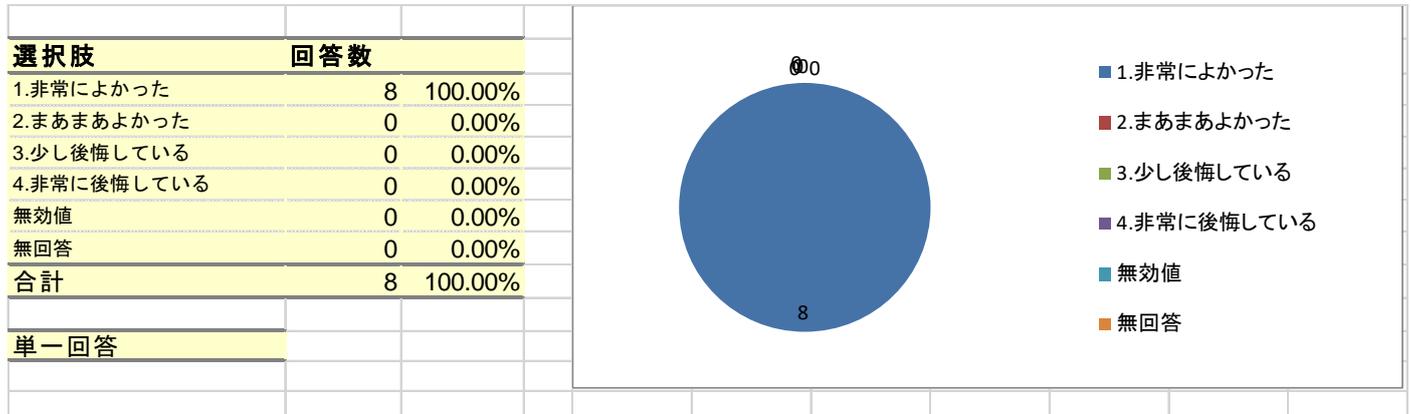
▷SQ12.1「1.神職」と回答した方に尋ねます。次のうち該当するもの1つずつ○をつけてください/採用区分



▷SQ12.2「7.未就職」と回答した方に尋ねます。理由として該当するものいくつかでも○をつけてください。



14 あなたは今、國學院大學に在学したことをどのように考えていますか。1つだけ○をつけてください。



---

平成 30 年度

神道文化学部各アンケートについての整理・分析結果

---

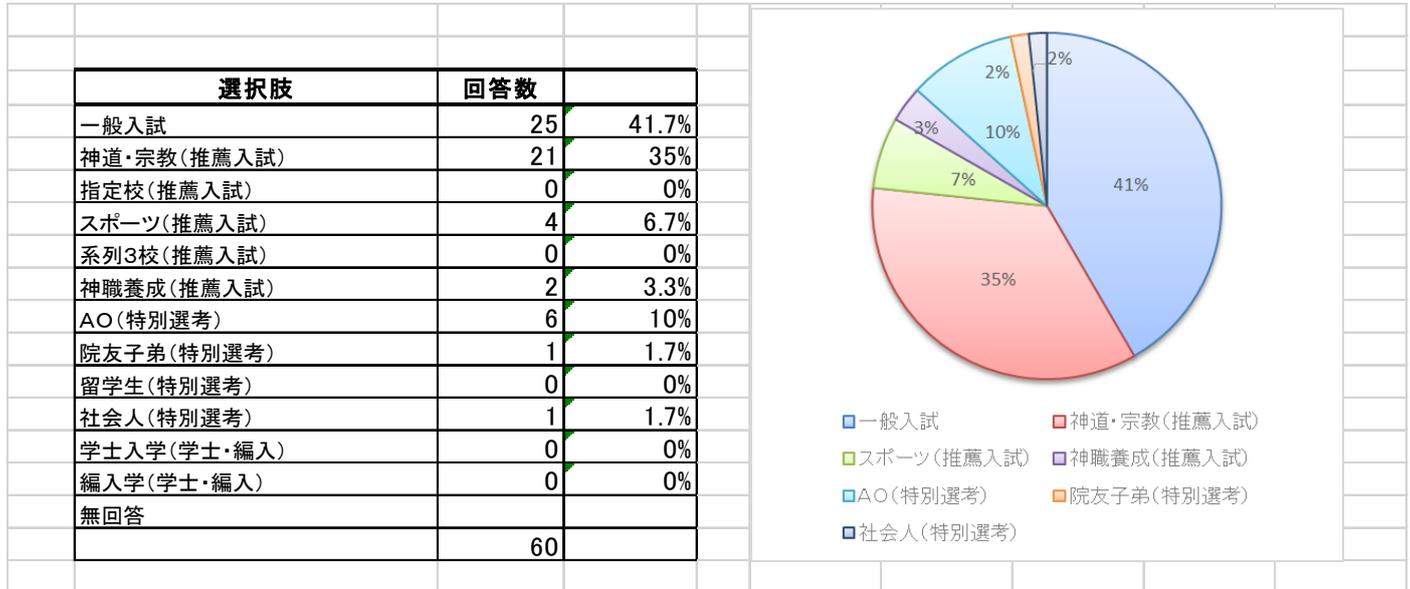
# 【平成 30 年度 新入生アンケート】

実施日：平成 30 年 4 月 1 日

回答者 フレックスA 60名                      フレックスB 123名

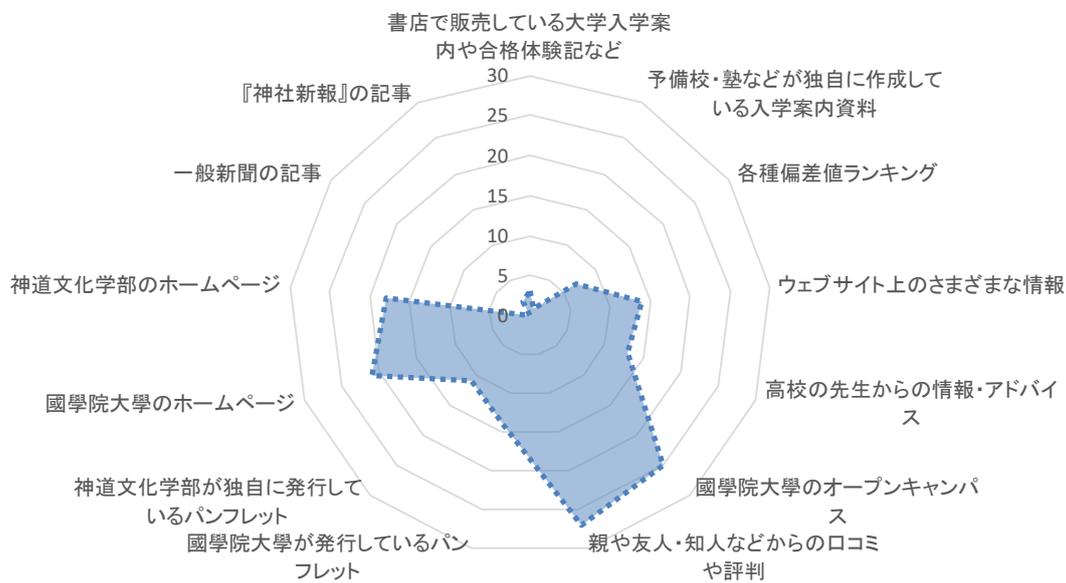
## フレックスA回答

1.合格した入試形態はどれですか。あてはまるものに✓をつけてください。/入試区分:

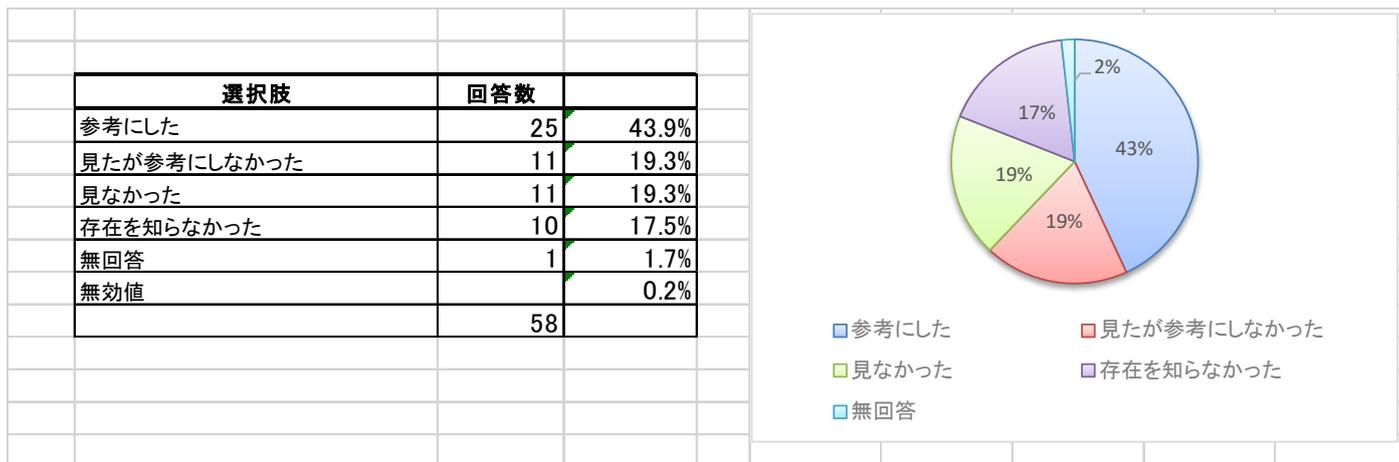


2.神道文化学部受験を検討する際に参考にしたものは、次のうちどれですか。あてはまるものすべてに✓をつけてください。

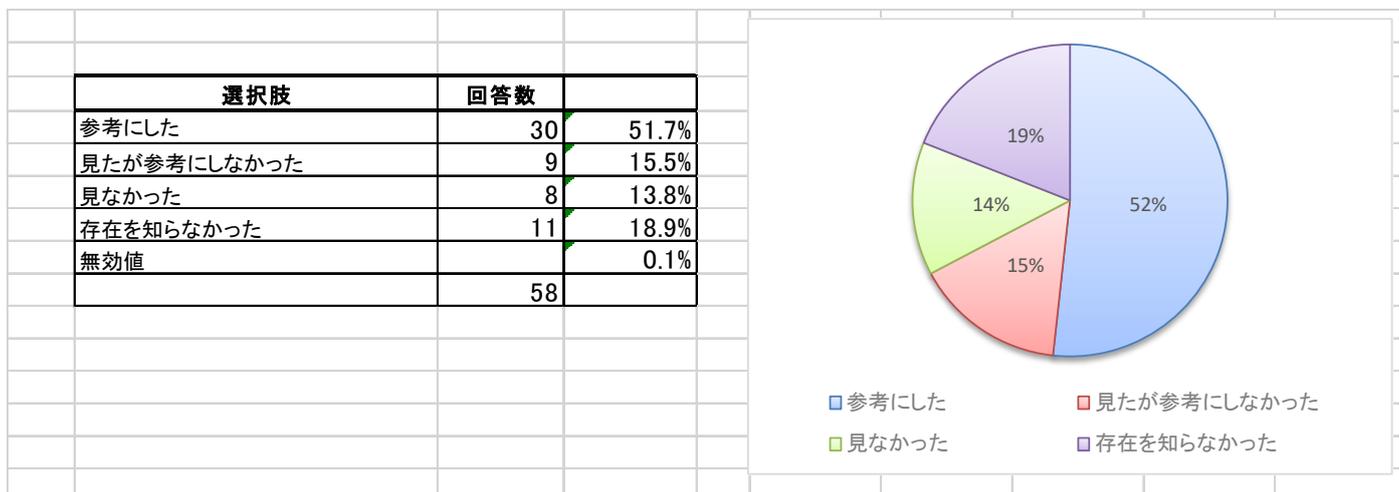
選択肢	回答数	
書店で販売している大学入学案内や合格体験記など	3	1.9%
予備校・塾などが独自に作成している入学案内資料	1	0.6%
各種偏差値ランキング	7	4.5%
ウェブサイト上のさまざまな情報	14	8.9%
高校の先生からの情報・アドバイス	13	8.3%
國學院大学のオープンキャンパス	25	16%
親や友人・知人などからの口コミや評判	27	17.3%
國學院大学が発行しているパンフレット	14	8.9%
神道文化学部が独自に発行しているパンフレット	11	7.1%
國學院大学のホームページ	21	13.5%
神道文化学部のホームページ	18	11.5%
一般新聞の記事	0	0%
『神社新報』の記事	2	1.3%
無効値		0.2%
	156	



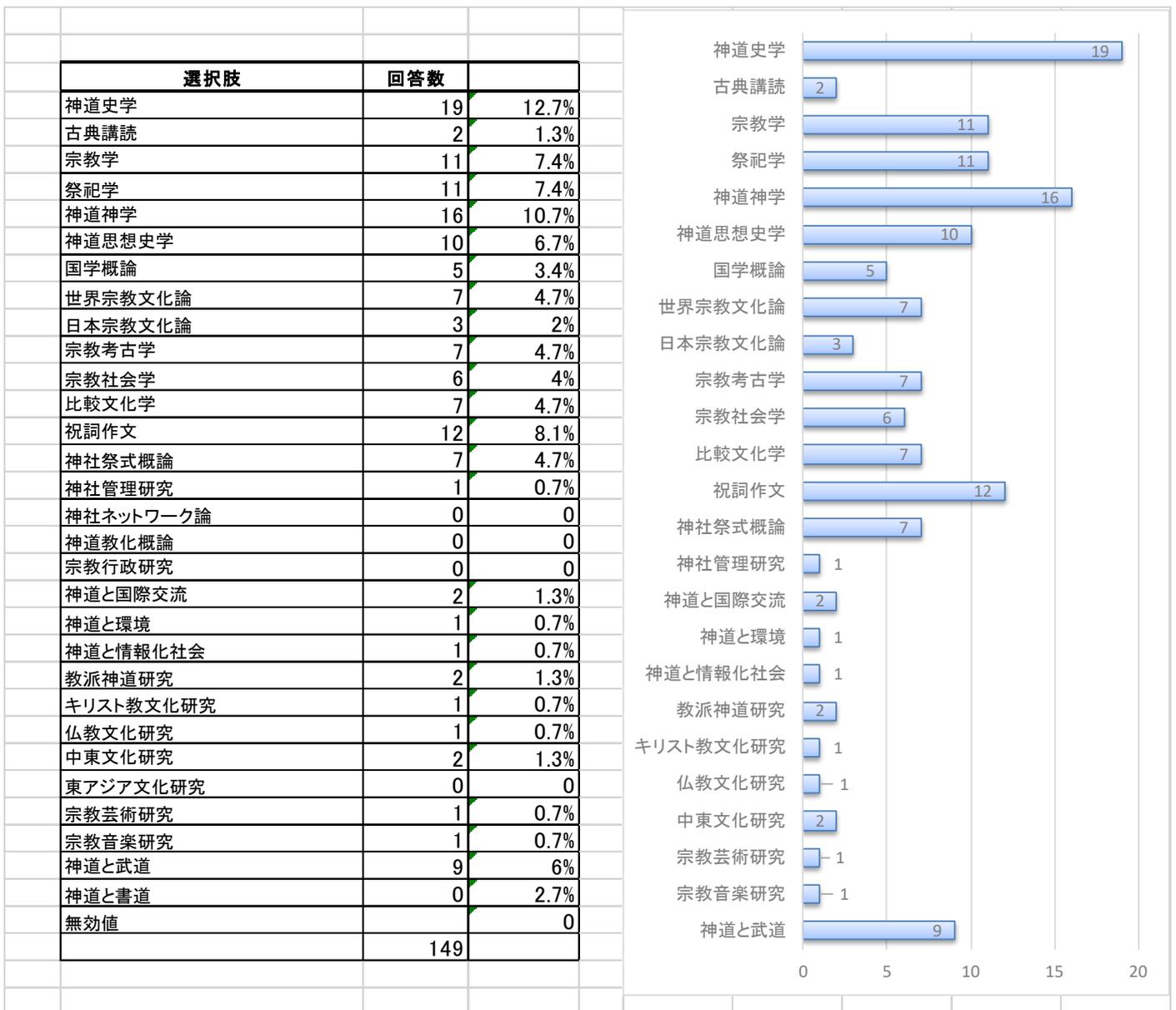
3.神道文化学部受験を検討する際に、國學院大學が大学として示している入学者受入れ方針（アドミッション・ポリシー）を参考にしましたか。どれか1つに✓をつけてください。



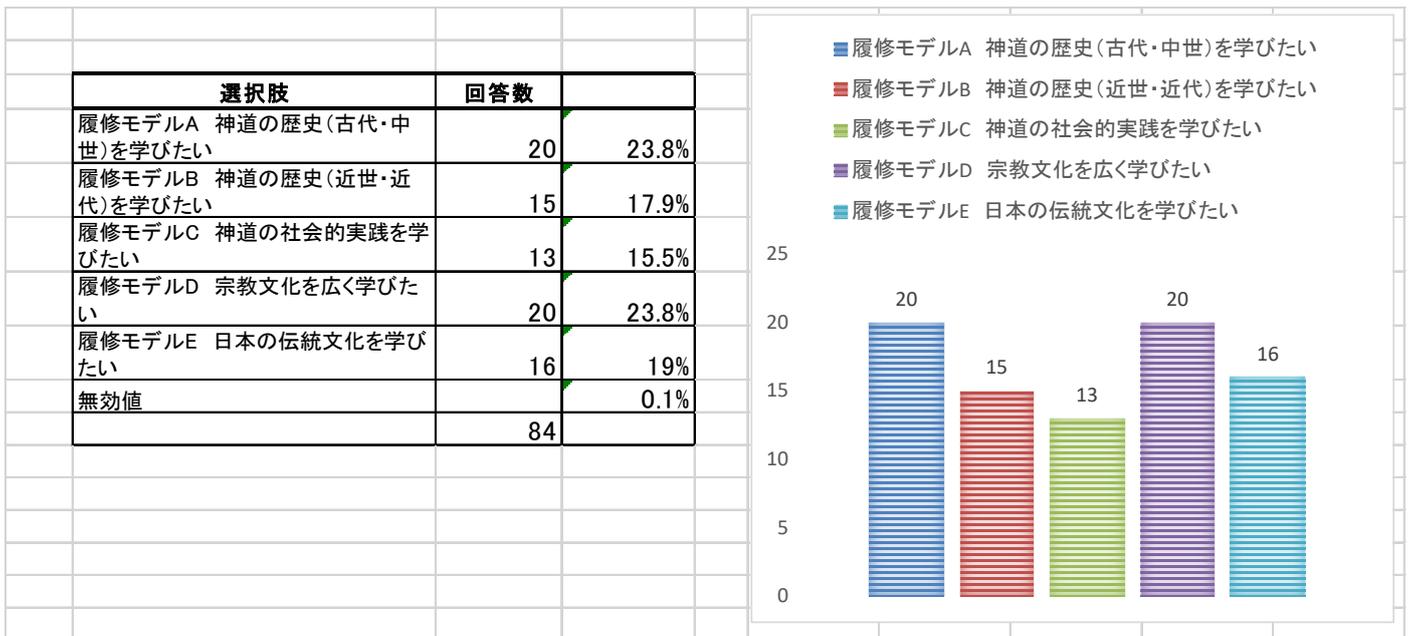
4.神道文化学部受験を決定する際に、神道文化学部が示している、学部の入学者受入れ方針（アドミッション・ポリシー）を参考にしましたか。どれか1つに✓をつけてください。



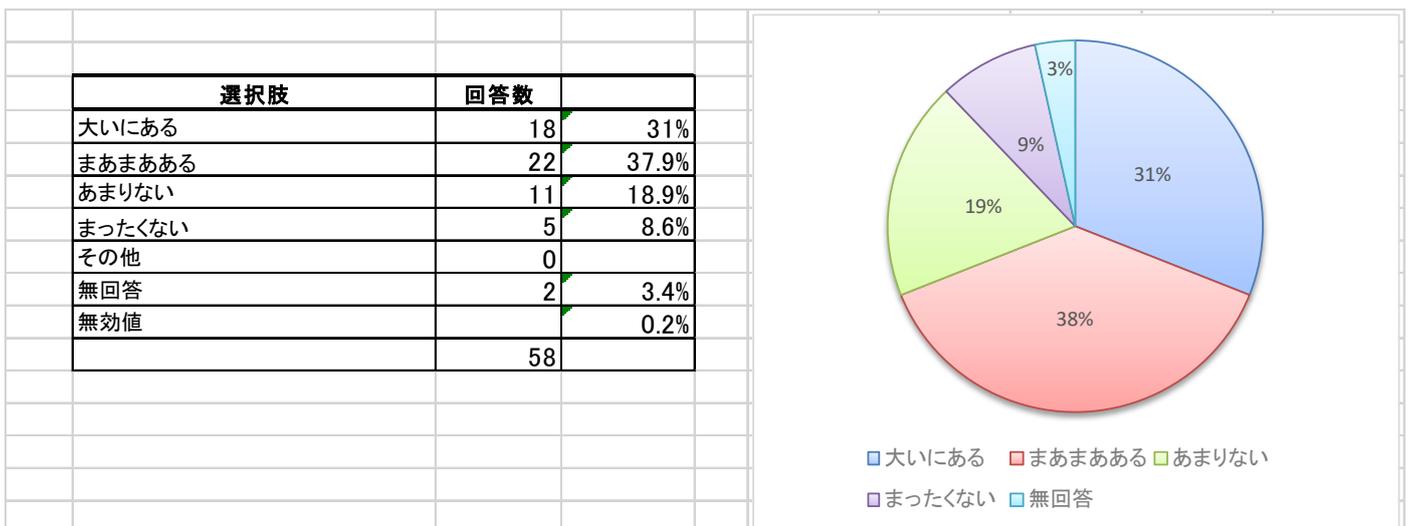
5. ぜひ学んでみたい授業科目名に3つまで✓をつけてください。



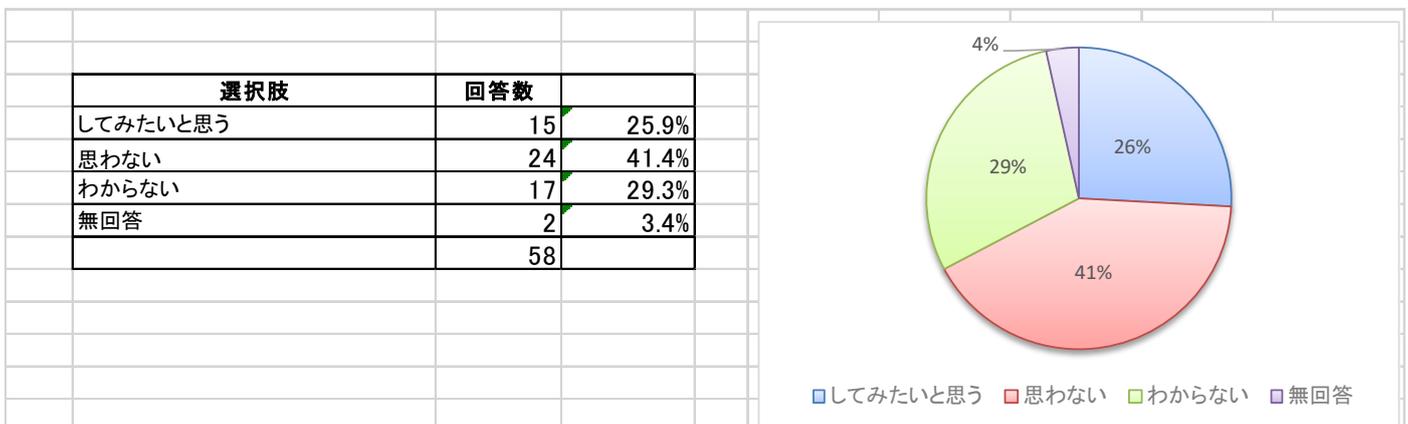
6.次のA～Eの5つの履修モデルのうち、関心があるものひとつ、もしくは2つに✓をつけてください。



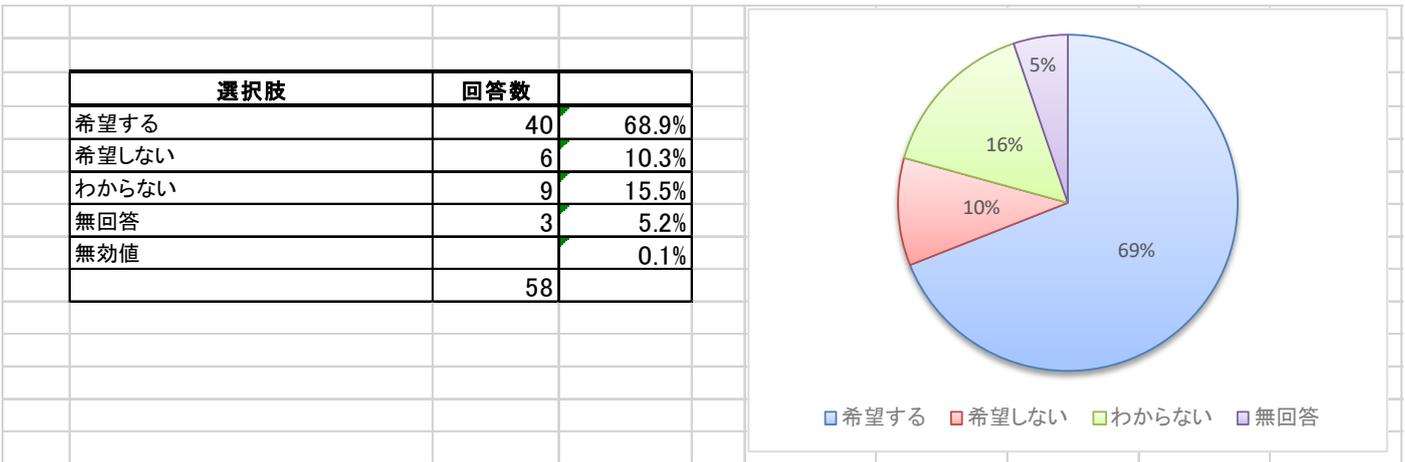
7.コンピューターやインターネットに関心はありますか。どれかひとつに✓をつけてください。



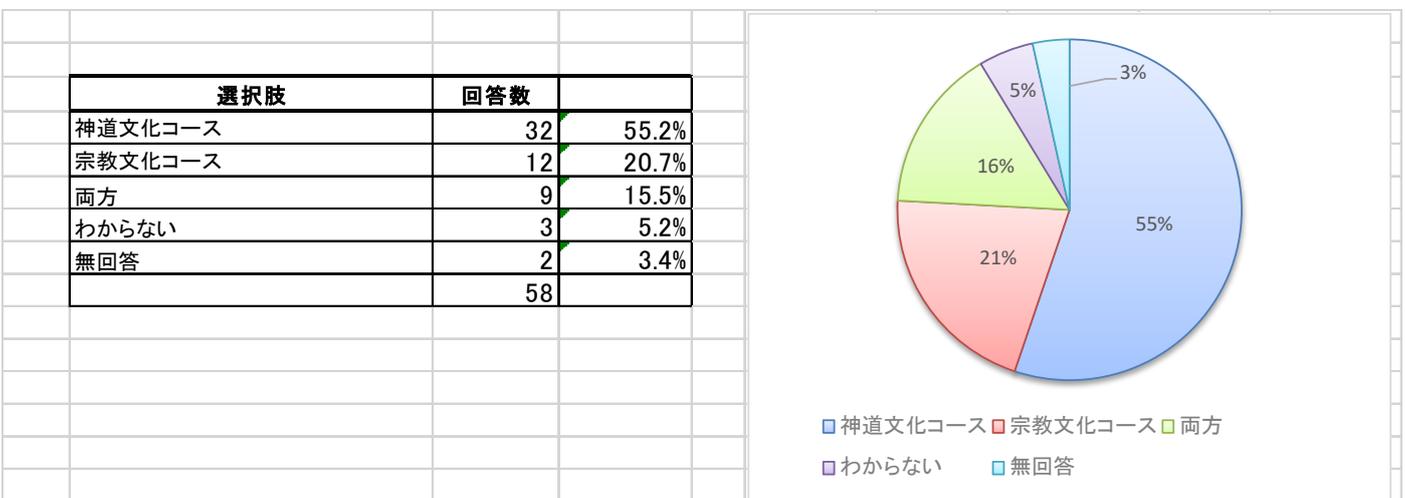
8.在学中に、可能であれば、留学や語学研修をしてみたいと思いますか。どれかひとつに✓をつけてください。



9.神職階位の取得を希望しますか。どれかひとつに✓をつけてください。

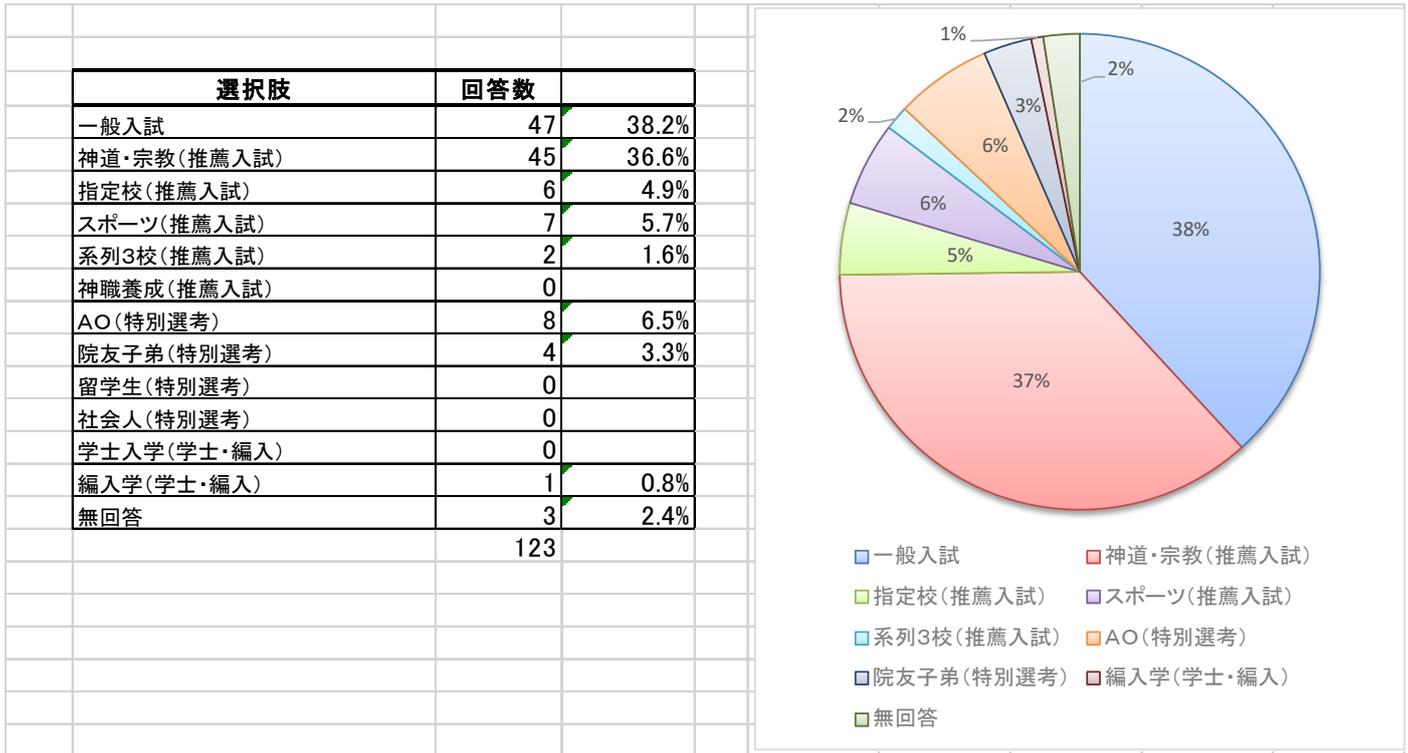


10.現在、神道文化コースと宗教文化コースのどちらに関心がありますか。(ガイドブック参照)



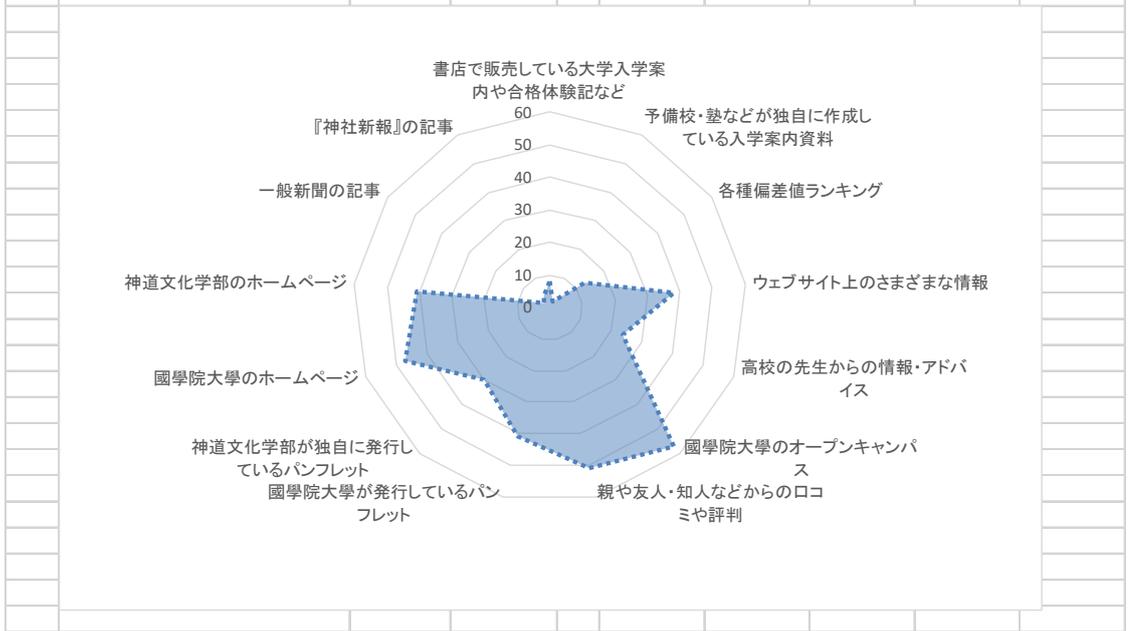
フレックスB回答

1.合格した入試形態はどれですか。あてはまるものに✓をつけてください。/入試区分:



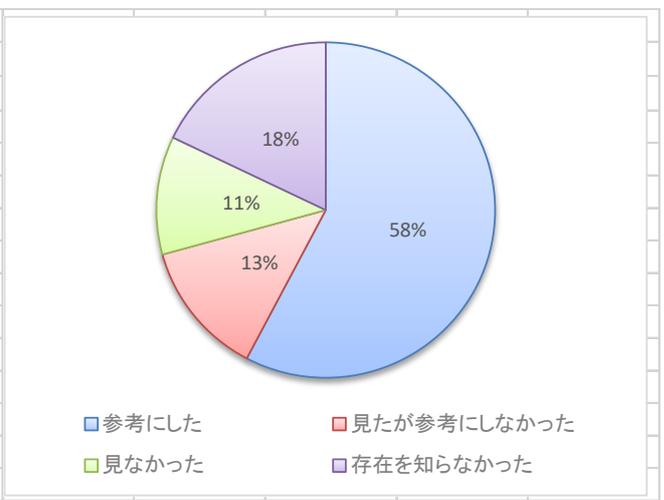
2.神道文化学部受験を検討する際に参考にしたものは、次のうちどれですか。あてはまるものすべてに✓をつけてください。

選択肢	回答数	
書店で販売している大学入学案内や合格体験記など	8	2.2%
予備校・塾などが独自に作成している入学案内資料	2	0.6%
各種偏差値ランキング	13	3.6%
ウェブサイト上のさまざまな情報	38	10.6%
高校の先生からの情報・アドバイス	24	6.7%
國學院大学のオープンキャンパス	57	15.9%
親や友人・知人などからの口コミや評判	51	14.2%
國學院大学が発行しているパンフレット	41	11.5%
神道文化学部が独自に発行しているパンフレット	30	8.3%
國學院大学のホームページ	47	13.1%
神道文化学部のホームページ	41	11.5%
一般新聞の記事	2	.60%
『神社新報』の記事	4	1.1%
無効値		0.1%
	358	



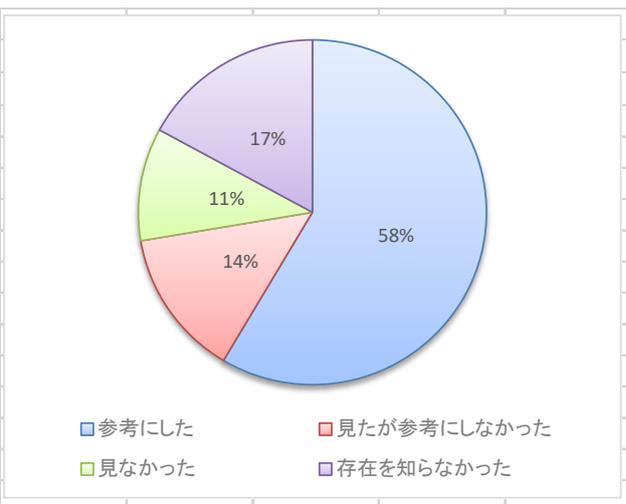
3.神道文化学部受験を検討する際に、國學院大学が大学として示している入学者受入れ方針（アドミッション・ポリシー）を参考にしましたか。どれか1つに✓をつけてください。

選択肢	回答数	
参考にした	71	57.7%
見たが参考にしなかった	16	1.3%
見なかった	14	11.4%
存在を知らなかった	22	17.9%
無回答		
無効値		
	123	



4. 神道文化学部受験を決定する際に、神道文化学部が示している、学部の入学者受入れ方針（アドミッション・ポリシー）を参考にしましたか。どれか1つに✓をつけてください。

選択肢	回答数	
参考にした	72	58.5%
見たが参考にしなかった	17	13.8%
見なかった	13	10.6%
存在を知らなかった	21	17.1%
無効値		
	123	

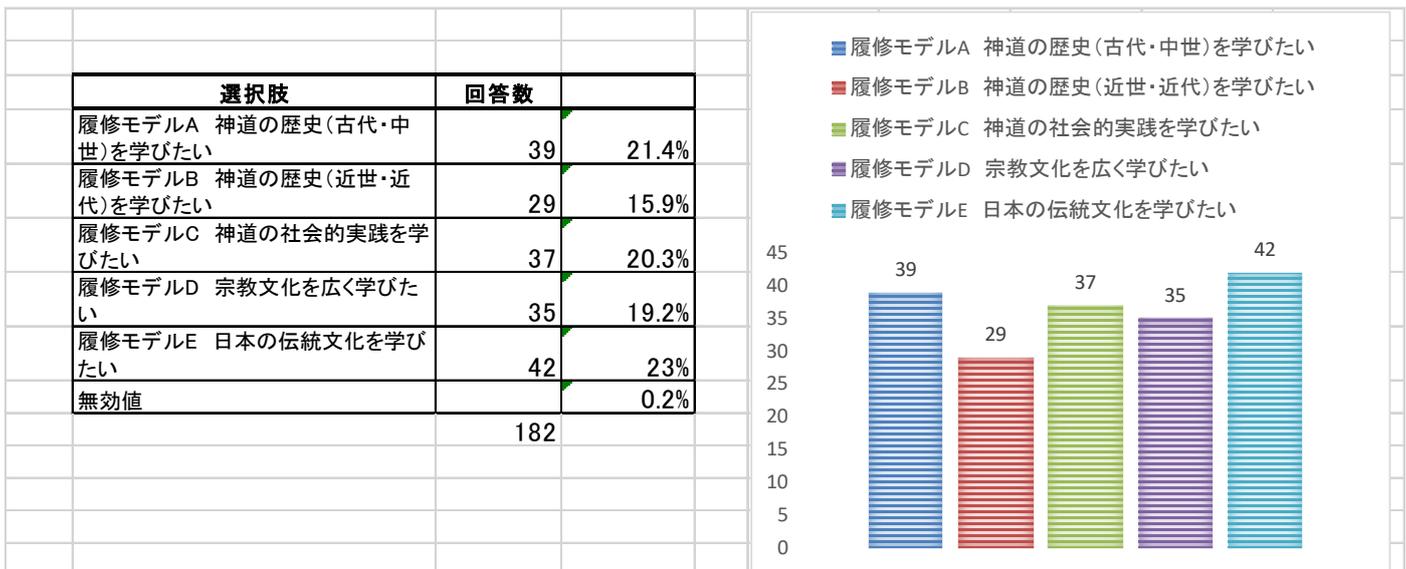


5. ぜひ学んでみたい授業科目名に3つまで✓をつけてください。

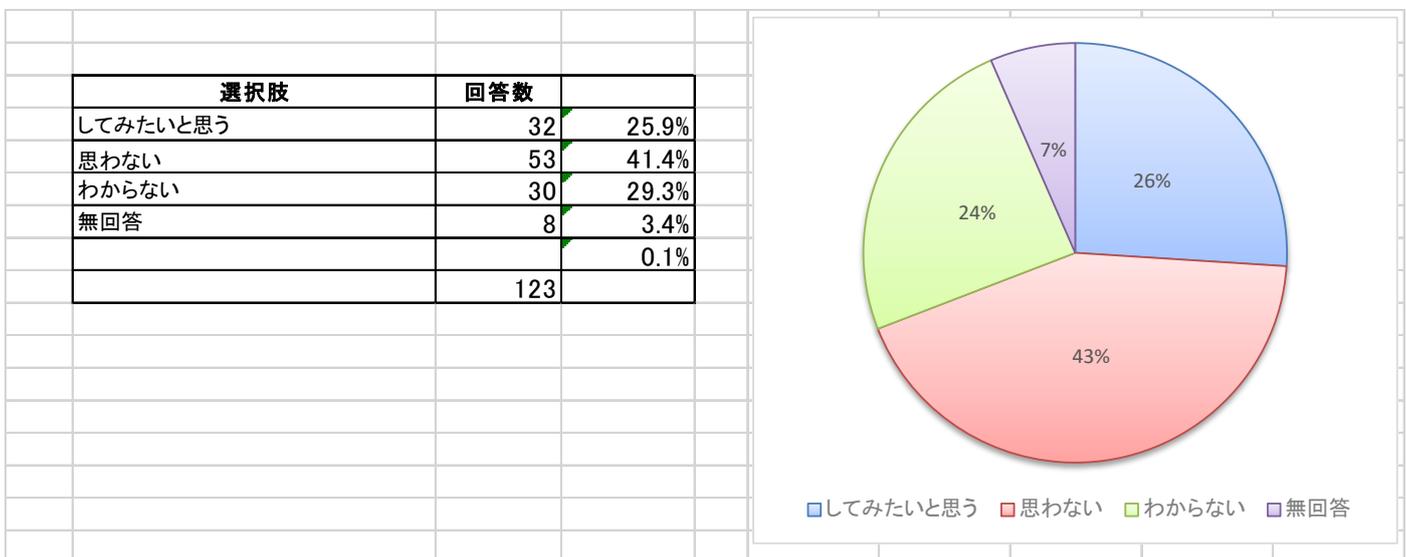
選択肢	回答数	
神道史学	43	13.3%
古典講読	11	3.4%
宗教学	16	4.9%
祭祀学	33	10.2%
神道神学	49	15.1%
神道思想史学	15	4.6%
国学概論	15	4.6%
世界宗教文化論	14	4.3%
日本宗教文化論	12	3.7%
宗教考古学	4	1.2%
宗教社会学	4	1.2%
比較文化学	4	1.2%
祝詞作文	20	6.2%
神社祭祀概論	14	4.3%
神社管理研究	1	0.3%
神社ネットワーク論	4	1.2%
神道教化概論	3	0.9%
宗教行政研究	2	0.6%
神道と国際交流	3	0.9%
神道と環境	7	2.2%
神道と情報化社会	3	0.9%
教派神道研究	3	0.9%
キリスト教文化研究	3	0.9%
仏教文化研究	0	
中東文化研究	2	0.6%
東アジア文化研究	5	1.5%
宗教芸術研究	4	1.2%
宗教音楽研究	8	2.5%
神道と武道	11	3.4%
神道と書道	11	3.4%
無効値		0.4%
	324	



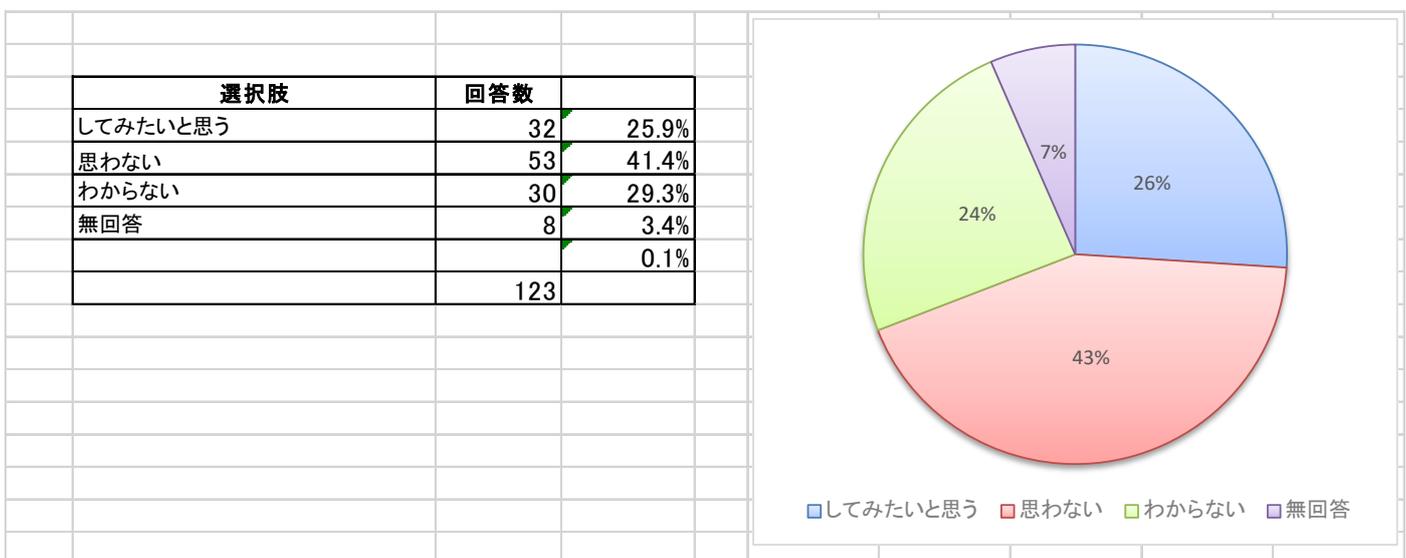
6. 次の A～E の 5 つの履修モデルのうち、関心があるものひとつ、もしくは 2 つに✓をつけてください。



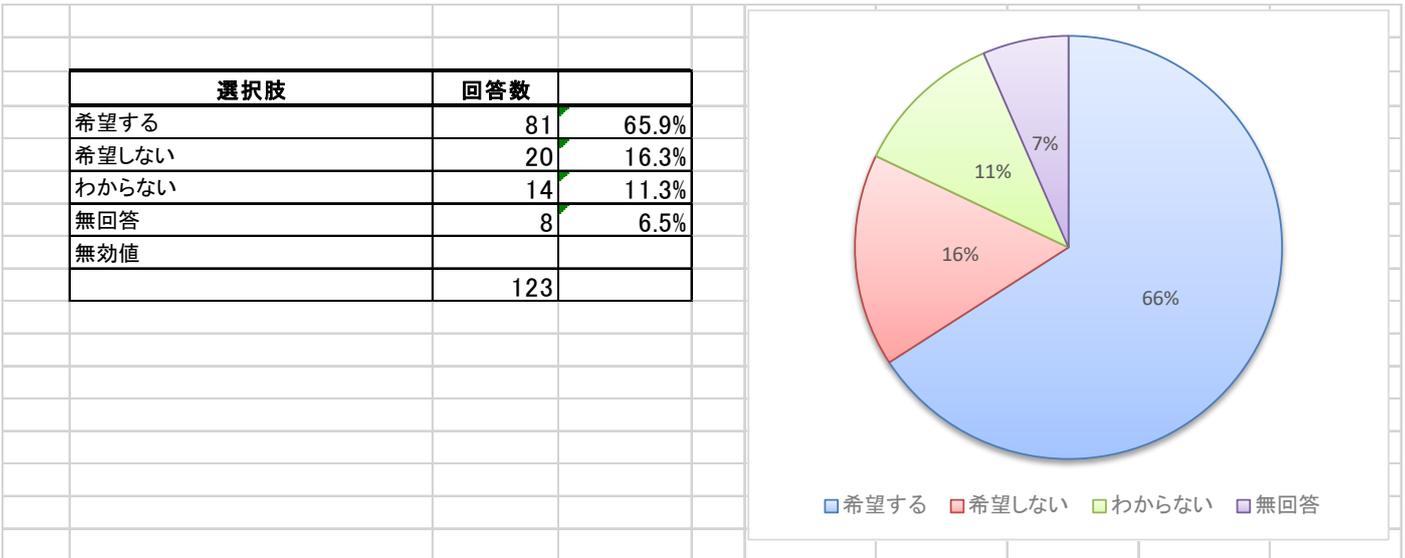
7. コンピューターやインターネットに関心はありますか。どれかひとつに✓をつけてください。



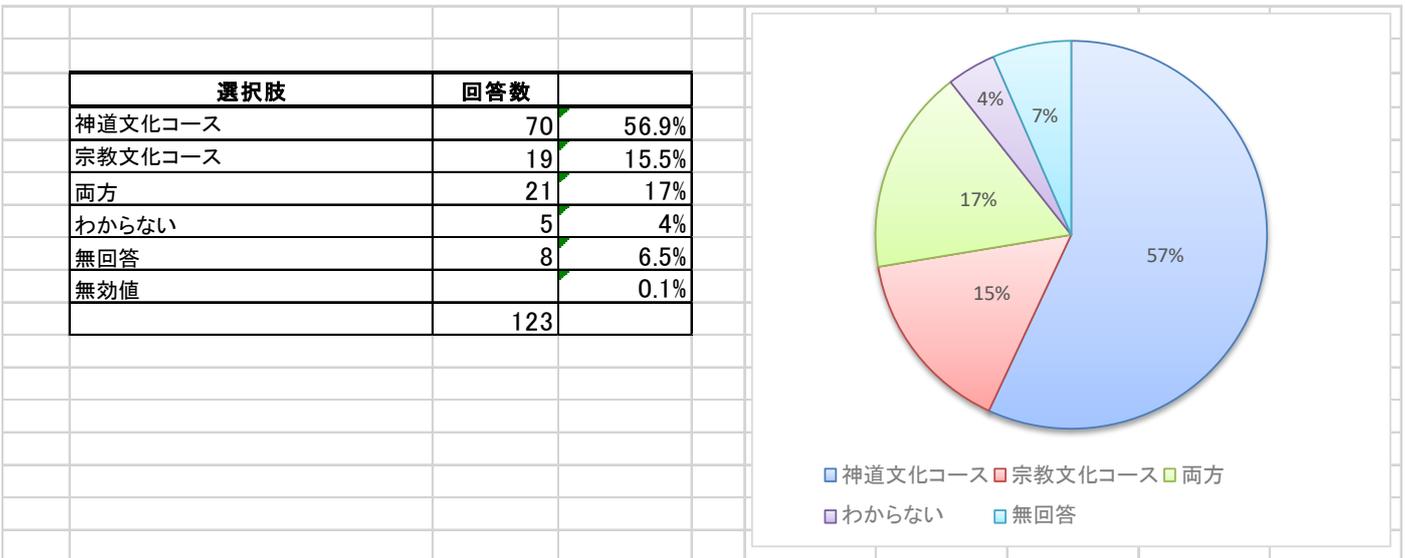
8. 在学中に、可能であれば、留学や語学研修をしてみたいと思いますか。どれかひとつに?をつけてください。



9.神職階位の取得を希望しますか。どれかひとつに✓をつけてください。



10.現在、神道文化コースと宗教文化コースのどちらに関心がありますか。(ガイドブック参照)



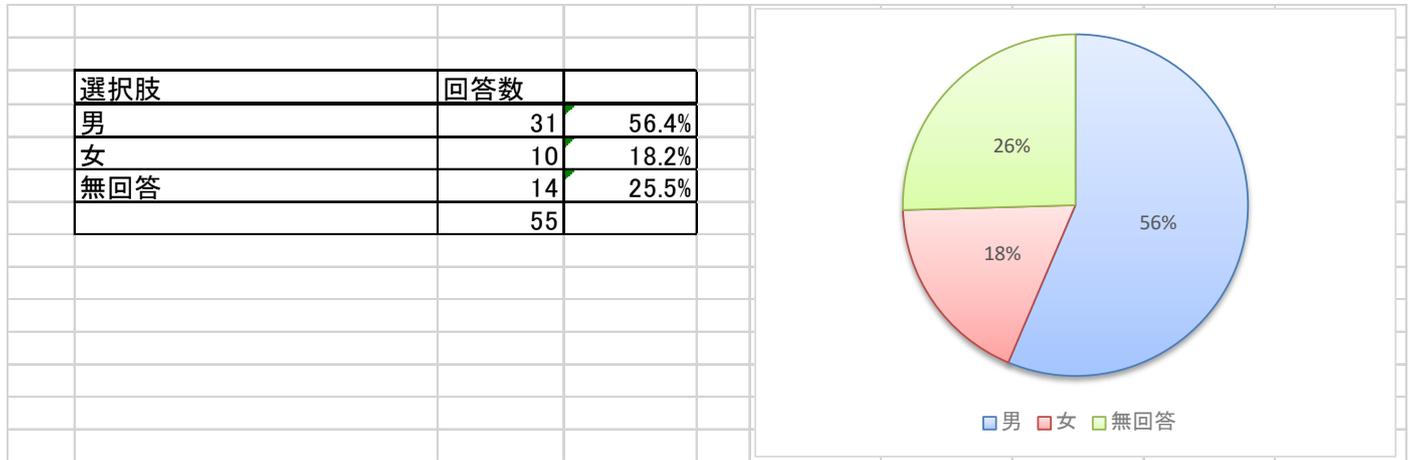
## 【平成 30 年度 アイスブレイクアンケート】

実施日：平成 30 年 4 月 15 日 於明治神宮

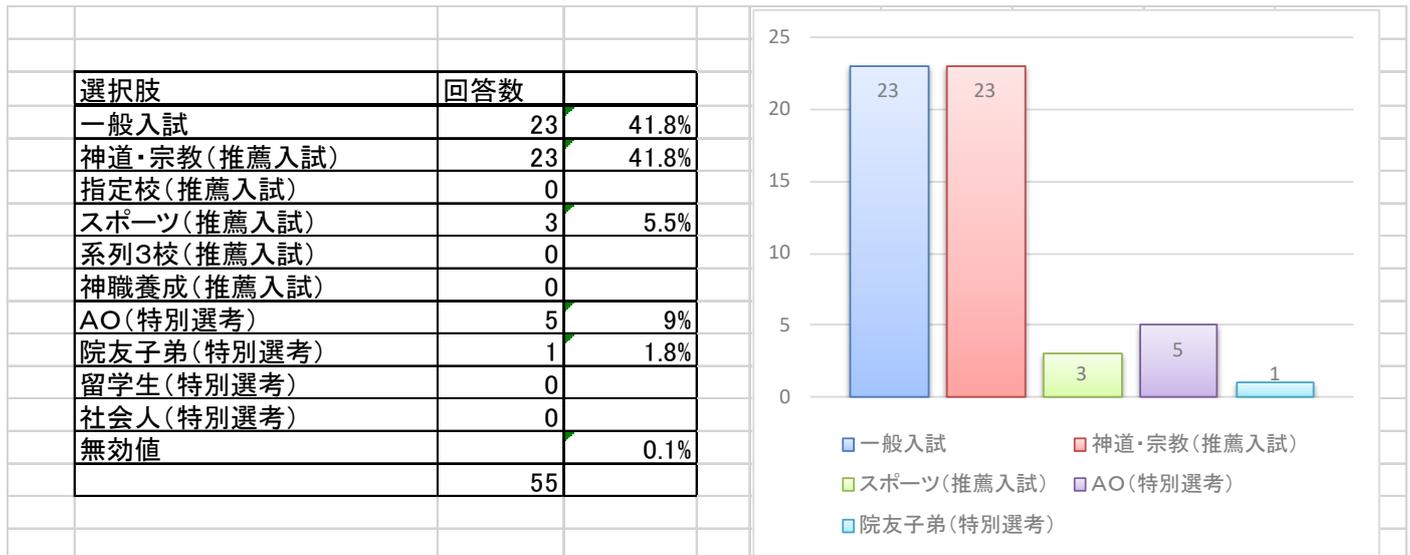
回答者 フレックスA 55名 フレックスB 111名

### フレックスA

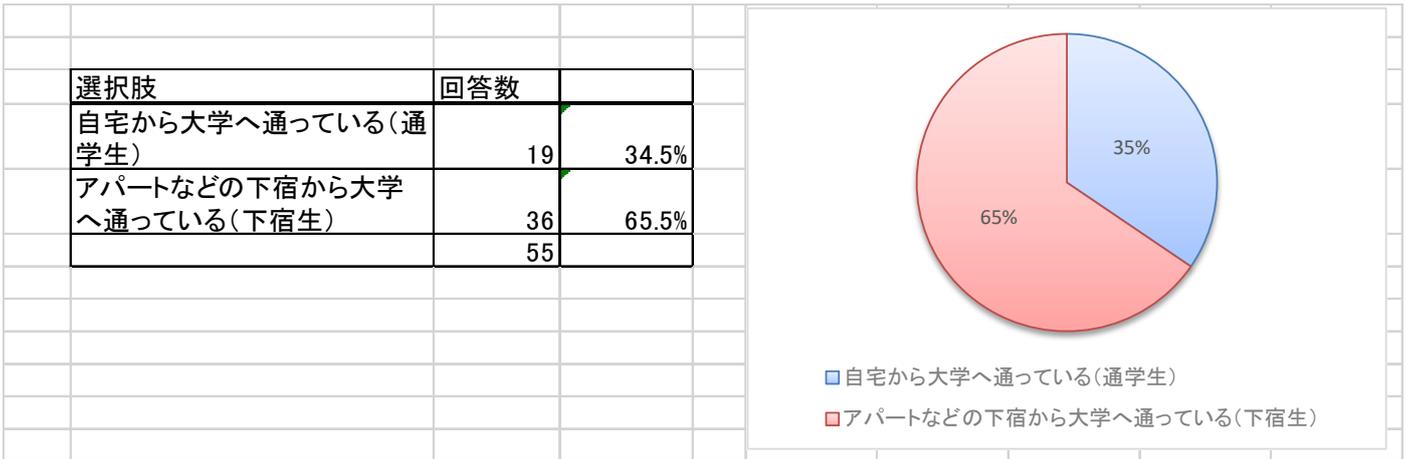
性別



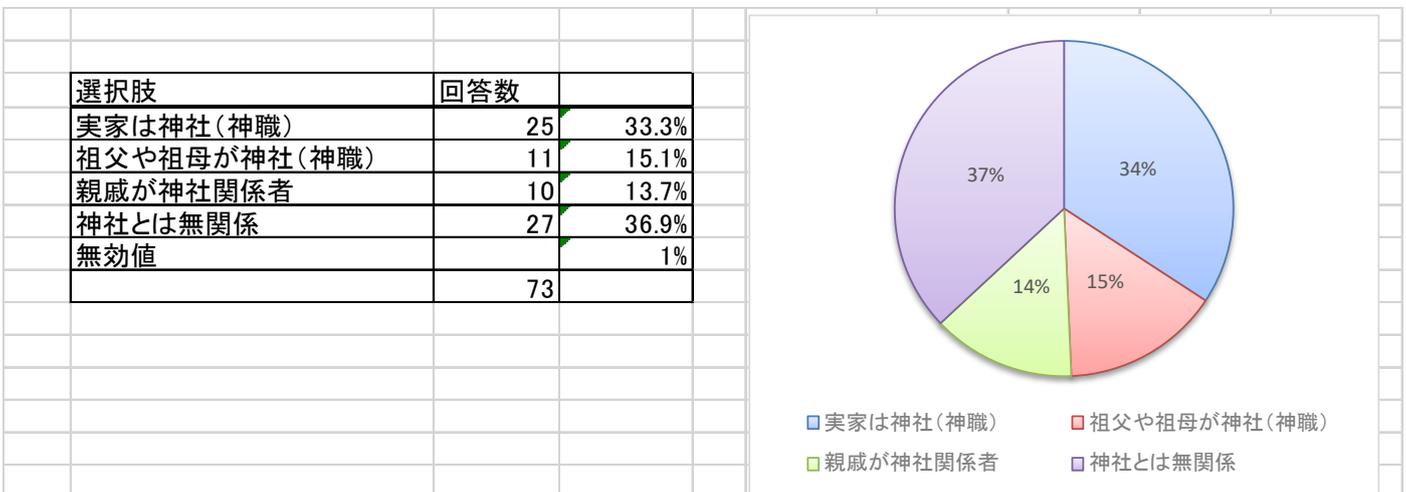
入試形態



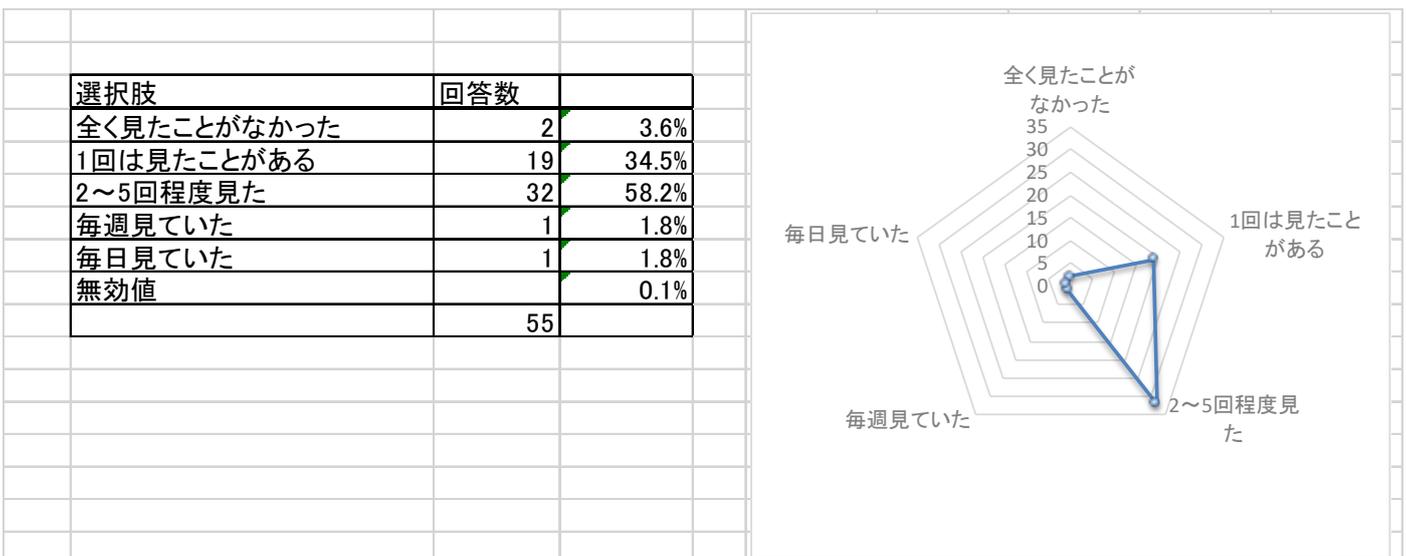
1. あなたは、自宅からの大学へ通ういわゆる通学生ですか、それともアパートなどを借りて通う下宿生のどちらですか



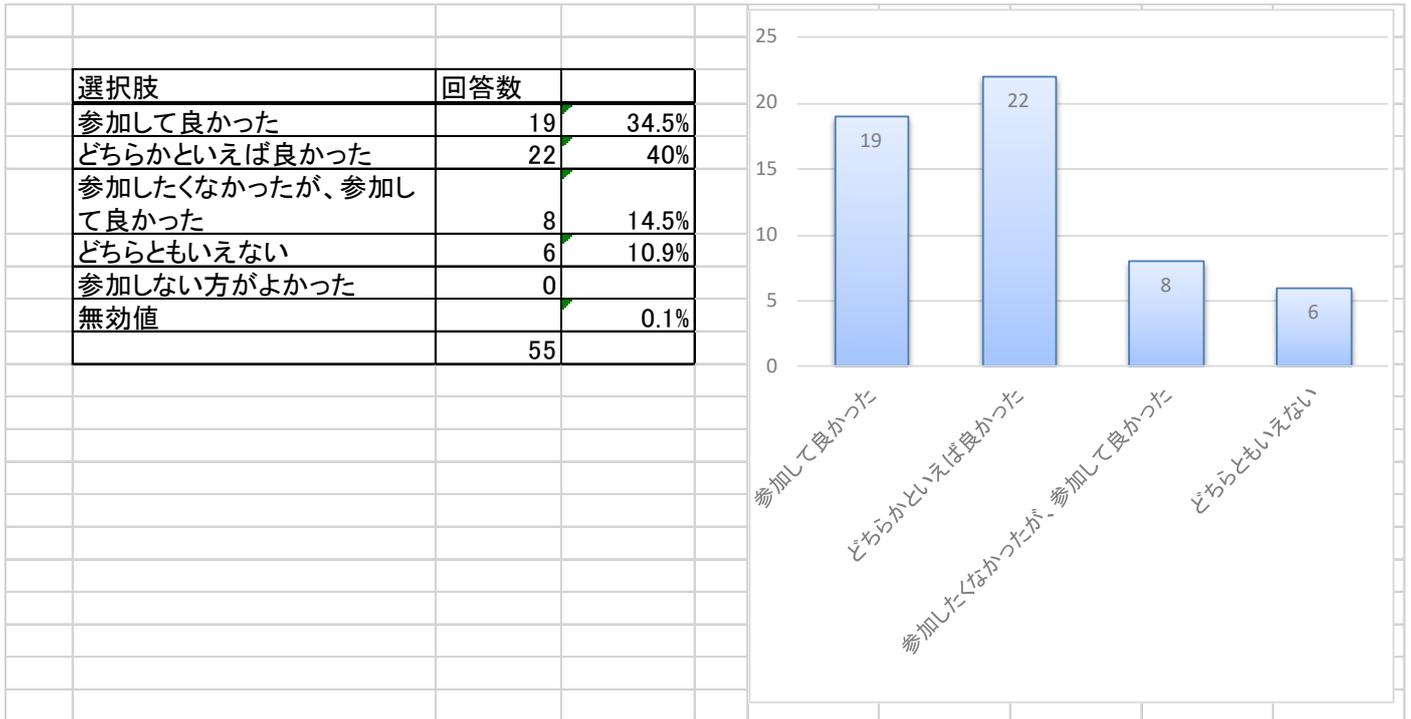
2. あなたの実家は神社の神職ですか



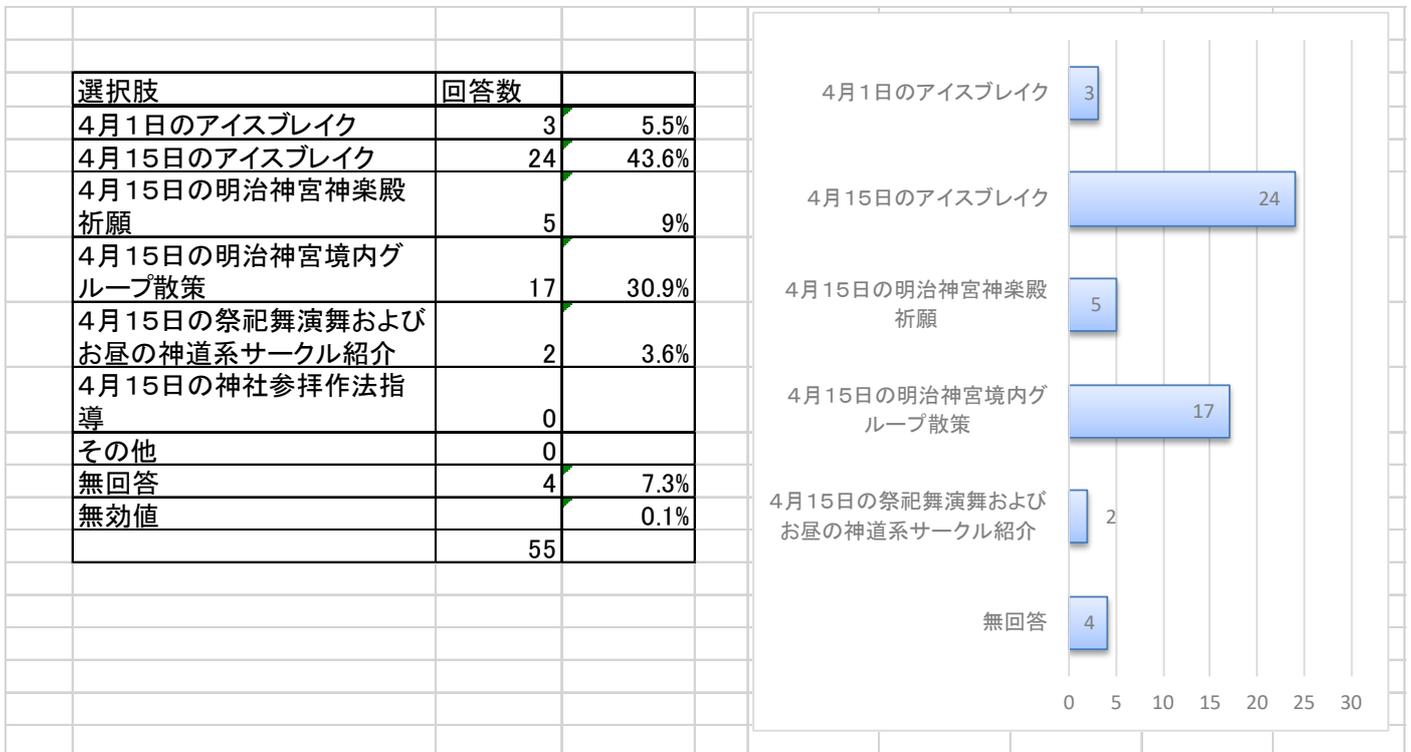
3. 大学入学前に、神道文化学部ホームページの記事を見たことがありますか。



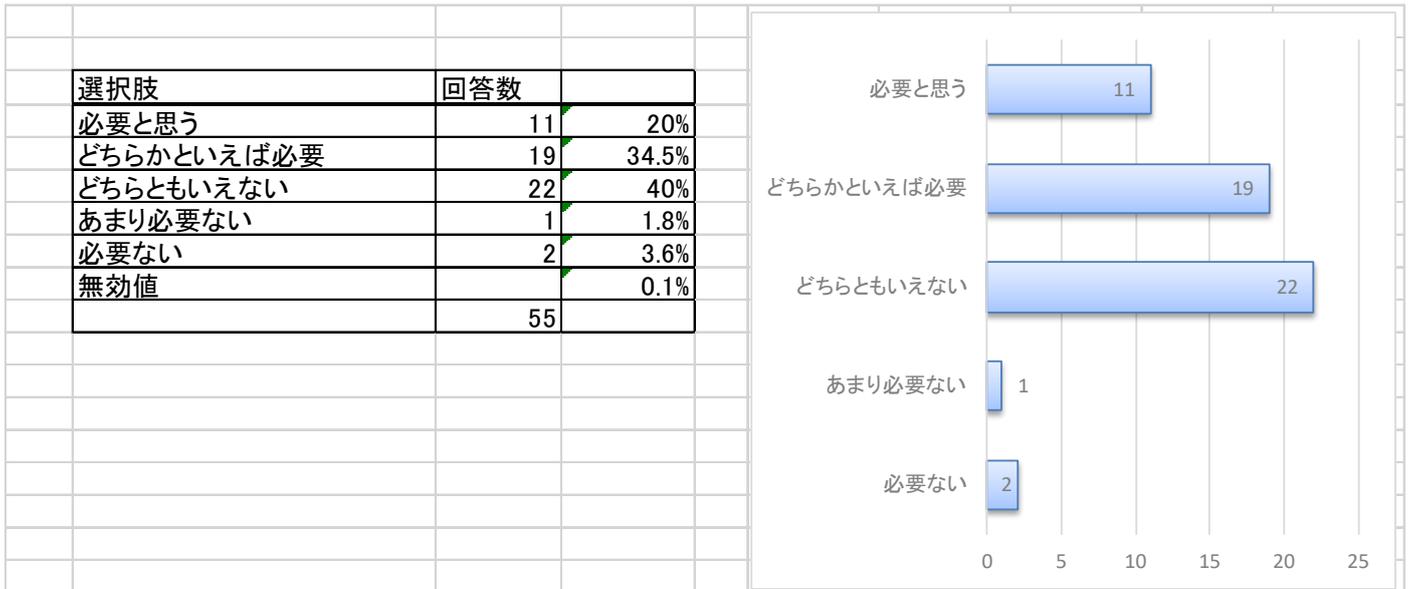
4. 4月1日、4月15日のオリエンテーション（アイスブレイク）に参加した印象について下記の項目から選んで✓をつけてください



5. 4月1日、4月15日と2回行われたオリエンテーション（アイスブレイク）のなかで、一番面白かった（もしくは自身のためになった）行事について✓をつけてください

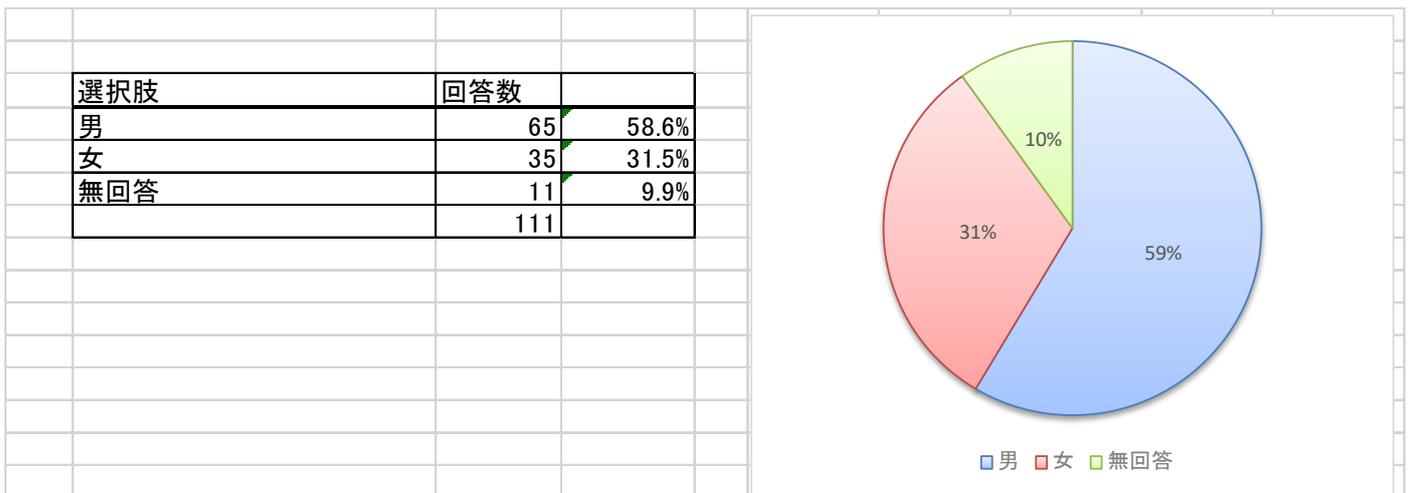


6. 國學院大學神道文化学部に入学して約2週間が経ちますが、大学のクラスの中で、今回のような学生の懇親行事がもっと必要と思いますか

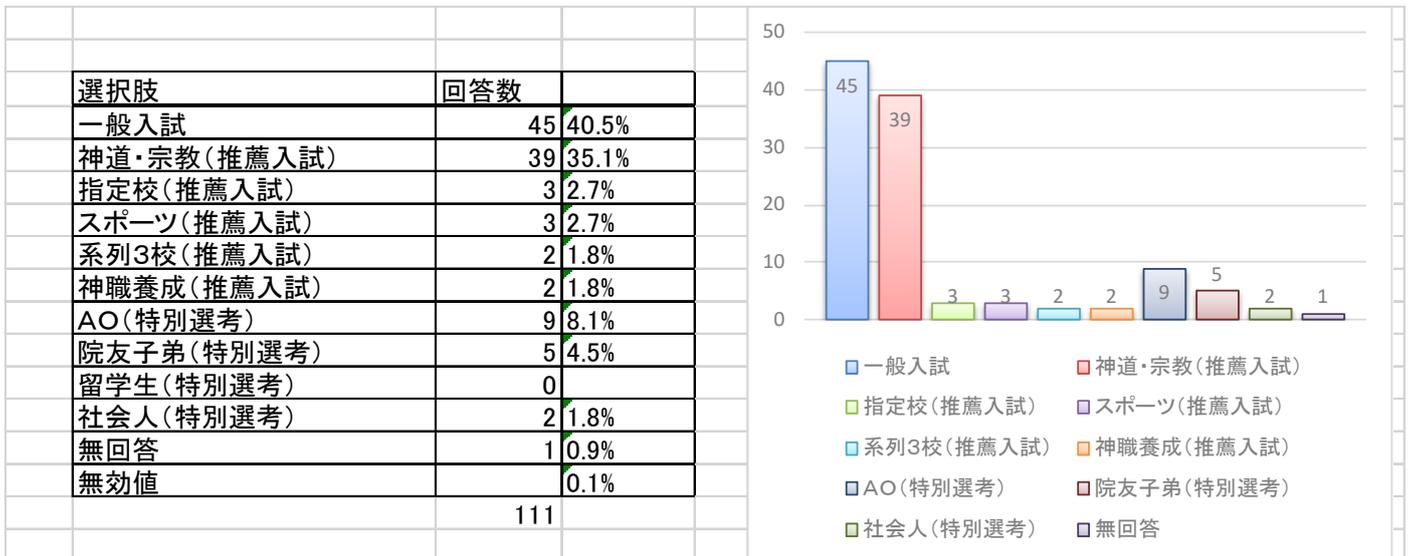


フレックスB

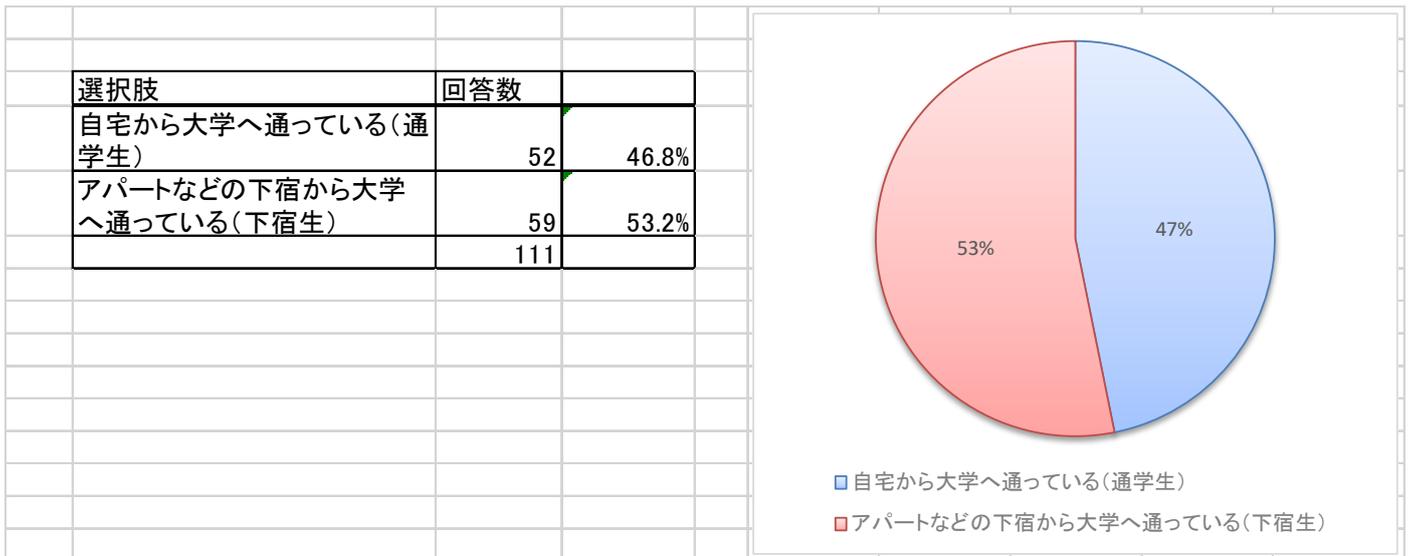
性別



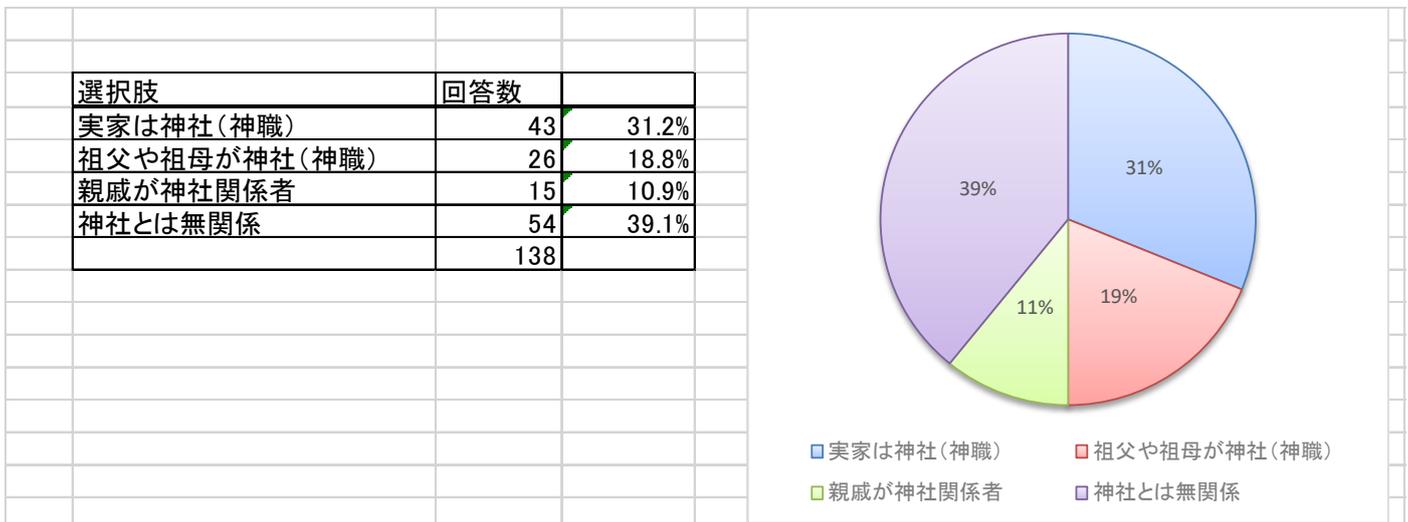
入試形態



1. あなたは、自宅からの大学へ通ういわゆる通学生ですか、それともアパートなどを借りて通う下宿生のどちらですか

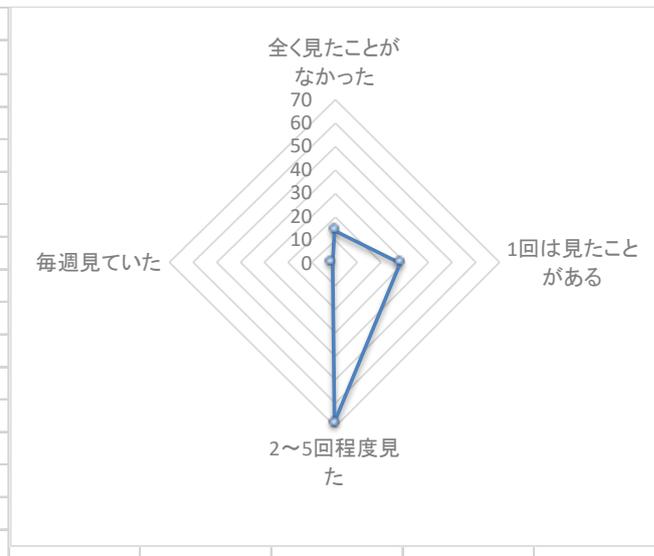


2. あなたの実家は神社の神職ですか



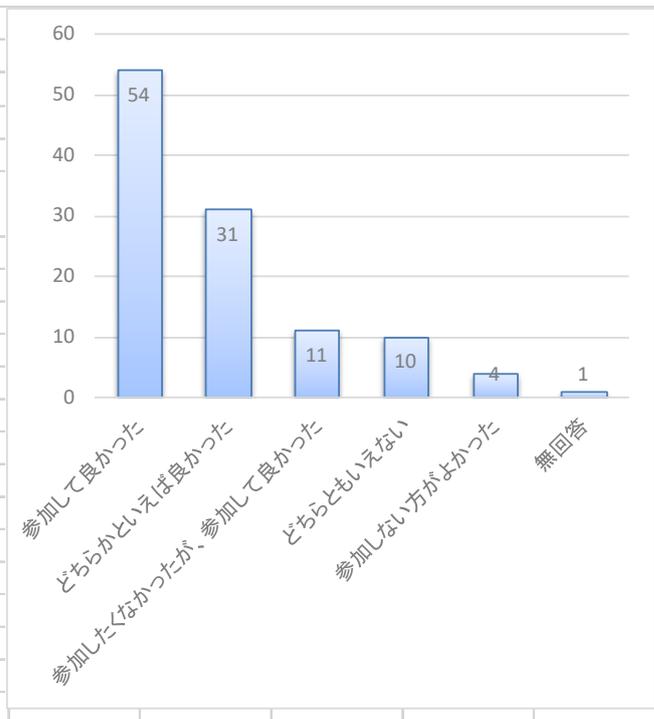
3. 大学入学前に、神道文化学部ホームページの記事を見たことがありますか。

選択肢	回答数	
全く見たことがなかった	14	12.6%
1回は見たことがある	28	25.2%
2～5回程度見た	68	61.3%
毎週見ていた	1	0.9%
毎日見ていた	0	
	111	

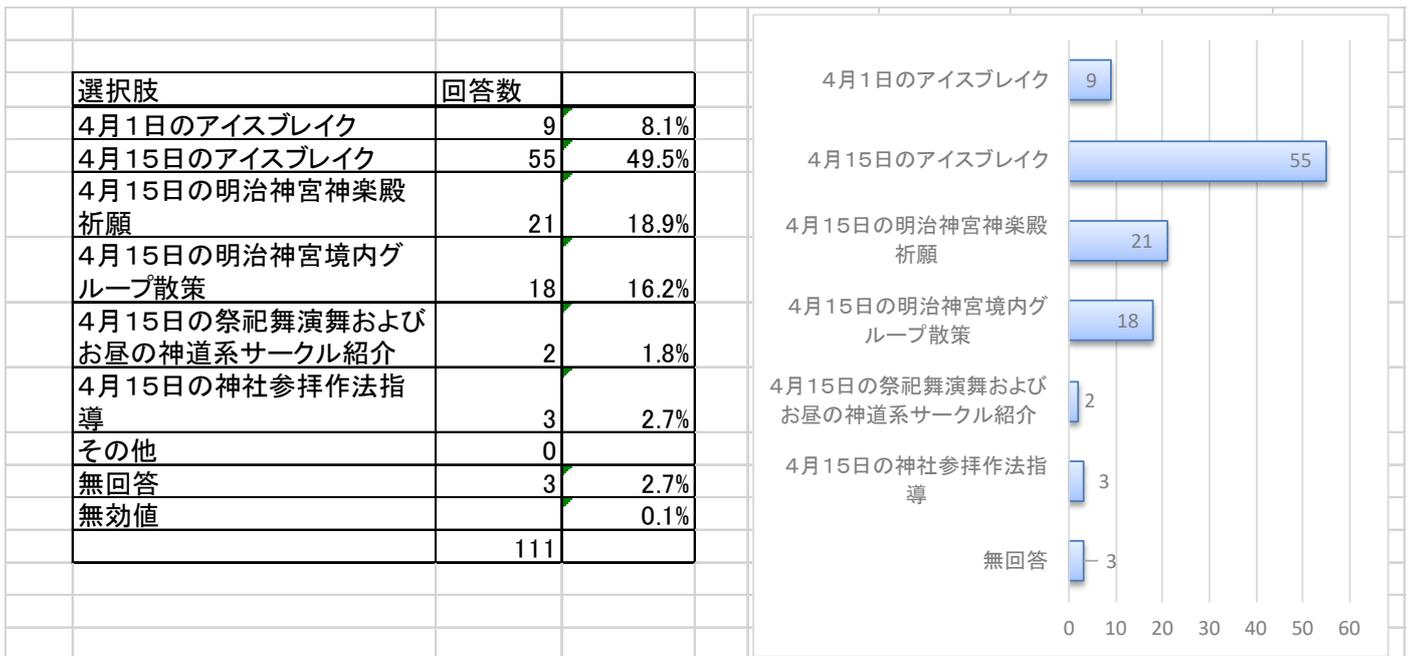


4. 4月1日、4月15日のオリエンテーション（アイスブレイク）に参加した印象について下記の項目から選んで✓をつけてください

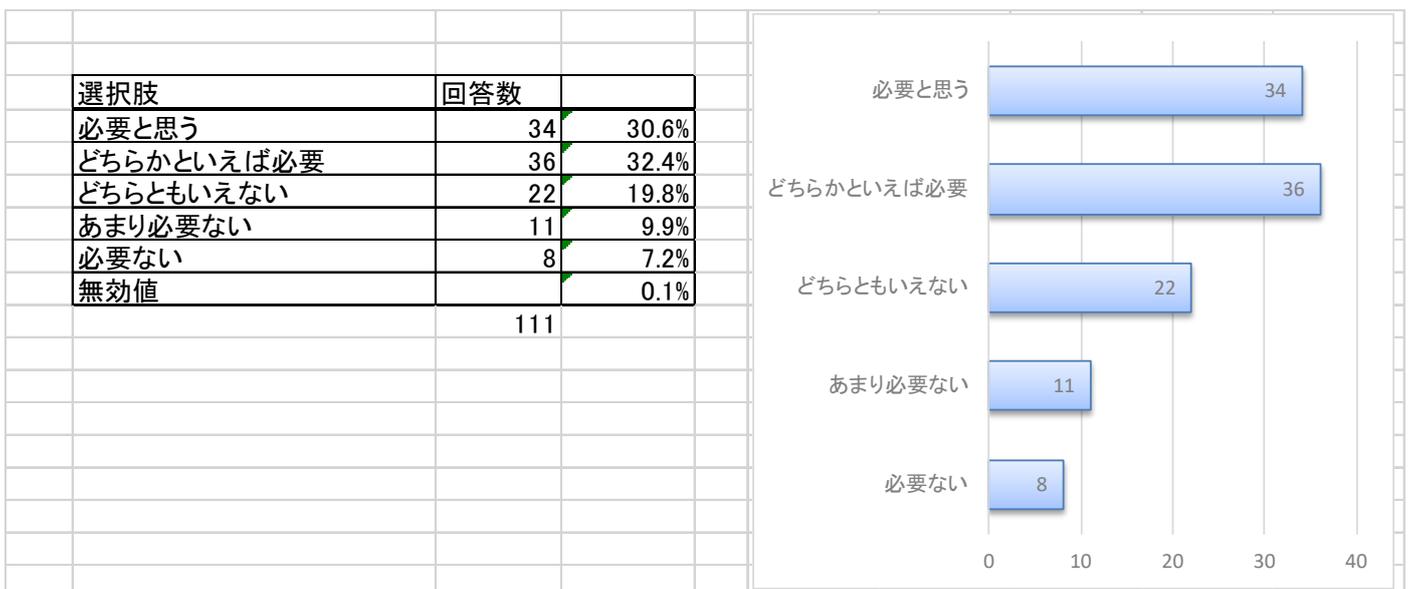
選択肢	回答数	
参加して良かった	54	48.6%
どちらかといえば良かった	31	27.9%
参加したくなかったが、参加して良かった	11	9.9%
どちらともいえない	10	9%
参加しない方がよかった	4	3.6%
無回答	1	0.9%
無効値		0.1%
	111	



5. 4月1日、4月15日のオリエンテーション（アイスブレイク）に参加した印象について下記の項目から選んで✓をつけてください



6. 國學院大學神道文化学部に入學して約2週間が経ちますが、大学のクラスの中で、今回のような学生の懇親行事がもっと必要と思いますか

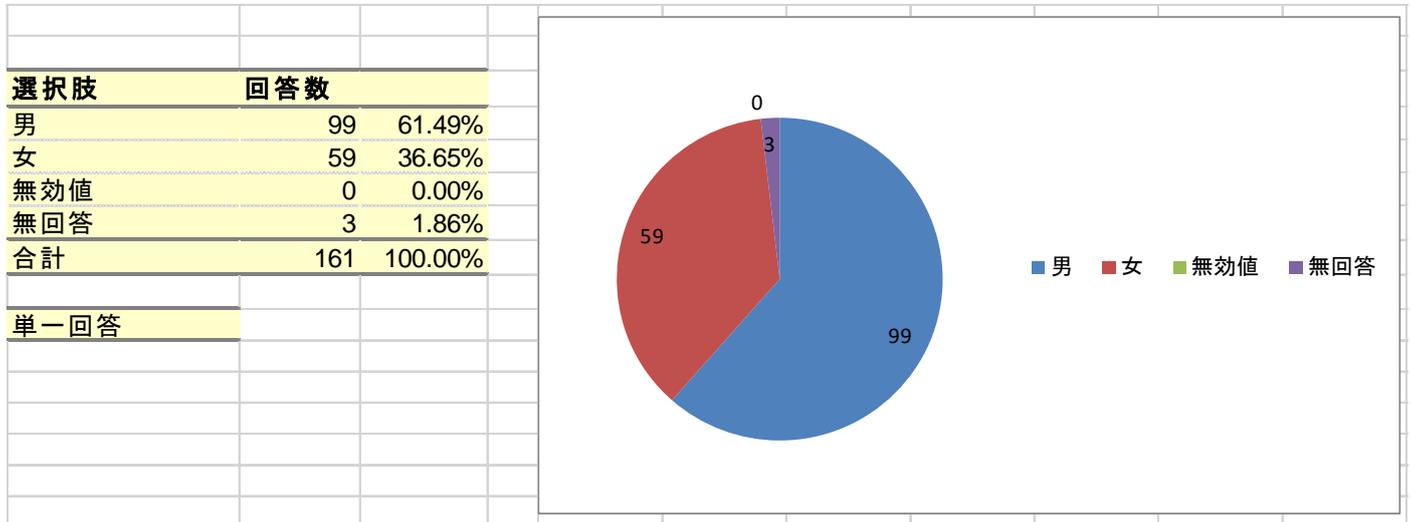


## 【平成 30 年度 就職・奉職意識アンケート】

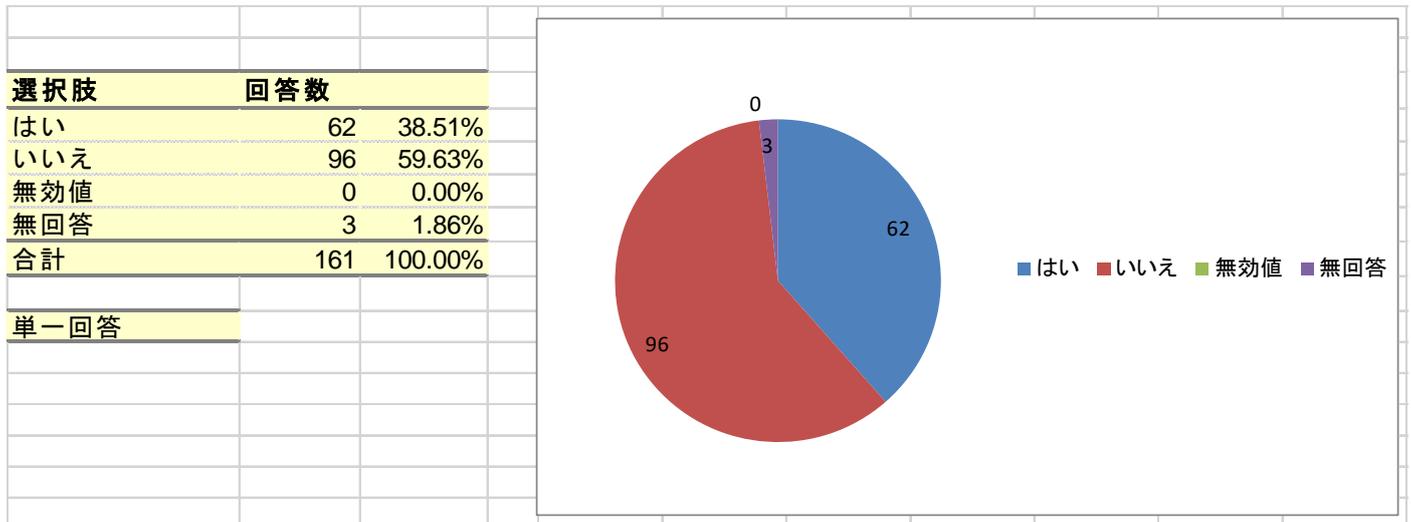
【平成 30 年度 神道文化学部 2 年生 就職・奉職意識アンケート〔総合〕】

回答数 161 名

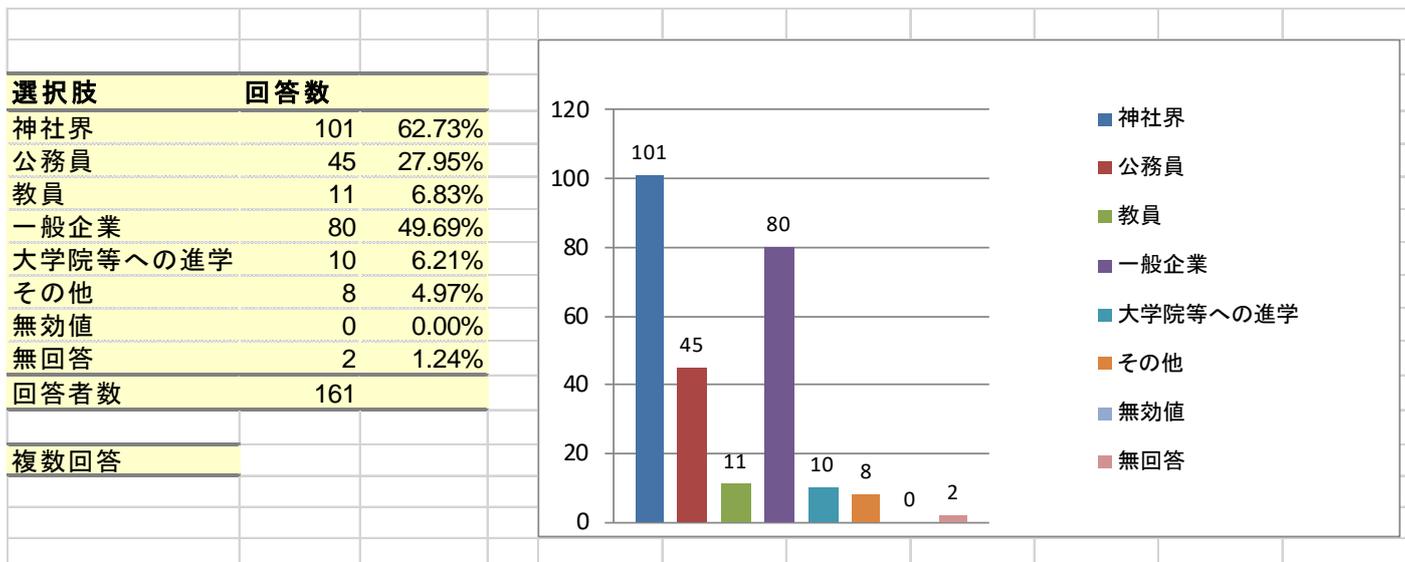
### I 性別



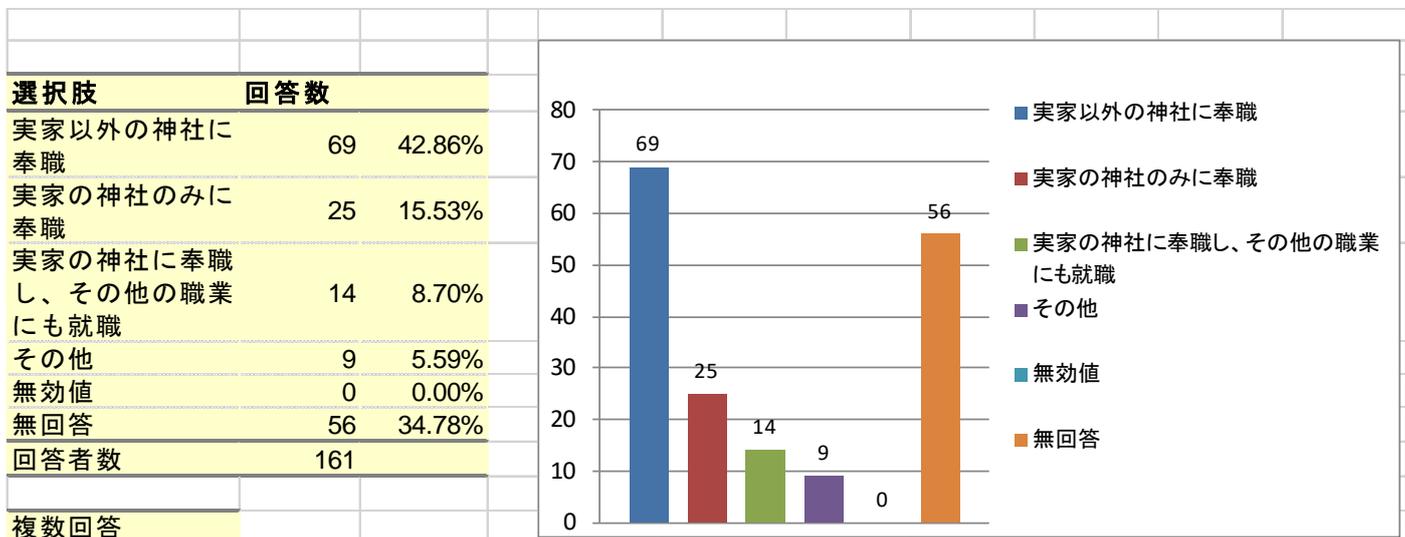
### II あなたは、神社の子弟ですか。



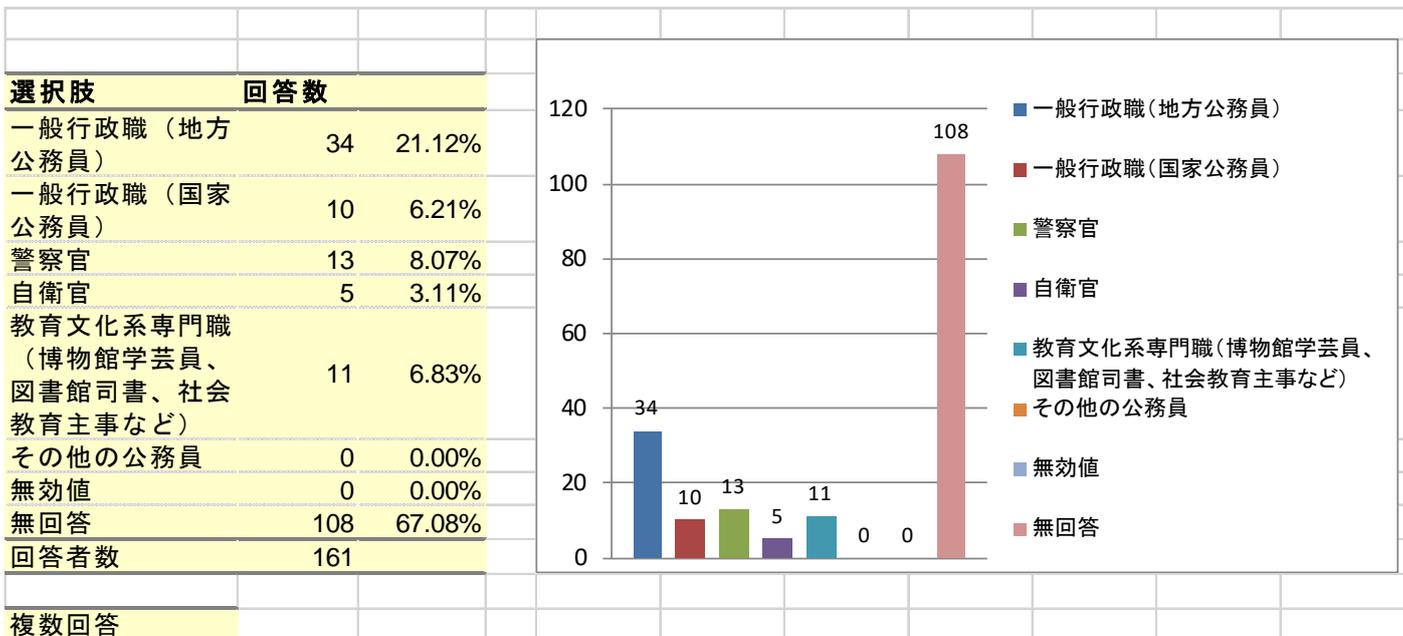
Ⅲあなたの就職・奉職希望は、どの方面ですか。(複数回答可)



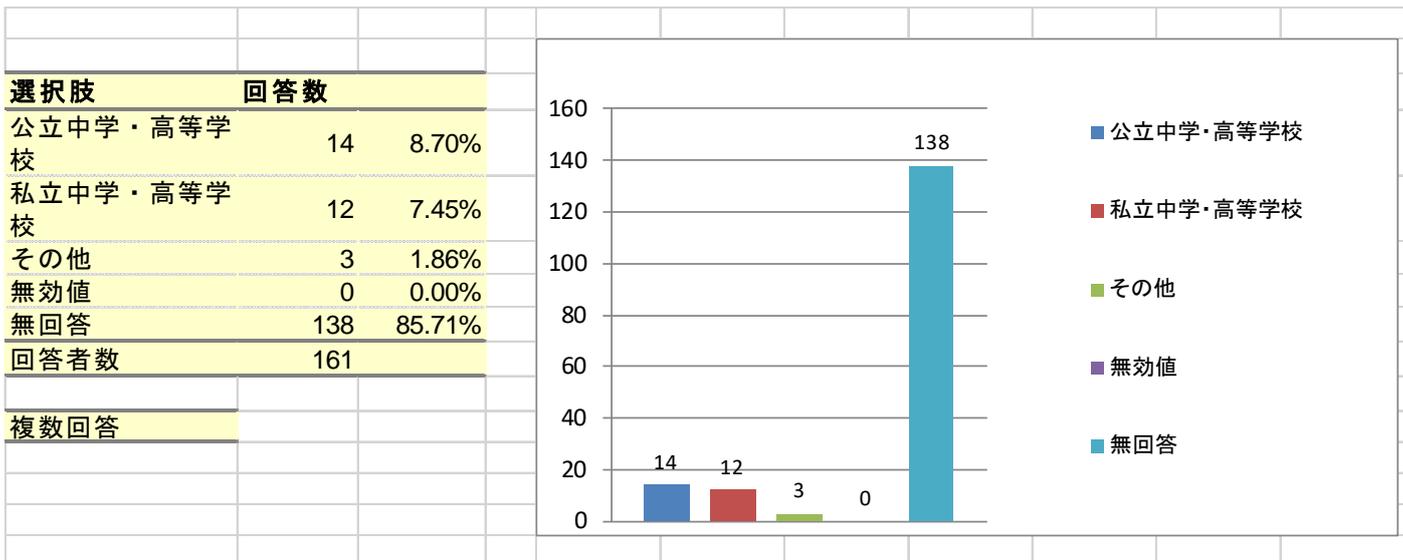
Ⅳ神社界への奉職を希望する場合、次のどれを希望しますか。(複数回答可)



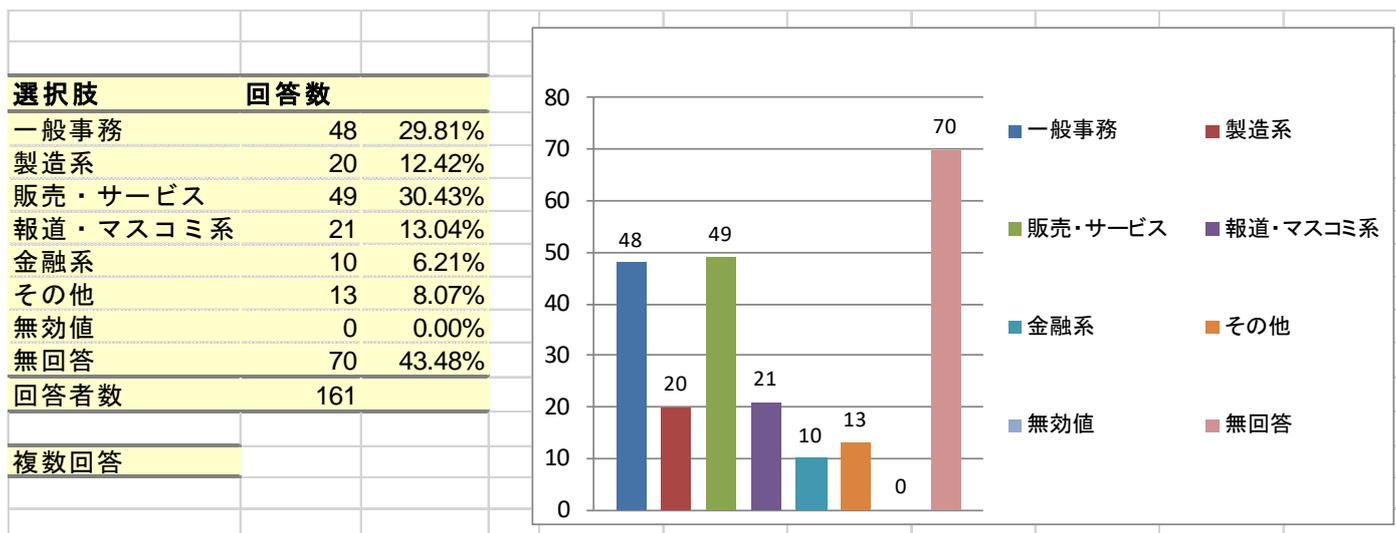
V公務員を希望する場合、職種は次のどれを希望しますか。(複数回答可)



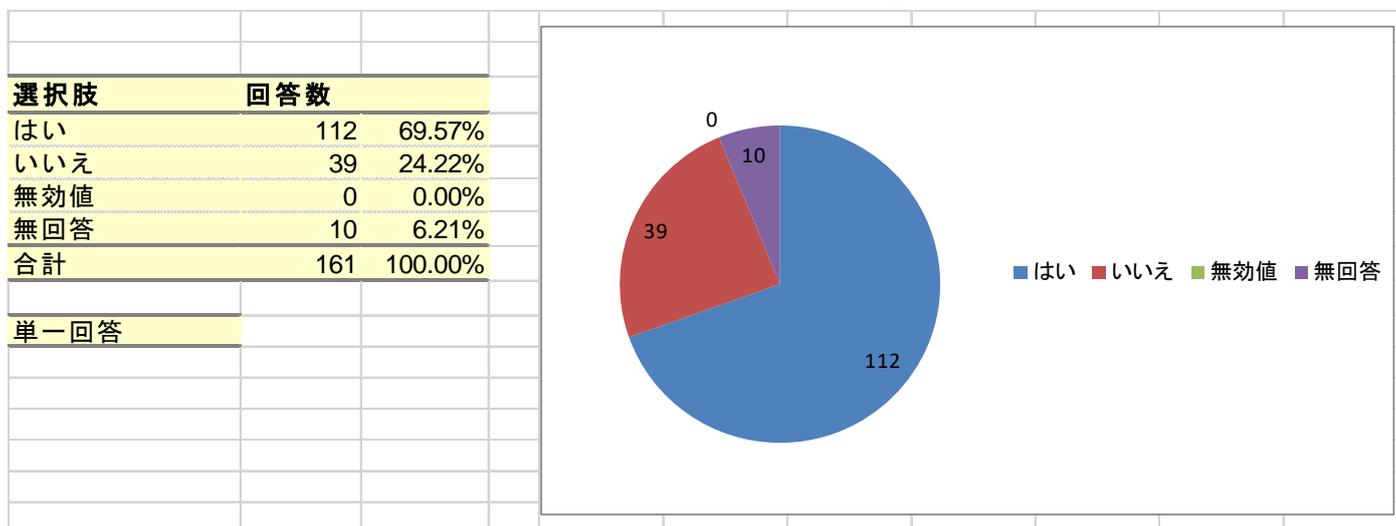
VI教員を希望する場合、次のどれを希望しますか。(複数回答可)



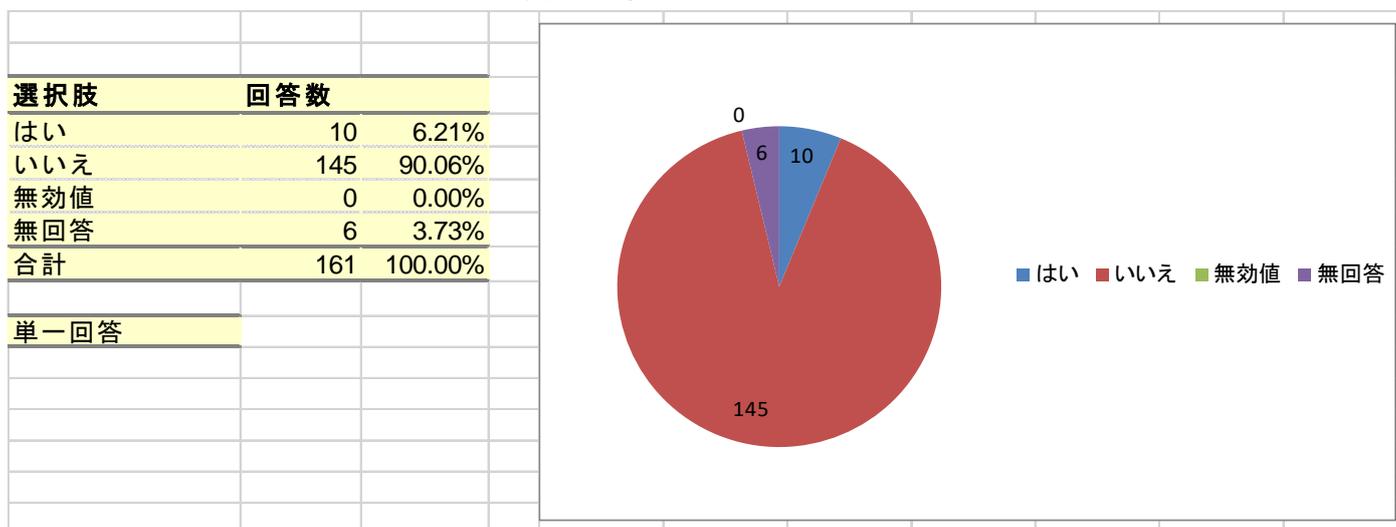
VII一般企業を希望する場合、次のどの職種を希望しますか。(複数回答可)



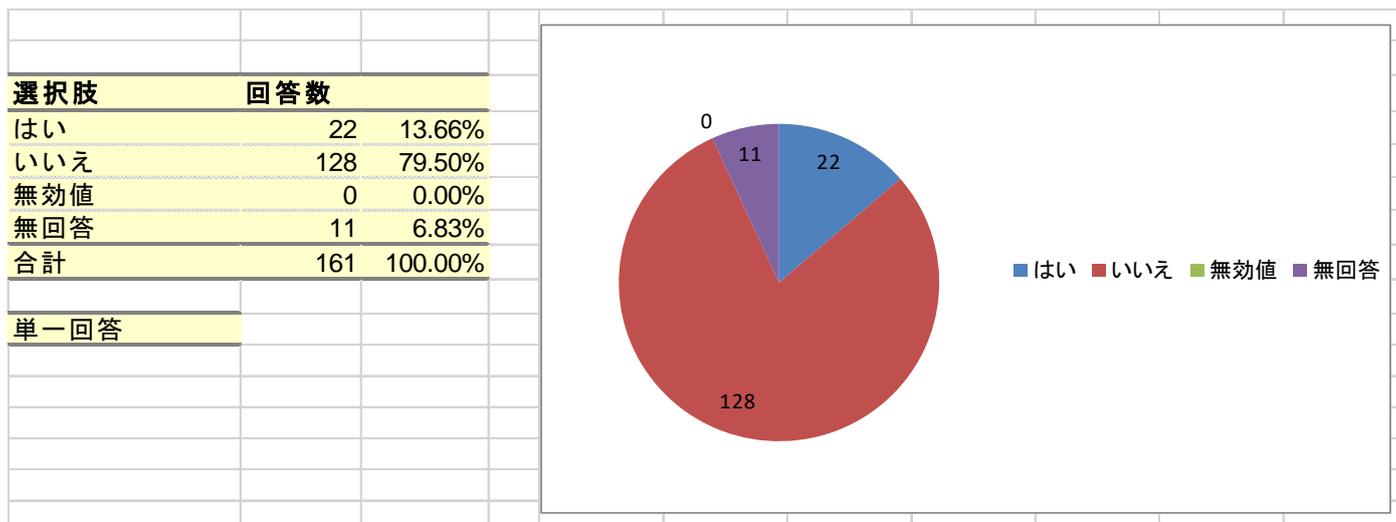
VIIIインターンシップ（企業・役所等での就業体験）はやってみたいと思いますか？



IXキャリアサポート課で就職相談や就職情報の閲覧をしたことがありますか？



Xキャリアサポート課主催のガイダンス・講座・セミナーに参加したことがありますか？



## 神道文化学部2年生 奉職・就職意識アンケート結果〔男子〕

I 性別 男子 99名

II あなたは、神社の子女ですか。

1. はい 45名 45.5%
2. いいえ 53名 53.5% (未回答 1名)

※以下、「全男子」＋〔①は「子女」に占める割合、②は「一般」に占める割合〕で内訳を表示  
(複数回答可のため、各割合の合計≠100%)

III あなたの就(奉)職希望は、どの方向ですか。(複数回答可)

1. 神社界 67.7% [①88.9% ②50.9%]
2. 公務員 29.3% [①24.4% ②33.9%]
3. 教員 8% [①5% ②5.7%]
4. 一般企業 43.4% [①33.3% ②50.9%]
5. 大学院等への進学 6% [①2.2% ②11.1%]
6. その他 4% [①2.2% ②5.7%]

IV 神社界への奉職を希望する場合、次のどれを希望しますか。(複数回答可)

1. 実家以外の神社に奉職 42.4% [①42.2% ②43.4%]
2. 実家の神社のみに奉職 16.2% [①35.6% ②0%]
3. 実家の神社に奉職し、その他の職業にも就職(この場合、以下のアンケートにも答えて下さい) 14.4% [①31.1% ②0%]
4. その他 6% [①4.4% ②7.5%]

V 公務員を希望する場合、職種は次のどれを希望いたしますか。(複数回答可)

1. 一般行政職(地方) 23.2% [①24.4% ②22.6%]
2. 一般行政職(国家) 8% [①4.4% ②11.3%]
3. 警察官 10.1% [①11.1% ②9.4%]
4. 自衛官 4% [①2.2% ②5.7%]
5. 博物館学芸員・社会教育主事等教育文化系専門職 7% [①4.4% ②9.4%]
6. その他 0% [①0% ②0%]

VI 教員を希望する場合、次のどれを希望しますか。(複数回答可)

1. 公立中学・高等学校 12.1% [①17.7% ②7.5%]
2. 私立中学・高等学校 9% [①11.1% ②7.5%]
3. その他 3% [①2.2% ②3.8%]

VII 一般企業を希望する場合、次のどの職種を希望しますか。(複数回答可)

1. 一般事務 25.3% [①22.2% ②28.3%]
2. 製造系 11.1% [①8.9% ②13.2%]
3. 販売・サービス 26.3% [①33.3% ②20.8%]
4. 報道・マスコミ系 12.1% [①8.9% ②15.1%]
5. 金融系 7% [①6.7% ②7.5%]
6. その他 9% [①4.4% ②13.2%]

VIII インターン・シップ(企業・役所等での就業体験)はやってみたいと思いますか?

1. はい 67.7% [①60% ②73.6%]
2. いいえ 28.3% [①4.4% ②22.6%]

IXキャリアサポート課で就職相談や就職情報の閲覧をしたことがありますか？

1. はい 4% [①14.7% ②5.7%]      2. いいえ 93.9% [①95.6% ②92.5%]

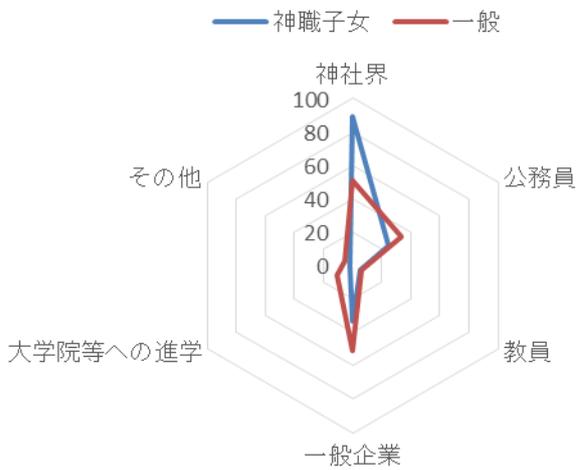
Xキャリアサポート課主催のガイダンス・講座・セミナーに参加したことがありますか？

1. はい 8% [①2.2% ②13.2%]      2. いいえ 87.9% [①95.6% ②81.1%]

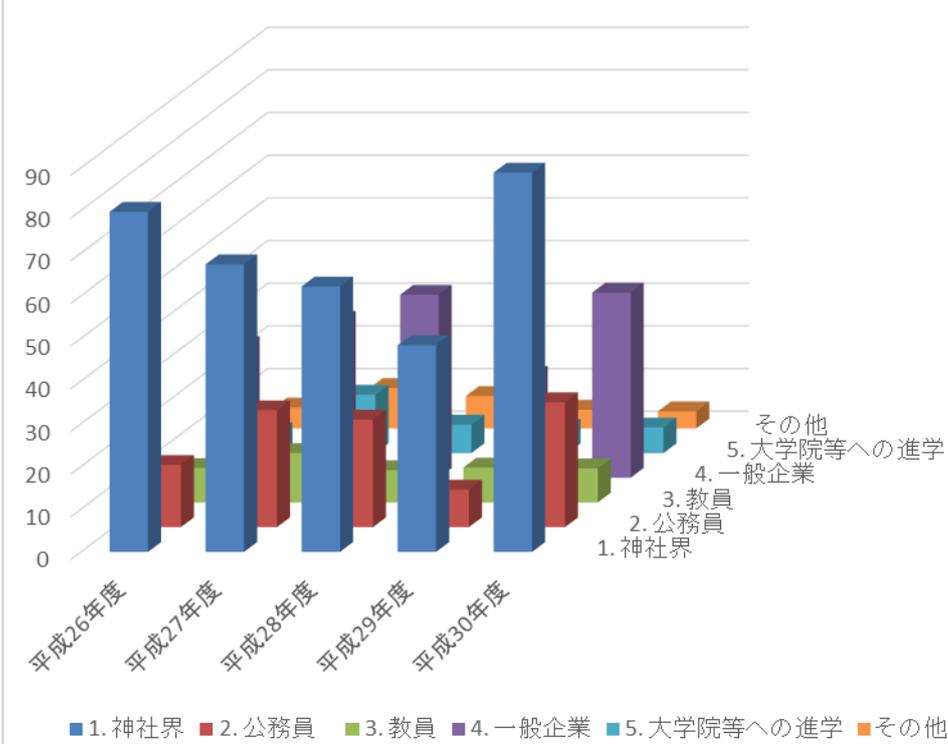
### 【コメント一覧】(学生の記入通り)

- ・SPIは高校の授業の復習をするのが効果的でしょうか？
- ・とにかく情報と内情をたくさん知りたい。
- ・自分が働けるのか分からない
- ・ちゃんと社会に出れるのか不安です。
- ・社会人学生かつ、今の処は院への進学を考えていますが、視野を広げる意味で、今回のガイダンスは役に立ちました。有難う御座いました。
- ・神社界1本で考えている
- ・神職と一般企業の兼業はやはり難しいのでしょうか
- ・明確に将来が思い描けない。自分に何か出来る気がなくて不安でしょうがない。
- ・キャリアサポート課の面談などは気軽に申し込んでもよいのか。(就職をどのように始めたらよいのかといった初歩的な相談でもよいのか)。
- ・4年間で卒業した後は、何かに就いていないといけませんか。
- ・公務員のことや勉強についてなどが知りたい。
- ・神道文化学部でも企業に入れるのか 好かれるのか
- ・特にありません。
- ・実家の神社を継いだ後、実家の神社だけでは食べていけないので、どうするか悩んでいる。
- ・学生に対しては仕方がないのかもしれないが、業界、会社を目標に活動するのはミスマッチの源に思える。人事担当者や、採用担当以外の目線で「仕事」を見ることも必要とは思う。例えば、投資会社が投資先を見る目線を研究しても面白いはず。鎌倉投信やミュージックセキュリティーズなど。
- ・自分の将来を大きく左右するものだけあって真剣に考えなければならない。それが同時に不安をあおる。
- ・既に就職なさっている先輩方に神道文化学部の生徒が就活する時に苦労したこと、大変だったこと、逆によかった事をお聞きしたい。また、神社の事務はどのような仕事をするのか、神職との兼業もあるのかお聞きしたい。
- ・不安なので死にたい。
- ・宗教学者のインターンシップに行ってみたいです。
- ・自分の地域やその就職先に魅力を感じるところに行きたいと思っています
- ・やりたい事がたくさんありますが、まだ将来の夢がきまっていない。東京オリンピックが終れば就職が難しくなるという話が聞いた事がありますが本当ですか？単位が取得が難しくなってきた。

### 平成30年度 就(奉)職希望先傾向表



### 男子全体就職先希望



## 神道文化学部2年生 奉職・就職意識アンケート結果〔女子〕

I 性別 女子 59名

II あなたは、神社の子女ですか。

1. はい 16名 27.1%
2. いいえ 43名 72.9%

※以下、「全男子」＋〔①は「子女」に占める割合、②は「一般」に占める割合〕で内訳を表示  
(複数回答可のため、各割合の合計≠100%)

III あなたの就(奉)職希望は、どの方向ですか。(複数回答可)

1. 神社界 57.6% [①81.3% ②48.8%]
2. 公務員 27.1% [①12.5% ②32.6%]
3. 教員 5% [①0% ②6.9%]
4. 一般企業 61% [①37.5% ②69.8%]
5. 大学院等への進学 6.8% [①0% ②9.3%]
6. その他 6.8% [①0% ②9.3%]

IV 神社界への奉職を希望する場合、次のどれを希望しますか。(複数回答可)

1. 実家以外の神社に奉職 45.8% [①50% ②44.2%]
2. 実家の神社のみに奉職 13.6% [①50% ②0%]
3. 実家の神社に奉職し、その他の職業にも就職 (この場合、以下のアンケートにも答えて下さい) 0% [①% ②0%]
4. その他 5% [①6.2% ②4.7%]

V 公務員を希望する場合、職種は次のどれを希望いたしますか。(複数回答可)

1. 一般行政職(地方) 16.9% [①12.5% ②18.6%]
2. 一般行政職(国家) 3.4% [①0% ②4.7%]
3. 警察官 5% [①0% ②6.9%]
4. 自衛官 1.7% [①0% ②2.3%]
5. 博物館学芸員・社会教育主事等教育文化系専門職 6.8% [①0% ②9.3%]
6. その他 0% [①0% ②0%]

VI 教員を希望する場合、次のどれを希望しますか。(複数回答可)

1. 公立中学・高等学校 1.7% [①0% ②2.3%]
2. 私立中学・高等学校 5% [①0% ②6.9%]
3. その他 0% [①0% ②0%]

VII 一般企業を希望する場合、次のどの職種を希望しますか。(複数回答可)

1. 一般事務 38.9% [①18.8% ②46.5%]
2. 製造系 15.3% [①0% ②20.9%]
3. 販売・サービス 37.3% [①37.5% ②37.2%]
4. 報道・マスコミ系 15.3% [①6.3% ②18.6%]
5. 金融系 5% [①0% ②6.9%]
6. その他 6.8% [①0% ②9.3%]

VIII インターン・シップ（企業・役所等での就業体験）はやってみたいと思いますか？

1. はい 76.3% [①62.5% ②81.4%]      2. いいえ 16.9% [①25% ②13.9%]

IX キャリアサポート課で就職相談や就職情報の閲覧をしたことがありますか？

1. はい 10.2% [①12.5% ②9.3%]      2. いいえ 86.4% [①81.3% ②88.4%]

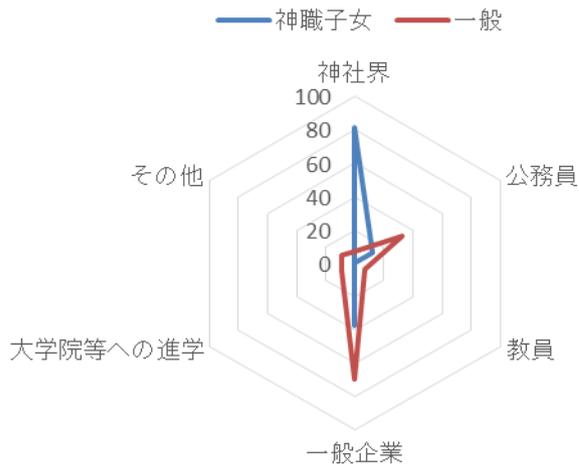
X キャリアサポート課主催のガイダンス・講座・セミナーに参加したことがありますか？

1. はい 23.7% [①0% ②32.6%]      2. いいえ 67.8% [①87.5% ②60.5%]

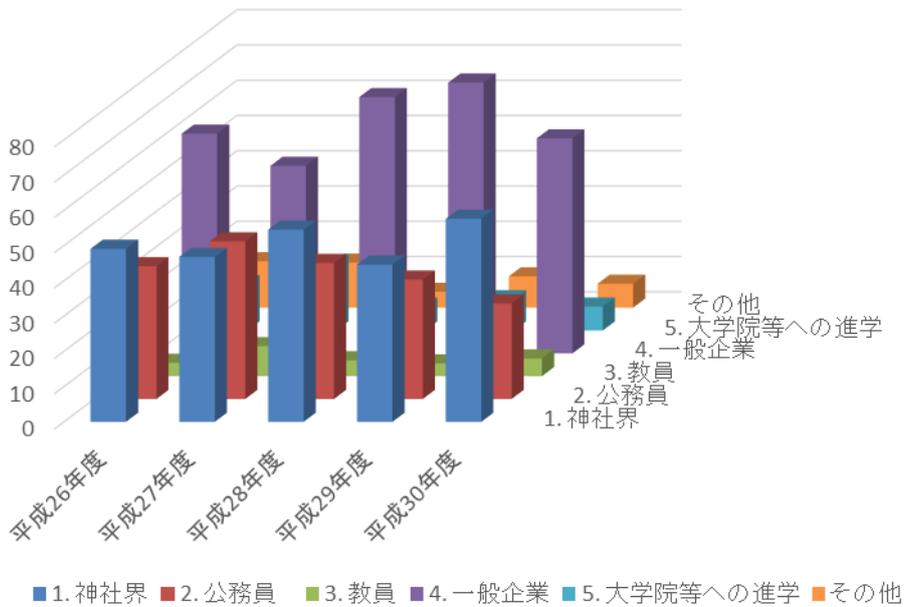
### 【コメント一覧】（学生の記入通り）

- ・教職にするか神職にするか悩んでいます。
- ・やりたいことがたくさんあってどの進路に進むべきか悩んでいます。
- ・ブラックなところには就職したくないです。
- ・やりたい事がなく何になればいいのか分からない。
- ・スポーツをやっているため、スポーツを通して就職するのか、スポーツから離れるか迷っている。
- ・奉職の具体的な流れ
- ・2年生の夏休みにインターンシップに参加しようとしたのですが、選考に漏れてしまいました。併願不可だったため貴重な体験の機会を失ってしまったので、2次という形でも時期をずらして参加できるような形にしてもらえたらと思います。
- ・具体的に何から始めれば良いかわからない。
- ・自分がどういう職に向いているのか良く分かりません。適性審査のようなものや、SPIの対策講座のようなものの実施はあるのでしょうか。
- ・適性検査やSPI対策などのガイダンスまたはセミナーの情報をメールで受け取れるようにしたい。
- ・性格診断などはどのようなものを使うのが良いのでしょうか。ネットのものや紙のものがあると聞きます。受けてみたいですが良く分かりません。
- ・時間が合わず、公務員説明会に参加できなかったのですが、公務員についてまだよく分かっていないので、今後参加したい。

### 平成30年度 就(奉)職希望先傾向表



### 女子全体希望就職先



---

平成 30 年度

神社に関する基礎知識試験についての整理・分析結果

---

【平成 30 年度 神社に関する基礎知識試験についての整理・分析結果】

〔実施概要〕

【内容】 神社検定3級

【実施日】

〔前期〕：平成 30 年 4 月 12 日(木) 3 時間目 「神道概論」授業内  
同 4 月 12 日(木) 6 時間目 「神道概論」授業内

〔後期〕：平成 31 年 1 月 24 日(木) 3 時間目 「神道概論」授業内  
同 1 月 24 日(木) 6 時間目 「神道概論」授業内

【形式】 事前予告なし

〔実施時間〕：前期 45 分間  
後期 45 分間

【算出基準】履修登録上のルールに則し、曜時限目の「神道概論」はフレックスAの学生が、曜時限目の「神道概論」はフレックスBの学生が履修していると見做して計算した。

【受検対象】平成 30 年度入学・編入の新入生+2年生以上の「神道概論」履修者

在籍人数(新入生)：全 244 名(フレックスA 98 名 ・フレックスB 146 名 )

前期受検者：232 名〔フレックスA：89 名(新 61 名・他 28 名)

〔フレックスB：143 名(新入生 126 名・他学年 16 名・不明 1 名)

後期受検者：163 名〔フレックスA：67 名(新入生 51 名・他学年 16 名)

〔フレックスB：96 名(新入生 84 名・他学年 12 名)

○前期からの減少率： $100 - (163 / 232 \times 100) \Rightarrow 29.7\%$

【結果】

〔前期〕受検者全体：平均点 約 59.3 点      新入生全体：平均点 約 58.7 点

・フレックスA：約 59.1 点

・フレックスA：約 58.5 点

・フレックスB：約 59.4 点

・フレックスB：約 58.8 点

〔後期〕受検者全体：平均点 約 73.4 点      新入生全体：平均点 約 74 点

・フレックスA：約 71.9 点

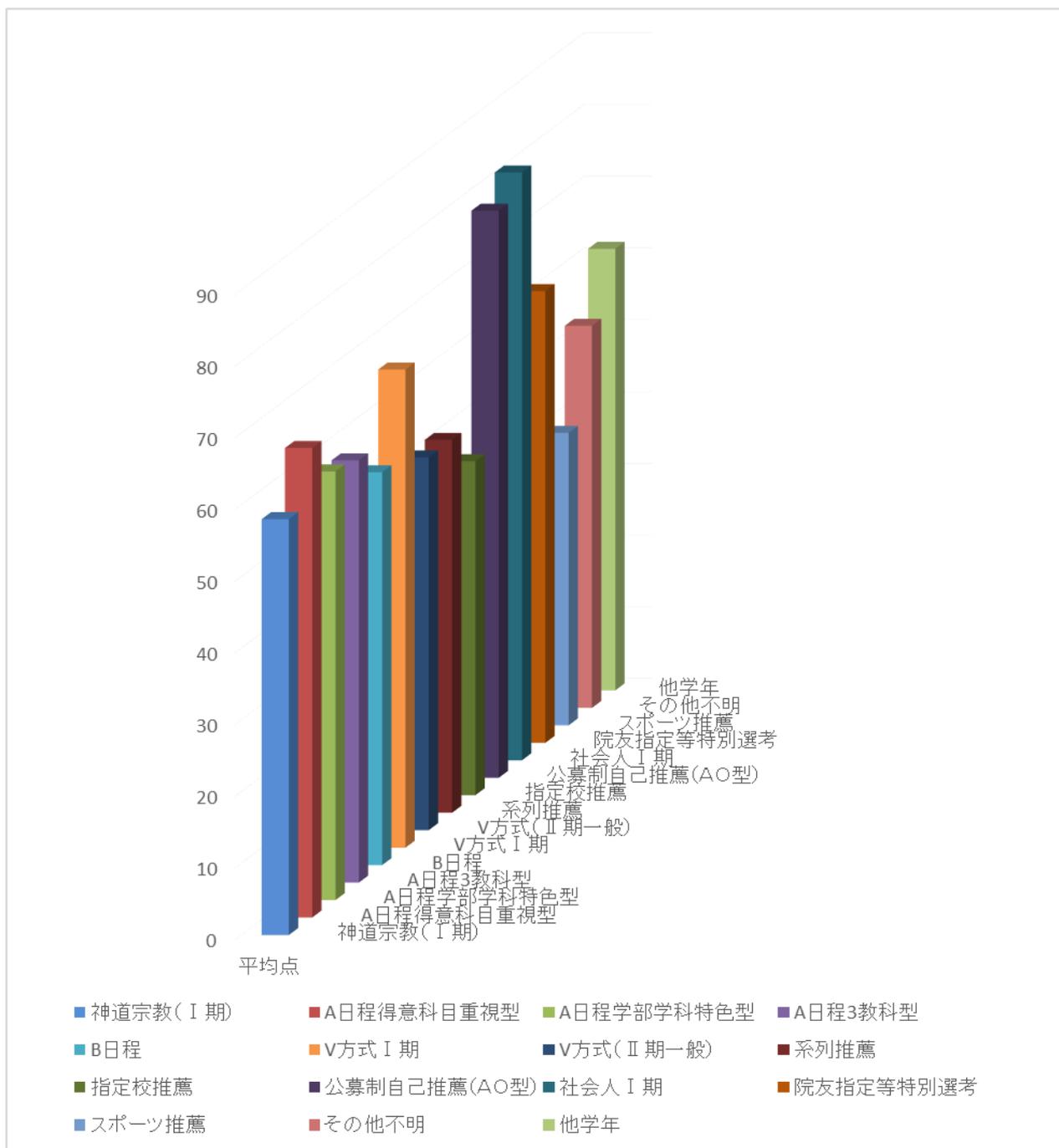
・フレックスA：約 73 点

・フレックスB：約 74.5 点

・フレックスB：約 74.8 点

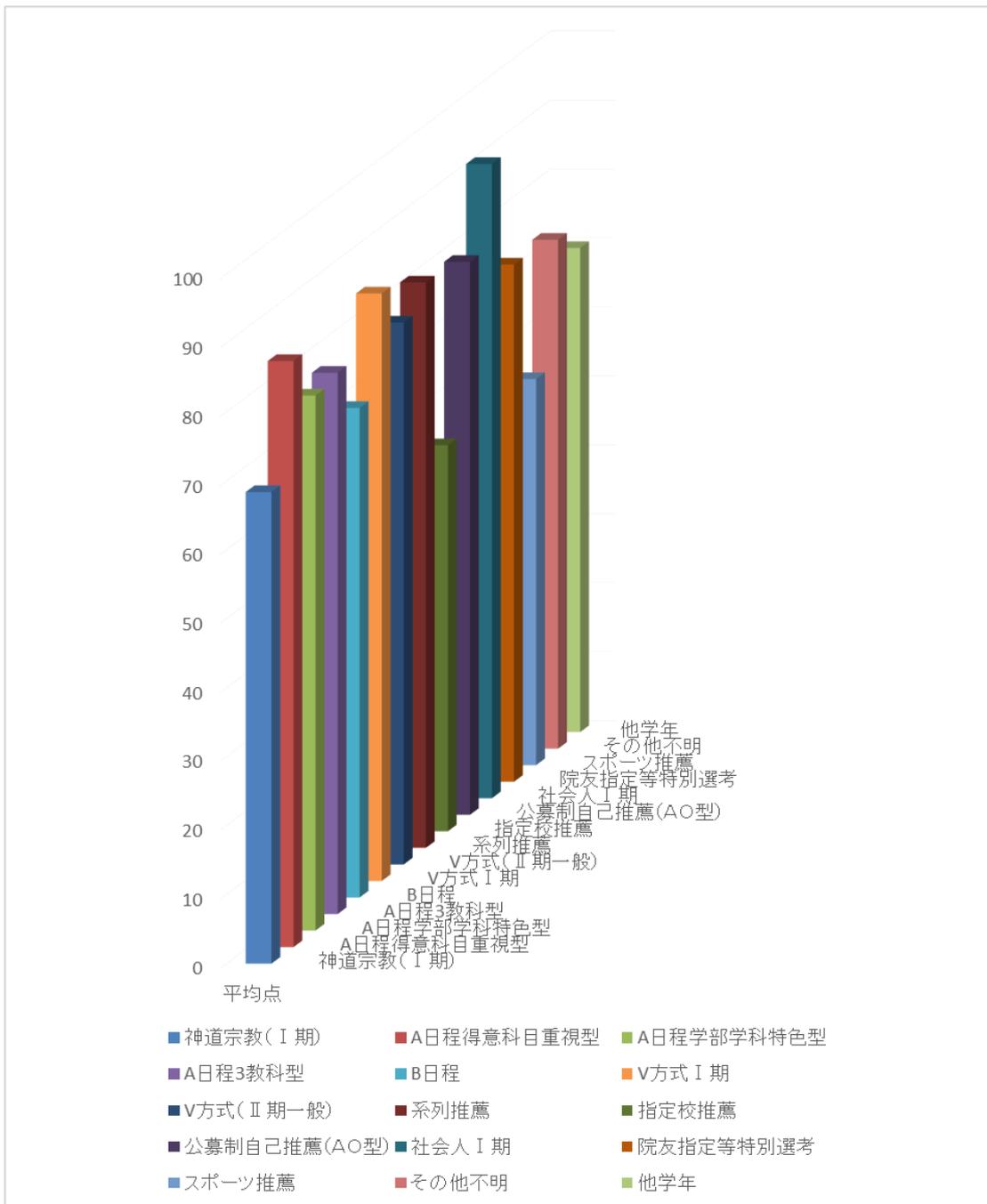
【入試形態別得点一覧表（入学時）】

入試形態	受検者数	平均点	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100
神道宗教（Ⅰ期）	73	58		1	6	10	18	25	10	3		
A日程得意科目重視型	16	65.5				2	2	7	2	3		
A日程学部学科特色型	24	59.8				4	8	8	2	2		
A日程3教科型	14	58.9				5	3	4	2			
B日程	12	54.8				4	3	5				
V方式Ⅰ期	6	66.7					1	3	2			
V方式（Ⅱ期一般）	2	52				1		1				
系列推薦	3	52			1		1	1				
指定校推薦	5	46.6		1	1	1	1		1			
公募制自己推薦（AO型）	12	79.1				1		2	6	2	1	
社会人Ⅰ期	3	82							1	2		
院友指定等特別選考	2	63						2				
スポーツ推薦	11	40.8		2	3	4	1	1				
その他不明	3	53.3			1	1				1		
他学年	45	61.6	1		5	6	6	13	5	6	3	



【入試形態別得点一覧表（年度末）】

入試形態	受検者数	平均点	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100
神道宗教（Ⅰ期）	55	68.4			2	4	8	11	13	14	3	
A日程得意科目重視型	12	85							3	5	4	
A日程学部学科特色型	18	77.6					1	2	9	4	2	
A日程3教科型	10	78.5					1		3	6		
B日程	7	71					1	2	3	1		
V方式Ⅰ期	5	85.2							1	3	1	
V方式（Ⅱ期一般）	5	78.6					1		1	2	1	
系列推薦	1	82								1		
指定校推薦	1	56					1					
公募制自己推薦（AO型）	9	80.2					1		2	4	2	
社会人Ⅰ期	2	92									2	
院友指定等特別選考	1	75							1			
スポーツ推薦	5	56				1	2	2				
その他不明	5	73.8					1	2			2	
他学年	28	70.2				1	3	9	11	1	3	







## 平成 30 年度「FD 推進助成（甲）学部 FD 推進事業」報告書

標記のことに關し、以下のとおり報告いたします。

学 部 名	人間開発学部学部
事 業 名	充実した『理論と実践の往還』による教育インターンシップに向けた学部の関わり方
平成 30 年度実務担当者名	神事 努
<b>事 業 の 概 要</b>	
<p>以下、<u>本年度実施した推進事業の概要</u>について、年初「学部 FD 推進事業」申請書の「目的」「内容」「計画」を参照しつつ、具体的に記入してください。</p> <p>中央教育審議会の答申(2015 年 12 月 21 日)に、これからの学校教育を担う教員の資質能力向上にむけて教員養成段階における学校インターンシップ(学校体験活動)の重要性が示され、各大学で導入が促されている。これに先駆けて 2009 年の学部開設時よりカリキュラムに学校インターンシップ科目が開設されている。学校インターンシップは多くの大学において様々な形態で開設運用されているが、教育実習につなげる指導体制が不明瞭なまま継続されているケースもあり、学校インターンシップの在り方が問われている。そのため、人間開発学部では平成 29 年度の学部 FD 推進事業より、本学部の学校インターンシップの現状と課題の把握について他大学での取り組みも含めて検討を進めてきた。その中で「理論と実践の往還」が進められるインターンシップ体験がその後の教育実習に繋がるものとの共通認識に至った。そこで、本年度の事業では、学生がインターンシップで抱えた疑問・課題を大学に戻り、理論的な裏付けの下で「協議・解決・共有」し、学生が再び実習に従事できるような学部支援体制の構築を目的に進めてきた。具体的には、教育インターンシップ体験事例集(以下、事例集)を作成し、学生がインターンシップ先でどのような課題に直面し、どう考え、どう行動したのかを整理し、これらを教員間で共有することを目的とした。</p> <p>事例集を作成するにあたり、インターンシップ実習中に学生たちが実習校においてどのような課題に直面し対処しているのか、実習記録カードから関連記述を抽出した。この実習記録カードには、学校種や場面ごとに特徴が認められたことから、「学校種」、「場面」の項目で整理し、それぞれに学生が感じた課題を明記した。さらに、事例集の実際の運用では、各教員が担当している科目に関連している事例を検索することが想定されることから、「対応科目」の項目も設けることとした。</p> <p>学部 FD 協議会が平成 31 年 1 月 23 日に開催され(参加教員 34 名)、各学科の科目担当教員から、教育インターンシップの実習現場で学生が直面している課題と対応状況について報告がなされた。そして、質疑応答や意見交換が活発に行われ、学生が抱えている課題を教員間で共有した。</p>	

## 事業の結果

【目的】年初計画で設定した目的は達成できましたか？（または「今後達成できるか？」）（いずれかにチェック）

■十分達成できた（できる） □若干の計画修正の上達成可 □大幅な修正の上達成可 □達成できない

【内容】年初計画で設定した事業内容は適切でしたか？（いずれかにチェック）

□適切であった ■概ね適切であった □あまり適切でなかった □適切でなかった

【点検・評価・共有】点検・評価を行い、その結果を学部教員全員で十分に共有・検討しましたか？

□十分な点検・評価・共有ができた ■一定の点検・評価・共有ができた

□点検・評価・共有のどれかが不十分であった □点検・評価・共有のほとんどが不十分であった

以下、**本年度実施した推進事業の結果**について、年初「学部 FD 推進事業」申請書の「目的」「内容」「計画」「点検・評価」及び上記の自己評価（チェック項目。特に【点検・評価・共有】については必ず言及）に照らして記入してください。

平成 22 年度から開講されている本学部の教育インターンシップであるが、子どもの理解、教師の仕事の種類と内容の理解において成果があったことが報告されている（小笠原, 2016）。また、子どもとの具体的ななかかわりを通じた経験の充実、子どもの実態をとらえ様々な方向からアプローチする教師の指導法や対応の理解、安全教育・人権教育・特別支援教育の理解においても効果が報告されている。平成 29 年度に開かれた FD 協議会では、これらの科目設置の効果について各教員間で共有がなされた一方で、課題もいくつか挙げられた。その中で特に、インターンシップの効果を最大限発揮するための「理論と実践の往還」という観点から議論がなされた。小笠原の報告（2016）においても、教育インターンシップの経験を次のステップにつなげる学びの交流について課題が挙げられており、大学－現場－大学といった「スパイラルな学び」をどう継続するののかについて検討していく必要性が示された。

そこで 30 年度の学部 FD 推進事業では、「理論と実践の往還」が可能な学部による支援体制の構築をするために、まず、教育インターンシップ体験事例集（以下、事例集）を作成した。事例集では学生がインターンシップ先でどのような課題に直面し、どう考え、どう行動したのか記載されている。学生が直面した事例を各教員が認識することで、授業の改善に役立つ示唆を得ることを目的とした。

事例集を作成するにあたり、学生が直面している課題を以下の方法で抽出することを予定していた。

①実習記録カードから関連記述内容を抽出

②中間・事後報告会時における実習中の疑問・課題についての対処についてアンケート調査を実施

しかしながら、①だけでもかなりのサンプルがあることがわかり、学生の負担や運用上の問題を考慮し、①のみから学生の課題を抽出することにした。年初計画とは、サンプルを収集する内容は変更となったが、多くの事例が収集でき、おおむね順調に事業を進めることができた。

学部 FD 協議会が平成 31 年 1 月 23 日に開催され（参加教員 34 名）、各学科の科目担当教員から、教育インターンシップの実習現場で学生が直面している課題と対応状況について報告がなされた。そして、質疑応答や意見交換が活発に行われ、学生が抱えている課題を教員間で共有した。「学生の声を意識した授業をおこなうべきだと感じた」という様な意見も挙がり、年初計画で設定した「授業の改善に役立つ事例の共有」は十分達成できたものと考えられる。

## 今後の展望

【改善・期待される効果】本事業で得た知見は、今後の当該学部の教授法や授業改善に効果的であるか？

とても効果的である  効果的である  あまり効果的でない  効果的でない（いずれかにチェック）

効果的である（ない）と判断した理由を、平成 30 年度以降の当該学部の教授法や授業改善との関連から、具体的に述べてください。

本学部における教育インターンシップをより効果的なものにするためには、インターンシップ後の学生が直面した問題を消化できるような事後指導の体勢を構築する必要があった。体験事例集を作成し、学生たちが実習校においてどのような課題に直面し対処しているのかを各教員間で共有したが、インターンシップの科目担当以外の教員の支援が必要不可欠であることが明らかになった。多くの事例が共有されたことで、学生がインターンの実習現場で持ちやすい課題の傾向を理解した上で授業を展開することが期待される。これにより、学生がより高いレベルの課題を持つようになることにつながるであろう。

【汎用性・波及効果】本事業で得た知見は、学部学科を超えた本学学士課程教育全体または教員の職能改善に効果的であるか？

とても効果的である  効果的である  あまり効果的でない  効果的でない（いずれかにチェック）

効果的である（ない）と判断した理由を、平成 30 年度以降の当該学部の教授法や授業改善との関連から、具体的に述べてください。

学校インターンシップは、今後教職課程で中核をなすものと予想される。その運用については、理論と実践をどのように往還させるかという観点が重要である。今年度は、インターンシップ体験事例集を作成したが、学生がインターンシップで抱えた疑問・課題を教員が知り、授業科目に取り入れるという点について、効果が高いと考えられた。今後全学的に学校インターンシップに取り組む場合、今年度人間開発学部 FD 推進事業での取り組みは、大学－現場－大学といった「スパイラルな学び」を継続していくことに活用できるものと考えられる。

【経費の執行】経費の執行は、執行計画表に基き執行時期・費目別執行率とも適切でしたか？

本年度の経費の執行状況について、執行計画表に基づき、中間報告の前後に分けて記入してください。

体験事例集の印刷製本費を当初は 250,000 円で想定していた。しかし、非常に安価（75,330 円）での納品に至ったため、印刷製本費の執行率は低くなった。また、実習記録カードからの事例の抽出ではアルバイトをお願いしたが、こちらも時給や所要時間に若干の変更があったものの、概ね計画に基づいて執行されたと考える。

【成果報告会】成果報告会の内容（説明事項、共有事項、問題提起等）について現時点での概要をお書きください。



平成30年度  
学部FD推進事業 報告会

充実した『理論と実践の往還』による  
教育インターンシップに向けた  
学部の関わり方

ーインターンシップでの学生の気づきを授業に生かすー

人間開発学部  
山田佳弘



昨年度の事業概要



中央教育審議会答申（2015年）に、  
学校インターンシップの重要性が示され、  
各大学での導入が促されている。

本学部の教育インターンシップの現状と課題の把握を他大学の取り組みも含めて検討



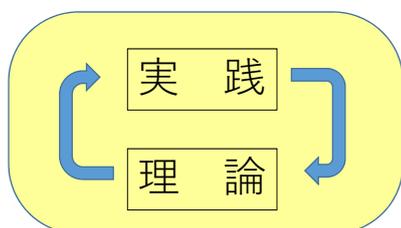
「理論と実践の往還」のある学校インターンシップ体験が、その後の教育実習に繋がる。

2

## 今年度の事業目的



学生がインターンシップで抱えた疑問・課題を大学に戻り、理論的な裏付けの下で「協議・解決・共有」し、学生が再び実習に従事できる「**理論と実践の往還**」が可能な学部支援体制の構築を目的とする。



3

## 事業計画・方法



実習中に学生たちが実習校でどのような課題に直面し対処しているのか。

その情報を「**実習記録カード**」から関連記述を抽出収集・整理し、体験事例集にまとめ、学生が直面する課題と対応状況について意見交換も踏まえて学部教員で共有する。

4

## 調査対象



教育インターンシップ活動記録 (第 回目)		月 日 ( ) 天気:
学籍番号	氏名	印
園・施設名		
活動時刻	環境の種類や活動と幼児の姿	気づいたこと・考えたこと
幼稚園・保育所等の活動記録用紙		
今園計	時間 分	次回予定: 月 日 ( ) : ~
園・施設担当者署名	印	大学担当者署名 印

※ 行為や活動内容の記録だけで終わりにせず、必ず考察・振り返りの欄を記入すること。  
活動内容と考察はその日のうちに、記憶と体験が鮮明なうちに記録すること。

平成29年度履修学生(223名分)

教育インターンシップ受講者数

初等教育学科 111名  
健康体育学科 39名  
子ども支援学科 73名

小学校実習 117名  
中学・高校実習 31名  
幼稚園・施設実習 75名

5

## 小学校での教育インターンシップ



### 体験事例抽出手続き

調査対象	H29年度履修者 117名
活動記録	8~12ページ/人
記述内容	1ページに3~5種の内容



## 小学校での教育インターンシップ



【学校種】：小学校（国語）

【場 面】：1年：片仮名

片仮名と平仮名が似ているもの、大きく違っているものについての確認をしていた。「ホ」を扱う時には漢字の「木」に似ていることなどを提示しつつ説明をしていたので子供たちも集中力が切れることなく話を聞いていた。片仮名の「モ」は平仮名の「も」と書き順が違うことに全員で空中に書いて確認していた。**その時に間違えたということを経験することで書き順が違うことが強く記憶に残るのかなと思った。**

【対応科目】：初等科教育法（国語）、国語概説、教育の方法と技術

想定される授業内容

- 文字学習の指導方法
- 文字の成り立ち
- 書き順指導
- 発問、板書の工夫
- 動作化 など



7

## 小学校での教育インターンシップ



【学校種】：小学校（社会）

【場 面】4年：野菜や果物、肉、魚などの産地調べ

話し合ったり、自分の意見を言えるような状況を作るとはクラスの雰囲気がいいからだと思った。アクティブラーニングが促進される中、**自分の考えたことを言えるような環境は子どもたちの学習しやすい環境作りと同じだ。**

【対応科目】：初等科教育法（社会）、社会科概説、教育の方法と技術

想定される授業内容

- アクティブラーニングとは
- 学習指導要領の確認
- 調べ学習の方法
- 教材・教具の工夫・・・ICT活用 など



8

【学校種】：小学校（図画工作）

【場 面】

制限が多く、指示を聞いていないと間違えそうなことがあり、案の定、間違える子がいた。一つの作業を順に追ってやっていかないと難しそう。絵具を洗う時の水道がすごかった。先生も教室を離れるわけにもいけないので大変だと思った。

【対応科目】：初等科教育法（図工）、図工概説、教育の方法と技術



想定される授業内容

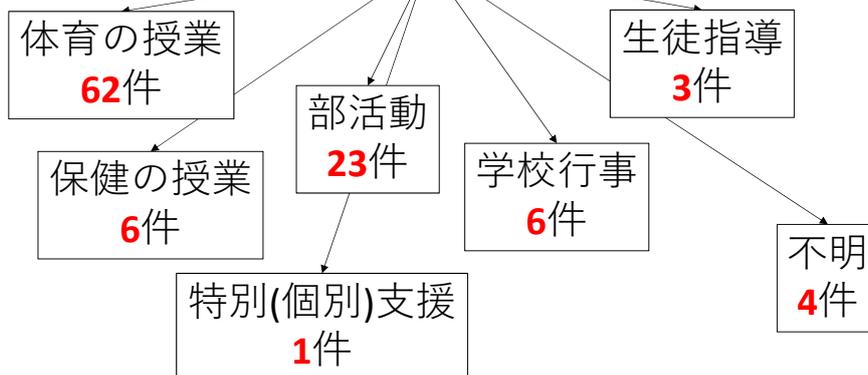
- 学習指導要領上の位置づけ
- 材料、場所、空間
- 造形遊びをする活動の手順
- 指示の方法

など

### 活動記録の特徴

- 「国語」・・・低学年の学習補助の記述が多い
  - 「算数」・・・授業補助  
(つまづきへの対応、個に応じた指導)
  - 「生活」「社会」・・・校外学習や調べ学習の補助
  - 「理科」
  - 「家庭」
  - 「図工」
  - 「音楽」
  - 「体育」
  - 「学級活動」
  - 「休み時間」
  - 「給食」
- 実験、実習、制作、実技の授業準備、指導補助
- 児童との関わり、子ども理解  
信頼関係づくり、学級経営

全体から抽出された課題：89件



【学校種】：中学校  
【場 面】：体育実技（マット運動・跳び箱）

ケガ人が出た。早い対応。ケガ人がでた！どうしよう！ではなく、何をすれば良いかを冷静に考えることが大切。

対応科目：救急法、安全教育、運動方法基礎実習表現系1（体操）、指導法実習表現系1（体操）

【学校種】：高校  
【場 面】：体育実技（テニス）

正直何もできなかった。テニス経験者としてたくさん教えていたが初心者には難しいらしくそれなりにどう上手く伝えられるか考えなければならぬ。

対応科目：運動技能未開発者の指導、運動方法基礎実習球技系4（テニス）、指導法実習球技系4（テニス）

## 中学・高校での教育インターンシップ



【学校種】：中学校  
【場 面】：保健授業

とても詰まっていたので難しい内容だったので板書をいつもより少なくして教科書にマーカーを引くようにしていた。そういった工夫は自分もしていきたいと感じた。

対応科目：保健科教育法Ⅰ、保健科教育法Ⅱ

【学校種】：高校  
【場 面】：保健授業

パソコンやタブレットを使って授業で発表をしていて、効率的で分かりやすい発表を見ることができました。

対応科目：ICT授業構成論

13

## 中学・高校での教育インターンシップ



【学校種】：高校  
【場 面】：部活動

練習中に事故で部員が頭から血を出してしまった。その時自分しか現場におらず、内心とてもパニックになっていたけれども外に出てしまうと生徒により心配をかけるので、冷静になりしっかりと生徒に指示を出せたので対応としては良かった。

対応科目：スポーツ医学、救急法、安全教育

【学校種】：高校  
【場 面】：部活動

分からない部分をどう言葉で伝えるのかとても苦労した。最終的に動きを真似してもらったが、女子にこれは通用しないので自分の考えを自分の言葉で伝える練習をしっかりと練習しなければならないと思った。

対応科目：コーチング論、性別による身体特性

14

## 中学・高校での教育インターンシップ



【学校種】：中学校  
【場 面】：体育祭

SNS上への写真、動画の扱いや注意をおこなっていた。徒競走では、肉離れを起こしてしまった生徒がおり、スムーズに対応していた。私にも、そのような突然の事象に対し、すぐに動ける判断力と、そこでスムーズに正確な行動ができるための知識、経験を付けなければいけないと感じた。

対応科目：安全教育、救急法

【学校種】：高校  
【場 面】：体育祭

用具の運搬はスムーズにやることと的確に仕事をこなすことが必要だと実感した。騎馬戦や棒倒しなどは危険を伴うため、先生たちの補助が必須であった。また当日は生徒が落下してしまい救急車が来るなど、緊張感のある現場を見れていい経験になったが、安全面での注意は特に必要だと感じた。

対応科目：安全教育、救急法、体育科教育法

15

## 幼稚園・保育所等の教育インターンシップ



### □生活

- ・ 基本的な生活習慣への保育者の援助

(午睡の場面) 私は、自分の周りにはいる子みんなに平等にトントンできるようにしていたが、先生に「一度にたくさんの子どもを見るのではなく、目の前の子どもと向きあうことが大事」と教えていただいた。子どもたちに向き合うということについて改めて考えようと思った。

対応科目：保育内容（健康）、保育内容（人間関係）、乳児保育Ⅰ・Ⅱ

- ・ 保育室の環境

昼食時間、部屋は同じだが食べる場所は低い棚や壁で仕切られていた。保育環境の構成要素でもある空間や雰囲気を作り出すために、区切られているのだと思った。特に、0歳児は、周囲の環境の変化を敏感に感じ取るので、区切ることで昼食時間というものへの認識も高まるのだろうと考えた。

対応科目：保育内容（環境）

16

## 幼稚園・保育所等の教育インターンシップ



### □遊び ・ 遊びのルール

「じゃんけんで決めるのはどう？」と提案すると、じゃんけんに負けたHちゃんは不本意そうであったり、勝ったNちゃんもよくわかっていなかったようだった。結果的に少し混乱させてしまった。  
「じゃんけん」自体はあいまいな時期であるのに、安易な提案だった。双方の意見を聞き、譲ってもらうなど、二人のためにはもう少し方法があったかと思う。

対応科目：幼児理解の理論と方法、保育内容（人間関係）、保育内容（環境）

### □設定活動 ・ 絵本の読み聞かせ

絵本を読んでいる時に、先のページをめくろうとする子どもには、子どもの興味に寄り添うことを大切に、めくってしまうか、正しく絵本を読むために「ちょっと待てね」と止めてしまうかを悩んだ。子どもにとって最善の絵本の読み方、夢中になってもらうためにどのような工夫をすればよいかを考えた。

対応科目：保育内容（言葉）、保育内容（環境）

17

## 幼稚園・保育所等でのインターンシップ



### □その他

#### ・ 学生の立場での不安や悩み

プールに入る前、なかなか先生の話を見聞かず、私に話しかけることに夢中になっている子がいた。「先生の話聞いてないと、どうしたらいいかわからなくなっちゃうよ。」と言ったが、それでも話し続け、私の話はなかなか聞いてくれない。

対応科目：教育実習ⅠA・ⅠB、保育実習指導ⅠA・ⅠB、保育実習指導Ⅱ、保育実習指導Ⅲ

#### ・ 行事や安全管理、避難訓練に関する記述

地震を想定して部屋の中央に避難し、その後、火災を想定して園庭に避難するものだった。1歳クラスの中には、階段の昇り降りが難しい子もいるので、おんぶひもを使い先生たちがおんぶして3人～4人で手をつないで園庭に避難した。おんぶひもを使ったのは初めてで、重くて苦しいと感じた。いざという時には大人が冷静になる必要があるなと思い、避難訓練に参加できてよかったと思う。

対応科目：子どもの健康と安全、保育内容（健康）

18

□その他

・養育者への共感

泣き止まない子を抱っこしていたが、軽いけど腕に疲れがたまり、  
重いと感じてしまった。先生やお母さんを尊敬した。

対応科目：教職論、子ども家庭支援論、子ども家庭支援の心理学

・家庭環境への配慮

父の日の制作物として表彰状を作った。  
シングルマザーの方だと父の日について配慮しなければならないし、  
保育者としての対応というより、人としての対応だと考えた。もし、  
1クラスだけそのような対応をする子がいたとしても、他クラスで  
父の日の製作をすることはどうなのだろうと思った。

対応科目：子ども家庭支援論、子ども家庭福祉

19

今後に向けて

当該科目担当以外の教員による支援も必要で、  
学生の経験を意識した授業展開にする。

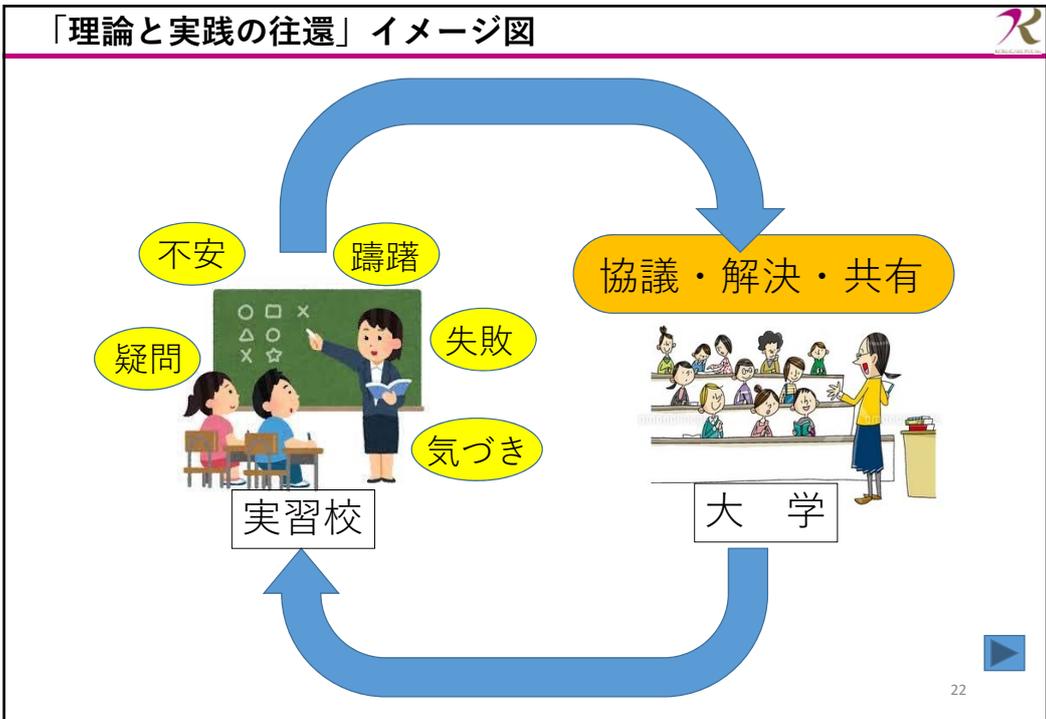
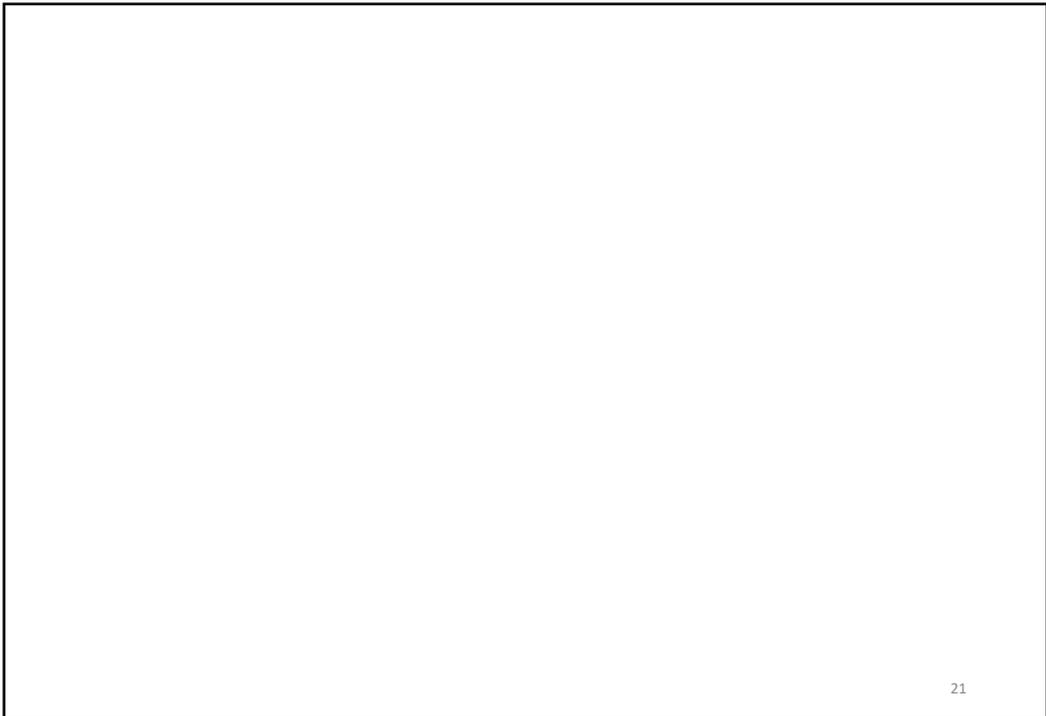


■授業での問いかけ、体験の言語化、フィードバック

■大学の授業で解決できる事例を予め扱う

⇒今よりも高いレベルの疑問や教育現場での深い  
理解に繋がる

（学生が学校現場で感じた不安や悩みなどを教員に  
即座に伝えるシステム作り ⇒ Web上での共有 <sup>20</sup>）





## 平成 30 年度「FD 推進助成（乙）グループによる FD 推進事業」報告書

標記のことに関し、以下のとおり報告いたします。

学 部 名	人間開発学部
事 業 名	ルーブリックを活用した日本語関連科目の学修支援
申請者氏名（所属／職名）	成田 信子（人間開発学部初等教育学科／教授）
<b>事 業 の 概 要</b>	
<p>本事業では、大学の学修に必要な基礎的な言語能力を身に付けることをねらいにした共通教育「基礎日本語」を中心に、学生の自己学修能力を育成することを目指して次の二通りのねらいに基づき学修支援を試み、研究・研修を行った。</p> <p><b>ねらい</b></p> <p>(1) 文章記述においてルーブリックを使用し、学生の自覚的な言語使用また言語能力を伸ばそうとする意欲を喚起し、その効果を検証すること。</p> <p>(2) 文章診断ソフトを利用し、学生が作成した文章を入力して診断を行い、自ら改善を試みること。</p> <p><b>内容</b></p> <p>(1) の研究・研修推進</p> <p>「基礎日本語」の半期 15 回において取り上げる 3 種の文章について、ルーブリックを用いた自己評価、相互評価、教員評価を行った。その結果を科目担当者及び研究分担者が集まる研究会等で共有し、後期に向けて改善を行った。</p> <p>(2) の研究・研修推進</p> <p>「基礎日本語」の前期 3 クラス、後期 5 クラスにおいて、文章診断ソフト「文採」（旧 SAI）を使用した自己診断を行った。ソフト採点 80 点以上で課題提出可能とし、診断項目に照らして自らの文章を改善する姿が見られた。</p> <p><b>研究会・研修会</b></p> <p>(1) (2) とともに内容について、下記の研究会において、話題提供、講話、討議等を行い、実践の成果を共有し、次への課題を議論した。</p> <p>第 1 回(4/18) 29 年度グループ FD 概要紹介/30 年度グループ FD 計画と分担</p> <p>第 2 回(7/4) 話題提供「これまでの取り組みから」高橋大助 討議：吉田、坂本、井上、鈴木、大津、成田</p> <p>第 3 回(8/3) 話題提供「ルーブリックについて」成田信子 討議：渡邊、吉田、戸村、鈴木、大津</p> <p>第 4 回(9/20) 話題提供「『基礎日本語』の成績評価について—2018 年度前期の実践から—」笹川勲 討議：成田、鈴木、大津、「基礎日本語」科目担当者</p> <p>第 5 回(1/31) 話題提供「文採（旧 SAI）と文体」岡田誠 討議：坂本、渡邊、高橋、鈴木、大津、成田、 「基礎日本語」科目担当者</p> <p>第 6 回 話題提供 ルーブリック（評価シート）による自己評価と相互評価について /鈴木道代・嶋田龍司 講話 日本の大学におけるこれからのアカデミック・ライティング指導を考える 講師 加納なおみ（お茶の水女子大学） 参加と討議：坂本、吉田、高橋、鈴木、大津、「基礎日本語」科目担当者、31 年度担当予定者</p>	

## 事業の結果

【目的】 年初計画で設定した目的は達成できましたか？（または「今後達成できるか？」）（いずれかにチェック）

十分達成できた（できる） 若干の計画修正の上達成可 大幅な修正の上達成可 達成できない

【内容】 年初計画で設定した事業内容は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【計画】 年初の計画は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【役割分担】 年初計画で設定した役割分担は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【点検・評価・共有】 点検・評価を行い、その結果をグループ全員で十分に共有・検討しましたか？

十分な点検・評価・共有ができた 一定の点検・評価・共有ができた

点検・評価・共有のどれかが不十分であった 点検・評価・共有のほとんどが不十分であった

申請書に記述した目的はほぼ達成できたが、内容に記述した1点目の「高等教育におけるルーブリック使用の実際調査」は文献調査にとどまり、先進校の実際調査にはいたらなかった。今後ルーブリックの改善にあたり、聞き取り調査を行い、実際の使用について留意点や相互交流の成果、TAの配置等細かい点を把握することが必要である。

申請書の計画3でルーブリックの開発と授業における使用は行ったが、開発したルーブリック使用による学生のメタ認知等の自己学修能力伸長の調査については、心理学的な知見も生かして行う予定であったが、使用が精一杯であり、能力の伸長を客観指標で行うことまではできなかった。今後の課題として、「4 文章診断ソフトによる文章記述面の自己診断の効果検証」は事例研究として文章の改善例を確かめることができた。「5 教員の添削を文章の構成、論理展開に重点化し、添削による学生の記述力の伸長を検証する。」については、研修会で一定の感触を得たが、どのように重点化するかについてさらなる検討が必要である。

役割分担については、実践面についてはかなり効率的に行えたが、効果の検証面で役割遂行に課題が残った。

点検・評価・共有については、FD研究会ならびに科目担当者を交えた研修会でルーブリック開発の成果と課題、文章診断ソフトの運用と効果についてある程度の共有ができた。開発と実施内容の客観的な評価に至ることが今後目指すところである。

## 今後の展望

【改善】本事業で得た知見は、今後の当該学部の教授法や授業改善に効果的であるか？

とても効果的である 効果的である あまり効果的でない 効果的でない（いずれかにチェック）

① 本事業で得られた成果を、次年度以降の教育活動にどのように反映・活用して行くか

「基礎日本語」にかかわるグループFD推進事業は平成29年度に「学生の基礎日本語力を向上させる授業方法の開発」平成30年度に「ルーブリックを活用した日本語関連科目の学修支援」と二カ年連続で科目の内容・方法にかかわる研究を行ってきた。29年度の学生の実態調査から、自己学修、メタ認知能力の必要性が浮かび上がり、30年度の主要テーマに結びついた。30年度ルーブリックとソフトの使用によって、感触としては学生の自己学修力が向上したと捉えられるが、まだ感触であり、客観指標を用いた検証が求められる。ルーブリックの使用はまだ試用の段階であり、今後内容と使用方法についてさらなる改善をしていく予定である。文章支援ソフトは、その有用性が学生に実感された。予算措置の問題があるが可能な範囲でトライアルを続ける必要がある。

② 本事業で見出された課題等について、次年度以降はどのような取り組みが必要と考えられるか

研修会のありかたとして、ただ実践の結果を持ち寄るではなく、検証を行う仕組みが必要である。実践報告のあり方が具体的な改善につながるよう考える必要がある。

例えば、ルーブリック使用によって、教員の添削はどのように重点化され、学生の記述がどのようにかわったかなどを具体的に共有できるとよい。FD講話でアメリカの事例が紹介され、教員の添削の観点のはっきりしていることが、学生の記述改善につながったとの知見を共有することができた。「基礎日本語」でも応用可能な観点だと考えられる。

【経費の執行】経費の執行は、当初の執行計画に基き執行時期・費目別執行率とも適切でしたか？

経費の執行については、中間報告で減額補正を行ったが、なお下記の項目について計画どおりに執行できない面があった。

一般旅費：理由は、事業の結果の欄にも記述したが、先行事例の調査が文献調査にとどまり、訪問調査まで至らなかったことが挙げられる。

労務委託費：当初は昨年同様、学生のアンケート調査を行ったものを分析する予定であったが、ソフトやルーブリックの開発面に力を注いだ結果、アンケート分析が行えず、労務委託費の執行ができなかった。他の項目においては、費目によって執行率に若干差があるが、計画の履行に必要な経費の使用ができたと考えられる。

【成果報告会】成果報告会の内容（説明事項、共有事項、問題提起等）について現時点での概要をお書きください。

成果報告会では、スライド資料を参照しながら、事業概要と成果と課題を報告した。以下一部抜粋する。

#### 成果

ペアで行うルーブリック評価の開発

サイクル：自ら文章を書き、同じ基準でほかの受講生の文章を読むことの繰り返し→ 評価することの意味をつかむ→次の文章作成

自己学修力を支援する手がかり

評価指標に設けたコメント欄の有効性

#### 課題

評価項目及び評価基準の精査

評価基準を具体的に判断するための方策の検討

複数教員による評価

フィードバックの在り方

他の報告においてもルーブリックを使用した演習科目の取り組みが発表され、作成手順、指標等を共有することができた。本報告への質問は、教員にとってルーブリック使用の効果というものであったが、今後は発表の眼目であった学生の自己学修力の開発と教員の評価作業の関連について、焦点をあてる必要があると感じた。

平成30年度國學院大學FD推進助成（乙）

## ループブックを活用した 日本語関連科目の学習支援

「基礎日本語」における自己学修力の育成



研究代表者 成田信子（「基礎日本語」科目マネージャー  
人間開発学部教授）

## 「日本語リテラシー」にかかわる科目

人間開発学部を例にすると・・・

### 共通教育科目

「基礎日本語」1・2年次（選択）2単位

「導入基礎演習」1年次（必修）2単位

専門教育科目 「演習」3年次 2単位

「演習・卒業論文」4単位



# 「基礎日本語」科目概要 1 目標

「基礎日本語」＝汎用的スキル科目群

【知識・技能】（RS-A2）

- ・大学の学修に必要な熟語、同音異義語、慣用句等基礎的な語彙の量を増やすことができる。
- ・語彙語句の適切な使用により、文や文章を書くことができる。

【思考力・判断力・表現力】（RS-B2）

- ・一つのテーマ（論題）に対して問いをもち、自分の主張を述べることができる。
- ・自分の意見を根拠をもとに論理的に文章に表すことができる。
- ・「考える」と「書く」という学修の往還を通して、自身の思考を深めることができる。

【主体性・多様性・協働性】（RS-C1）

- ・自ら問いをもって考え、グループワークにおいて、受講生と自由に議論することができる。



# 「基礎日本語」科目概要 2 授業計画

第1回 ガイダンス（授業の目的・方法・計画・現在の自分の文章力自己評価）

文章のどのような点が評価されるかを知る。

構成を考えて小論文を書こう<YES OR NO型小論文> ① ・600字で小論文を書く。

第2回 構成を考えて小論文を書こう<YES OR NO型小論文> ②

- ・主張に対する反論、再反論等を考え、論理的な構成について学ぶ。

第3回 構成を考えて小論文を書こう<YES OR NO型小論文> ③

- ・論理的な構成を考えて、小論文の書き直しをする。

第4回 構成を考えて小論文を書こう<YES OR NO型小論文> ④

- ・小論文を推敲し、清書をする。

第5回 文章を読んで、自分の意見を書こう<読解型レポート> ①

- ・文章の内容を要約し、筆者の主張をつかむ。

第6回 文章を読んで、自分の意見を書こう<読解型レポート> ②

- ・<読解型レポート>の評価シートで、どんな点に気を付けて書いたらよいかを知る。（図表1）
- ・文章に取り上げられたテーマについて自分の主張をもち、400字の<読解型レポート>を書く。

第7回 文章を読んで、自分の意見を書こう<読解型レポート>③

- ・<読解型レポート>の交流をし、評価シートによって自己評価、相互評価を行う。



## 基礎日本語」科目概要<sup>2</sup> 授業計画続き

### 第8回 テーマについて考え、自分の意見を書こう<調査型レポート>①

- ・引用・剽窃について学ぶ。 ・テーマについての問いの立て方を学ぶ。
- ・自分の問いを立てて、文献調査の見通しをもつ。

### 第9回 テーマについて考え、自分の意見を書こう<調査型レポート>②

- ・<調査型レポート>の評価シートで、どんな点に気を付けて書いたらよいかを知る。 (図表2)
- ・文献調査をもとに、自分の主張を決め、1000字のレポートを書くための構成を考える。

### 第10回 テーマについて考え、自分の意見を書こう<調査型レポート>③

- ・調査結果を根拠として構成を考え、記述する。

### 第11回 テーマについて考え、自分の意見を書こう。<調査型レポート>④

- ・<調査型レポート>の交流をし、評価シートによって自己評価、相互評価を行う。

### 第12～14回 敬語を学ぼう①②③

### 第15回 返却・フィードバック ・自ら学修を振り返り、成果や課題を明らかにする。



## ルーブリックの導入

「パフォーマンスの成功の度合いを示す尺度と、それぞれの尺度にみられるパフォーマンスの特徴を説明する記述語で構成される評価基準の記述形式」(西岡2004)

「観点×レベルのマトリクス」(松下2016)

「記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難な、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある。」(中教審答申2012)

### ルーブリック評価

妥当性 ○ パフォーマンスにおいて調べたいことを反映しているか

信頼性 △ 同じ人が同じような条件で指標を用いたときに同じ結果を出すか

### 文章表現におけるルーブリックの導入

参考：先行実践(春日美穂2015)(小野和宏・松下佳代2016)(渡邊淳子2018)



# ループリックの作成の手順

一般的な評価指標の観点

<構成力><論理性><客観性><要約><文章表現>× 3段階の基準

先行実践参照

<問題設定>を加える

FD研究会での検討（30年度前期→後期）

- ・ 3段階→4段階
- ・ 文章記述の学修内容の変更→<論理性>の基準の修正
- ・ 文章の種類による文章の型の変更→<構成力>の基準の修正



〈読解型レポート〉評価シート				曜日	
評価の観点	よく出来ている	概ねよく出来ている	もう少しがんばろう	がんばろう	
論理性	①問題を的確にとらえて、自分の主張を書いている。 A社の社説の主張をふまえて、的確な批判、あるいは発展させた主張を書いている。	A社の社説の主張に沿って主張を述べている。	A社の社説の主張と自分の主張が差別化できていない。	自分の主張を述べていない。	
客観性	②客観的な根拠を示している。 自ら見出した客観的な根拠を示している。	A社の社説にすでに指摘されている、客観的な根拠を示している。		客観的な根拠を示していない。	
構成力	③頭括型または双括型の構成で書いている。 頭括型または双括型で書いている。			頭括型または双括型で書いていない。	
要約	④文章の内容に沿った論題が付けられている。 適切な論題が付けられている。		適切な論題が付けられていない。	論題がない。	
文章表現	⑤「である」調で書いている。 「である」調で文章全体が統一されている。			「です」「ます」調が混在している。	
	⑥主語と述語とが照応している。 全体的に主語と述語とが照応した文を書いている。			主語と述語とが照応していない文がある。	
	の一文が適切な長さである。 一冊長い文でも、3行（60字）以内である。			3行以上にわたる文がある。	
[批評やコメント]					

## 〈読解型レポート〉のループリック（図表1）

社説を読んで、問いについて自らの主張を述べる〈読解型レポート〉のループリック

互いの文章を交換して読み合う

→評価とコメント

欄 自己評価

欄 相互評価

相互評価 > 自己評価 > 教員の評価



＜調査型レポート＞ 評価シート					曜日	期
評価の観点	よく出来ている	概ねよく出来ている	もう少しがんばろう	がんばろう		
題 ①与えられたテーマから、自分で問いを設定している。	与えられたテーマについて、背景をつかんで問いを設定し、論争の意義や理由を述べている。	与えられたテーマについて、背景をつかんで問いを設定している。	与えられたテーマについて、問いを設定しているが、背景が述べられていない。	問いを設定していない。		
論 ②問いに対して、自分の主張を述べている。	問いに対して、筋道をたてて自分の主張を説明し、明確な主張を述べている。	問いに対して、明確な主張を述べている。	問いと主張が整合していない。	主張を明確に述べていない。		
実 統 性 ③体系的な根拠を示している。	調査結果の信頼性を吟味して、根拠として示している。	調査結果を根拠として示している。	調査結果を根拠として示していない。	根拠を示していない。		
構 成 力 ④論議の設定から結論に至るまで論理的な組み立てで構成されている。	記述の順序や段落相互の接続が整っている。			記述の順序や段落相互の接続がわかりにくい。		
要 約 ⑤文章の内容に合った論議が付けられている。	適切な論議が付けられている。		適切な論議が付けられていない。	論議がない。		
文 章 の 表 現 ⑥「である」調で書いている。	「である」調で文章全体が統一されている。			「です」「ます」調が混在している。		
⑦主題と述語とが関係している。	全体的に主題と述語とが関係した文を書いている。			主題と述語とが関係していない文がある。		
全一文が適切な長さである。	一語句一文でも、3行（60字）以内である。			3行以上にわたる文がある。		

### ＜調査型レポート＞のループリック（図表2）

一定のテーマの元に、自ら問いをたてて調査を行い、調査結果を根拠として主張を述べる＜調査型レポート＞のループリック

### ＜読解型レポート＞のループリックと同じ手法で評価

→ 相互コメントの精緻化事例

相互コメント「後半に入るといろいろな内容の話が出てきてごちゃごちゃな感じがした」自評「改めて読むと、後半部分は情報過多で読みにくく要点をまとめるべき」

[批評やコメント]

## 成果と課題

### 成果

ペアで行うループリック評価の開発 ←グループ

サイクル：自ら文章を書き、同じ基準でほかの受講生の文章を読むことの繰り返し→ 評価することの意味をつかむ→次の文章作成

自己学修力を支援する手がかり

評価指標に設けたコメント欄の有効性

### 課題

評価項目及び評価基準の精査

評価基準を具体的に判断するための方策の検討

複数教員による評価

フィードバックの在り方

## 引用・参考文献

2004年 西岡加名恵「評価指標（ルーブリック）」『現代教育方法事典』教育方法学会

2012年 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～」

2015年 春日美穂「大学生の日本語表現技術におけるルーブリックの活用—詳細な項目の使用の可能性」『國學院大學教育開発推進機構』（6）

2016年 松下佳代「アクティブラーニングをどう評価するか」『アクティブラーニングの評価』東信堂

2016年 小野和宏・松下佳代「初年次教育におけるレポート評価」『アクティブラーニングの評価』東信堂

2018年 渡邊淳子「ライティング指導のためのルーブリック評価表開発：均質なパフォーマンス評価の試み」『熊本保健科学大学研究誌』No. 15



- 平成30年度 國學院大學FD推進事業（乙）
- 「ルーブリックを活用した日本語関連科目の学修支援」
  
- 研究代表者：成田信子（人間開発学部初等教育学科教授）
- 研究分担者：高橋大助（文学部日本文学科教授）
- 吉田永弘（文学部日本文学科教授）
- 渡邊雅俊（人間開発学部初等教育学科教授）
- 坂本正徳（人間開発学部初等教育学科教授）
- 鈴木道代（教育開発推進機構助教）
- 大津直子（教育開発推進機構助教）
- 研究協力者：戸村理（教育開発推進機構准教授）
- 井上明芳（文学部日本文学科教授）
- 岡田誠（國學院大學兼任講師）
- 笹川勲（國學院大學兼任講師）
- 「基礎日本語」科目担当兼任講師



## 30年度グループFD研究会記録

- 第1回 29年度グループFD概要紹介/30年度グループFD計画と分担 平成30年4月18日
- 第2回 話題提供 これまでの取り組みから/高橋大助 7月4日
- 第3回 話題提供 ルーブックについて/成田信子 8月3日
- 第4回 話題提供 「基礎日本語」の成績評価について—2018年度前期の実践から—/笹川勲 9月20日
- 第5回 話題提供 文採（旧SAI）と文体/岡田誠 平成31年1月31日
- 第6回 話題提供 ルーブリック（評価シート）による自己評価と相互評価について  
/鈴木道代 嶋田龍司  
講話 日本の大学におけるこれからのアカデミック・ライティング指導を考える  
講師 加納なおみ（お茶の水女子大学）

2月7日





	評価の観点	よく出来ている		概ねよく出来ている		もう少しがんばろう		がんばろう	
問題設定	①与えられたテーマから、自分で問いを設定している。	与えられたテーマについて、背景をつかんで問いを設定し、論ずる意義や理由を述べている。		与えられたテーマについて、背景をつかんで問いを設定している。		与えられたテーマについて、問いを設定しているが、背景が述べられていない。		問いを設定していない。	
論理性	②問いに対して、自分の主張を述べている。	問いに対して、筋道をたてて自分の意見を展開し、明確な主張を述べている。		問いに対して、明確な主張を述べている。		問いと主張が整合していない。		主張を明確に述べていない。	
客観性	③客観的な根拠を示している。	調査結果の信頼性を吟味して、根拠として示している。		調査結果を根拠として示している。		調査結果を根拠として示していない。		根拠を示していない。	
構成力	④問題の設定から結論に至るまで論理的な組み立てで構成されている。	記述の順序や段落相互の接続が整っている。						記述の順序や段落相互の接続がわかりにくい。	
要約	⑤文章の内容に沿った論題が付けられている。	適切な論題が付けられている。				適切な論題が付けられていない。		論題がない。	
文章表現	⑥「である」調で書いている。	「である」調で文章全体が統一されている。						「です」「ます」調が混在している。	
	⑦主語と述語とが照応している。	全体的に主語と述語とが照応した文を書いている。						主語と述語とが照応していない文がある。	
	⑧一文が適切な長さである。	一番長い文でも、3行（60字）以内である。						3行以上にわたる文がある。	

[批評やコメント]

学科	年	学籍番号
氏名		

	評価の観点	よく出来ている		概ねよく出来ている		もう少しがんばろう		がんばろう	
論理性	①問題を的確にとらえて、自分の主張を書いている。	A社の社説の主張をふまえ、的確な批判、あるいは発展させた主張を書いている		A社の社説の主張に沿って主張を述べている。		A社の社説の主張と自分の主張が差別化できていない。		自分の主張を述べていない。	
客観性	②客観的な根拠を示している。	自ら見出した客観的な根拠を示している。		A社の社説にすでに指摘されている、客観的な根拠を示している。				客観的な根拠を示していない。	
構成力	③頭括型または双括型の構成で書いている。	頭括型または双括型で書いている。						頭括型または双括型で書していない。	
要約	④文章の内容に沿った論題が付けられている。	適切な論題が付けられている。				適切な論題が付けられていない、		論題がない。	
文章表現	⑤「である」調で書いている。	「である」調で文章全体が統一されている。						「です」「ます」調が混在している。	
文章表現	⑥主語と述語とが照応している。	全体的に主語と述語とが照応した文を書いている。						主語と述語とが照応していない文がある。	
文章表現	⑦一文が適切な長さである。	一番長い文でも、3行(60字)以内である。						3行以上にわたる文がある。	

[批評やコメント]

学科	年	学籍番号
氏名		

第1章

構成を整えて小論文を書こう

〈YES OR NO型小論文〉

(1) 文章のどんな点がチェックされるかを知ろう

50点

	6	4	2	0
<b>構成力</b>	書けている。	自分の主張を示しているが、その主張に至るまでの論理展開が不十分である。	自分の主張は述べられているが、その主張に至るまでの論理展開に矛盾や齟齬が見られる。	書けていない。
<b>論理性</b>	自分の主張を示し、なおかつその主張に至るまでの説得力ある論理展開がなされている。	自分の主張を示しているが、その主張に至るまでの論理展開が不十分である。	自分の主張は述べられているが、その主張に至るまでの論理展開に矛盾や齟齬が見られる。	自分の主張が述べられていない。
<b>客観性</b>	引用文献を挙げた上で、それに対する分析や意見が明示されており、なおかつ自分の主張に有効的に機能している。	引用文献を挙げた上で、それに対する分析や意見が示されているが、自分の主張との関連づけが不十分である。	引用に対する分析や意見が示され、それと自分の主張との関連づけが不十分である。	自分の意見と引用とを混同している。
	<b>評価観点・評価尺度</b>	<b>評価観点・評価尺度</b>	<b>評価観点・評価尺度</b>	<b>評価観点・評価尺度</b>
	小論文の内容に沿った適切な論点を付けているか。	内容との整合性が見られない。	論題がない。	
	文章の書き出し、改行した段落のはじめは、ひとマス空いているか。→ <b>1</b>	空いている。	空いていない。	
	句読点は一字分とって、適切に打っているか。→ <b>2</b>	句読点を一字分とって、打つべき場所に打っている。	句読点がほとんど使われていない。	
	横書き(縦書き)の場合、数字は算用数字(漢数字)を用いているか。→ <b>3</b>	算用数字(漢数字)を用いている。	漢数字(算用数字)を用いている。	
	アルファベットの書き方は正しいか。→ <b>4</b>	正しく書いている。	誤っている。	
	カギ「[]」・カッコ()の書き方は正しいか。→ <b>5</b>	正しく書いている。	誤っている。	
	行頭にくる句読点や閉じるカギがこの書き方は正しいか。→ <b>6</b>	正しく書いている。	誤っている。	
	横書きの単位記号の書き方は正しいか。→ <b>7</b>	正しく書いている。	誤っている。	
	句点と閉じるカギかっこは同じマスに入っているか。	入っている。	入っていない。	
	誤字・脱字はあるか。	ない。	3か所以上ある。	
	「です」「ます」調の混在している箇所はないか。	ない。	ある。	
	主語と述語とが一致しない文はないか。	ない。	3か所以上ある。	
	話し言葉を用いていないか。	ない。	3か所以上ある。	
	言葉の省略はないか。	ない。	ある。	
	一文は適切な長さであるか。	一番長い文でも3行(60字)程度である。	3行(60字)以上句点を打たない文がある。	
	出典を正しく書いているか。	正しく書いている。	誤っている。	
<b>表現形式</b>				
		1、2か所ある。	3か所以上ある。	
			ある。	
		1、2か所ある。	3か所以上ある。	
		1、2か所ある。	3か所以上ある。	
			ある。	
		1、2か所ある。	3行(60字)以上句点を打たない文がある。	
			誤っている。	



## 參考資料



## 〈資料 1〉平成 28 年度「学部 FD 推進事業」について（案）

（平成 27 年 11 月 18 日開催第 7 回教育開発センター委員会資料）

### 平成 28 年度「学部 FD 推進事業」について（案）

本学では 2012（平成 24）年度より学部 FD 推進事業を実施し、教育内容・方法等の改善を図るための組織的な研修・研究の機会を提供・実施してきた。当該事業は先の認証評価でも比較的高い評価を得たと言われている。しかしながらこれまでのセンター委員会の議論でも明らかなように、課題が散見されることもまた事実である。そこで以下では、これまでに指摘された検討課題を確認した後、平成 28 年度以降の学部 FD 推進事業について、①申請書の形式の改定、②成果の共有・検証と学外への情報発信、の 2 点から具体的な改善案を提示したい。

#### 1. これまでに出た検討課題

- 各事業成果について、学部及び全学での周知・共有を強化
- 学部内で必ず事業効果の検証を実施（アンケート等）
- 学外への成果発信（紀要への掲載、報告書の作成、Web 公開）
- 各学部で FD 事業の推進を担う担当教員の育成（長期的視点からの検討）
- 申請書の形式の変更（PDCA サイクルの徹底等）

#### 2. 改善案

##### ①：申請書の形式の改定

【改定の意図】これまでの「学部 FD 推進事業」申請書では、事業の概要（計画期間全体）として、「目的」、「内容」、「計画」、「期待される効果・達成目標」の 4 項目を記入した。しかしこれらの項目では、

- ① 当該事業の実施方針や実施状況の振り返り、成果の検証というプロセスが不十分であること
- ② 当該学部の授業改善にどのような影響を及ぼすかが不明瞭であること
- ③ 当該事業の成果が学部学科を超えて本学学士課程教育全体または本学教員の職能改善にどのような効果（汎用性）をもたらすのかが明らかでないこと

という課題があった。そこでこれらの点を勘案するとともに、本事業が PDCA サイクルを自覚的に踏まえつつ企画・運営されていることを明らかにするため、以下の様に申請書の形式を改定することとする。なお申請する事業は、原則として単年度で完了するものとして想定されるが、他方で「教育内容・方法等の不断の改善」という視点から、単年度での予算措置及び申請書作成が求められるものの、1 年を超えることを想定した事業計画を策定することも可能とする。ただし最長で 2 年とする。

改定（各 400 字程度）	現状
<p>○目的（P）：現状認識を踏まえた事業の目的</p> <p>○内容（D）：目的を達成するために、どのような事業を実施するのか。</p> <p>○計画（P）：どのような計画で、当該事業を実施するのか。</p> <p>○点検・評価（C）：本事業の実施状況並びに成果を、どのように点検・評価するのか。</p> <p>○改善・期待される効果（A）：今後の当該学部教授法や授業改善にどのように役立つことが想定されるか。具体的に記述して下さい。</p> <p>○汎用性（V）：成果を全学で共有することで、当該学部学科を超えて、本学学士課程教育全体または本学教員の職能改善にどのような効果をもたらすことが想定されるか。* <i>V = versatility</i></p> <p>○経費の妥当性・必要性：教育研究経費支出、人件費支出、設備関係支出について、申請する事業計画と関連して妥当性と必要性を記述して下さい。</p>	<p>○目的</p> <p>○内容</p> <p>○計画</p> <p>○期待される効果・達成目標</p>

## ②：成果の共有・検証と学外への情報発信

【改定の意図】申請書の形式を改定しただけでは、各学部の事業成果の共有とはならない。そこで事業成果を確実に学部間で共有させ、かつ汎用的な成果については、本学学士課程教育全体または本学教員の職能改善に結びつけるためにも、成果を共有する機会を設けたいと考える。具体的には「成果報告会」（仮称）を開催し、各学部長ならびに実務担当者を必須の参加者として、広く本学専任教職員に参加を求めることとする。これにより学部での成果（タテ）が、確実に学部間で共有できる（ヨコ）と考えられる。あらかじめ申請書に記載した「汎用性（V）」の観点からの議論も行うことで、より実りある議論も期待できよう。具体的な開催日時や内容については、今後、本センター委員会にて検討しなければならないが、現状での方向性は以下のとおりである。

名 称：成果報告会（仮称）

日 時：年 1 回。年度末実施

参加者：各学部長・実務担当者ならびに本学専任教職員

内 容：①当該年度の学部 FD 推進事業の成果報告会 <学部の Good Practice の共有>

②各学部汎用性（波及効果）についてのディスカッション<本学学士課程教育全体への寄与>

\*申請書に *V = Versatility* を記入して頂くことで、ディスカッションの共通議題を予め設定

\*成果報告会の議論については、報告書等を作成し機構 HP にて公開

備 考：2 年に 1 度は、隔年で開催される教育開発シンポジウムと関連付けることも可能

また関連企業（インテージ、丸善等）や関東圏 FD（※）との連携も検討課題

例 國學院大學教育改善カンファレンス（仮称）と銘打って・・・

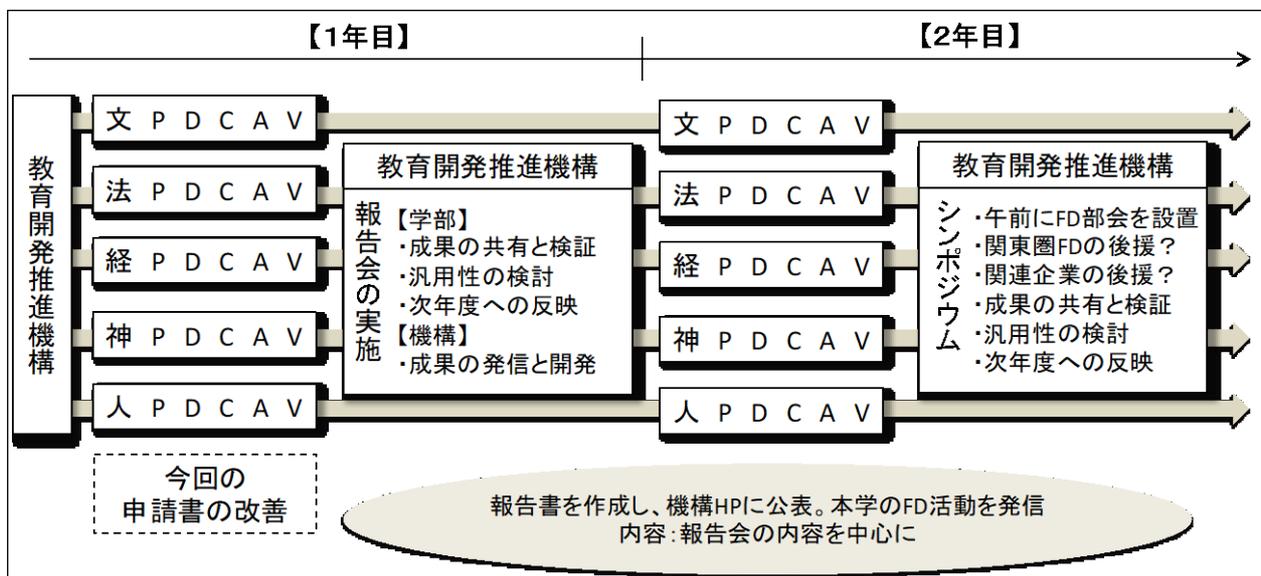
午前：成果報告会

午後：教育開発シンポジウム

※関東圏 FD：法政大学、立教大学、東洋大学、青山学院大学の FD 活動に携わる教職員にて構成される組織的な FD コンソーシアム。本学は今年度より参加。初回会合日は、2015 年 11 月 25 日。

注意：事業によっては「期待どおりの成果が出なかった」・「事業計画に無理があった」というケースが発生することも考えられる。この場合は Good Practice でなくても、その知見を共有すること自体が有益であると考えられるが、学外への公表（報告書等）については、様々な点から検討する必要がある。したがってこの点については、引き続き教育開発センター委員会での検討事項とする。

【平成 28 年度以降の「学部 FD 推進事業」のモデル】





## 〈資料2〉 國學院大學FD推進事業の助成に関する規程

(平成29年2月8日開催第7回教育開発センター委員会資料)

### 國學院大學FD推進事業の助成に関する規程

平成28年12月7日  
制 定

#### (目的)

第1条 この規程は、教育開発推進機構規程第2条及び教育開発センター規程第2条に基づき、本学のFD推進事業を助成するために、必要な事項を定める。

#### (定義)

第2条 この規程におけるFDとは、学士課程における教育及び学修の効果を高めることを目的とし、かつ以下の各号のいずれかに関わる取組みをいう。

- (1) カリキュラムの改善又は体系化
- (2) 教育を行う組織及び学修環境の整備
- (3) 教員の教育力開発
- (4) 授業の内容及び方法の工夫改善

#### (助成対象)

第3条 この規程に定める助成(以下「FD推進助成」という。)の対象は、学部単位で企画、実施する学部FD推進事業(以下「甲」という。)又は2名以上のグループが行うFD推進事業(以下「乙」という。)とする。

- 2 甲の対象は、各学部において機関決定を経た取組みとする。
- 3 乙の対象は、主に前条第3号又は4号に関わる取組みとする。

#### (申請資格)

第4条 FD推進助成を申請できる者は、本学専任教員とし、甲の申請者は学部長とする。ただし、事業推進の協力者に兼任講師又は職員を含めることができる。

#### (実施期間)

第5条 FD推進助成の実施は、原則として単年度とする。ただし、内容により最長2年の事業計画を申請することができる。

(申請手続)

第6条 FD推進助成の採択を希望する者は、実施する前年度の1月末日までに、別に定める申請様式に従い、計画調書を教育開発センター長宛に提出しなければならない。

(審査)

第7条 FD推進助成の審査は、別に定める審査基準に基づいて教育開発センター委員会が行い、審査結果に基づき、学長が採択を行う。

(助成金)

第8条 甲に対するFD推進助成金の上限は、1件あたり年間100万円とする。

2 乙に対するFD推進助成金は、採択する取組みの合計が予算内に収まるように調整する。

3 助成金の使途の範囲及び取扱いについては、別に定める。

(設備備品等)

第9条 FD推進助成により購入した設備備品は、大学に帰属する。

(成果の報告、共有及び発信)

第10条 FD推進助成に採択された者は、次の各号に掲げる義務を負う。

(1) 成果検証に基づき、採択された年度の3月末日までに学長へ成果報告書を提出すること

(2) 学内における取組み情報の共有に努めること

(3) 取組みの状況及び成果を学外へ発信すること

(事務)

第11条 FD推進助成金の運用に関わる事務は、教育開発推進機構事務課が行う。

(改廃)

第12条 この規程の改廃は、教育開発センター委員会及び教育開発推進機構運営委員会の議を経て、学長が行う。

附 則

この規程は、平成29年4月1日から施行する。

### 〈資料3〉平成30年度「FD推進助成事業（甲・乙）」成果報告会 開催状況（報告）

（平成31年3月6日（水）第8回教育開発推進機構運営委員会資料）

#### 【開催概要】

主催：教育開発推進機構 教育開発センター  
日時：平成31（2019）年2月27日（水）14:00～16:30  
会場：1304教室（120周年記念1号館3階）

#### 【プログラム】

14:00	開会
14:00～14:05	趣旨説明（教育開発センター長 柴崎 和夫）
14:05～14:25	グループによるFD推進事業（成田 信子 人間開発学部教授） 事業名「ループリックを活用した日本語関連科目の学修支援」
14:25～14:45	文学部 学部FD推進事業（牧野 格子 准教授） 事業名「カリキュラム及び授業改善の基本方針検討」
14:45～15:05	法学部 学部FD推進事業（小原 薫 准教授） 事業名「法学部新カリキュラムの実効性の検証」
15:05～15:25	経済学部 学部FD推進事業（星野 広和 教授） 事業名「基礎演習A・Bにおけるループリックの作成・授業導入、および実践のためのコーチングスキル研修」
15:25～15:45	神道文化学部 学部FD推進事業（菅 浩二 教授） 事業名「学生に対する効率的なアンケート・学力調査に基づく授業運営・学部カリキュラム改善への検討」
15:45～16:05	人間開発学部 学部FD推進事業（山田 佳弘 教授） 事業名「充実した『理論と実践の往還』による教育インターンシップに向けた学部の関わり方」
16:05～16:30	総合意見交換
16:30	閉会

#### 【参加者数】31名

- ・教員27名（文学部6、法学部6、経済学部1、神道文化学部2、人間開発学部8、教育機構4）※報告者除く
- ・職員4名

#### 【アンケート結果より】（提出数：15件）

- (1) 回答者中、学部FD推進事業への参加15名、グループFD推進事業への参加10名（重複あり）
- (2) それぞれの学部の報告への参加者数は、文学部7・法学部8・経済学部9・神道文化学部9・人間開発学部12。  
(2) 参加した理由としては、発表者であるため5件、事業の担当者・協力者であるため5件、興味・関心があったため6件、学内業務であるため4件（重複回答可）。
- (3) 時間の長さについては、概ね適切との回答であったが、報告時間・質問時間に若干「短い」との意見あり。  
実施時間（2時間半）：13件中「適切」10件、「長い」1件、「短い」2件。  
発表時間（15分）：15件中「適切」10件、「短い」4件、無回答1件。  
質問時間（5分）：15件中「適切」9件、「短い」5件、無回答1件

→ 裏面へつづく

(4) 成果報告会に参加した感想 (件数)

	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
新しい知識・情報を知った	4	4	0	0
新しい技術を学んだ	4	4	0	0
新たな見方ができるようになった	3	5	0	0
授業で活用したくなった	2	5	1	0
同僚に勧めたいと思った	3	5	0	0
参加して満足した	4	4	0	0
FDの重要性を再認識した	6	2	0	0

(5) 成果報告会の実施は、本学FDの各レベルでの改善に資すると思うかとの問いに対して

	かなりそう思う	そう思う	あまりそう思わない	そう思わない	無回答
学部学科レベル	3	5	0	0	7
全学レベル	0	5	2	0	8

アンケートを提出した参加者にとっては概ね有意義な報告会であったと受け止められている。

本学のFD改善への寄与という面では、学部学科レベルでは「成果を学部内で共有する機会を位置づけたので、今後の改善に資すると期待される」との記述が寄せられるなど、一定の手応えを感じられたようである。一方、全学レベルへの活用については「授業改善に対する各学部の努力が伝わってきた」という感想が寄せられる一方、「他学部の報告内容を有効に生かすことがもっと出来ると良い」との意見も出された。

また、「今後も成果報告会を継続して実施することが望ましいと思うか」との問いに対しては、15件中、無回答7件を除く8件が「そう思う」と回答。実施自体にネガティブな印象はないが、どの程度学内で有意義な試みとなり得るかについては未知数と感じる参加者も少なからずいたようである。

(6) その他、自由記述として、以下のような意見・感想が寄せられた。

- ・最後の協議がとても有意義でした。他学部の先生方との意見交換の重要性を思いました
- ・学部を超えた実践的論議の場をもっと設けられると良いですね。
- ・継続することに意義があると思う。
- ・最後まで参加したところ、他学部の報告もとても参考となった。せっかくの機会なので、より多くの教員が参加するような工夫があれば良いと思う。(途中までの感想)
- ・時間設定に問題はないと思うがいささか参加者が少ないのが気になる。
- ・本学のFDに関しては、各学部のFD活動をいかに全学で共有できるかが重要。

以上

〈資料4〉過年度事業一覧（平成24～29年度）

平成24年度 学部FD推進事業

項目	詳細
申請学部	文学部
事業名称	導入教育及び初年次教育科目の授業改善
申請者	野呂 健
実務担当者	石川則夫
申請額	1,000,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部教育における本格的 PDCA サイクル始動のための準備作業
申請者	宮内靖彦
実務担当者	荻田真司
申請額	898,000 円
申請学部	経済学部
事業名称	4年間を見通した教育改善を目的とした学生による主観的な学修の達成度に関する調査
申請者	尾近裕幸
実務担当者	田原裕子
申請額	1,000,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	アンケートの実施の簡便化による授業運営、学部運営の向上プログラム
申請者	石井研士
実務担当者	西岡和彦
申請額	542,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発
申請者	新富康央
実務担当者	堀江紀子
申請額	1,000,000 円

\*総額 4,440,000 円

平成 25 年度 学部 FD 推進事業

項目	詳細
申請学部	文学部
事業名称	授業改善及びカリキュラム改訂の基本方針策定
申請者	野呂 健
実務担当者	矢部健太郎
申請額	1,000,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部教育における本格的 PDCA サイクルの準備作業
申請者	宮内靖彦
実務担当者	佐藤秀勝
申請額	999,000 円
申請学部	経済学部
事業名称	在学中の学修達成度と教育改善に関する意識調査
申請者	尾近裕幸
実務担当者	本田一成
申請額	1,000,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	アンケートの実施の簡便化による授業運営、学部運営の向上プログラム
申請者	石井研士
実務担当者	西岡和彦
申請額	563,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発
申請者	新富康央
実務担当者	柴田保之
申請額	490,000 円

\*総額 4,052,000 円

平成 26 年度 学部 FD 推進事業

項目	詳細
申請学部	文学部
事業名称	授業改善及びカリキュラム改訂の基本方針策定
申請者	野呂 健
実務担当者	柴田紳一
申請額	1,000,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部教育における本格的 PDCA サイクルの成果検証およびアクティブラーニング導入に関する基礎的研究
申請者	宮内靖彦
実務担当者	佐藤秀勝
申請額	999,000 円
申請学部	経済学部
事業名称	導入教育における主体的な学びの促進
申請者	尾近裕幸
実務担当者	本田一成
申請額	987,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	アンケートの実施の簡便化による授業運営、学部運営の向上プログラム
申請者	石井研士
実務担当者	西岡和彦
申請額	1,000,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発
申請者	成田信子
実務担当者	柴田保之
申請額	902,000 円

\*総額 4,888,000 円

平成 27 年度 学部 FD 推進事業

項 目	詳 細
申請学部	文学部
事業名称	授業改善及びカリキュラム改訂の基本方針策定
申請者	野呂 健
実務担当者	白井重範
申請額	648,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部教育における本格的 PDCA サイクルの成果検証およびアクティブラーニング導入に関する基礎的研究
申請者	宮内靖彦
実務担当者	川合敏樹
申請額	700,000 円
申請学部	経済学部
事業名称	リーダーシップ教育を行うための能力とスキルの獲得
申請者	尾近裕幸
実務担当者	宮下雄治
申請額	1,000,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	アンケートの実施の簡便化による授業運営、学部運営の向上・改善化プログラム
申請者	武田秀章
実務担当者	遠藤 潤
申請額	600,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発-教育実習・保育実習に焦点をあてて-
申請者	成田信子
実務担当者	伊藤英之
申請額	540,000 円

\*総額 3,488,000 円

平成 28 年度 学部 FD 推進事業

項 目	詳 細
申請学部	文学部
事業名称	カリキュラムおよび授業改善の基本方針検討
申請者	野呂 健
実務担当者	金杉武司
申請額	800,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部におけるアクティブラーニング導入および初年次教育手法の研究
申請者	宮内靖彦
実務担当者	川合敏樹
申請額	797,600 円
申請学部	経済学部
事業名称	基礎演習 A・B における外部評価を通じた授業改善
申請者	尾近裕幸
実務担当者	細井 長
申請額	1,000,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	学生に対する効率的なアンケート・学力調査ならびに有識者の外部評価による授業運営・学部運営の改善化
申請者	武田秀章
実務担当者	遠藤 潤
申請額	798,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発
申請者	新富康央
実務担当者	伊藤英之
申請額	969,500 円

\* 申請総額 4,365,100 円

平成 29 年度 FD 推進助成（甲）「学部 FD 推進」事業

項目	詳細
申請学部	文学部
事業名称	カリキュラムおよび授業改善の基本方針検討
申請者	野呂 健 学部長
実務担当者	樋口秀実 教授 → 吉岡 孝 教授 (変更)
申請額	600,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部における新カリキュラム導入に向けた初年次教育の手法の研究
申請者	宮内靖彦 学部長
実務担当者	安田恵美 専任講師
申請額	794,000 円
申請学部	経済学部
事業名称	基礎演習 A・B における FA 制度を用いた授業改善
申請者	尾近裕幸 学部長
実務担当者	星野広和 教授
申請額	998,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	学生に対する効率的なアンケート・学力調査による授業運営・学部運営の改善化
申請者	武田秀章 学部長
実務担当者	遠藤 潤 准教授
申請額	600,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発 —学校インターンシップの現状と課題の把握—
申請者	新富康央 学部長
実務担当者	神事 努 助教
申請額	450,000 円

\* 申請総額 3,442,000 円

平成 29 年度 FD 推進助成（乙）「グループによる FD 推進事業」事業

項目	詳細
研究代表者	根岸毅宏 経済学部教授
事業名称	アクティブラーニング型授業における教員と学生との間の教育成果のギャップの確認およびルーブリックの作成
実施形態	経済学部
共同研究者	齊藤光弘 経済学部特任教授
申請額	1,126,200 円
研究代表者	藤本頼生 神道文化学部神道文化学科准教授
事業名称	神道教化関連授業の改善およびアクティブラーニング化にかかる教材開発授業
実施形態	神道文化学部神道文化学科
共同研究者	黒崎浩行 神道文化学部神道文化学科教授
申請額	598,060 円
研究代表者	成田信子 人間開発学部初等教育学科教授
事業名称	学生の基礎日本語力を向上させる授業方法の開発
実施形態	学部・学科横断型
共同研究者	鈴木道代 教育開発推進機構特別専任助教 大津直子 教育開発推進機構特別専任助教 吉永安里 人間開発学部子ども支援学科准教授 渡邊雅俊 人間開発学部初等教育学科教授 藤田大誠 人間開発学部初等教育学科教授 吉田永弘 文学部日本文学科教授
申請額	937,600 円

\* 申請総額 2,661,860 円



## 平成 30 年度 教育開発センター委員

(委員長)	柴崎 和夫	教育開発センター長
	仙北谷穂高	教育開発センター副センター長 (教学事務部次長)
	大久保桂子	教務部長
	青木 豊	文学部教授
	小原 薫	法学部准教授
	細谷 圭	経済学部教授
	菅 浩二	神道文化学部教授
	神事 努	人間開発学部准教授
	小濱 歩	教育開発推進機構准教授
	原田 佳昌	教育開発推進機構事務課長
(幹事)	坂入 裕一	教育開発推進機構事務課長補佐
(幹事)	中條 豊	教育開発推進機構事務課主幹

\* 職名・役職等は平成 30 年度当時のもの

平成 30 年度

FD 推進助成 (甲・乙) 事業 成果報告書

編集・発行 國學院大學 教育開発推進機構  
教育開発センター

令和元 (2019) 年7月31日

